俺の異世界物語

七つ夜&夜つ七

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺の異世界物語

【Ｎコード】
Ｎ４９５７Ｊ

【作者名】
七つ夜＆ａｍｐ；夜つ七

【あらすじ】
アニメ、漫画、ゲームが好きな高校生　如月　刹那　《キサラギセツナ》が神に拉致され異世界に送られる物語。
楽しんでいただけたら嬉しいです。
最強物です。嫌いな人は注意して下さい。

プロローグ（前書き）

最強物です。楽しんでいただけたら嬉しいなぁ～

作中のゲームはメル〇ィブラッドアク〇レスアゲインです。

プロローグ

今は、午前2時を回った所だ。そんな時間にゲームをやり続ける少年がいた。現在八時間以上ぶっ通しで…

「そこだ！」

ＥＸシールド！

『その肉塊、ことごとく喰い砕こう…！』

Ｌａｓｔ　Ａｒｃ　Ｆｉｎｉｓｈ

『出口など無い。ここが貴様の終焉だ』

「勝った…」

まさか、ＣＰＵレベル５の姫ア〇クに教授で勝てるとはな、俺も強くなったのものだ。

よし、これから、どうしよう？

1，コンビニで菓子を買う。

2，友人と遊ぶ

3，このままゲームを続ける
4，寝る

1は行くだけで一時間はする（坂道多数）し、2はこんな時間（午前2時）に行ったら迷惑だ。3はもう八時間以上したから勘弁となると4か。

よし、寝るか。

そして、ベッドに向かう。

「さて、明日は何をしようかな？」

そう言いながら少年は眠りに就いた。

その日から、少年、如月（キサラギ）　刹那（セツナ）を見た者はいない…

主人公：プロフィール

作者の七つ夜です。
今回は、キャラクターのプロフィールです。

名前：如月（キサラギ）　刹那（セツナ）

性別：男
年齢：１６
身長＆ａｍｐ;体重：１７８ｃｍ，６０ｋｇ

髪＆ａｍｐ;目：黒
特技：家事全般（本人否定）　調べ物
趣味：料理、ゲーム
好きな物：娯楽、日本茶、動物、可愛い物（テディベア等）
嫌いな物：勉強、イジメ、整頓してない部屋、虫
能力：？？？（まだ持っていない）
容姿：髪は背中まで伸びたのを一纏めにしている。顔立ちは中性的だが、パッとみて男に見られることは少ない
身体能力：フルマラソンを１時間半程で走り、素手で不純物無しの氷（鋼の３倍の強度）を余裕で砕ける。一度見た技術を数回練習れば習得可能。体育会系の部活から引っ張りだこ
ＩＱ：文系は基本的に４０～６０点の間だが、理数系は３０～５０点程。ちなみに英語は喋れるのに書くことは苦手（本人が言うには喋れるのと書けるのは違う）
備考：
両親が他界しているため、独り暮らし（その関係で家事スキルｕｐ）だが、寂しいとは思ったことはあまり無い。
調べ物は、一日あれば大体調べることが可能（人物の場合は半日）。

性格はヘタレ。常にやる気がない。かと思うとやるときはやる。正義感はあるにはある（本人談）
基本的に女性に弱い（免疫がない）。その上鈍感。美形だが本人自覚無し。
中学からの知り合いで化け物みたいな奴とか、猛毒を作る先輩の尻拭いとかさせらたりするので、逃げれる場所なら何処にでも逃げたい。異世界とかでも喜んで行き程逃げたい
昔、両親が生きてる間に金絡みで嫌な事を何回も経験しているので【金】が大嫌い
座右の銘は、『金より平穏な日々をくれ』

神に拉致された…　でも何とかなった。（前書き）

作者がしゃべってます。

神に拉致された…　でも何とかなった。

「…ＺＺＺ」

「いつまで寝とるんだ?こいつ…」

「…ＺＺＺ」

「このままだと話ができん。それだと呼んだ意味がない。起こすか…」

言いながら布団の端を持つ。

「それじゃやるか。」

指先に力を入れ、

「いい加減起きんかぁぁぁぁ!!!」

おもいっきり剥ぎ取った。

「のわぁぁ!?」

強く引っ張り過ぎたのか、刹那が宙を舞っている…

グシャ!

刹那は痛いのか、死にかけているのか、ピクピクと痙攣している。

「…ちょっと強すぎたかな?」

落とした者も反省はしているらしい。が、

「反省はしているが、航海はｓ「しろ！かっこいいこと言って誤魔化そうとするんじゃない！」…ゴメンナサイ」

突っ込みのために復活したらしい。生きてて良かったね…

「別に突っ込みのために復活したんじゃない！」

地の文にまで突っ込まないで。

「すまん。」

「私を忘れるな！」

グゴシャ…

綺麗な円を描き、刹那が吹き飛ばされている…どうやら、アッパーらしい。

「作者に突っ込んでないで、私の話を聞け！」

無理だと思うな。白目むいてるし、口から泡出てるし…（ちなみに作者の声は刹那と神にしか聞こえません。）

「起きろぉぉぉぉ！！」

ゴロゴロ、ドカーン！

「ギャァァァ！？」

うわ、ヒデェ。雷で強制的に起こしやがった…

「やっとで起きたか。この寝坊助め…」

「さっきから全身が痛いんだけど。なんか顎は砕けたみたいだし、髪型アフロだし…俺に何が起きた!?」

「そこまで意識がはっきりしたならいいだろう。」

ウンウンと頷く神。いや、あれでいいと言うか。普通…

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

説明中…

もうしばらくお待ちください。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

説明終了～

「つまり、神様（この女性）が暇だから拉致され、今から強制的に異世界に送られる、と?」

「うん。まあ、そんな感じ。」

「いろいろ言いたいことも有るけど、３つ質問していい?」

「ウム、許可する。」

盗人猛々しいとは、こうゆう奴のことを指しているんだろう…

「一つ目は、なぜ俺なんですか?」

「暇だったから釣りで決めたんだ…」

「釣り？」

「そうだよ。釣糸垂らしてたらいきなり食い付いてきたから、こっちもビックリしたよ。」

つまりあれか？『不幸だぁぁ！』てやつか？幻想殺し《イマジンブレイカー》もビックリだな…

「確かに。じゃあ、二つ目の質問。今までの世界での俺の扱いとこれからの世界の特徴を教えてくれ。」

「お前が住んでた世界では抹消しといた。つまり、最初から居ないこととしといた。」

「やっぱりな…」

「それとこれからの世界は魔法がある世界だ。科学もあるがほとんど進歩していない。大きな国が多数あるし、学校もあるぞ。人間、獣人族、魔族、龍人族、魔獣が存在している。この中でも注意しなきゃいけないのは龍人族と魔獣だな。説明は…あっちの住民に聞け。」

分かったのは、魔法と環境、住んでる生き物だけか。しかも触りの部分だけ…

「あっちに行ってから聞こう。最後に一番大切なことだ。」

「何？ハッキリ言いなさい。答えてあげる。」

何が大事なんだ…？

「自己紹介してないが、いつするんだ？」

「…は？」

…一番大事なことがそれかよ。

「いや、ずっと“神”じゃ言いにくいし、何より失礼だ。」

…こいつはまた、ククク…

「面白い奴だな…」

「作者、何でいきなり笑うんだ？てか、笑い方が怖い。」

「あれは、無視して構わん。最後の質問の答えを言うぞ。私の名はオーディーン。最高神だ。」

…《最高神》。こんなテキトーな奴にやらせて良いのか？

「……（同意しちゃいけない。したら、確実に惨殺される）　オーディーンだったんだ。予想以上に凄い神様だったんだ。」

「私の名はいい。人間はともかく、日本人は名乗られたら名乗り返すんじゃないのか（知ってるけど）？」

「そうだな。俺の名前は如月　刹那だ。これからよろしく。」

こうして、刹那とオーディーンは知り合いましたとさ。

よく受け入れたな、アイツ…

「ああ、そうだ。少し、野暮用があるから待っていてくれ。」

「良いけど。どこ行くんだ？」

俺も気になる…

「な～に、遠くにあるようで近くにある場所だ。すぐに分かる。」

そう言いながら右手を前に突き刺した…

……え？何で入ってきてんの？ちょ、手に持った禍々しい物は何！？何でそんないい笑顔なの！？ちょまっ、ギャァァァ！！！

「…（ガタガタ、ブルブル）」

その後、オーディーンはいい笑顔で帰ってきた。

作者の声が聞こえたのは、一時間後だったそうだ（その間恐怖の余り失神していた）。

神に拉致された…　でも何とかなった。（後書き）

イタタタ…死、死ぬかと思った。

能力ＧＥＴ！…説明書読めって酷くね？（前書き）

駄文です。
それでも読んでもらえると嬉しいです。

能力ＧＥＴ！…説明書読めって酷くね？

イタタタ…死、死ぬかと思った

「前回の後書きのセリフで始めるなよ。」

「チッ。殺したつもりだったが、生きていたか…。台所の黒い悪魔並の生命力だな。」

誉め言葉として受け取っておこう。

「貶したつもりだがな…。そんや事よりそろそろ送るぞ。」

「いきなりだな。」

「そろそろ遊びに行きたいしな。」

自己中だ…

「まあな。と言ってもこのまま送ると一時間も持たん。だから、能力を渡してやろう。」

「ありがとう。」

拉致ったのに上から目線の神。そして普通にお礼をする少年…　お礼する必要無くね？

「よし、今から渡すから後ろ向け。」

「分かった。これで良いか？」何故後ろを向くか疑問に思えよ…
別に前でも変わらないだろ？

「まあな。それより、少し痛いぞ。まあ、すぐに終わるがな。」
「どうして痛いのさ？」

「気にするな。逝くぞ！」
「ニュアンスが違う！まっｔ「問答無用！喰らえぇぇ！」

グチャ…

それはもう素晴らしい一撃だった。この一撃を受けて生き残れる者はいないだろう。頭蓋は砕け、脊髄は粉々で首が陥没している…。
「さて、ストレスも発散できたし、蘇生するか。」

『ぴぴるぴる○るぴぴるぴ～』

「ストレス発散で殺すな！何が少し痛いだけだよ！死んだから痛みを感じる暇がなかっただけだろ！」
「痛みは一瞬だったし今は無いだろ？なら良いじゃないか。」
「そんな簡単に納得できるか！さっきまで死んでたんだぞ！？そんなにあっさり許せるわけ無いだろ！」

「わかった。そこまで言うなら謝罪の代わりにもう一発逝こうか？」

「ゴメンナサイ。調子に乗ってました。」

「ウム、許そう。」

……これって脅迫じゃね？それはともかくどんな能力にしたの？

「まだあげてないけど。ちゃんと言っただろう？ストレス発散だと。」

ヒデェ…　あまりに理不尽だ　早く渡してやれよ。

「今からやるよ。……はい、完了。」

指一本動かしてないし…　さっきまでの行動は一体…

「ストレス発散と遊び心だ。殺したのは、撲殺天使の真似がしたかったからだ。」

やっぱり、ヒデェ…

で、今度こそどんな能力なんだ？

「3つ入れてある。2つは私のお気に入りだ。残り1つはまだ能力がないよ。

理由は所有者の想像力で変化する力なんだ。つまり、君が想像するまで何の力もない。　想像力が乏しいと何の役にもたたないショボい能力になるが、想像力が凄ければ素晴らしい能力になる。君なら面白い能力になるだろう。」

うん。確かに。

「な、何で？」

「君は想像力が人一倍優れているから心配する必要が無いんだよ。」

それに良い考えが無くても今まで見たアニメ、漫画、ゲームから、能力が創れるからな。

「いや、そりゃそうだけど…」

そうだ！凄いだろ？日本の誇る娯楽文化！？

「そうだよ。あれは、日本人の想像力が豊かな証拠なんだよ。私だって、本当はゲームが欲ｓ「話が変わりすぎです。そろそろ次の能力の説明もしてください。」…」

「……萎えた。後で説明書送るから読め。」

「何で機嫌が悪いんですか？」

そりゃお前が悪い。考え無しの言葉は、後々自分が酷い目見るから気を付けなよ～。

「そりゃどうも。これからは努力するよ。…それはともかく、あの縄何なんだ？嫌な予感がするんだが…」

「フフフ…じゃ～ね。」

クイ（縄を引く音）、パカッ（床５ｍほどが開く音）、ヒュルルル～（何かが落ちる音）

それじゃ、達者でな～♪

「ギャアアアアアア」

号泣してるな…

「よく脱水症状にならないな。」

だんだん速くなってるな…

「パラシュート無しのスカイダイビングだからな。」

このまま墜ちたら死ぬと思うが…

「地面スレスレで止まる安全設定だ。死ぬことは無い。」

ならいいか…

能力ＧＥＴ！…説明書読めって酷くね？（後書き）

次回は、オーディーンの紹介です。

オーディーン：プロフィール

刹那がやっと異世界に送られた
今回はオーディーンのプロフィールです

名前：オーディーン

性別：性別はない（好きな姿に変える事が可能なため）が、作中は基本的に女性
年齢：正確な年齢がわからない（ほとんど数えていなかった）ため、永遠の１８歳だと言っている
身長＆ａｍｐ;体重：性別と同じで好きな姿に変える事が可能なのだが、基本的に１７０ｃｍ前後，体重は黙秘　が好きらしい
髪＆ａｍｐ;目：性別（以下略）だが、基本的に銀髪に緋と蒼のオッドアイ
スリーサイズ：以下略だが、基本的に　Ｂ８８（Ｃ６３）／Ｗ５３／Ｈ８２
特技：大規模破壊
趣味：ゲーム、睡眠
好きな物：暇が潰せる遊び、ゲーム、干したばかりの布団
嫌いな物：暇な時間、雨、仕事
能力：全知全能（神様としての基本能力。ただし、把握出来ていない能力もある）　予知能力（少し先の未来を視る事が出来る）
容姿：容姿は毎回違うが、美形であることは変わらない
身体能力：神の中ではそこまで高くはない（ただし、１時間くらいで地球横断くらいはできる）
ＩＱ：歴史は詳しいが、その他が悪い（本人曰くつまらないらしい）。
備考：

北欧神話では真面目にだったが、終了後の後始末が多すぎで嫌気がさした。

仕事は部下に押し付けている。しかし、部下に嫌われてはいない。むしろ、好かれている（お姉さま的意味で）。

最高神だが、やる気がない。そのせいか、神界以外の世界にいる事が多いが、ほとんど娯楽施設（ゲーセンなど）の場所にいるため簡単に見つかる。

性格は、天上天下唯我独尊そのもの。楽しければ後先を考えない上、自分が楽しければ他人にどれだけ迷惑をかけても気にしない。

座右の銘は『籠の鳥よりカラスがいい』ある高校生の名台詞。シンパシーを感じたらしい。

オーディーン：プロフィール（後書き）

次回からは刹那に地の文をやってもらいます。

説明書

前回
落とされました。

「アハハハハ！ハハ、アハハハハ！！」

なんか笑いと涙も止まらない…

「生きてる！俺は生きてるんだぁぁぁ！！」

うん。生きているって素晴らしい！

さすがにスカイダイブ（パラシュート無し）は、死んだと思ったよ。
止まるなんて知らなくて本気で怖かった…

とりあえず、説明書来るまで待っとこう。何かしたいけど、やったらヤバイ気がする。

そういえば、今の手持ち何があるんだ?待ってる間に調べとこ。

刹那の装備
パジャマ、スニーカー、バック（結構デカイ）

バック内アイテム
制服（クリーニングした物）、救急セット（絆創膏、包帯、湿布、

消毒液など）、携帯電話（圏外）、説明書、枕（変わる寝むれない）、調理器具（鍋、包丁、まな板、おたまなど）、その他……だな。
なんでバックがあるのか、普通こんなに入るかとかは自分も分かりません。オーディーンが用意してくれたのか？
うん。荷物の中に、説明書あったよな…
色々と気になるがとにかく読もう。

『説明書：能力詳細
最初に言ったようにお前には3つの能力を与えた。1つは説明したから、省略させてもらうぞ。　じゃあ、残りの能力の説明を記入するから自分で読め。

能力1：心身強化
その名のとおり、精神力と身体能力の強化だ。地味とか言うな。
　この能力は結構強力なんだ。　まず精神力だが、お前のは上限がなくなる。つまり無限だな。精神力は魔法の発動と威力に関係するものだ。高ければ高いほど、優れた魔法を使えるようになる。それに、精神汚染を防ぐことができるのも強味だ。精神汚染は幻惑や催眠が主だが、希に崩壊させるモノもある。それが防げるのはとても有利なことだ。　それに肉体強化。これはある意味一番重要だ。身体能力が上昇する。1kmぐらいなら、十秒ほどで走れるし、殴れば戦車に風穴を空けれる。　それと体を強化するのがメインだが、オマケのほうが大切だな。
第一に翻訳機能が追加させる。どんな言葉も喋れるし、理解できる。文字も読み書きできる優れものだ。
　第二に治癒力が上がる。致命傷でも半日足らずで元通りだ。第三にどんな武器でも扱える。刀も槍も鉄砲も暗器も、とにかく何でも

使うことができる。
まあ、こんなところだ。
次行くぞ～

能力2：解析［アナライズ］この能力は、対象の情報を視ることができる。
初見の物でも情報が解るため非常に使い勝手が良い。が、情報を知りすぎるため注意が必要だ。他人の過去や考えまで解ってしまう。コントロールできるないと在る物全ての情報を視てしまう。だから、コントロールできるよう精進しろ。

追伸
バックは自由に使え。ちなみに何でも容れれる。バックの中に地図も入ってるからな。その地図は現在地が分かるから迷う事はないだろう。それと、今のお前は攻撃方法がほとんどない。いや、むしろ皆無だ。理由は簡単。武器が無いことと、魔法の知識が無いことだ。武器が無いとスライムで死ぬぞ。あいつらは酸でできてるからな。その他も素手で勝てるほど甘くない。魔法は魔力の使い方を知らなければ意味がないしな。だから、死にたくなければ早めに能力を創りなさい。

by，最高神』

…能力は解った。地図もある。でもさ、無事に街まで行けるかな？
よし、能力を創ってから行くか。
死にたくないし……

能力作成と可愛い家族（前書き）

作成は猫が大好きです。
だから、猫が登場します。
名前はメル〇ラのキャラから付けました。

駄文ですが楽しんでもらえたら嬉しいです。

能力作成と可愛い家族

前回

能力が解りました。

どうも刹那です。現在能力作成中です。と言っても、もう決めてるけどね。

色々考えたけど、これで決まり。
どんな能力かと言うと…

能力：想像具現
自分の想像した能力・道具を現実にできる。基本的に制限はない。
アニメや漫画の技もできるから便利だ。

こんな能力です。

これで街まで行けるかな？
ブルルル…　ブルルル…

ん？ケータイがなってるぞ。ここ圏外だよな？
メールきてるし…　ここ圏外だよな？

ええっと、

『差出人：オーディーン
題名：能力作成完了へのプレゼント

創ったみたい

だな。じゃあ能力作成ができたお前にプレゼントをやろう。近くに魔物がいる。その魔物がプレゼントだ。可愛がってやれ。』

もしかして、前にいるこいつか？結構可愛いな…

あ、情報が視えた。

名称：無し
種族：神獣
ランク：ＥＸ
性別：♀
マスター：刹那
詳細：オーディーンのプレゼント。見た目は猫。だが、持っている力は龍種以上。属性は火，風 。オッドアイで右目が赤、左目が緑と属性を表している。体は白と黒の虎縞。
大きさは自由自在。猫の姿と人間の姿があり、猫の時は人語を理解できるが、話すことはできない。人間の時は理解も話すこともできる。一度忠誠を誓った相手は裏切らない。
少食で、肉も野菜も食べるが、野菜の方が好みらしい。大きさを変えると姿も変わる。猫↓虎　子ども↓大人

龍より強い猫…
もらって良いのか？

『ふみゃぁぁぁ』

可愛い！

「おいで〜」

歩いてる姿まで凄く可愛い！！

「よろしくな。」

『みゃぁぁぁ』

名前なかったから、俺が付けて良いのかな？

「俺が名前を付けて良いか？」

あ、首を振ってくれた。

「じゃあ、レンで良いか？」

お、喜んでくれてる。

「よし、街に行くか。レンおいで。」

そう言ったら、頭に飛び乗ってきた。案外ワンパクらしい。

「さて、ここから一番近いのは……アイギス城か。なんか嫌な予感がするようなしないような…」

とにかく行ってみよう。

じゃなき野宿だ。

「って、いつまでパジャマでいるんだ俺は？」

着替えてから行くか…

能力作成と可愛い家族（後書き）

嫌な予感は的中するもの…だから、次回は酷い目に遭わせたいな～

アイギス城到着。　冤罪で捕まりました。（前書き）

次、決闘します。

アイギス城到着。　冤罪で捕まりました。

前回
可愛い家族が増えました。

着替えた後、地図を見ながら歩いてたんだけど…なかなか着かないね。
何故かと言うと…エンカウント率がハンパじゃない。
右に行けば魔物。左に行けば魔物。　ここら辺の魔物は暇なのかね〜

ま、そのおかげで解析がマスターできたり、そいつらの剥ぎ取りをしたから、アイテムが大量入手できたよ。
「それに、俺は何もしてないしな。」

何故ならレンが殺ってくれるから。　出てきた敵を焼き殺したり、切り裂いたり…　味方で良かった。
さっきなんて龍を瞬殺した。しかもさ、体の中を真空状態にして内側からグシャリ、なんて殺し方だ…　流石に龍に申し訳ない気持ちになったよ。

「レン。魔物はまだ良いけど、人間は殺さないでよ。頼むから。」

『にゃぁぁ〜』

返事（？）したから大丈夫だろ。　…多分。

まあ、それはともかく…

「まだ着かないのか？」

そろそろ着いてもおかしくない。　地図でもそろそろなんだが…

『ふにゃぁぁ～』

なんだ？レンが何か見つけたみたいだ。

そこには立て札が立ってた。　よく今まで気付かなかったな。こんなデカイのに…

「ええっと、『アイギス城を見つけられない人へ！　立て札から右に進むと魔方陣が有りますので、その上に乗ってください。　そうすればアイギス城へ行くことができます。　以上　旅人案内人　フラウ＝クロイツでした！』…」

……怪しくない？これ。

まあ、手掛かりこれしか無いからな～　取り敢えず行ってみるか。

でも、地図と反対方向なんだよな…

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

これが、魔方陣か？　なんて言うか…デカイな。　軽く２０人は入るぞ。

これに乗れば良いんだよな？

……乗ったけど何も起こらない。　解析しても、転送魔方陣→転移魔法の触媒。魔方陣によって転移の仕方が違う。としか説明無かったし…実際はまだあったけど理解できませんでしたー

そんな事を考えてたら急に魔方陣が光りだした。

「お、転移するのか？」

しかし何故だろう？なんか、凄い嫌な予感がする

「あれ？レン、何でバッグに入ってるんだあああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

飛んでる！？もしかしてこれが転移魔法か！？

てか、痛い！風圧が痛い！空気が冷たい！　あの魔方陣作った奴は絶対馬鹿だ！

俺が作った奴を心の中で罵倒してると、デカイ城がありました。

「スゲェ…城が浮いてる。」

あれ、気のせいかな？このままだと城に突っ込みそうなんだけど…

「ギャァァァァァァ！！！！！」

ドゴーン！！！！

「イタタタ…　よく死ななかったな、俺。」

にしても、まだ嫌な予感がするな…　なんで？

「なんだ！？何が起きた！」「ここです！ここから音がしました！」

「賊かもしれん！全兵、戦闘配置に付け！魔法が使える者は結界の修復を急げ！」

…外の話の流れだと俺が犯人か？

「私が扉を開く。後の者は私の後に続け！」

ヤバイ！このままだと侵入者として捕まっちまう！　どこか隠れ

「突撃！！！！！！！」

バキバキメキ、ドゴーン！！！！

「いたぞ！目標を確保せよ！抵抗した場合殺しても構わん！」

マジですか！？　こうなったら…

「抵抗しないので殺さないで下さい！！！！！」

逃げて殺されるよりは、捕まっても生きる方がずっといい。だって死にたくないし…

え？少しは戦え？やだよ。俺は一般人Ａだぞ？兵士［多数］なんか

に勝てるわけないだろ…

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ただいま謁見の間みたいなとこで縛られてます（バック背負ったまま）。

俺、これからどうなんだろ？極刑とかじゃないよね？

「……との…こ……す。」「そ……ら……か。」

なんか話してるみたいだけど、よく聞こえない。

近くにいる兵隊さんに聞いてみよ。

「あの～、俺どうなるんですか？」

「……」無視されたよ。返事ぐらいしてほしい…

「少年、顔を上げよ。」言われた通りに顔を上げた。

そしたら、なんかすんごい地味な人が玉座に座ってた。

解析してみよ…

名前：ウィリアム・クロム・シルディア

通称：シルディア王

種族：魔族

性別：男性

年齢：４５歳

身長＆amp;体重：１７５ｃｍ，５９ｋｇ

髪＆amp;目：金髪、碧眼

特技：魔法
趣味：魔法研究、農業
好きな物：自室、静かな場所、ハーブティー
嫌いな物：徹夜、五月蝿い場所、牛乳
能力：魔力無効化（魔力による攻撃を無効化することができる。ただし、自分の現在魔力量より高い攻撃は無効化できない。）
容姿：すれ違っても全く記憶に残らない位地味
身体能力：歳のせいか最近はあまり凄くない
ＩＱ：ほぼ全ての国の歴史や言語等を知っている。魔法の知識等も深いところまで理解できている
備考：
アイギス城現城主。　このアイギス城を浮かばせている張本人。魔法が得意で、先の戦争では魔法王ウィリアムと恐れられていた。特徴は地味。限りなく地味。その地味さは魔物にさえ気が付かれないほどだ。
国王としては優秀。国民のほとんどが支持している。家族構成は妻と娘がいる。どうも妻には頭が上がらないようだ。性格は優しく、身寄りの無い者や病気の者を助けるために教会や孤児院を作り、その経営まで自分で負担している。
なんか凄い人みたい。魔法で城を浮かばせてるなんて誰でもできる事じゃないだろ。　でも特徴が地味って酷くない？

「少年、名はなんと言う？」
「如月　刹那　です。」

「ではセツナよ。何故我が城に侵入した？」
やっぱり誤解されてる…

「別に侵入した訳じゃありません。」

「なら、何故あのような事になった？」

「アイギス城の道が書いてある立て札があったから、その通りに動いただけです。」

「……その話は本当か？」

「本当ですよ。立て札はあったし、作った人の名前だって書いてありました。」

「ではその者の名を言ってみよ。」

「フラウ＝クロイツと書いてありました。」

……あれ？なんで静かになるのさ？

「そうか…あの馬鹿の仕業だったか。ならば納得できるな。」

なんか納得されてるし…

「誰か！この者の縄を解け！それとあの大馬鹿者をこの場に連れてこい！多少手荒な事をしても構わん！」

やった！解放されたよ。

「セツナ君。今回の事は本当にすまなかった。　謝って済む問題ではない。何か出来ることがあるなら何でも言って欲しい。」

そう言い、頭を下げる王。別に気にしてないけどな～

「王！フラウ様をお連れし

ました。」

「んだよ！俺が何したってんだ！？」

なんか後ろに縄で引き吊られてる人がいる。

解析しなきゃな…

名前：フラウ＝クロイツ
種族：魔族
性別男性
年齢：２０歳
身長＆ａｍｐ；体重：１７８ｃｍ，７０ｋｇ
髪＆ａｍｐ；目：両方とも青
特技：槍術
趣味：ナンパ（成功率はあまり高くない）、魔道具研究（ただし失敗ばかり）
好きな物：女の子、魔道具研究、武器いじり
嫌いな物：読書、勉強、静かな場所
能力：魔力看破（魔力の量、質、属性を発動前に分かるが、自身の総魔力量を越える魔力に使うと酷い頭痛がする）
容姿：ゲルマン風の顔立ちで見た目は美形（ただし3枚目の空気を纏っている）
身体能力：脚力が尋常ではない（本気で蹴ると成人男性を一撃で殺せる程の威力を持つ）
ＩＱ：知能は（そこまで）悪くないが知識が皆無
備考：
シルディア王の義理の息子。戦争の時両親と死別し、その後シルデ

ィア王に拾われ今に至る。
最初の頃は喋ることが出来なかった。そのため周りの者が無愛想だと思っていた。
ここ1，2年前は、魔道具研究にはまっていたがあまりに周りに被害が及ぶため、禁止された。その時に、全ての作品を機能停止させた。
ナンパ趣味だが、成功率は高くない。
槍術を学んでおり、腕前はかなりのモノ。そこいらの兵士では太刀打ち出来ないほどだ。
フラウ＝クロイツは拾われる前の名前。本人は戦争を忘れないように名乗っている。
性格は優しいが、普段は悪ぶっている。
自分の事を『青き貴公子』と名乗ったことがあった。本人にとって触られたくない黒歴史だ。
ちなみに『青き貴公子』は髪と目が青い事と王子である事から言ったらしい。

「糞爺！今回は何だよ！？徹夜明けで眠いんだ！さっさと寝かせやがれ！」

王様にこんな口を聞いていいのか？

「この大馬鹿者がぁぁぁ！！！！！」

王様が吠えた！怒鳴ったじゃない。吠えたが適切だ。

「今回は、お前の作品が城の者ではなく、旅の者に被害が出たのだ！さっさと謝らんか！！！」

「待てよ！何の話だよ！？最近は何も作ってないし、前に作った者は全部機能停止にしたじゃねぇか！！？」

「だが、実際に被害にあった者がいる。しかもお前の名が書いてあったと証言している。」

「本当かボウズ！！？嘘だったらタダじゃ済まさねえからな！」

これって脅しだよな！

「本当ですよ。嘘だと言うなら確認してから来てください！」

「このガキ！下手にでてやりゃぁいい気になりやがって！殺すぞ！？」

「どこが下手にでてたんですか？」

「落ち着きなさい2人とも！今、調べに行かせている。静かに待ってなさい！」

「チッ！良かったなボウズ。あのまま戦ってたら、首と胴がサヨナラしてた所だぜ。」

……ブチッ（何かが切れた音）

今の挑発か？挑発だよな？だったら買ってやろうじゃねぇか！

「そうですか。ですが、助かったのは貴方の方じゃないんですか？」

……ブチッ

「それはどーゆう意味だ、ボウズ？まさか俺に勝てると思ったのか？」

「当たり前でしょう？貴方程度に負けるほど弱くないですよ。このまま引いた方が身のためですよ。」

「よく言った。つまりはアレだな？殺して欲しいんだよな。なら、望み通り殺してやるよ、糞ガキ…」

「は？何か勘違いしてませんか？俺が死ぬわけ無いだろ？やっぱり頭逝ってますね。さすが『青き貴公子』様ですね♪」

……ピシッ

空気が凍りつく音がした…

周りの人達は真っ青になってるね。どうでもいいけど

「……おい糞ガキ。それをどこで知った？」

「教えると思うか、『青き貴公子』様？」

「そうだな。誰か武器を貸してやれ！　決闘だ。付いてこい。それとも…あそこまで言って逃げるなんてないよな？」「当たり前だろ。勝てる勝負を捨てるなんて馬鹿がする事だ。」

「アハハハハハハ」
「ハハハ、アハハハハ…」

「「アハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！」」

「お、おい。２人とも少し落ち着「「外野は黙ってろ！！！！！」」ごめんなさい！！」

もはやケンカの理由なんか覚えていない２人は闘技場で、相手を叩きのめすことしか考えていないのであった…

アイギス城到着。　冤罪で捕まりました。（後書き）

バトル描写書けるかな？

決闘！精神的に追い詰めろ！（前書き）

はじめての戦闘描写です。会話の方が多いです。

駄文です。それでも読んでもらえたら嬉しいです。

決闘！精神的に追い詰めろ！

前回
決闘をすることになりました。

現在、中庭にいます。…中庭？広すぎだろ？しかも観客席まであるし。ってか観客来すぎだよ。何百人いるんだよ？

まあ、それどころじゃないですけどね。
……決闘か～
さっきまでの俺は何を考えてたんだろう？それ以前に何故キレたんだ？

このままじゃ絶対に死ぬ！
誰か！俺にアドバイスを…

【人は死の間際まで　もしかしたら助かるかもしれないと空想し得る力を与えられる　―武者小○実篤―】

ホントにきたよ…
空想し得る力…確かに助かるかもしれない！
なんたって、俺の能力そのモノだしな！

「おい、そろそろ始めるぞ。」
空想は出来てる。後はそれを現実に持ってくるだけだ。　失敗しないよな？

「分かった。始めようか。」

俺がそう言った瞬間、王様が前に出てきた。　なんか、若干暗くない？

「よし。親父！いつも通り審判頼む！」

王様が審判かよ！？しかもいつもやらされてるのか…そりゃ暗くもなるな…

「では両者誓いをここに！」

……え？

「私、フラウ・クロム・シルディアは、持てる全てを尽くし、正々堂々、この者と戦うことを誓う。……おい、さっさとお前も言え！」

いや、せめて事前に教えてくれよ…

「俺、如月　刹那は持てる全てを尽くし、正々堂々、この者と戦うことを誓います」

…これって選手宣誓じゃないか？

「それでは、試合…開始！！」

よし！早く具現化しなきゃ…

「死ねぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

危ねぇ！

「チッ、外したか。それよりやっぱり気になるぜ…　おい、ボウズ！少しだけ待ってやる。武器を誰かから借りてこい！じゃなき、死ぬしかないぜ？」

…意外に優しいな。解析結果に優しいって書いてあったけど、信じてなかったよ。

「いや、別に借りなくていい。　…今から少しだけ奥の手を見せてやる。避けた方がいい。じゃないと…大変な事になるぞ。」

空想具現、発動！

「……なんだ？その布は？奥の手じゃないのか？　」ただの布じゃない。マグタラの聖骸布だ！
男にとってこれ以上ない武器（？）だ。

「俺が知っている武器で一番厄介な武器だ。…最初に言っておく。俺の勝ちだ。」

「そんな布程度で俺に勝てるだと！？ふざけた事を言ってんじゃねぇぞ！てめえぇぇぇぇ！！」

やっぱり突っ込んでできたか！

……ありがたい（ニヤリ）。

「私に触れぬ（ノリ・メ・タンゲン）」

深紅の布は意思を持ったかのようにフラウへと伸びる。

「な！？！？」

避けようにも布のスピードの方が速い。

だから…

「な、なんじゃこりゃぁぁぁ！！？？」

そう、全身ぐるぐる巻きのイモムシ状態になる。

……どうなるかは知ってたけど、かなり憐れだ。

「世の中には拘束を目的とした武器もある。次からは気を付けよう。」

「ふざけんな！こんな物、俺の魔法ですぐにでも…なぜ魔法が使えない！？」

イモムシ、それは無意味だよ。

そう考えながらフラウの腹の辺りに座る。

「何座ってやがる！さっさと退け！」

「やだ。だいたい実戦だったら、こんな長い間拘束された時点で死んでるよ？それに比べたら座られるくらい我慢しなきゃ。」

俺こんな性格だっけ？なんか最近壊れてるような…

「それと、その布はマグタラの聖骸布。男に対して絶対的な拘束力を持つ布だ。一度拘束すれば能力まで封じることができる。諦めろ。これに包まれたら、どんな能力を持っていても逃げることなどできん。お前が男であり限りな。それとも、男を辞めてみるか？」

言っている自分ですら寒気がする…

「嫌に決まってんだろ！さらっと恐ろしい事を言うんじゃねぇ！！」

そりゃ他人事だもん。いくらでも言えるよ。

「そんな事より、敗けを認めるか？認めない場合、俺は容赦なく殺るぞ。」

どっちかって言うと精神的に。

「勝手に殺りやがれ！敗けなんて絶対認めねぇ！」

……いい度胸だ。真の地獄を見せてやる！

「……アハハハハハハ！」

「何を笑ってやがる！」

「いや～いい度胸だ。お前は今動けないんだぜ？それでも敗けを認めないなんて。　うん。気に入ったから最後のチャンスをあげるよ。敗けを認めるか、このまま俺に殺られるか。」

これで認めないなら、マジでやる。

「くどい！さっさと殺れと言ってるだろ！」

「ああ、分かった。今から殺るさ。」

右手にメガホンを持つ。観客席に向かい…

「皆さ～ん。聞こえますか～？　今からフラウの恥ずかしい過去を暴露しちゃいま～す！　最後まで静かに聞いてくださいね！」

「んなぁ！？」

どうしたイモムシ？腹でも痛いのか？

「な、何をしてやがる！？俺を殺るんじゃねぇのかよ！」

「心配しなくて良いぞ？ちゃんと精神的に殺してやるからな。」

アハハハ。ちゃんと死にたくなる程度にしてやる。

「何をふざけた事を言ってやがる！」

「さっき言ったぜ？容赦なく殺ると。それにチャンスもあげただろ？それを棒に振ったのはお前だ。」

「た、頼む。敗けを認めるから止めてくれ。」

もちろん答えは、

「ヤダ♪　さ～て皆さん！お待たせしました！　フラウの恥ずかしい過去ベスト１０から始めたいと思います！」

俺の攻撃は今からだ！

…俺はこんな性格だっけ？違ったよな？

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「…はい！ご清聴、有り難うございました。」

スゲー盛り上がったよ！　やっぱり人の不幸は蜜の味だな。

「フラウ～、生きてる？」

そこには白く燃え尽き、口から何かが出かけている状態のフラウがいる。

「……」

ちょ、ちょっとやり過ぎたかな？

「王様、俺の勝ちでいい？あと、これ死んでんのかな？ピクリとも動かないし、返事もしないんだけど…」

「あ、ああ。君の勝ちでいい。にしても、本当に容赦しなかったな。」

王様、顔が青いよ？

「最近、やること全部の歯止めが効かないんだよね。何でだろ？」

「それは早く戻した方が良いのでは…」

分かってるけど難しいんだよ！

「それより、調査の方はどうだったの？」

それが一番大事だ。決闘の原因（？）だし、俺の無実を証明するための鍵だからな

「それなら君がフラウの過去を暴露してる間にきたよ。」

よっしゃ！

「だけどフラウが目覚めてからだ。一応この馬鹿も関係者だからね。」

こっちは早く聞きたいのに！　…無理矢理起こるか。
「王様、こいつが起きたら話すんだな？」

「ああ。起きたらすぐに話そう。」

「なら、今すぐに起こす。」

ちゃんと起きろよ！

「フラウ、…ボソボソ…」

「ギャァァァァ！！！！」
よし起きた。

「…は！？なんで俺は中庭にいるんだ？しかも縛られてる！？俺に何があったんだ！？」

「王様、起きたから話してくれ。」

「あ、ああ。フラウ、落ち着きなさい。今は話を聞くんだ。」

「親父！なんｄ「いいから聞けや！」うるせぇ！お前は誰だよ？」

自己防衛なのか、俺の事を忘れているようだな。
どーでもいいけどね　。

「とにかく黙ってろ。じゃないと、女にするぞ。」

「……（コクコク）」

どうやら分かってくれたみたいだな。

「アンタもさっさと話せよ。俺はそこまで気が長くないからな。」

「分かった。如月　刹那君、君は確かに何もしていなかった。」

「当たり前だ。」

「しかし…」

あれ？まだなんかあるの？

「あの転移魔道具の機能を停止させた魔法は、私が発明した特殊な結界魔法でな。魔物だけが解くことができるが、魔物は結界には近付くことができないという代物だ。」

だからなんだよ？

「なのに刹那君は解いてしまった。いったい君は何者なんだ？少なくとも魔物ではないようだが…」

「俺は人間だよ。ちょっと特殊な人生を送ってるけどね。」

両親と死別し、神様には拉致され、来たばかり世界では冤罪になった。心の癒しはレンだけだな。

……あ。レンを忘れてた。

「なんで忘れてるんだ、俺は！？」

急いでバッグをあさる。
魔物のから剥ぎ取った物をどけ、レンを探す。

「いた！レン！何もなかったか？怪我はしてないか！？」
丸めた体はわずかに動いている。　寝てるだけみたいだ。良かった…

「刹那君…なんだその生き物は！？」

何って猫だけど…

「猫ですよ。名前はレンです。可愛いでしょ♪」

「そんなバカな！猫は３００年前に絶滅した伝説の種族のはずだ！」

嘘だろ！？レン以外に猫いないのかよ。
それはそうと、伝説ってなにさ？

決闘！精神的に追い詰めろ！（後書き）

猫が伝説の世界。
自分で書いといて意味分からん。

シルディア王国最強の騎士登場（前書き）

この度は真に有り難うございます！
まさかＰＶ２００００アクセスしてもらえるとは…
読者様がたに、楽しんでいただけるように、精進させていただきます。

シルディア王国最強の騎士登場

前回
決闘終了。

俺は膝を抱え、軽く鬱になってる。なぜなら…

「なぜ、なぜ猫が絶滅してしまったんだ。　それどころか動物は全て滅んでいるだなんて…。」

俺にとっては死刑宣告に等しい。　王様に教えられてもまだ信じられない。

「その程度で泣くんじゃねぇよ。泣きたいのはこっちの方だぜ…」

そう言ったのはフラウだ。さっき全部思い出したみたいだ。良かったな。

「動物の愛らしさを知らないフラウ君には分からんよ。この気持ちは…」

「てめえこそ分かるかよ。黒歴史を暴露されまくったヤツの気持ちが…」

……確かに酷かったな。

「済まなかったな。確かに俺は最低な事をした。恨まれるぐらい甘んじて受けよう。」

さっきまであんだけ酷いこと言いまくったからな。恨まれても文句はない…　それはそうと、なんか口調おかしくない？

「……別にいい。」

「え？」

「なんだその愉快な顔は？俺は謝られて許さねぇほど、小さいヤツじゃねぇよ。　それと、こっちこそ悪かったな。」

「なんで謝るんですか？」

「お前は俺の魔道具のせいでこんな目にあっちまったからな。謝るのが普通なのに俺は怒鳴りつけた。」

「別にフラウさんが悪いわけじゃない。あれは結界があった。それを解いたのは俺とレンだ。そっちに非はない。」

「なら喧嘩両成敗ってことにしようぜ。それならどっちも納得できるだろ。」

「そうですね。なら、今までのことは水に流しましょう。」

そう言い2人で笑う。
フラウさんは、話せば分かる人だな。

「ゴホン！仲直りは良いが、さっさと城へ戻ってくれないか？そろそろ夕食の時間なんだが…」

その声の方を見ると…

シルディア王が疲れた顔で立っていた。

「親父。コイツにもメシを食わせてやってくれ。俺の道具のせいでここに来ちまったんだ。　メシくらい食べさせても良いだろ？」

マジですか！？

「無論そのつもりだ。今回は済まなかったね、刹那君。夕食だけと言わず、止まっていてくれ。」

う、嬉しすぎて言葉が出ない。
この世界に来てから一回もご飯を食べてない。

考えただけでヨダレが…

「どうした？刹那君。顔がすごい事になってるよ。
…とりあえずヨダレを拭きなさい。」

「は、はい！」

すごい顔ってどんなんだろ。

「とりあえずメシにしようぜ。親父はともかく俺たちは腹減ってんだからよ。」

「そうだな。行こうか刹那君。早くしないとフラウに全て食べられてしまうよ。」

なに！？急がないと…

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「遅かったか…」

追い付けなかった…
全部食われてるよ。キレイさっぱりと…

「フラウ！刹那君の料理まで食べてないだろうな！？」

「大丈夫だよ！シンゲンさんに頼んで取っといてもらった。シンゲンさん、コイツの分のメシを持ってきてくれ！」

シンゲンさん？日本人か？いや、流石に無いか。

「今持ってくる。そう急かすな。」

キッチンの方から聞こえた声の主は、すぐに料理を持ってきてくれた。

でもその人（？）を見た瞬間、思考がフリーズした。

「ん?どうした小僧?我の顔に何か付いておるのか。」

なんか話しかけてきた。
これは夢だ。だから、落ち着け。深呼吸、深呼吸。

「スー…ハー…スー…ハー…。」
よし、落ち着い…

「何をやっておる小僧?そのような場所におらずに、さっさとここに座らんか。食事が冷めてしまうだろうが。」

落ち着けるかぁぁ!
くそ、夢なら痛くないはずだ。よし…

拳をつくる。そして自分の腹を殴る!

「ぐぼぉぉ!!」

かなり痛い。予想以上に力が入ってたみたいだ。口から血が垂れてる。

「小僧!?いきなり自分を殴るとは…。正気か?」

「いや、それ以前に口から血が出てるし…　刹那、何やってんだよ。

死ねつもりか？」

「今すぐ医者を呼べ！寝ていたら叩き起こせ！　刹那君！すぐに医者を呼ぶから安心しなさい。」

そんな馬鹿な事をした結果、俺の意志は堕ちた。

何やってんだよ。俺は。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「……き……ろ……刹那……」

うん？誰か呼んだか？

「……っと……小僧……」

眠いんだ。寝かせてくれ。

「さっさと起きんか小僧！」

「ぎゃあああああ！！？？」

なんだ!?何が起こった!

「やっとで起きたか。シンゲンさんに感謝するんだな。　いきなり馬鹿な事をしたお前を、此処まで運んでくれたんだぜ。」

「あれ?フラウ。俺、いつ寝たんだ?」

まったく状況が理解できない。なんか扉の近くに変な生き物がいるのは分かる。

「何を言ってんだお前さんは?　お前は自分の腹を殴って、気を失ったんだよ。まったくなんでいきなりあんな事をしやがった。」

「なんでだっけ?
……そうだ。なんかすごい奴を見たんだ。で、夢か確認するために殴ったんだ。」

「お前、絶対馬鹿だろ。」

反論できない…

「まさかとは思うが、そのすごい奴は我か?」

え?

「小僧。聞いておるのか？」

やっぱり夢じゃなかったか…はぁ

「…そうですよ。いきなりアンタみたいなのが出てきたら誰だってあれぐらいやるぞ。」

目の前にいるコイツは流石に受け入れがたい。

だってさ、ライオンが二足歩行で歩き、口に煙草をくわえ、左目に眼帯をし、タキシードにピンクのエプロン着てたら夢だと思いたくなるだろ？　しかも燃えてる。比喩じゃなく本当に燃えてる。

「まったく、我のどこが変だと言うのだ。」

いや全部だろ？　でもフラウも王様も驚かなかったな…　慣れたのか？それともこの世界では普通なのか？

とにかく解析しよう。そうすれば分かるだろ。

名前：シンゲン
種族：獣人
性別：オス
年齢：７５歳
身長＆ａｍｐ；体重：２０６ｃｍ．８５ｋｇ
髪＆ａｍｐ；目：髪は炎でできているため、赤や青と感情によって変わる。瞳孔も同様に色が変わる

特技：狩り
趣味：鍛練、瞑想、子どもと遊ぶ
好きな物：子ども、肉、礼儀正しい者
嫌いな物：不意討ち、魔法、無礼者
能力：魔物化（一時的に魔物の力を引き出す事が可能。ただし使う間は、理性が無くなるため注意が必要。）、炎神の加護（火炎系の力を吸収し、自身の魔力にすることができる。また、炎を魔力無しで出すことができる。）。２つの能力を持つ者は少ない上に、両方レアスキル。あと１つ能力があるようだが封印しているようだ
容姿：……説明困難。強いて言うなら二足歩行で立ったライオンが背筋を伸ばし、たてがみとかを炎に変えればこんな風に……なるかもしれない
身体能力：バグキャラ一歩手前（ネ〇ま！のラカン並）
ＩＱ：戦場の知識はそこらの軍師より多い
詳細：シルディア王国第一騎士団団長。この王国最強の騎士。世界でも数多く存在する獣人の中でも極めて珍しいライオンの遺伝子を持つ。もともとは流れの傭兵だったが、ある事件の後騎士団に入団。わずか３ヶ月で騎士団団長になった豪傑。
あらゆる武術を使う事ができると噂されている。
戦闘時は武器を持たず、素手で戦う。素手で戦うのは、相手の無力化のため。
本気で戦う場合、戦斧を使う。　一撃で龍に致命傷を与える威力を持つ。
性格は優しいが、同時に厳しい。　子どもに好かれており、城下町に行くと遊んでいる姿を見かける事がある
ほぼ全てにおいて完璧にこなす事ができる。　が、少しばかりずれている。
服装は子どもと遊んだ時のバツゲームのようだ。だが、本人は気にしていない。周りはよく見かけるため気にしない事にしている。

凄く強い事とこの服装が普通じゃないと分かった。

「聞いておるのか？まあいい、それより小僧。腹が減っているのだろう？　今飯を持ってくるから待っておれ。」

あれ？いつ出てったのあの人。さっきまで目の前にいたはずなのに…

「刹那。お前が驚く気持ちはよく分かる。だけどシンゲンさんに常識を求めたら負けだ。」

確かにそうかも…

「つまり我は非常識だと？」

……え？

「そうそう！龍を一人で倒すような人に常識がある…は…ず……」

フラウは固まった顔で後ろを向くと…

「つまりフラウ。これからの鍛練に容赦は要らんのだな。」

般若も逃げ出すような狂暴な顔をしたシンゲンさんが立ってました。

「あ、あああ…」

もはや恐怖で口が動かないみたいだ。

「小僧。ここに飯を置いてくぞ。我はフラウと鍛練をしてくる。用があるなら中庭に来い。」

「待った！マジで待ってくれシンゲンさん！　今日は遅いし明日にしよう。」

確かに外は真っ暗だ。

「なに、夜中によく出歩くお主だ。こんな時間ならまだ大丈夫だ。それに夜に戦う時などいくらでもある。それを教えようかと思ってな。王からもお主の鍛練は我に全て任せると言われている。」

フラウの逃げ道全部塞いだよ。

「そうだ！刹那と話さないといけない事があったんだ！いや～悪いねシンゲンさん。また、次の機会に教えてくれよ。」

俺をダシに使うのかよ。

「小僧。それは真か？」

めちゃ恐い！冷や汗が止まらないよ。

「本当だ！なあ、そうだよな刹那！（副声音／頼む！合わせてくれ！）」

「どうだっけ？あったような無かったような…（副声音／なんかしてくれるか？）」

取引は大事だよ？

「あった！あったぞ。思い出せ刹那（副／分かった何でしてやるから、助けてくれ！）。」

よし！

「思い出した！確かに約束してました。」

「では何を話すのかな？」

「どうして動物が絶滅したかを聞こうと思って。俺、実はあんまりそうゆう知らなくて…」

「それぐらいなら今教えてやろう。動物が絶滅したのは魔力が発見

されたからだ。魔力は人より動物の方が宿しやすい。そのため動物は膨大な魔力をその身に宿した。いや、宿しすぎた。ゆえに多の動物が人の形をとるようになり、我ら獣人に変化したと言われている。なぜ魔力が多すぎると悪いかと言うと魔力とは毒のような物だからだ。免疫ができた現代ならともかく、昔は死には死にはしなかったが魔獣になってしまう。つまり魔獣にならないために人の姿に変えた。この点だけ分かればいい。」

「え？あ、はい。」

「ならフラウを連れて行くぞ。」

「あ…」

ごめん、フラウ。
俺には無理だったよ。骨は拾ってやるからな。

それにしても、絶滅ってそうゆう意味かよ。

シルディア王国最強の騎士登場（後書き）

お気に入りユーザーに登録してもらえるなんて夢のようです！
茶羽根様、コウ様、夷　神酒様、本当に有り難うございます！

レンと王様と最近の若者と（前書き）

レン（人間バージョン）のプロフィール

髪&ａｍｐ;目：髪は銀に近い白で首にかかる程度。目は猫バージョンと同じ

身長&ａｍｐ;体重：１４０ｃｍくらい？　体重不明

スリーサイズ：Ｂ９０ｃｍ．（Ｃ）６９ｃｍ．Ｗ６５ｃｍ．Ｈ６８ｃｍ

ちなみにＣはアンダーカップです。

後は長くなりそうなので他のキャラと一緒に書こうと思います。

レンと王様と最近の若者と

前回
シンゲンさんが登場しました。

二人が出てったが、俺はこれから何すればいいのさ?

「寝るか…　レンおいで。」

今日は遅いので眠るよ…

おやすみ～

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「……ふぁぁ～。朝か。」

まだ眠いしもう一眠りしようかな～

布団を被り寝返りうつと…

なんかとても柔らかい感触がある。

「……何だこれ？」

布団に隠れているため何か分からない。

はぐってみるか。

俺は一気にはぐり、素早く戻した。

え～と、何かな今の幻。俺は、そんなに欲求不満なのか？

もう一回ちゃんと見よう。幻なら消えてるだろ。ってか消えててくれ…

もう一度確認した結果…

鼻から血が流れた。急いでティシュを創り、鼻に積めた。さいわいシーツは汚れなかったようだ。良かった、良かった。

「って良くないねぇよ！！何一つ解決してない！」

何で鼻血がでたかって？裸の少女がいたからだよ！しかもデカイ。

何かは聞かないでくれると助かります。

「何故？何がどうなってるのさ！？」

誰か助けに来て！いや、やっぱ来るな！
このままだと色々（社会的とか精神的に）ヤバイ！

「どうすりゃいいんだよ。」
「何かあったの？」

落ち着け。今のは幻聴だ。頭が現実逃避に走っただけだ。ほら、妖精がウフフ、アハハ言いながら飛んでるし。こいつが喋りかけてきただけ。何も問題ない。

「だから何かあったの？僕にも教えてよ。」
そう言い、ガバッと起きた少女。ん？ガバッと…

「って起きるんじゃねぇ！！せめてシーツを巻いてくれ！」

うぅ…見えちまった。女の子の裸なんて目に毒だ。いつもなら目の保養だけど…朝はキツイよ。マジで……

「巻いたよ。これでいいの？」

うん。さっきよりはマシだな。でも色々強調されてて目のやり場に困る。
って息子！将軍になっちゃ駄目だ！

「と、とにかく何で君はここで寝てたのさ！」

本当になんでさ！？

「何でって、お兄ちゃんが一緒に寝ようって言ったんだよ。忘れちゃった？」

「お兄ちゃんって俺か？俺に妹はいないよ。いたとしても、ベッドで寝るなんてしないよ。」

「絶対言われたよ。お兄ちゃんが『寝るか…　レンおいで。』って言ってくれたんだよ。」

「ちょい待って。君の名前はなんて名前かな？名前を付けてくれたのは誰かな？」

なんだろ？何か大切な事を忘れてる気がする。

「僕はレンだよ。名付けてくれたのはお兄ちゃん。」

「……レンなのか！？何で人間になって……あれ？そういえば解析結果にそれらしき事があったような？」

確か、猫の姿と人の姿になれるんだっけ？んで今が人の姿なのか…

「レン。できれば人になるときは教えてくれないか？心臓に悪い。それと眠ってるときは絶対に止めてくれ。鼻血の出しすぎで死ぬなんて嫌すぎる…」

「でもお母さんが『夜、あいつと寝るときはこっそり人になれ。女みたいな顔してるけどアイツも男だ。凄く喜ぶぞ。色々な意味で。』って言ってたよ。」

お母さん……あいつだな。次にあったら絶対殴ってやる！負けるだろうけど…

「とにかく次からは止めてくれ。絶対に。」

「分かった、次からはあんまりやらない。」

「あんまりかよ！絶対にやらないでよ！」

「ヤダ。だって驚いてるお兄ちゃんって凄く可愛いだよ。次も見るの。」

可愛いって…

男としてかなりショックだよ。

「もういいや。そんな事よりレンの服創らなきゃ。」

……よしできた。

結構上手くできたな。あ、下着も創らんと…

できた。でも何かごっそり削られた気がする…

創ったのは水色のワンピースと、その…下着だ。

ワンピースは着た人のサイズに変わる特殊な物を創った。下着はリボンがある。以上。

「レン。服を創ったから着なさい。」

「ありがとう、お兄ちゃん。」

あー、二度寝しようと思ったのに…

完全に目が覚めたよ。

「お兄ちゃん。どうやって着るの?」

……ゴッデス、せめて服ぐらい着れるようにしといてくれ。

「下着は着たか?」

「うん。それはお母さんに習ったから大丈夫だよ。」

何で服は教えてないんだよ…

「服は習わなかったのか？」

「習ったけど、真っ黒のフリフリした服しか習わなかったよ。確か…ゴスロリだっけ？」

ゴッデス。何故ゴスロリなのですか？

「分かった。分かったから後ろ向いて。そうじゃないと着せられないから。」

「は～い。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「はあ、はあ、やっとで着せれた。」

後ろ向いてって言ったのに前向くから大変だったよ…

「ありがとう。お兄ちゃんは凄いね。」

なんか凄い嬉しい。頑張って良かった。

「それじゃ王様に会いに行こうかな?」「会いに行こう〜。でも何処にいるのかな?」

「それは大丈夫だ。あれさえ創ればすぐに行ける。」

「あれ?」

「レンは知らんか…」

さて、何を創るでしょう?ヒントはドアだよ。

分かるよな?答えは…

「どこでもドア〜」

やっぱりこれだよな。

「お兄ちゃん。ドアなんて創ってどうするの?」

やっぱり初めて見たら、意味分からんよな。だって見た目はただのドアだもんな

「王様のいる場所へ。」

ドアノブを回すと…
図書館みたいな場所に出たよ。

「わ～、魔法のドアだ。これって僕も使えるの？」

凄いキラキラした視線が送られくるよ。

俺はレンを抱き上げつつ、教えてあげることにした。
「もちろんレンにも使えるよ。そう創ったからね。」

まあ、他の奴等は使えんがな。悪用されても困るし…

「僕も使ってみたい。使っていい？」

「今はダメ。だけど後でなら使っていいよ。王様を見つけてからね。」

「王様ならお兄ちゃんの後ろにいるよ。」

……え？

「刹那君。その子は誰だね？　昨日は居なかった筈だが…」

確かに王様だな。でも、なんか犯罪者を見る目だよ？
「王様、何でそんな目で見るんですか。俺何かしましたか？」

「その子は誰かな刹那君。
場合によっては君を牢に入れる事になるのだが…」

あー、確かに怪しいな。いきなり現れたあげく、小さい子を抱いてるなんて…

「王様、誤解してますよ。　この子はレンですよ。」

「レン？確か猫の名前だった筈だが…」

「そのレンです。なんなら本人にも聞いてください。」

「分かった。お嬢さん、君はなんて名前かな？」

「僕はレンだよ。昨日も会ったよね？」

「……「いや、なんか喋って下さいよ。流石に行数の無駄です。」……本当に昨日の猫みたいだな。」

「それ言うだけに時間かかりすぎです。」

ツッコミあわせて七行も使ったよ…

「そう、言わないでくれ。流石に私だって驚くよ。猫が人になれるなんて…。伝説になるだけあって、デタラメだな。シンゲン並みに…」

確かにあの人はデタラメだったな。

「そういえば、何で猫だけ伝説になってんですか？」

本当になんでさ？
他の動物もなっててもおかしくないだろ。

「それは動物が何故滅んだかから、話さねばならん。」

「それはシンゲンさんから聞きました。」

「……何故猫だけが伝説になれたかは簡単だよ。猫以外の動物は比較的早い段階で獣人になった。だが猫は違う。多くの猫が獣人にならず、５００年以上生き続けたんだよ。しかも一匹も魔獣になっていない。これは凄い事なんだよ。そして３００年ほど前に絶滅した。正確には姿を消したんだよ。つまり何処かでまだ生きているかもしれない。その姿のままで…」

分かったような分からんような…

「質問はあるかな？」

「どこが伝説になる理由？　それとシンゲンさん、猫科（ライオン）の獣人じゃないですか。」

「伝説になった理由は魔力量だよ。猫の魔力量は龍の2倍にあたると言われている。これだけでどれだけ凄いか分かるだろう？」

「いや、全然分からん。そもそも龍の魔力量なんか知らないよ。」

王様よ～。その珍獣を見たような視線は止めとくれ。

「君は学校で習わなかったのか？」

「まず（この世界の）学校なんて通ったことないよ。」

元の世界の学校は行ってたけどさ…　遠野や高崎とか元気かな？もっとも俺は忘れ去られてるけどね。ははははは…　虚しい

「そんな馬鹿な！どの国でも義務づけされている。君の両親は何をやってるんだ！？」

「あー、両親死んでます。だから独り暮らしでした。」

いや～あの2人はいきなり死んだな。借金残して…
せめて払ってから逝けよ。しかも七千万とんで二十八円とかいったい何したんだよ！　悲しむ暇すら無かったぞ…　親戚の金持ちがほとんど払ってくれたけどさ。　なんかムカついてきたよ。

「そんな…」

「どうしました？なんか真っ青通り越して真っ黒になってますけど…」

白くなるなら分かるけど黒って初めて見たよ…　魔族だからか？

まあ、それより王様どうにかしんとな。投身自殺しそうな雰囲気だ…

「あの～、俺はそこまで気にして無いんでそんな落ち込まんでください。」

一つ訂正。投身自殺じゃすまない。ぶつぶつ言ってる言葉にヤバイ単語が何個かあった。　爆死だの焼死だのと、危険極まりない。

……アンタは周りも巻き込む気か？

「おい。何を恐ろしい事言いまくってんの。せめて過労死にしろ。馬車馬の如く働きまくれ。」

「刹那君。君は私を許してくれるのか？」

今の科白聞いて何故そんな解釈ができる。それともその耳は餃子か？

「どうでも良いよそんな事は。いいから疑問に答えろよ。」

この人に優しくしたらダメだ。優しくするだけ時間の無駄だ。

え？相手は王様だって？別に良いだろ、コレぐらい。俺なんて冤罪

喰らったんだぜ？どこぞの馬鹿王子のせいで…

「せ、刹那君。首を持つのは止めてくれないか。流石に苦しい。」

あれ？どうやら無意識に首を絞めてたみたいだ。ちょうど良い。

「いちいち落ち込まずに最後まで話すか？それとも……ふふふふふ。」

「待って。話すから待って。」

「よし話せ。」

「何話すんだっけ？」

……殺してもいいかな？東京湾あたりに沈めたいよ

「シンゲンさんは猫型の獣人だよな？猫は最後までそのままじゃねぇのかよ。」

「さっきの説明をちゃんと聞いていたのかね？私は“多くの猫が獣人にはならなかった”と言ったんだよ。全部とは言ってないよ。全くこれだから最近の若者は…」

……殺してもいいよね？東京湾とか甘かったな。生きたまま鳥葬するぞコラ…

「刹那君？何故そんな怖い顔をしているのかな？」

「それはキレているからですよ。」

「刹那君?その手に持ってるのは何かな?」

「これは虎竹刀と呼ばれる物ですよ。」

「刹那君?何故それを私に向けているのかな?」

「それはお前が狙いだからだ!全身打撲で死ぬほど苦しめぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!!」

「ギャァァァアアアアア!!!!!」

なんだか赤ず◯んちゃんとオオカミの会話みたいだったな。

自分内裁判とご飯とクッキーと

前回
レンが人の姿になりました。　王様は…どうでも良いや。

さてさて、王様を全身打撲（全治2週間程度）したけど、これから何しよう？

「レン。どっか行くか？」

あれ？返事が無いぞ。
まさか迷子か？いや、むしろどこでもドアを使ったのかも…

「まったく、うちの猫は落ち着きが無いことで。」

さてレンは何処にいるのかな？ドアを開けばすぐだけどね。それじゃつまらないよね～
だから、そこらを歩いて行こうかな。ほら言うじゃないか。えっと…急げば廻るだっけ？え？漢字が違う？しかも使い所が違うって？気にしない、気にしない。気にしたら負けだって。…誰にだろ？

「それはともかく、レンを探しに出発！！！！」

とりあえず食堂に行ってみるか。　流石にすぐには見つからんだろう。え?もし食堂に居たら?何でもやってやるよ。……いや冗談ですよ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「もきゅもきゅ…もきゅもきゅもきゅもきゅ…。」

居たよ。しかも美味しそうに色々食ってやがる。　かなり少ないけど…　それにしても、“もきゅもきゅ”ってかわいいな～

「もきゅもきゅもきゅ…ゴクン！　あれ?お兄ちゃんだ。どうして此処にいるの?お迎えに来てくれたの?」

そしてレンは１００万ドルの笑顔を向けてきた。

ぐばぁ!!!!!

あ、危なかった!少しでも抑えるのが遅れてたら辺り一面真っ赤になってた所だよ。　…あれ?辺り一面真っ赤だ。俺は鼻血出してないよ?

あ。　周りにいた兵士の人達がロケットもかくやの勢いで鼻血を噴いてる…　ある意味シュールな光景……なのか?むしろ地獄絵図かな?　多分直視したんだな。兵士1は恍惚とした表情で逝ってるし、兵士2はビクンビクン動いてる。兵士3は「なんて綺麗な川だ。それに向こう岸にはたくさんの美人が…あれ?俺呼ばれてね?よっ

しゃぁぁ！今行くぜ！美女たちよぉぉぉ！！！！！」　って逝ってる。誤字にあらず。

「ってお前ら帰ってこい！それと最後の渡るんじゃねぇぞ！そっちに逝ったら帰れねぇから！」

さすがにそんな死に方は嫌だろ。にしても、此方にも三途の川あるんだ。

「お兄ちゃん。そんな変な生き物ほっといて、ご飯食べようよ。」

兵士3、お前に同情しよう。君は変な生き物に決定されてしまった。だが安心しろ。君の仲間も鼻血を噴いて倒れてるから。あと色々ごめんなさい。
「そうだな。よし！お兄ちゃんが何か作ってあげよう！」
…本当にごめんなさい。

「ワーイ！ありがとうお兄ちゃん！ならお兄ちゃんの分は私が作ってあげるね。」

「それは嬉しいな！じゃあ今すぐ作ろうか。」
俺よ、何故にそこまでスルー出来る？目の前には血の海が広がってるんだぞ？それ以前にせめて起こすぐらいしてあげよう。このままだと本当に逝っちゃう。

「でも流石にこのままじゃ嫌だな。目の前に死人がある部屋で食いたくない。血も凄いし。よし…」

おお！ついに俺が彼らを起こしてあげるようだ。さすが俺！優しいぜ俺！さあ、手始めにそこの兵士を起こすんだ。出来るだけ優し「ドグシャ」く……へ？

「起きろよカス共。お前らの血で部屋が汚れてんだろうが！さっさとてめえで掃除しやがれ！」

ちょっとぉぉぉ！？！？

いきなり何言ってんだよ！？それ以前に何してんの！何で蹴り上げてんだ俺！？変な生き物君が口から血を吐いたぞ！？

「このままじゃ…レンの飯が作れねぇだろうがああああああ！！！！」

ふざけんなああああああああああああ！！！！

――――――――――――――――――――――――

ただいま自分内全自分裁判中です。

裁判官（以下裁）「そんじゃ今日の仕事を始めるよ～」

誰か（以下誰）「んじゃ前出ろよ」

欲望（以下よ）「俺は悪くねぇ！ただ本能に従っただけだ！」

理性（以下り）「ふざけるな！そんな理由が通じると思うな！」

裁「静粛に静粛に！とにかく落ち着こうぜ。自分自身で罵り合いは見てて虚しいぞ。」

よ・り「「ふざけた事を言うんじゃねぇ！それと虚しいって言うな！」」

裁「だから落ち着けよ。欲望はレンのために善かれと思ったために起こしただけだ。それは理性も分かってるだろ？」

り「当たり前だ！だけど他にもいくらでもやり方があるだろ！」

よ「そりゃそうだが…」

り「だったら少しは自制しろ！」

よ「いや無理だろさすがに。俺は本能だぜ？自制なんて出来ねぇよ。そもそもそれはお前の仕事だろ。」

り「あ」

裁「はい。それじゃ真犯人は理性と言う事で裁判を終了します。」

誰「ま、こんなの俺の妄想なんだけどね…」

自分内全自分裁判終了

犯人：理性

―――――――――――――――――――――――――――――

よし…。なんとか落ち着いた。　それにしても、理性の野郎…。仕事をサボりやがって！

「お兄ちゃん！さっきから何ボーッとしてるの？」

「いやごめん。ちょっと自分探しをしてただけ。」

「？よく分かんないけど、掃除終わったよ。」

本当だ。血が消えてる。匂いすら残ってない。…どうやったの？

「それよりお兄ちゃん。あの人達どうするの？」

「え？」

「「「……」」」

兵士の方々が……土下座してました。しかもめちゃ震えてる。なんでさ?

「この度はすみませんでした!出来ることは何でも致します。だから、だから自分達の事を許して下さい!」

「別に怒ってないです。コッチこそ蹴り上げてごめんなさい。」
いきなり蹴るわ怒鳴りつけるわ、何様だよ俺…。

「許していただけるのですか!良かった、本当に良かった…」

「それにしても、何でそんなに震えてるんですか?」

「え?いや、王子の客人だと皆が言っていたので失礼をしたら首が飛ぶ、と思いまして…」

「違う違う!俺はあの馬鹿の発明品で酷い目にあった一般市民Aだよ。」
「そうですか。貴方もフラウ様の発明で酷い目に…」

「俺の時は何だっけ?…確か『どんなに魔法を受けても大丈夫な楯を作ったぜ!よし!お前が実験台になれ。』って言われて楯を構えたら、魔法をくらった瞬間楯が爆発して全治3週間の大怪我だったな…。しかも医者が里帰りしてて応急措置しかできなかった…」

「馬鹿野郎！それならまだ良いよ！俺なんて『今までに一度でも行った場所に一瞬で着くことが出来る帽子を作ったぜ！よしお前がやってみろ！』で、侍女達の部屋に出ちまった。しかも着替え中。侍女達はキレて花瓶で殴ってくるし、何人かは魔法で攻撃してくるし。挙げ句の果てに屋根から逆さ吊りにされたよ。そのせいで軽く高所恐怖症になりかけた…」

スゲー遠い目をしてるな。にしても楯が爆発って意味無いだろ。移動先が更衣室（着替え中）とか天国のち地獄だ。

「お兄ちゃん！ご飯作ろうよ～」

「そうだね。そろそろ作ろうか。あ、皆さんも食べます？お腹減ってるみたいですけど。」

「良いんですか！？邪魔じゃないならお願いします！実は今日、料理長が休みでして。朝から食事を摂ってないんですよ。」

よくそれで仕事をサボらなかったな。俺だったらストライキおこすぜ？

「えー！二人で食べるんじゃないの？」

「コラコラ。そう言わないの。二人で食べるより皆で食べた方が美味しいんだ。それにこの人達が腹減りすぎて倒れたりしたら可哀想だろ？　だから、今日は我慢してくれ。頼むこの通りだ。」

「しょうがないな～。じゃあ次は二人で食べようね。」

おお、流石レンだ。話が分かるぜ。

「よし！それじゃ少し待っていてくれ。すぐに作る。…口に合わなかったら済まんな。」

「いえ大丈夫です！私達はあまり味を気にしませんから。」

「そうか！なら絶対美味いものを作ってやる！レン、バックから調理器具を取ってくれ！」

「はい！……お兄ちゃん、これで良いの？」

レンが持ってきたのはお玉、包丁、フライパン、まな板。

「流石レンだ！よく持ってきてくれたな。」

なでなで。

「えへへ～♪」

凄い嬉しそうだな。よし。撫でた事だし、始めますか

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「凄い…」

「飯が輝いてる…」

「ヤバい。同じ料理だと思えない…」

喜んでくれるのは嬉しいけど、涎を拭きなさい。（ちなみに今回のメニューは和食です）

「凄い！私のより美味しそう！」

うん。この笑顔だけで俺は腹一杯だよ。

「よし！それじゃ食べますか。…ってまだ食おうとすんな！」

俺の言葉を聞き終わるとすぐに手を伸ばした兵士の手首を箸で強打する。

「え！？食べて良いんじゃないんですか！？」

そんなに痛かったのか、涙目で抗議をしてくる。だがこれだけは譲れんのだ。日本人としてな。

「この国ではどうかは知らんが、俺の国では食べる前にやることがあるんだよ。」

「何やるんですか？」

「いただきます。って言うんだよ。」

「いただきます！よし！」

言った瞬間、食らい付いたよ。そんなに腹減ってたのかよ。

「・・・・・・・・・・」

…あれ？食べたら動きが止まったぞ？どうしたんだ。

「えっと、どうしたんだ？」

「おい大丈夫か？…うわ、いきなり泣きやがった！」

「お兄ちゃん。これは何してるの？瞑想？」

「いや違うと思うぞ。」

ホントにどうしたんだ、この人は…。あ、動き出した

「美味い。今までの料理と全然違う。」

「そんな事で意識を飛ばすなよ。大袈裟だな。」

「そこまで喜んでくれるのは嬉しいけど、意識を飛ばさないでね。冷めると不味くなるから。」

とにかく喜んでくれて嬉しいよ。

「「「いただきます！」」」

皆も食い始めたな。美味そうに食うなこいつら。

「ごちそうさまでした。」

ってレン食うの早いな。しかもあんまり食べてないし。

「どうしたレン。口に合わなかったか？」

「違うよ。さっきも少し食べてたからお腹一杯なんだ。ゴメンねお兄ちゃん。」

「いやいや、別に構わないよ。残ったものはあの三人が食べるだろうし。無理に食べてお腹が痛くなったらダメだしね。」

無理に食べさせるのはダメだよね。好き嫌いは治すけどさ。

「いいの？ありがとう！」

「どういたしまして。それより、レンは何を作ってくれるのかな？さっきから楽しみにしてるんだけどさ。」

「あ、そうだ！クッキー作ろうと思ってたんだ。待っててね、すぐに作るから。」

よし。元気になったな。良かった良かった。

ブルル…ブルル…

あれ？ケータイがなってる。　アイツからか…

「ったく。面倒だな。えっと何々、
『差出人：オーディーン
題名：全部食べるな
さっきお前は食堂にレンが居たら何でもすると言ったな？ならレンのクッキーを全部食べるな。死にたくなければな。これはお前のために言っている。忘れるなよ。』…何だこれは？クッキーを全部食べるな？死にたくなかったら？何故？」

「出来た！お兄ちゃん出来たよ！」

お、出来たみたいだな。なんか気になるけどまあ良いか。全部食べなきゃ良いんだし。

「お、綺麗に焼けたな。凄く美味しそうだぞ。」

本当に美味そうだ。でも何故だろう？さっきのメールがあったせいか、嫌な予感がするよ。

「レ、レン。あの三人にも食べさせてあげよう。そんな美味しそう

なクッキーを一人占めは良くない。」

「別に良いけど…。お兄ちゃんが最初に食べてね。」

「分かった。一枚くれ。」

レンから一枚受け取った。何故だろう?さっきより嫌な予感が酷くなったぞ。背中に冷や汗が出てるし、体が思うように動かない。

「レン。三人にも渡してあげよう。」「?良いけど…」

「「「もらって良いんですか!」」」

反応早いな…

「どうぞどうぞ。…どうなるか見とこう。」

「あれ?何か言いました?」

「いえ、気のせいでしょう。それより食べましょうか。」

バリバリ…バリバリバリバリバリ…ゴクン

「美味いな。」

生地はサクサク。味はやや甘い。売ってる物と遜色ないな。　どこが危険なんだ？

「美味い！こんなに美味いお菓子は初めてです！」

「お前食い過ぎだ！後は全部俺が…」

「ふざけた事を言うんじゃねぇ！全部俺のだ！」

山のようにあったクッキーがもう無いや。…まだ2分もたってないだけど…

「あれ？何か違和感があるような無いような？」

何だろう？兵士達の様子が…。顔面蒼白、全身痙攣、瞳孔が開きっぱなし。唇が紫色。しかも同じ姿勢で動かない。　…あれ？何だ。俺の体が冷たい。冷や汗が止まらない。服が重い。いや体が重いのか？

訳の分からないまま俺の意識は飛んだ。

本当になんでさ?

三途の川に来ました。

前回
意識が飛びました

「何処だよ此処は…。」

前回、クッキーを食べたら意識を失ない、気が付いたら綺麗な川が広がってました。にしてもでかいな～。ナイル川でもここまで大きくないよ。しかも河原まで広い。あ、小さい子が石を積んでる。…何をやってんだ?

「おーい、何やってるの?楽しいのか?」

「……全然。」

「楽しくないのにやってるのか?何でやってるんだ?」

「…これを積めれば天国に行けるから。」

「……はい?」

今なんて言った？天国に行ける？

「でも、何時も鬼が来て崩すんだ。頼んでも『済まない。コレも仕事なんだ。許してくれ。』って、止めてくれない。」

ＯＫ．ＯＫ．　少し考えるようか。

綺麗な川→三途の川？
広い河原→賽の河原？
この子がやってること→石の塔作り？
鬼→意外と良い奴？

俺は？→もしかして…死んだ？

「ふざけんなあああああぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！俺がいったい何をした？！」

ＯＨ　ＭＹ　ＧＯＤ！いやＧＯＤＤＥＳ！

「おい、そこのお前！少し五月蝿いぞ！他人の迷惑も考えるように！」

「五月蝿いのはお前だ！！！！！」

ネックカットキック！

「ぐびゃ？！」

何か言った気がするが無視だ。倒れそうな誰かにフライングボディアタックを仕掛ける。

「ごぶっ！？」そのまま足を持ち大きく振り回す。いわゆるジャイアントスイングだ。

「ぐっ！ごべっ？！」

その勢いのままに、

「喰らえ！」

バックドロップ！

「びぎゃ！！？」

……ふう。落ち着いた。久々に暴れたらスッキリしたな。よし、とりあえず誰だ？コイツ？　赤い肌（赤銅では無い）、アフロ？、牛

のような角、胸毛がヤバイ、頭から地面に刺さってる。そして極めつけには虎柄パンツ。　どっからどう見ても鬼だ。むしろコレで鬼じゃなかったらビックリだよ。…あれ？一つ余分じゃないか？

「にしても…鬼って弱いな。　これなら遠野（元の世界の友人だ。名前だけチラッと出た）の方が強い位だよ。」

うん。アイツの体術は強いからな。技や力より駆け引きが強いタイプだ。久々に殴り合いたいぜ。それはそうとコイツ、抜いた方が良いよな？このままだと窒息しちまう。

「よっと！」

抜けた抜けた。角が片方折れてるけど別にいいだろ。生きてんだし。

「ん？イタタタタ…一体何があったんだ？」

起きたか。なら話を聞くか。強制的に。

「ハロー、そこの筋肉ダルマ。聞きたいことがあるんだ。知ってる事を全部教えろ。ちなみにコレは強制イベントです。」

「ん？さっきの暴走レスラーか。何か様か？」

「ああ。知ってる事を全部教えてくれ。教えなきゃフルコースいくぞ。それと俺はレスラーじゃない。」

フフフ…　ＳＳＤ喰らわせるぞ。いやワンダフルメキシカンコンボにしようかな？

「話す。だから待て。イイ笑顔でよってくるな。寒気がする。」

「なら早く話せ。ちんたらしてるとマジで殺るぞ？」

その気になれば真空八連撃ぐらい出来るぞ。お好みなら神龍拳も追加してやる。

「待て！まずは何を話すか言ってくれ。じゃなきゃ話せねぇよ。」

「そうだな。此処は何処だよ。そして俺は死んだのか？」

「何を言ってる。此処は言わずと知れた三途の川だ。それとお前は死んでない。仮死しただけだ。」

やっぱり三途の川か…　それと死んでなくて良かった。　神に感謝だな。いや女神か？

「何時になったら戻れる?知ってるなら言え。」

「2分38秒07後に帰れるぞ。」

細かっ!

「分かったな。なら良いだろ?仕事があるんだ。帰らせてくれ。」

「あ、ああ。そりゃ悪かったな。仕事頑張れよ。」

「ああ。コッチも妻と子供がいるんだ。言われなくともやるよ。」

コイツ既婚者かよ?!ってか鬼って結婚するのか!? 色々知らない(むしろ知りたくない)ことが出てきて頭が痛いよ。

「そろそろ生き返るぞ。10,9,8,7…」

「?何を数えてぎゃあああああ!!!!!」

何故か足下に穴が開き、そのまま落ちた。 コレ作ったの誰だよ?!

「せめて結婚してから死ねよ～！…さて仕事仕事。」
そんな言葉が聞こえた…。俺もそうしたいよ。

俺が落ちた後…

「何故だ？またアイツに会う気がする…」

残された鬼がそんな事を言った…

番外編？　お礼とこれから（前書き）

どうも七つ夜です。
この度は皆様にお礼をと思い、書かせていただきました。
これからも楽しんでいただけたら嬉しいです。

番外編？　お礼とこれから

「うぅ…。此処は何処だ？」

周りを見渡してもただ暗すぎてまったく見えない。生き返ったんじゃないのか？

「よ。眼が覚めたか？」

誰だ？…いやまさかアイツじゃないよな？　もしそうなら一発殴る。

「返事ぐらいしろよ。ま、良いか。今灯りつけるから待ってろよ。」

何か押したような音が聞こえ、一拍遅れて灯りがついた。……あれ？此処って（元の世界の）俺の部屋か？でもこんな巨大スクリーンは無いぞ？

「ようこそ！俺の部屋に！貴方は１３人目のお客様でげぶっ！！」

何かほざいたバカを殺すつもりでぶん殴った。　目の前にいるバカ――作者――は何をしにきたんだ？マジでうざい…

「何か様か、破れた雑巾以下の造形物？まさか様も無いのに出たとか言わないよな？」

「いきなり殴るのは酷くないか！？それに俺はそこまで酷くないわ！せめてふにゃけたクッキーぐらいにしてくれ！」

自分で言うなよ…。聞いてて虚しい…

「それと用事はある。コレを見ればすぐに分かるぞ。巨大スイッチ・オン！！！」

別に巨大でも何でもない普通のスイッチをいれる。するとスクリーンに文字が映る。そこにはデカデカと…

『（祝）ＰＶアクセス６万突破＆ａｍｐ；ユニーク１万突破！！』

「……えええええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！」

嘘だ！いくら何でも嘘だ！この小説が？！

「気持ちは分かるぞ！だがウソではない！！本当にそんなに読んで下さっているんだ！」

「読者様！ありがとうございます！！」

「それで祝いとして何かやろうかなっと思ってな。で、だ。何をやろう？」

おい、作者がキャラに聞くなよ。

「とりあえず登場人物の増加でもしろよ。できれば女の子で。」

このままだと男女率がヤバイし…。

「その辺は大丈夫。流石にそろそろ出すから。どこかオカシイ奴をな。」

そう言い、グッと指を出してくる。　それがあまりにうざくて殺したくなる。って我慢しなきゃ。今回は記念日何だから…

「ち・な・み・に、ソイツが出ると犠牲者が出る！」

「おい、ふざけんな。たまには普通の奴をだせ。」

この小説、まともな奴が少ない。ってか俺だけだ。

「大丈夫！今までで一番ヤバイからな。楽しみガブフッ？！」

殺そうかな？これ以上ヤバイ奴を出されてたまるか！記念日？知らん。命の方が大事だ。

「いきなり何しやがる！？殺すつもりか！」

「Ｏｆｆｃｏｕｒｓｅ！！！　俺にこれ以上酷い目に合わせるつもりならマジで殺す！」

どうだ？弁解があるなら聞いてやろう。もちろん、その後殺るけどな。

「…は？何を勘違いしてやがる。犠牲者はお前じゃないぞ？」

……ホントか？信じられない。

「ホントか？絶対だな？嘘ついたら針１３本飲まして、残り８７本で体を刺すぞ？」

「嘘じゃないから針を創り出さないで。ちびっちゃうぜ？」

「偉そうに情けない事を言うなよ。なら誰が犠牲者になるんだ？」

「どこぞの迷惑王子だよ。アイツなら別に良いだろ？」

「良い。凄く良い。それなら納得できる。」

アイツに被害がでるなら万々歳だ。

「ちなみにどんな事になるんだ？教えてくれ。」

「無理。それは本編でな。」

「そうか。ならそろそろ帰してくれ。さっさと知りたいし。ただし落とすなよ。」

「よかろう。それと此処での記憶は消させてもらう。ではサラバだ！！」

グイッ…　ビョーン！

「ってなんじゃこりゃぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

キラーン☆

「よし消えたか。言ってないけど、間接的にはアイツも酷い目に合うんだよな～。」

刹那はどんな目に合うか。楽しみにしててくださると嬉しいです。

「あれ？七つ夜、いつ来たの？ってか、お前は前書きと後書きだけじゃないのか？」

気にしないで下さい。玉には本編に出てみたかったんですよ。

「そっか。じゃあ最後に俺等で言うか？」

良いですね。では…

「「ＰＶアクセス６万＆ａｍｐ；ユニークアクセス１万ありがとう（ございます）！」」

番外編？　お礼とこれから（後書き）

次回は本編です。

黄泉帰り…（前書き）

皆様に楽しんでいただけていれば嬉しいです。

黄泉帰り…

前回
三途の川から戻って来ました。…何か他にもあったような？

ここはアイギス城医務室。そこでは小さな女の子がある少年の顔を割りと本気で叩いていた。
最初は頬をつついていただけだったが、段々エスカレートしていったのだ。

「お兄ちゃん！早く起きてよ。地味なおじちゃんが呼んでるよ。」

地味なおじちゃん――ウィリアム・クロム・シルディア――はかなり困った顔をしていた。
ただ単に彼がこれからどうするかを聞きに来ただけだったのだ。
別に今すぐに聞く必要はない。

「あの～レンさん？別に今すぐじゃなくても良いんですが…。」

少年の顔が腫れていくのを見て流石に止めに入った。だが少女――レン――は、

「ダメだよ！大事な話しは直ぐにしないと大変なんだよ。お母さんが言ってたもん。」

と、言うだけで叩くのを止めない（ちなみに少女の母親が言っていたのは軍事会議のことである）。

このやり取りをやっている間にも叩き続けている。いや叩くより殴るの方が的確かもしれない。
先ほどまでは手のひらだったが今は拳である。

グシャ、メチャ、グチャ

「・・・・・・・・・って痛いわあごぶふぇ？！」

少年――如月　刹那――は流石に（すぐに意識を刈り取られそうになったが）起きた様だ。
それに気付いたレンは拳を止め、

「お兄ちゃんおはよう！」
と、花も恥じらう様な笑顔をむけたのだった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「おはようレン。また三途の川に逝くところだったよ。」

目覚めて二秒程でまた逝っちまうところだった。軽い皮肉を言いながら挨拶をしたが…

「川へ行くの？ならお弁当持っていこうよ。」

サラッと流されたよ。
ここは戦法を変えるか。とりあえず泣き落としをしてみるか。

「それよりレン。何で殴ったんだ？お前がそんな事をするなんて、お兄ちゃん悲しいよ。」

わざとらしく涙まで流してみせた。
だけどさ、やっちいけない相手っているよね。

「え、お兄ちゃん悲しいの？　もしかして僕お兄ちゃんに酷いことしたの？僕お兄ちゃんに嫌われちゃったの？」

逆に涙を目に溜めてこんな事を聞かれた。コレをやられて俺は…

「い、いや別にレンが嫌いな訳じゃないよ。むしろ好きだよ。うん！」

「…ほんと？」

「本当だよ。俺はレンが大好きだよ！」

「わーい！僕もお兄ちゃん大好きだよ～」

はい敗け。むしろ惨敗。多分これからも勝てない。

「刹那君。取り込み中済まないが話があるんだが…」

いつから居たんだよアンタは。もしかしてステルス搭載してない？

「話は良いですけど…今ですか？」

「……だよね」

現在の状況を説明しよう。

俺→黄泉帰り直後。ちなみに顔は悲惨な事になってる。

レン↓俺に抱き付いた格好のまま熟睡中。そろそろ痺れてきました。

王↓地味。話したい。

こんな感じかな？

「私の説明だけ簡潔すぎないかい？」

「気にするな。それより明日じゃダメか？」

ダメって言っても無視するけどね。

「ああ、それで構わないよ。じゃあ用件だけ伝えとくよ。……かくかくしかじか……なんだが。」

何故俺は“かくかくしかじか”で分かるんだ？

いや確かに便利だけどさ…

「分かった。明日までには考えておくよ。それで全部か？よし帰れ。」

「ああ、また明日。」

そう言い残し、王は出てった。
そして俺はある事に気が付いた。

「確か全身打撲（全治2週間ほど）にしたから簡単に動けないはずだけど…？」

う～、面倒だけど明日聞くか。

黄泉帰り…（後書き）

次回辺りに新キャラを出したいです。

王さまと会話（前書き）

今回も楽しんできていただけたら嬉しいです。

ちなみに、わき役と新キャラが出てきます。

新キャラは2人ですが、今回は名前と一言だけです。プロフィールは次に載せたいと思います。

王さまと会話

前回
顔が痛いです（一晩寝たら治りました。）

現在、謁見の間みたいな場所にいます。正直空気が重くて嫌んなっちゃうよ。
ってか回りにいるその他大勢は何ですか？なんか貴族っぽいのと騎士っぽいのがところ狭しといる。

「刹那君。彼等はこの国の騎士団と重役達だ。別に君に危害を加えるつもりはない。だからそんなに警戒しないでくれないかな。」
「別に警戒なんてしてないですよ。つーかする必要が無いし。」

俺が言葉を発した瞬間、騎士団、貴族の両方から殺気が溢れて出した（何で殺気が分かるかとか気にしたら敗けです）。
馬鹿にされてムカついたらしい。プライド小さいな～

「あ～皆様落ち着いて、落ち着いて。そんなに殺気を出さない。戦うのもいいけど今は話が優先でしょうが。それとも～王さまの前で戦うつもりか？」

その一言に反応した馬鹿がいた。貴族それも私腹を肥やすタイプだな。見た目はデブでハゲ…哀れだな。

「貴様！悪ふざけも大概にしろ！あまり調子にのると我々が黙ってはいないぞ！」

はー…　平和的に解決しようとしたのに、空気読めよお前。　しょうがない…少しばかり脅すか。

「ミルド地方で税金が３０％程増加。　その町の騎士団は、町の巡回中に平民への危害もしくは商品の無銭飲食。　詳しい話が聞きたい方はどうぞ前へ。もしくは他の地方の状態を聞きたい方も前へ。……いないんですか？」どうしたの？何も無いなら進めるよ？

「……無いようですね。なら王さま、昨日の話だが…決まったから手配してくれないか？」

昨日の話――迷惑を掛けたのでお礼がしたいと言われた（ちなみに分からない人は『アイギス城到着。　冤罪で捕まりました。』の２ページ目を読んでみよう）――は良いよな。太っ腹だよ王さま。

「内容を教えてくれないと手配が出来ないよ。」

あ、そうだった。自己完結してないで早く伝えんと

「まずは確認。３つあっても良いか？ダメだったら２つにするけど…」

「いや３つでも良いだろう。もともと我々のせいだからな。」

よしそれなら無問題（モウマンタイ）だ。

「なら言うよ。これが俺の願いだ！

1，シルディア市民権の取得（家付き）＋税金無し＆ａｍｐ；魔道具販売の許可

2，俺とレンの魔法学校に入学。ただしなるべく強い奴がいる学校。

3，俺に公爵の位をくれ。

……だけだ。」

シンと静まり返った。

多分理解が追い付いてないな。

…お、みんな動き出したか。

「「「「「「ふざけるなあああああ！！！！！！！！」」」」」」

耳が痛い…
それ以前にふざけてない。

「五月蝿いぞ。無駄なエネルギーを消費する暇があるなら仕事しろ。」

「刹那君。1つ目と2つ目は良いが、3つは許可できない。いきなり爵位、それも公爵の位を与えるなど不可能だ。」

あ、やっぱり?そんな気がしてたんだよね。

「なら1と2だけで良いです。ただし家は二階建てで頼む。それと陽当たりだといい場所が嬉しい。庭もあればなお良いな。うん、最高だ。」

「いや良いが、3つ目以外なんと言うか…しょぼくないかね?」

別に良いじゃん!自分の家を持てるなんて夢のようだ…

「それより、俺の後ろにいる奴等は…何?あからさまに武器を持ってんだけど?」それに答えたのは王さまじゃなく、さっきのデブだった。

「貴様のような若造が王に向かってなんて口のききかただ！　しか

もいきなり爵位を寄越せだと?!」

そうだそうだと言う周りの奴等
こいつ等…耳と頭が悪いのか?

「ちゃんと話を聞いてたか?　爵位は要らないと言ったんだが…。
聞いてなかったのか?」

「五月蝿い!そんな事は関係ない。貴様みたいな奴がこの場にいるだけでも不快なんだ!貴様は「黙らんかこの大馬鹿者めが!!」ヒィ!!!!?」

一瞬で空気が凍りついた。凍りついた空気の中で一人だけ（一匹だけ?）動く者がいる。　声の主、シンゲンさんだ。
出来れば叫ぶのは止めて欲しい。心臓に悪すぎる。

「貴様等…少し調子にのりすぎだ。彼は王の客人だ。その客人に向かって武器を向けるとは…。」

恐い。俺に向けられた殺気ではないのに、冷や汗が止まらない。
向けられた奴等の中には口から泡吹いて気絶してる奴もいるし、涙を流しながら家族の名前を呼び続けている奴もいる。
さっきのハゲは気絶すら出来ないみたいだ。
自業自得とはいえ流石に可哀想だな（ハゲ以外は）。

「シンゲンさ〜ん。もうそのぐらいで良いですよ〜（小声）」

無理。これ以上の事は無理だ。だって恐いすぎる。

「む、こぞ…刹那がそう言うなら仕方ない。貴様等、彼に感謝しておけ。」

聞こえてた。…良かったなお前等。もし聞こえてなかったらどうなっていたか。なるべく考えたくないな…

「シンゲン。出来れば叫ぶのは止めてくれないか。お前が叫ぶと洒落にならん。それと刹那君。先ほど話していた事をもう一度話してくれないか？」

さっき話してた事？何か話したか、俺？

「言い方が悪かったな。先ほどミルド地方の状況を言っていたが、私に話してくれないか。」

そうだな。さっきのハゲはウザイから別に良いか。

「ミルド地方では領主が税金を引き上げ、自らの私腹を肥やしている。騎士団も町の巡回のフリをして、市民に暴行や商品の無銭飲食を繰り返しています。ちなみに城に内通者がいて報告書の偽装もバッチリです。」

話すにつれてハゲや周りの騎士達の顔は青く、王さまやシンゲンさんは無表情になっていく。

「刹那君。その情報はどの程度信頼できる？」

「全部本当ですよ。なんたって俺の能力は“解析［アナライズ］”。俺が知りたい情報はリアルタイムで入手できる。ちなみに情報源はそこのハゲですよ。」

「そうか。能力の話が嘘でないなら確かなのだろう…。シンゲン、鑑定機を持ってきてくれ。」

「は。」

鑑定機？なんだそりゃ？

「ただいまお持ちしました。」

シンゲンさんが持ってきたのは…水晶玉？しかも2つある。

「刹那君。方手を右の水晶にのせてくれないか。それで真偽が分かる。」

鑑定機だから、俺の能力が分かるんだよな？

少しヤバイな。解析はともかく、他の2つは知られたくない。

よし、想像具現化で感知されないようにするか。

……よしできた。

「これで良いですか？…って何だあ！？！？」

のせた瞬間、水晶に手が入った。凄く気持ち悪い。なんかハンバーグを捏ねてる時みたいだ。

「もう良いよ刹那君。シンゲン、なんと書いてある。」

シンゲンさんは左の水晶に映った文字を読み始めた。

「では、

能力名…解析［アナライズ］制限…無し
詳細…見た物の情報を視る事が出来る。
視る事が出来る物に限りはない。　使い方によっては世界の情報すら解析出来るため、注意が必要。
情報系の能力では最上位。レアスキルの中でも特に珍しい。
能力保持者…如月　刹那

と書かれています。」

周りの方々の視線が嫌だな。　まるで化け物を見たかのような感じだな。
いや王さまとシンゲンさんだけは違うな。　なんか珍しい道具を見つけた視線だ。
本題に行こうよ？

「分かりましたよね？ならさっさと結論出せよ。」

「ああ。グラモンよ、前に出ろ。」

「・・・・・・」

グラモン（さっきのハゲ）は、顔を真っ黒にしながら出てきた。

「ミルド地方はお前の管轄だったな。・・・覚悟は出来ているだろうな？」

「・・・はい。」

嘘だな。アイツは魔法を使う気満々だ。無理だろうけどね。

「なら牢に一月ばかり入ってもらうぞ。その後、この国から追放する。分かったな。」

「…王よ。貴方は勘違いをしてませんか？私が前に出たのは…貴方の命を頂くためだ！」

グラモンは呪文のようなモノを呟き、王さまに向けて放った。が、

「なっ？！」

王さまに当たる前に魔法が消えた。　王さまの能力だろうな。確か…『魔力無効化』だっけ？

「馬鹿めが。私は先の戦争で生き残った者だ。戦争を体験した事がない半人前に遅れを取るわけがないだろう。リクス、シオン、コイツを牢屋へ連れていけ。」

「「分かりました。」」

「いや誰！？」

今までまったく居なかった2人がグラモンを連れていった。
本当に誰だよあの2人は？

「王よ。私はミルド騎士団の処罰をして参ります。」

「頼むぞシンゲン。徹底的に殺ってくれ。1人も残さないように…」
「御意。」

ミルド騎士団の奴等、絶対に終わったな。

「さて、色々と済まないね。　手配はしておくから、家が出来るまで城の客室を使ってくれ。学校の方は明日から行けるだろう。」
「分かった。なら夜まで自由に遊んでて良いよな？」

「遊びに行くなら楽しまないと損だな。…金貨１０枚あげるから楽しんできてくれ。」
「やった！王さま太っ腹！」

王さまが渡してくれた金貨をもらい、テンションが急上昇した。

「じゃあ行ってきます！」

言うが早いか俺は走り出した。

王さまと会話（後書き）

次回は町に出てみます。

迷子と変態

前回
色々ありました。
金貨１０枚をもらいました。

さてさて遊びに行くつもりでしたが、何処から出れば出れるのだろうか…（汗）

「まさかこんな事になるとはな・・・。この歳で迷子は笑えねぇよ。」

“解析”使えば解るけど、流石にもったいない。
どこでもドアは創るの面倒だし…。

「流石に窓から出たらダメだろうし…。は～、マンガみたいに人が来てくれないかなー。」

流石にないよな。
そんな都合の良い事なんてさ。

「「誰ですか？貴方は…。（誰だお前？）」」

あれ？まさか来ちゃった？しかも２人も？

「だから誰だと聞いているんです。答えなさい。」

「所属は？仕事は？名前は？城へはどうやって来た？」

「所属は無し。仕事は今のところ無し。名前は如月　刹那。城へは壁をぶち破ってきた。」

「つまりは不法侵入ですか。　まったく仕事が増えたじゃないですか。」

「不法侵入なら殺しても良いよな？」

そう言い、何処に隠していたのか武器を取り出してきた。２メートルはある…包丁？人１人ぐらい入りそうな…フライパン？・・・武器？

「いや何処から出したのさ？！流石に隠せないだろその大きさは！つーか武器じゃないだろそれ！あと不法侵入じゃないから！」

「これは全て乙女の秘密です。それと不法侵入かどうかは私たちが決めます。」

「私はどっちでも良いよ。結局最後は殺すからな。」

乙女の秘密と来ましたか。ってそっちじゃないだろツッコミ場所は。

「落ち着け。少しは話を聞いてくれ。まず殺そうとするな。」

最近の子は短気過ぎじゃない？俺でももう少しは……とにかく話さないとな。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「つまり、迷子なのですか。・・・その歳で迷子は恥ずかしくなですか？」

「五月蝿い・・・。」

何故か話すたびに貶されてる。　虚しい…

「とにかく纏めると、王子の作品で酷い目にあったからここにいるのですね。御愁傷様です。」

満面の笑顔で言わないで。絶対楽しんでるよね？君…

「フラウ様…えへへへ…」

こっちはフラウの名前が出てから壊れてるし…

目が逝ってて怖い。

「あの子は大丈夫なのか？」

「姉さんの事は気にしないでください。それより外に出るなら突き当たりを真っ直ぐ行った所にある扉を開ければ出れますよ。」

「あ、うん。ありがとう。じゃあ早速行くか！」

俺は2人に礼を言いその場を後にした。

その後、

「そして苦しんで下さいね。私の楽しみの為に。」

と言われた事を刹那は知らない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

さて、言われた通りに来てみたら・・・

「暑苦しい騎士達が鎧姿でケンカしていましたとさ…。」

泣きてえ・・・

確かに外に出たけどさ、こんな場所には来たくなかった（泣）

「あら。可愛らしいお客様ね。ここは演習所だよお嬢さん。誰かに用でもあるのかな?」

いきなり小さな女の子が話しかけてきた。

。ただ何て言うか…獲物を狙う猛禽類みたいな感じ？がする。あと周りの騎士達から憐れみの視線を感じるのは何故だろう？

「用なんかねえよ。ただ外に出たいのに出れないだけだ。？」
「別に道を教えてあげても良いですよ。まあ、条件が１つありますが…。」

俺の中で何かが一斉に叫んだ。まるで『ハヤクニゲテ』と言うかのように…

「その条件はね、私と勝負して欲しいの。もちろん罰ゲームがあるわよ。」
「教えなくていい。じゃあなお嬢ちゃん。」
「あら失礼ね。レディの誘いは乗るものよ？」

無視だ、無視。それが一番の対処法だ。皆も嫌な奴にやった事あるだろ？

そのままこの場所を出ようと扉を開けた。……筈だった。

「無駄ですよ。結界を張りましたから私が解くまで出れません。ほら、出たいなら私と戦って下さいな。」

「ふざけるな！何でそこまで戦いたがる？！お前は戦闘狂（バトルジャンキー）かよ！？」

俺の言葉に目の前の少女は首を左右に振った。

「本当に失礼ね。私が戦闘なんて無粋なものを好きな訳ないじゃない。私の目的は別の事よ。だけど貴方は嫌がるだろうから。だから罰ゲームで命令する事にしたのよ。」

「少し怖いが罰ゲームの内容を教えてくれないか？」

「簡単よ。私が勝ったら貴方を着せ替えたいの。」

「・・・・・はい？」

あまりの事に思考が停止した。だが目の前の少女は気にせずに語っている。

「メイド服やブルマ、スクール水着もいいかしら？こんなに可愛らしい子を着せ替え出来るなら私は何をしても良いわ。」

聞いているだけなら面白いかもしれないがその当事者だから笑えない。

「さあ、戦いましょう。私の趣味の為に。」

「嫌だあああああ！！！！！《破戒すべき全ての符【ルールブレイカー】》！！！！！！」

創り出した短剣で扉を刺した。
すると扉が開いた。そして解析をフルに使い城からの最短で脱出できるルートを視る。
そしてそのルートを全力で駈けた。

少女（と周りの騎士達）は目の前で起きた光景を見て呆然としていた。そして、

「私の結界を短剣を刺しただけで破ったですって？あり得ない。彼は何者なの？結界を破られたなんてシンゲン以外初めてよ。」
先程まで捕食対象でしかなかった少年に恐怖を感じていた。

「そうだ。王に知らせなければ・・・！！」

少女は王に報せるべく駆け出した。

迷子と変態（後書き）

次回、ウィリアム（王様）視点で進みます。

意味の無い緊急会議と護衛

前回
本当に色々あった。泣いてもいいですか？

―ウィリアム視点―

ん？今回は私の視点から話を進めるのか？
私よりもフラウやレンさんの方が良いと思うのだが…まあ、折角選ばれたなら頑張らせてもらおうか。

私は刹那君の願いを聞いた後、いつもどおり家庭菜園の整備をするつもりだった。
だが、刹那君のスキルがあまりに危険なため、今後の対応を決めるため緊急会議を開いく事にした。

「さて、皆も知っていると思うが先日我が息子のフラウの作品によって此処に来た少年がいる。彼の処遇を決めたいのだが、何か意見がある者は言ってくれ。」

私が話を切り出してすぐに何人もの貴族が馬鹿な事を言い始めた。

ある者は追放しろと、ある者は換金しろと、さらに過激な者になると暗殺しろと言う者までいる。

それは自分の首を絞める愚行だ。

追放した後、彼が他の国に雇われる可能性がある。それでは我が国と戦争になった時かなり不利だ。相手はこちらの作戦など視るだけで解るのだからな。

監禁など不可能だ。彼はフラウとの決闘で勝利している。しかも両者は傷を負っていない。これは実力にかなりの差が無いと無理だ。

身内贔屓ではかもしれないがフラウはなかなか強い。シンゲンの弟子であり、第一騎士団副団長のリキュルの懐刀と呼ばれる程だ。第二騎士団団長のリクスですらフラウの事を認めている。そんなフラウが負けたのだ。並の騎士では話にならないし、もし捕まえる事が出来たとしても見張りにはリクス以上の騎士が居ないと抜けられてしまうだろう。

暗殺など失敗すればこの国にどのような被害がでるか分からない。場合によればこの国が物理的に墜ちる可能性がある。

そのような事では意味が無い。民には危険が及んではいかん。

「それらの意見は状況から見て現実的ではない。故に許可できない。」

意見を言った者は悔しそうだ。それもそうだろう。彼等は国の為ではなく、自分の安全の為に言ったのだから。

少し時間が経ち、ある者が案を出した。
「王よ、結界に封じ込めるのは如何でしょう?リキュル程の術者なら永久に封じ込める事も可能では?」

ふむ。確かに悪くない。むしろこれでダメならシンゲンに頼むしかない。
リキュルの結界は私より上だ。彼女の結界が破られたのは一度しかない。誰が破ったかは…言わなくても良いだろう。

「試してみる価値はあるか。誰かリキュルをここに呼び出せ。」

私が命令を出してすぐ、いきなり血相を変えた小さな少女――リキュル・エルメス――が飛び込んで来た。
あまりのタイミングの良さに今まで居たのでは?と思う程だ。

「何を慌てているのだリキュルよ?まさか隣国が攻めて来たのか?」

リキュルは肩を上下させながらこちらを見る。だがまだ話さない。
どうやら呼吸を整えている様だ。
収まったのか彼女は話始めた。

「ある少年に結界を破られました。少年は最短ルートで城から逃亡したそうです。」

周りの者が驚愕の声を上げた。私も同じ気持ちだ。彼女の結界を破った者は私が知る限りではシンゲンただ1人。

「その少年はどのように結界を破った!?そして結界の発動から破界までにどの程度の時間だった!?」

あのシンゲンですら結界を破るのに2日程かかった。それも全力で暴れてだ。

「あまり信じたくないのですが、発動から僅か5分程度で破界されました。少年は歪な短剣で扉を刺しただけです。それだけで私の結界を破りました。いや違う。破ったなんて荒々しいものありません。まるで結界を解いたかの様でした。」

有り得ない…
流石にそれだけは有ってはならない。
結界を破るのと解くのでは意味が違う。
どちらも結界が消滅するが2つの消滅はあらゆる意味で正反対だ。

結界を破る
それは結界を破壊すると言うこと（ちなみにこの事を破界と言う）。
これは完全な力業だ。破る事が出来る力があれば出来てしまう。

結界を解く
こちらは術者が自ら術を止める場合だ。結界は術者以外には解くことが出来ない。何故なら術者が1から創り出す世界だからだ。同じ

結界はこの世に1つも無い。故に解除方法は術者以外知ることが出来ない。

それなのに逃げた少年は解いてしまった。結界に短剣を刺しただけで。

「その少年の特徴を覚えているか？容姿、服装、使用魔法、魔法属性、魔法量。何でも良い。覚えている事を全部教えてくれ！」

今すぐ少年を始末するか仲間に引き込むか。どちらかしか道は無い。

「容姿は…可愛らしい子でした。思い出すだけで鼻血が出てしまいそうな程に。服装は黒一色で統一した軍服のような物を着ていました。…もったいない。魔法は使用していないため分かりません。魔法属性も分かりません。」

ちらほら個人的な感想が出てきたが、重要な事が分かった。美しい顔立ちで軍服のような服を着ている。

軍服はレッドアークか、ガーダルシアしか着ることはない。何故ならその二国のみ軍隊だからだ。他の国は騎士団と呼ばれている。もっとも、鎧を着るか軍服を着るかの違いしかない。

だが魔法属性が分からないのは何故だ?魔力の属性は髪や目に出てくる。炎なら赤、水なら青、風なら緑、土なら黄色、雷なら金、木なら橙色。これ以外にもまだ数種類ある。だから瞳の色や髪の色を見れば分かるものだ。

「魔法属性が分からないのは何故だ?髪や目を隠していたのか?」

リキュルは首を左右に振った後ゆっくりと言った。

「私は、今まであのような髪や瞳の色を見たことがない。あんな綺麗で禍々しい色は見たことがない。私が見た色は黒でした。夜の闇すら生ぬるい純粋な黒。」

その特徴を聞いた時、私は少年の事を刹那君としか思えなくなっていた。

「済まないが、少年は何か言わなかったか?」

「外に出る道が分からないって言ってました。」

一瞬、膝の力が抜け倒れかけた。誰も気付かなかったようだ。良かった。

「済まないがリキュル。少しだけ待ってくるないか。会議を終わらせる。」

リキュルは頷き、私の後ろに立つ。そして軽く殺気を放つ。皆が静まりこちらを見た。

「皆の者。今日の会議は終わりだ。忙しい時に済まなかったな。各自解散してくれ。」

その言葉を言ってからものの数十秒で部屋には私とリキュルしか居ない。

「それでウィリアム。何か用事が有るんじゃないの？さっき私を呼んでたみたいだけど。」

私の名前を呼ぶことが出来る者はこの世に5人しかいない。内3人は家族だ。他の呼ぶことが出来るのはシンゲンとリキュルだけだ。

「ああ。だが必要がなくなった。私が頼もうとしたことは意味が無い様だ。」

「ちょっとウィリアム。あまり人を見くびらないでくれるかな？かな？」

リキュルは私の頬をつまみ伸ばした。

「ふぁめへふふぇ（やめてくれ）。」

「はいはい。離してあげるわよ。で、何か説明をくれないかしら。それなら納得できるから。」

「・・・私が君に頼もうとしたのは刹那君を結界に封じてもらう事だった。」

「どうしてそれを引っ込めるのよ?私の得意分野じゃない。刹那って奴は知らないけどさ。」

「だが結界は解かれた。ものの5分程度で。」

誰の事を言っているか分かったらしい。

「まさか知り合いだったの?あの可愛い子と?まさかそっちの道に目覚めたの?浮気!?」

「まて。何故真剣な話からそんな話に変わる?!それと私は浮気などしていない!」

いきなり訳の分からない話になってしまった。
いや確かに刹那君は女性に見える時もあるが…。刹那君の寝顔は可愛かったな。・・・ってまて私!いったい何を考えているんだ?!
相手は男だぞ!?

「ウィ、ウィリアム?どうしたの、いきなり変な顔して。見てて不気味よ。」

「はっ!いや何でもない。うん何でもないよ。」

危ない。本当に危なかった。

「そう？なら良いけど。にしても詰まらないなあ。ウィリアムが浮気してるってお妃様に言いたかったのにな～。」

まて今なんて言った？

「リキュル。お前は私を殺すつもりか？それはデス○サロに装備無しで挑むくらいにヤバいぞ！？」

私は彼女の肩を掴みガタガタとゆする。

「ちょ、ちょっと落ち着いて！話が良く分からないわ。まずデスピ○ロって何よ？」

む、そう言えば何だろう？

「済まない。だが絶対に言うなよ。そんな嘘。」

「はいはい。この私が嘘を付くと思う？」

今までさんざん付かれてきたんだが…

私の言いたい事が分かったのか彼女は、

「えっと、誰かが呼んでる気がするから帰るね。バイバイ！」

・・・逃げた。

さて、私も戻ろうかな。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

会議室から出て私室に戻る途中で刹那君に会った。
何故か疲れきっている。

「どうしたんだ刹那君？凄い汗だよ？」

「一日中、変態から逃げてた。」

「・・・それはなんとゆうかご愁傷様。」

刹那君は泣きそうだ。いや本当に泣いていたのかもしれない。

「王様、この城にはまともな奴は居ないのか？」

その何気無い一言に私は共感した。彼等は個性的と言うか何て言うか、あくが強い者ばかりだからな。

「確かに少し変わっているかもしれないね。シンゲンを筆頭にフラウ、リキュル、リクス、シオンは私もついていけない時があるよ。」

「いや人を結界に封印しようとしてたのに普通に話してるアンタも充分おかしいぞ。」

この言葉はあまりにも衝撃的で私の体を強張らせた。

「いやそこまで驚くなよ。別に殺したりしないよ。ただ忠告だけでもしようかなって思っただけだ。」

私はその言葉を聞くしかなかった。殺すつもりは無いと言われたが、彼から出ている殺気は普通じゃない。

「俺は楽しく過ごしたいんだ。邪魔なら出てってやる。だが監禁は御免だ。封印されるのはもっと嫌だ。殺されそうなら国を消す。」

彼が喋るたびに嫌な汗が出てくる。

そのまま、数秒が経過した。

「そこまで怖がるなよ。俺は仲良くしようぜって言ってるんだ。それとも脅しに聞こえたかな?」

どう考えても脅しにしか聞こえなかった。

消えた殺気にホッとしながら私は口を開いた。

「脅しどころか殺されるかと思ったよ。」

「そりゃ悪かったな。でも安心してくれよ。アンタが何もしてこないなら俺もしない。なんならアンタの護衛になっても良いぜ?金は貰うがな。」

少し魅力的な提案が出てきた。最近は味方すら敵になりかねない。

「どのくらいなら雇われてくれるのかな?」

「銀貨五枚でどう?」

彼が要求した金額はあまりに安い。護衛は金貨一枚でも安いぐらいだ。それが銀貨五枚…

「・・・刹那君?本当に銀貨五枚で良いのかい?流石に安すぎると思うのだが。」

「いやいや高いって。こっちも学校あるからほとんど来れないし。やりくりしてけば銀貨五枚で充分過ごせる。」

どこの主夫だ?と言うツッコミは呑み込んだ。

「分かった。なら私の娘の護衛を頼んで良いかな。あの子は体が強くないから心配なんだ。」

「良いぜ。銀貨五枚でその仕事を引き受けた。」

「いや金貨五枚で頼む。」

私と刹那君の間に火花が散った。

「いや銀貨五枚だ。無駄に金があると自堕落な生活になっちまう。」

「君はどんな生活を送っていたんだ？せめて金貨四枚にしてくれ。」

「なら銀貨六枚だ。」

「金貨三枚。」

「銀貨七枚。」

「金貨二枚。」

「銀貨八枚。」

「金貨一枚と銀貨五百枚。」

「銀貨十枚。これ以上は仕事をキャンセルさせてもらう。」

「・・・良いだろう。だが普通なら私と君のセリフは逆ではないか。」

「俺は普通じゃないらしい。昔、友人に変人扱いされたしな。」

「それはそうだろう。私だって君の事を変だと思う。それもシンゲン並みに。」

「・・・流石に傷付くな。とりあえず今日は帰って寝るよ。お休み。」

そう言い、彼は部屋へと帰って行った。

今日は刹那君の異常性がよく分かった。
これから何が起こるのか、私には想像も出来ない。

学園目指してＬｅｔ’ｓ　ｆｌｉｇｈｔ（前書き）

学校から学園に変更させていただきました。

学園目指してＬｅｔ'ｓ　ｆｌｉｇｈｔ

前回
道に迷ったあげく変態に会いました。
仕事ＧＥＴ！

「これもいるな。よし準備完了！」

今日は魔法学校に入学する記念すべき日だ。
別に学校は好きな訳ではない。ただ友人が欲しい。
知り合いはいるが友人（？）はフラウだけだ。流石に寂しいんだよ。

「さて、王さまに会いに行くか。」

挨拶がてら仕事の話しでもしようかな。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「おはようさん。今日も地味だな王さま。」

「おはよう、刹那君。今日も元気だね。」

自分が地味な事を自覚している王さまは、普通に挨拶してくる。

「今日から学園だね。刹那君は高等部の一年生として入ってもらう。学園の方には魔法が使えない事を伝えてあるから安心してくれ。」

「ついでに姫さんのクラスにしてくれたないか?離れてると護衛しにくい。」

「それは昨日の内に伝えてある。あの子の事を頼むよ刹那君。」

「はいはい。給料分以上の働きを見せてやるよ。じゃあ行ってくる。」

そのまま学園へ行こうとしたが、王さまに呼び止められた。

「刹那君。学園は歩いて行くには遠すぎる。魔車（この世界の馬車だと思ってくれ）を呼んであるからそれに乗っていきなさい。」

魔車か…。それならアレの方が速いな。

「いや自分で行く。そっちの方が速いしな。」

王さまは頭に？マークを浮かべている。
まあ当たり前か。この世界に魔車より速い物はないしな。
早く創っちまうか

「・・・よし完璧！」

どうよ。と言う目線を王さまに送る。

「・・・・・・・・・。」

ふ、王さまには少し刺激が強すぎたか。

目の前に有るのはアメリカの戦闘機Ｆ４Ｆ，通称ワイルドキャット（動力は魔力に改造）だ。一度乗ってみたかったんだよな～。（ちなみに戦闘機は武器に分類されるため使える。スキル万歳！）

「じゃあ行ってくる。あと結界張った方が良いぞ。」

レディ…ゴー！！！

凄まじい速度で飛び学校へ向かう。おそらく5分程度で着くだろう。
楽しさ半分、不安半分で学校へ向かう刹那であった…

ちなみに、城の庭はボロボロである。唯一無傷な場所は王の周りだけだった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

5分経過…

「お、見えてきた。・・・いくらなんでも広すぎだろ…」

目の前に広がる学園は東京ディ〇ニーランドより広い。回りは壁で囲ってあり、まるでジャス〇ス高校のようだ。

校舎もかなりデカイ。中庭のような場所には噴水があり、近くには休憩所がある。　校舎の奥にはコロシアムのような建物がある。

分かることは1つ。馬鹿みたいに金が掛かっている事のみ。

まあそれは良いだろう。今一番重要な事は…

「どうやって降りよう？パラシュートで降りるのも良いし、グライダーも捨てがたい。うむ、どうしたものか・・・」

難しいところだな。どちらも良いがインパクトに欠ける。

そんな事を考えているとバックが動き、可愛い顔が出てきた。

「お兄ちゃん。あの学校、風壁結界が張ってあるから普通に降りたら吹き飛んじゃうよ。」

レンは顔だけを出して教えてくれた。

「ありがとうレン。ちなみにレンはどうやったら安全に降りれると思う?」

「大きい猫バージョンの僕に乗るのはどうかな?僕ならくーきてぃこーもないし、結界も無視できるよ?」

多分、空気抵抗って言ったんだよな。

それより大きなレンか…。確か虎だったな。ならインパクトは抜群か。

「レン、虎になってくれるか?」

「分かった。少しだけ待ってね。」

そしてレンは顔をバックの中に引っ込めた。

待つこと十秒……

バックからホワイトタイガー（レン）が出てきた。
ただ首に真っ赤なチョーカー（鈴付き）がしてあり凄く気になる。

バックから出てきたレンは乗れと言わんばかりに背中を向けてきた。
俺はバックを背負いながらレンの背中に跨がり、確認をとる。

「ええっと・・・これで良いのか、レン？」

レンは僅かに顔を上下させ、いきなり飛び降りた。

「～～～～～っ！」

俺が声にならない悲鳴をあげていると、レンはいきなり止まった。
そして戦闘機に向かい口を開ける。次の瞬間、戦闘機はまるで蒸発したかのように消えた。

「・・・・・・え？」

驚いてる俺を乗せてレンは学校の結界に小さな（と言っても俺達が入れるぐらいの）穴を開け、その中に飛び込んだ。

「ははは、はははははは。」

レンが敵じゃなくて本当によかった。

侵入者、つまり俺だ（前書き）

グダグダです。

楽しんでいただけたら嬉しいです。

侵入者、つまり俺だ

前回
レンが味方で嬉しいです。

―???サイド―

『お父さんへ

今日の朝方に何者かが我が学園の結界をすり抜けて来ました。しかも学園で一番強固な風壁結界をです。
まあ、結界に異常があった場合は職員室に報告が行くので問題は無いのですが…何故でしょう?嫌な予感がしてなりません。なんだか平穏な学園生活が失われてしまいそうで怖いです。
侵入者は今だに捕まっておらず、先生方に追われています。先生方はとても素晴らしい魔法使いです。すぐに捕まえてくれるはず…でした。
先生方は一度は侵入者を捕まえたそうですが、侵入者が口を開いた瞬間に先生方はその場に泣き崩れたそうです。お父さん。このままでは学園が大変な事になります。至急、騎士団の方を向かわせて下さい。出来ればシンゲンさんも来て頂けるとありがたいです。

貴方の娘より』

私は書き終わると同時に、手紙をお父さんの仕事部屋に送った。この時間ならお父さんがいる筈…でしたよね？あれ？違いましたっけ？とにかくこれで明日までには解決できる筈です。

「・・・それにしても、いったいどんな人が侵入して来たんでしょうか？」

案外可愛い女の子かもしれませんね。

と、私が考えていると休憩時間が終わった。

「次は実戦の授業でしたね。」

正直やりたくないですね。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―刹那サイド―

「何故こんな事になったんだ？」

意味が分からない。

ただ上から来ただけなのにいきなり侵入者扱いかよ。しかもレンとは離れるし…

「此処に逃げたぞ！」

さっきから追ってくる変な奴等（頭に角だの尻尾があるだの）が此処まで来たみたいだ。

「しょうがない。他の場所に行くか。」

今までいた場所から走り、コロシアムみたいな場所に向かう。

「居たぞ！捕まえろ！」「奴は闘技場に向かったぞ！」「殺せー！」

先頭にいた奴が俺を見つけ追い掛けて来た。
て言うか、

「お前等仕事やれよぉぉぉぉぉ！！」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―？？？サイド―

私が闘技場に着くと何故かクラスの皆がフィールドの中心に集まっていた。

「何か有るのでしょうか？」

私も気になりフィールドに上がった。

そして近くに居た友人―リキュル・エルメス―に聞こうと…思ったが止めた。

何故なら鼻血を出しながら恍惚とした顔をしていたからだ。あの状態の彼女は話が通じない。

「・・・他の方に聞きますか。」

少し離れた場所に居るリクスに聞くと、

「凄く可愛い女の子がいるんですよ。」

と言われた。

可愛い女の子…気になりますね。

「すいませんが、私にも見せてくれませんか？」

リクスはすぐに私を中に入れてくれた。

そしてそこには…銀の髪に緑と赤の目を持つ少女がいた。

周りの方々は自分の弁当やお菓子などを与えようとしていたが「僕

はお腹減ってないよ」の一言で終わった。

「あの・・・貴方は誰ですか?」

あまり怖がらせないように聞いてみると、

「僕はレンだよ。」

と教えてくれた。

「レンちゃんは何で此処にいるのかな?もしかして迷子なの?」

初等部の子が迷子になったのでは?と思い聞いてみた。だが返ってきた答えは信じられないものだった。

「違うよ。僕はお兄ちゃんを探してるんだよ。さっき変な人に追われた時にはぐれちゃって。」

と言われ、私を含めクラスの（リキュールを除く）全員が固まった。

何故ならこの時、私達の頭の中では

変な人→侵入者

と言う考えが浮かんだからだ。

そしてリクスが、

「許せない。」

と言ったのを聞き、皆が口々に叫んだ。

「侵入者を探せ！」「見つけ次第八つ裂きにしろ！」「殺せ！」「生きたまま地獄を見せてやる！」「心をぶっ壊してやる！」「凍らせてやるわ！」「生かさず殺さず絶望を見せてあげるわ！」

等々の言葉が飛び交う。
もちろん私も許すつもりは無い。
そこに担当の先生の使い魔が連絡をくれた。
私はそれを読む。

「・・・なんですって?!皆さん、侵入者が闘技場に向かってきたそうです！」

それを聞き皆が不敵な笑みを浮かべた。

「リクス。リキュルを起こして！」

リクスがリキュルを殴り起こした。
そして結界を張らせた。

「各自、自身の使える最強魔法の詠唱開始！」

皆は詠唱を全て言うまで五秒と掛からなかった。

「目標が侵入次第、全魔法を発射！」

そして一分程経過し、リキュルの結界に入ってきた。そして侵入者が来た瞬間、

「一斉射撃！！！」

ドドドーーーーーン！！！！！！

「全魔法の命中を確認しました。」

私達が勝利を確信した時レンちゃんが、

「今のお兄ちゃんだよ？」

と、私に教えてくれた。私の背中に冷や汗が流れた。

「皆さん！彼に回復魔法を掛けてください！今すぐに！」

私の言葉を聞き疑問に思ている皆に

「今のはレンちゃんのお兄さんなんです！」

と説明した。

理由が分かった瞬間、全員の顔が青くなった。

そして回復魔法を唱え、彼に駆け寄った。

私はレンちゃんに謝るために話し掛けようとした。

…だがレンちゃんは動かないどころか笑顔さえ浮かべている。そして私に、

「お兄ちゃんだから大丈夫だよ。」

とあまりに信じられない言葉を言った。

その時、

「殺す気かお前等ーー！！！！」

私は声がした方を見ると彼に駆け寄った男子が宙に浮いた。

「え？」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―刹那サイド―

「殺す気かお前等ーー！！！！」

さっきから何ですか？俺なんかしましたか？
今までのはともかく、今の下手すりゃ死んでたぞ？！咄嗟に『攻撃の無力化』を使ったから助かったが、流石にキレた。
その上追撃しに来たっぽい奴が何人も来るし。
あまりにムカついたから、本気のアッパーを喰らわした。

綺麗な弧を描き地面に落ちた。
周りの奴等は警戒したのか驚いたのか動きを止めた。だが知った事じゃねぇ…

「お前等、五体満足で出られると思うんじゃねぇぞ。」

周りの奴等を睨み、私刑宣告をしておいた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―？？？サイド―

今私は地獄を見ている。
比喩じゃない。本当に地獄だ。

私の前には、形が変わった友人達が転がっている。

ある者は腕を引き千切られており、ある者は全身の骨が折られている。これ等はまだ軽い方だ。
ある者は指から徐々に腐っていき泣きわめいている。ある者は自分自身で腹を裂き、中の物を引きずり出している。彼等は痛覚が残っているらしいく、イタイ、イタイと言い続けている。

「少しは反省したか？」
いつの間にか、彼は私の後ろにいた。彼を見ようとしたが恐怖で体が動かなかった。
私はなんとか体を動かし、彼の顔を見た。

そこで世界に砕け散った。

「・・・え？」

私が今まで見ていた世界は消え、地獄になる前の世界が現れた。
周りを見るとリクスが泣いていた。その近くにいるリキュルは気絶している。

「これに懲りたら喧嘩は人を見てからやろうな。」

彼女達の近くに彼はいた。彼が２人を追い詰めたのか？
彼は周りを見渡すと、

「おはよう諸君！目が覚めたみたいだな。」
と挨拶をしたのだった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―刹那サイド―

あれ。また俺視点かよ。
作者、今回変わりすぎだ。

まあそれはともかく、少し説明しないとな。

俺が使ったのは『邪眼』。目を合わせた相手に一分間、現実にしか見えない幻を見せる事が出来る眼だ。それで色々見せた訳だ。

だけど、俺と目線を合わせなかった奴が2人もいた。女の子だったんだけど、いきなり攻撃してきたから1人は気絶してもらった。
もう1人は気絶してくれなかったから、ちょっと酷いけど昔の古傷を抉った。
彼女達に忠告をしていたらいつの間にか周りの奴等が起きた。だから、

「おはよう諸君！目が覚めたみたいだな。」

と挨拶をした。

そのとき、やっとで追い付いてきた変な奴等が現れた。

「貴様・・・生徒に何をした?!」

「うっさいぞトナカイ。少し夢を見せただけだ。」

マジで五月蝿い。此処等で消そうかなコイツ?

「お兄ちゃん、お姉ちゃん達が怖がってるよ。謝らないと。」

「・・・あれ?いつからいたのレン?」

「最初からいたよ。それよりお兄ちゃん、お姉ちゃん達に謝って。」

「分かったよ。皆さん済みませんでした!」

レンに言われるままに謝った。この子には勝てません。

「・・・いえ、私達こそ済みませんでした。侵入者と間違え攻撃を仕掛けるだなんて。」

「・・・・ははは。」

乾いた笑いが口から漏れた。

「レイナさん。この子達は侵入者です。間違いではありません。」

「だから侵入者じゃないって。」

その時、誰かが報告しに来た。

「先生！第一騎士団の方々がいらっしゃいました！」
「そうですか！フフフ、これで貴方も終わりです。観念しなさい！」

いやなんで？
確か第一騎士団ってシンゲンさんとフラウがいる騎士団だよな？

そんな事を考えていると、
「第一騎士団団長シンゲンだ！賊が出たのは此処か？」
「第一騎士団副団長の補佐、フラウ・クロイツだ。死にたくなければ大人しくしな！」

2人が来た。
すると調子にのってるトナカイが2人に話し出した。
「よく来てくださいました。お2人がいてくだされればすぐに侵入者を捕まえる事が出来ます。」

「世辞はいい。賊は何処だ？」

「シンゲンさん、俺とレンらしいよ。」

俺が話し掛けると（シンゲンさんとフラウを除く）周りの奴等が凍り付いた。

「あれ？刹那じゃねえか。」
最初に口を開いたのはフラウだった。

「よ、1日ぶりだな。元気してた?」

「ぼちぼちだな。で、なんでお前が侵入者になってんだ?」

「知らねえ。あっちに聞いてくれ。」

急に話を振られたトナカイは面白い程狼狽している。

「ふむ。よく状況が理解できんな。だが、」

シンゲンさんが口を開いた。

「彼は今日からこの学園の生徒になったはずだ。」

その一言でトナカイは真っ青になった。

「つまり、また冤罪になったのかお前。」

認めたくないがこれが俺の学園初日だった。

テキトーな初授業（前書き）

前回よりグダグダです。

テキトーな初授業

前回
また冤罪になりました。
呪われてんのか？

P，S，　さっきまでの騒動は一部の生徒を除いて忘れさせたそうだ。

ただいま休憩時間。なのに職員室にいる。何故かと言うと…

「「「本当に済みませんでした！！！」」」

この人達はいつになったら土下座を止めるんだろう？

「だからもう怒ってませんよ。良いからクラスに案内して下さい。」

「分かりました。今担当の者が来ますので少しばかり待ってください。」

土下座しながら言わないでくれ。つい踏みたくなる。

「失礼する。１－Ｓ組に入る奴等を迎えに来た。」

いきなりダンディーな人が入ってきた。

彼が入ってきたのと同時にトナカイは体を半回転させながら起き上がった。

「ヒューゴ君。こちらがセツナ・キサラギ様とレン・キサラギ様だ。無礼な真似をするなよ。」

「無理だな。嬢ちゃん達、さっさと行くぞ。」

トナカイの言葉をバッサリと切り捨ててヒューゴさんは廊下に出た。俺とレンはその男を追いかけた。

何故か職員室から殺意を感じたが気のせいだろう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「此処が１－Ｓのクラスだ。」

教室に着いた。この扉を開ければ新しい学園生活か。

「よし入るか。」

俺は扉を開け、中に入った。
その瞬間、何故か悲鳴？が上がった。

「・・・俺が何かしたのか？」
「どうかしたのお兄ちゃん？」
「俺にも分からん。」

レンとそんな会話をしているとヒューゴさんがクラスの人に俺たちの事を紹介し始めた。

「お前等、今日から１－Ｓの仲間になったキサラギ姉妹だ。仲良くしてやれ。」

「少し待て。今姉妹って言ったよな？」

「言ったが何か問題あるか？キサラギ姉。」

「それだ！俺は女じゃくて男だ！」

俺はそんなに女顔か！？確かに声変わりしたのは高い声だし、肩も丸い。鏡を見ると女みたいだと自分でも思う。けどな、人には言われたくないんだよ！

「そんな事より自己紹介しろ。授業が遅れる。」

そ、そんな事って…
かなりショックだよ。地面に“の”の字を書いとこう。
「お兄ちゃん、僕からやって良い？」
「良いよ。」

レンは皆の方へ体を向け、元気に言った。
「僕はレン・キサラギです。分からない事が一杯あるので教えてね。」
そしてレンは笑顔を向けた。ん？笑顔を…
「ってヤバい！・・・遅かったか。」

俺が顔を上げた時には、辺り一面真っ赤に染まっていました。
「お、恐るべしレンの笑顔…」
これさえあれば戦争終わらせれるんじゃねぇ？
「お兄ちゃん、なんで皆鼻血出してるの？」
「・・・俺にも分かんない。」

一番恐ろしいのは本人に自覚が無いことかも…

１０分後・・・

「とりあえず全員起きたみたいだな。」

でもヒューゴさん、まだ教室が真っ赤なんだけど…

「次はお前だ。さっさと言え。」

こんな中でもやるのかよ。くそ、なるようになれだ。

「俺は如月　刹那です。魔法がまったく分からないので教えてください。よろしくお願いいたします。」

俺は言い終わると同時に皆に笑顔を向けた。

ぶしゅ…

何故か鼻血リバース。

「ヒューゴさん、どうにかしてください。」
唯一起きてるヒューゴさんに頼んでみる。
「ち、しょうがねえな。【傷を癒したまえ『癒光（ファーストエイド）』】」
彼が詠唱を唱えると倒れている奴等の体に光が集まっていく。
その光が収まると全員の鼻血が止まっていた。
「スゲー。これが魔法の力か。」
「んな事はどうでもいいから早く席に着け。」
そのまま席に着こうとしたが自分の席が分からない事に気付いた。
「ヒューゴさん、俺の席は何処ですか？」
「妹の隣で良いだろ。」
その言葉を聞き、周りを見ると女の子がレンに抱き付いていた。あれ？あの子何処かで見たような？
とにかく行くか。
俺はレンの隣に座った。自分の隣に座っている女の子（レンに抱き

付いていた子ではない）に挨拶をしなくちゃな。

「初めまして。これからよろしくな。」
「私はレイナです。こちらこそよろしくお願いいたします。分からない事があったら聞いて下さいね。」
「あれ？何処かで会った事ないか？」
「え？初対面のはずですけど…。」
「ん～何か気になるな。」

そんな会話をしていると目の前を何かが通り過ぎた。
飛んできた方を見ると周りに水の短剣を浮かべたヒューゴさんがいた。

「俺の授業中にじゃれ合ってんじゃねえ。次は当てるぞ。」

今の言葉で教室内の温度が下がった…多分。

「ごめんなさい。」

人間素直が大事だよ。

「よしなら再開するぞ。ちゃんと覚えろよ。」

もう喋らんから睨まないで…

「いいか。魔法を使うには絶対に必要な物が３つある。１つ目は魔力。まあ当たり前だな。２つ目は集中力だな。例え上位魔法でも集中力が無い奴が使うと下級魔法にも劣る。最後は想像力だな。同じ

魔法でも人によって形状や効果が違う事がある。まあそのうち理解できるようになる。今言った3つが必要だと分かったか？」

なんとなく分かったので頷いた。

「全員分かったみたいだな。なら闘技場に行くぞ。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「とりあえず『炎撃（ファイア）』辺りで練習しな。」

「やり方知らないんですけど…」

「・・・はぁ。」

今この人溜め息ついたぞ。

「【燃やせ『炎撃（ファイア）』】・・・分かったな。」

「・・・分かりました。」

さて、やってみますか。

「【燃やせ《炎撃（ファイア）》】」

ボッ…
マッチの火ぐらいの小さな火が出た。
「・・・むしろ出ない方が嬉しかった。」
あまりに虚しい。他の皆は上手くいってるのに…
なぜ俺だけこんな小さい火なんだ…
「お兄ちゃん見て！僕のファイア可愛いよ。」
レンは嬉しそうに自分のファイアを見せに来た。
「これがレンのファイア？」
レンのファイアは青いネコ形の炎だった。しかも動いている。
「キサラギ妹は面白い魔法になったな。キサラギ兄とは大違いだ。」
グサリ・・・
ヒューゴさんの言葉が刺さった。泣いて良いですか？
そんな事をしているとレイナが来た。
「先生、みんな出来たみたい・・・どうしたんですか？」
「ああ。キサラギ兄がファイアを上手く出せないみたいでな。」
「・・・嘘ですよね？」

そんな目で見ないでくれ。

「刹那さん。とりあえずもう一回やりましょう。原因が分かるかも知れません。」

「・・・笑ったりしないでくれよ。【燃やせ『炎撃(ファイア)』】」

ボッ…

「「「・・・・・・・・・」」」

頼む。せめて笑ってくれ。沈黙はかなりキツイ。

「刹那さん。魔法を使うなら魔力を集めてください。魔力が分散しすぎです。」

「集め方知らないんだよ…」

「まずはリラックスしてください。・・・そうです。次は体のどこかに意識を集中させてください。」

どこが良いだろう？

とりあえず左手に意識を向けてみるか。

意識を集中させて少し経つと、黒い光が左手を包んでいた。

「出ましたね。ならもう一回ファイアをやってみましょう。」

「【燃やせ『炎撃(ファイア)』】」

ボッ…

「「あれ?」」どうなってるんだ?さっきと変わら…

バチッ、ゴオオオォォォォォォォオオ!!!!!

いきなり火柱になった。
これ、どうすれば止まるの?

「さっさと消せ!このままだと闘技場が火の海になるぞ!」

「え!?ちょっと待った!」

消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えて消えろ・・・消えた。

「な、なんとかなったか。」

「バカ野郎・・・。危うく火事になるとこだったぞ。」

あんまり魔法初心者虐めないでくれ・・・。
誰だって初めは失敗する・・・はず。

「とりあえず今日の授業はこれで解散だ。道草するんじゃねぇぞ。」

いきなりだな。
しかもまだ授業中なんだけど…

「レイナ。あれ良いのか？」
「言っても無駄ですよ。先生が解散と言ったら今日の授業は終わりです。」

この学園大丈夫なのか？色々な意味で…
まあ帰れるんなら帰るか。

「帰るよレン。・・・レン？」

返事がしないのが不思議に思い、周りを見渡すとレンがいなかった。

「また迷子か？」

それなら探せば良いんだけど、何か嫌な予感がするな
「あんまり気が進まないけど、仕方ないよな。」

解析をフルに使いこの学園全ての情報を視る。だが、レンの情報が

何処にも無い。
嫌な予感が膨れ上がった。
今度は城まで解析範囲を拡げた。・・・いた！

「城の地下室？しかも一緒にいる奴等は・・・レイナと誰だ？何がどうなってるんだ？」

状況がよく理解出来んがさっさと行った方が良いよな…。
俺はどこでもドアを創り連れ戻しに行こうとした。
だがドアノブを持った瞬間、凍えそうな寒気が襲ってきた。

これが何を意味するか、それが理解できるのが辛い。
「逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ・・・。」

俺は覚悟を決め、扉を開けた。
この後、絶対に悪い事が起きると確信しながら扉を開けた俺を誰か認めてくれ…

テキトーな初授業（後書き）

「次回予告！
扉を開けたらユートピア！だけど中にはサタンが3人！刹那の運命はどうなるのか！？待て次回！！」

作者！勝手に次回予告なんてしないでください！

「気にしない気にしない。嘘をついてる訳でも無し。問題無いじゃん。」

我が儘を言わないでください！

「細かいと老けるぜ？」

五月蝿い！

地下室で壊れた刹那（前書き）

「これは酷い目にあったのか？」

知りませんよゴミ作者。

「魔王出てないし…。」

だから知りませんよ超低能作者。

地下室で壊れた刹那

前回
授業をした&ａｍｐ;レンが消えただからどこでもドアで迎えに出発。

嫌な予感がするが覚悟を決めドアを開けた。

そこには…

「「「「え?」」」」

レンとレイナ、あと知らない女子（二名）がいた。
だけど問題が一つ…

みんな着替え中でした。

いきなりだったため、（レンを除く）みんなは理解出来ずフリーズしている。

「お兄ちゃんも着替えるの？」

レンの言葉で全員正気に戻る。

「って何で刹那さんが此処にいるんですか！？！？」

そう言いながらレイナは何処から取り出したのかナイフを投げてきた。

そのあまりの速さに避ける事が出来ず、左肩に刺さった。・・・痛い。

「死ね」

その他Ａが巨大な包丁（あれ？見たことがあるような？）を投擲してきた。

動作が大きかったため避ける事が出来た。が、余波っぽいヤツで右腕がズタズタになった。それ何処の《偽・螺旋剣【カラドボルグ】》？

「とりあえず楽しませてもらうわ（はぁと）」

その他Ｂは何かを手に持ち凄い勢いで振った。次の瞬間、顔の前に火花が散った。

あまりのダメージに俺は意識を手放した。

ちなみに上記の攻撃はほぼ同時に繰り出されてた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「・・・あれ？此処は…何処だ？って、何で縛られてるの俺！？」

起きると全身を縄みたいなものに縛られ動く事が出来ない。

「やっとでお目覚めかしらお嬢さん？」

いきなり目の前に小学生くらいの女の子が出てきた。それと俺は女じゃない。れっきとした男だ。

「とにかく縄をほどけ。・・・ってか何この縛り方？」

「何って、ただの亀甲縛りですが？」

あ、噂くらいなら俺も知ってる。アレって難しくないのかな～？

「って、ふざけんなあああぁぁああ――――――――！！！！！！！縛るだけなら普通に縛られよ！？　いや、そもそも縛るんじゃねぇよ！！」

「縛らないと逃げてしまうでしょう？それにどうせ縛るなら自分好みに縛りたいじゃない♪」

「リキュル、持って来たけどコレで良いの？」

いきなり後ろから声が聞こえた。振り向いた先には…

山のような衣装と注射器を運んで来たレイナがいた。

「それで良いわ。とりあえず準備は出来た。あとはレンちゃんとリクスが帰って来るのを待つだけね。」

何故だろう？目の前にある衣装と注射器が怖い…

まさかコレが第六感か？俺に死が近付いてるのか？

「ただいま～、買い物終わったよ～。」

「とりあえず言われた物は全て買え揃えました。」

嫌な予感を感じた瞬間、２人が戻って来た。

2人は化粧品を買って来たみたいだ。

「それでは始めましょう。レイナ、注射器を取って。」

「はい。」

リキュルはレイナから注射器を受け取り俺目掛けて歩いてくる。
そして俺の腕を取り…刺した。

痛みが全く無かったのは不幸中の幸いか?

「さて、今の薬が何か解るかしら?」

「・・・筋肉弛緩剤。それも速効性の。」

あはは、体に力が入らない

「よく解ってるみたいね。なら今から私達がヤること解るわよね?」

「止めろ、それは絶対止めろ。いや止めてくださいリキュル様。」

「ふふふ、良いわねその呼び方。でも止めない。
レイナは服を、リクスは小物を用意!仕上げは私がヤるわ!
・・・あ、縄は取らないとね。」

そして動けない俺はなすがままにされるだけだった…

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―レイナサイド―

あれから十分後・・・

「うふふ、あとはルージュを塗れば・・・完成！」

「「「・・・綺麗」」」

「ふふ、ふふふふふ、あはははははは！！！！！！！！」

私達が刹那さんの評価をした瞬間、刹那さんは狂ったように笑いだした。
なんか凄く怖いです。

「えっと、刹那さんが壊れたみたいなんですが、大丈夫・・・なんですか？」

「大丈夫ですよ。恐らく予想以上に綺麗になれたため嬉しいんです。

」

「お兄ちゃん?それともお姉ちゃん?」

「今なら死んでも良いわね。ってか死にそう。鼻血の出しすぎで死にそう。」

リキュルが悶死するのは何時もの事なので私達はスルーした。
だが、誰も予想しなかった事が目の前で起きた。

「大丈夫ですかリキュルさん?はい、首をトントンしてあげますから座ってくださいね。」

「ぐぶふぁ!!?」

刹那さんがリキュルの介抱をし始めた。
それも凄く慈愛に満ちた表情で・・・
だがリキュルは鼻血が止まるどころか余計に酷くなってる。

「大丈夫ですか?私だとダメみたいなので他の方にやってもらいましょう。」

「いやこのままでお願いします。このままトントンしてください。」

リキュルは自分の欲望のために悶死を選んだみたいだ。
だが今はそんな事は些細な事だ。

どう考えてもおかしい…
刹那さんの豹変ぶりは凄すぎる。まるで本当の女の子みたいだ。

「リクス、あれどう思う？」
「色々な意味でヤバイですね。このままだとリキュルは死にますね。確実に。」
「いやそれは何時もの事だから良いんだけど…。」

「本当にそう思っているのですか？あの顔は今までの比ではありませんよ。」

リクスは2人の方へ指を指した。

そこには・・・

鼻血が止まったのか膝枕をしてもらいながら耳掃除をしてもらっているリキュルが幸せそうな表情（ただし顔を真っ白）で微笑んでる。
それと一つ訂正、鼻血は止まったんじゃなくて出し尽くしたんだ。

「・・・確かに少し危ないかも。」
「言ってる側から口からエクトプラズマが…！」

確かにリキュルの口から白っぽい物が出てます。
とりあえず2人を引き剥がさないと…！

「刹那さん！少し外に遊びに行きませんか？せっかく可愛くなったんだから皆に見せに行きましょう。」

「そうですね。リキュルさんも寝ちゃった見たいですし、行きましょうか。」

刹那さんは凄く良い笑顔で歩き出した。
この時、刹那さんが私よりも綺麗な事が悔しかったですね。

その後・・・

「リキュル、とりあえず起きなさい。」
「セツナちゃん～次はお風呂に入れてくれないかしら?」
「お兄ちゃんがお姉ちゃんで、でもお兄ちゃんは男の子でお姉ちゃんは女の子?あれ?お兄ちゃんが女の子だっけ?ん～、分かんないよ～。」

色々あったようだ。

地下室で壊れた刹那（後書き）

「いや～この後どうなるんだ？」

いっそのこと殺してあげなさい。

「あげてるよ？精神的に。」

街でも大騒動（前書き）

「今回少しはっちゃけ過ぎたか？」

知りませんし、興味ありません。

「手厳しい！？」

街でも大騒動

前回
よく覚えてませんが、今はとても元気ですよ?

―刹那?サイド―

「う～ん、今日は良い天気ですね～。このまま誰かを虐めるのも楽しいかもしれません。レイナさんはどう思いますか?」
「どこに楽しめる要素が有るのかまったく分かりません。」
「人が苦しむ姿はどれだけ見ても飽きる物ではありませんよ?」
「そもそも見たくないです。」

まったく、あの良さが理解出来ないとは・・・お子ちゃまですね。
レイナさんは『人の不幸は蜜の味』と言う名言を知らないのでしょうか?

「刹那さん、街に着きましたよ。」
「なら早く遊びましょう。このままだと退屈しのぎに近くにいる子を・・・つい虐めたくなっちゃいますから。」
「さあ、早く遊びに行きましょう!」

レイナさんはやっぱり可愛いですね。ちょっと脅しただけであんなに急いでくれるなんて・・・。
本当に虐めたくなっちゃいますね。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

数十分後・・・

「せ、刹那さん、そろそろ帰りませんか。なんか周りの方々の視線が痛いです。正直逃げたいんですが…」「レイナさん、私達は少し前に来たばかりですよ?それに見られたくらいなんだと言うんですか?男性の私がこの格好で歩いてるんです。目立たない訳がありません。」
「絶対違います。間違ってないけど違います。刹那さんを男性と思ってる方なんていません。皆無です。」
「それはある意味侮辱ですよ?この場で逝きますか?それとも・・・これから一生城から出れない日々を過ごしたいんですか?」

ふふふ、今なら世界を滅ぼせますよ?

「ごめんなさいもう言いませんだからイイ笑顔で首を絞めるのを止めてくださいお願いします。」

あら？無意識に絞めていたみたいですね。可哀想だから放してあげますか。

「レイナさん、これからは喋る時は言葉を選んだ方が良いですよ？」

「うぅ…死ぬかと思った。もう少し手加減してください。」

「とりあえずご飯でも食べましょう。案内してください。」「私の言葉をスルーしな…いえ何でもありません。」

素直なのは良い事ですよ？まあそれはともかく、早くご飯を食べたいのですが…

そんな事を考えているとレイナさんはいきなり質問をしてきました。

「えっと、聞いて良いですか？」

「話にもよりますが歩きながらなら良いですよ。」

「貴女がリキュルを介抱したのは何故ですか？」

「ふふふ、あの人を優しく殺してあげようかな？って思っただけですよ。」

「そ、そうですか。じゃあご飯を食べに行きま「その前に一つ良いですか？」…は、はい何でしょう？」

「さっきの“あなた”が、『貴方』ではなく『貴女』に聞こえたんですが…」

多分、今の私は凄く良い笑顔をしていると思います。ああ、レイナさんが凄く可愛い顔で怯えてるのがグッときますね。

「まあ、その話は後で良いでしょう。だから早くご飯を食べさせてください。」
「・・・はい。付いて来てください。うぅ…。」

さて、早く美味しいご飯を食べたいものです。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―レイナサイド―

あれから数十分後・・・

私は今凄い光景を見ていると思う。
後ろを見ると惨劇が拡がっている。だけど前は更に酷い。
何故なら・・・

「この程度の腕で店を出すとは…。貴方は料理をなんだと思ってるんですか!?」
刹那さんが中華屋さんにかなりヤバイ事を言っちゃってます。・・・

またですか。

「おいお嬢ちゃん！俺の料理の何が悪いってんだ！？材料だって高い物を使ってんだぜ！」

その言葉を聞いた瞬間、刹那さんの目が光った。

・・・あの店も終わりましたね。

「今、貴方はなんと言いましたか？材料が良い？それが味を決める訳じゃないんですよ？なんなら見本を見せてあげますよ？」

そう言い刹那さんは近くの店から安い食材を買ってきた。

「麺とスープは貴方の店の物を使わせてもらいます。それなら材料が全てでは無いと分かるでしょう。」

それから3分後・・・

「出来ましたよ。どうぞお召し上がりください。」

そこには材料の違いがあっても埋まらない圧倒的な存在感を出すラーメンがありました。

それを店の常連の方に食べさせるみたいです。

「いただきます。」

ズルズル…ズルズル…

聞くだけでお腹が空くような音を出しながら常連の方は食べています。

あ、食べ終わりました。

「お代わりください！」

「すいません。その一杯しか作ってないんです。だからまだお腹が空いてるならこの店のラーメンを「嫌です！今のラーメンを食べたらあんな不味い物を食べるなんて出来ません！」…だそうですが？」

刹那さんは本当に嬉しそうに笑っている。さっきからあの笑顔を見ていて思いました。

あの笑顔で何人の男性が堕ちたのか…と。

そしてあの笑顔を見て、何人の女性が自信を粉砕されたのか…と。

「くそおおぉぉお！！！もうお前ら来るなあああぁぁあ！！！！」

「安心してください。この店の敷地を跨ぐ事は二度とありませんから。」

うわぁぁ・・・

「さてレイナさん、充分に楽しんだ事ですし帰りましょうか。」
「あ、そうですね。そろそろ雲行きが（色々な意味で）怪しくなってきましたし帰りましょう♪」
やった！やっとで帰る事が出来ます！それなら急ぎましょう！

「そうですね。早く帰ってレイナさんと大切なお話をしたいですし。」
「・・・ええっと、何を話すんですか？」
「もちろん、“あなた”が『貴女』に聞こえた事と不味いご飯を食べさせた事についてですよ。」

あはははは、私いつの間にか死亡フラグを立てていたようです。
今日1日、一緒にいて分かりました。刹那さんは容赦を知りません。狙われたら最後です。つまり私の命日は今日です。

「ふふふ、まあ今日は許してあげましょう。」
「・・・え？」

私は自分の耳を疑いました

「許してくれるんですか？」
「レイナさんは今日、街に誘ってくれました。それに・・・負け犬の遠吠えを聞いてたら気分が良くなっちゃいまして。」

負け犬の皆さんありがとうございます！私はこのご恩を忘れません！

「そうですか、なら早くお城に戻りましょう！」

私は嬉しくて駆け出した。

「あ、レイナさん危ないですよ。」

「え？・・・きゃっ！？」

いきなり硬い何かにぶつかってしまった。

「痛たた・・・。」

「痛いのはコッチだお嬢ちゃん！お前のせいでコイツの骨が折れちまっただろうが！」

「え？」

私が前を見ると胸を押さえながら苦しんでいる男性とゴーレムみたいな男性がいました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―刹那？サイド―

まったくレイナさんは一体どれだけ私を楽しませてくれるんですか？
ここまでベタな展開は現実で見たのは初めてですよ。
「痛ぇーー！！！！死ぬほど痛ぇーー！！！！！」
「見やがれ！コイツがこんなに痛がってるだろ！？どうしてくれるんだ？」
「あわわ…」

レイナさんはただ狼狽えるばかり、あれでは相手の思う壺ですね。

「どうしたら、どうしたら良いんでしょう！？」
「狼狽えたって治らねぇーんだよ！金を出せ！」
「ははははい！これで良いでしょうか！？」

そう言いながらレイナさんは財布をゴリラに渡した。
中を見たゴリラは少し驚いた後、気色の悪い笑顔を見せた。

「ダメだな！こんな金額で治療なんか出来るか！」

財布には金貨が十枚ぐらい入ってたはずです。治療費なんて銀貨一枚でお釣りがきます。

まったくこのままだと…

「お嬢ちゃん、少し付いてきてもらおうか。コイツを医者に連れて行かねぇと死んじまう。」
「死!?」
「いやあり得ないですよ。常識を考えてから話してください。」
「なんだ、てめえ!」

失敗しました。このまま楽しませてもらおうと思ってましたのに、あまりに予想通りかつ馬鹿なセリフにツッコミを入れてしまいました。
しょうがない、サクッと終わらせますか。

「この子の連れです。この子が何をしたんですか?」
「俺の友人の骨を折りやがったんだよ!」
「そうですか。なら何処が折れたんですか?」

ふふふ、良い悲鳴(こえ)で鳴いてくださいよ。

「ここですか?それともここ?もしかしたらここかしら?」
「ぎげぇ!?ぐがが…!?」
「ど、どうした!?大丈夫か?」
はぁ、気色の悪い悲鳴ですね。せっかく神経に痛みを直接流してあげたのに…
まあ良いでしょう。私のオモチャの金を巻き上げた時点で私刑決定しましたし…

「ぐぼげぇご?がぐっ!・・・」
「あれ?まさか終わりですか?・・・情けない。貴方は少し早すぎですよ。もう少しぐらい耐えたらどうなんですか?それとも、いきなり刺激が強すぎたのかしら?」
「てめえ!!!良くもコイツを・・・ぶっ殺す!」
「出来ませんよ。貴方は確かに硬く大きくそして強い。ですが技が何もないのに私を殺そうだなんて・・・虐めたくなっちゃいますよ?」
私はゴリラの拳を避けながら少し面白い事を考えた。

「ふふふ、特別です。今日は機嫌が良いので遊んであげます。ただし私より先にばてたら罰ゲームです。」

「ほざけ!!」

ゴリラの拳を避け、体が交差する瞬間に腹部へ五発ほど蹴ってあげました。

「がふっ?!」

私はゴリラのポケットから財布を抜き出し、静かに告げた。

「貴方は確かに他の人より硬く大きく強い。でも私には勝てない。それは貴方がどれだけ頑張ろうと変わりません。」

さて、それでは罰ゲームをやりますか。

よしコレで良いかな?

「～～～～♪～～～～♪」

私は彼等のお腹に創り出した物を塗った。
これで2人に今まで絶対に味わった事の無い物を味わうだろう。

「じゃあ行きましょうレイナさん。」
「え？あっ、はい。今行きます。」

さて、城に帰りますか。

「そう言えば刹那さんがあの人達に塗っていたのって何ですか？」
「ああ、アレは腸をおかしくさせる薬です。」
「おかしく？」
「簡単に言うと1週間の間お腹を壊す薬です。ちなみに速効性ですよ♪」
「そうですか・・・。それはそうと戦闘中のアレは誘ってるんですか？」
「？」

その後・・・

「うがあああぁぁぁああ。腹が、腹があああぁぁあ！！！！！」

「誰か、誰か医者を呼んでくれえぇぇぇえ！！！！！」

・・・悲惨な最後だった。

街でも大騒動（後書き）

「ふふふふふ、次回はヤバイぜ。どれくらいヤバイって言うと、眉間のシワが戻らないぐらいヤバイ。」

それはヤバイんですか？

まったく問題なさそうなんですが…

「気にするな。俺自身分かってない。」

夜の出来事、朝の出来事（前書き）

「ふふふ不負婦夫腐。なんかやり過ぎた。」

確かにやり過ぎですね。

「まあなんとかなるさ！」

刹那が哀れです。

夜の出来事、朝の出来事

前回
楽しかったですね。

「とりあえず着替えたいんですが私の服は何処ですか？」
「リ、リキュルが持っています。部屋まで案内するので出来れば首に手を掛けるのを止めてくれませんか？」
「ダメですよ♪レイナさんが嘘を付く可能性がある以上、何があっても離しません。」

ふふふ、何故か離した瞬間ナイフを投げられる気がするんですよ。

「首を持つのが嫌なら首輪でも良いですよ。」
「首輪って何ですか？」
「首に付けるアイテムです。それなら力加減を間違えて絞めてしまう事も無いですよ？素手と首輪、どちらが良いですか？」
「首輪でお願いします。」

その言葉を聞いてすぐに、レイナさんの首に首輪を付け、リードを繋ぐ。

「・・・刹那さん、何故か人以下になった気がします。」

「ふふふ、大丈夫ですよ。私が最後まで可愛がってあげますからね。」

いきなりレイナさんが逃げ出しました。凄く速いですね。１００ｍなら七秒くらいで行けますよ。

まあ、逃げれませんが…

「うなあああぁぁぁああ！！！！！！！！！」

ちょうど５０ｍぐらいの所でレイナさんは奇声をあげた

「あ、言い忘れてましたが私から５０ｍ以上離れると電流が流れますから気を付けてくださいね。」

レイナさんはよろよろと立ち上がり首輪を取ろうと引っ張った。無駄なのに…

「ふにあああぁぁぁああ！！！！！！！！！」

またレイナさんは奇声をあげた。

「ちなみに、無理矢理外すと死にますよ?今までの十倍以上の電流

が流れますから。」
「そんな恐ろしい物を付けないでください！」
「私は確認しましたよ？素手と首輪、どちらが良いですか…と。」
「うっ！でも、その、何て言うか、あの…「早く案内してください。私はさっさと寝たいんですから。」…なら外してくれるまで案内しません。どうします？外し『ポチッ』うなあああぁぁぁああ！？！？！？！」
「つまり、私の調教を受けたいと？私の躾は厳しいですよ？なんなら忠犬レベルまで躾ますよ？今夜は私と2人きりで過ごしますか？」
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

「さて、確認しますが案内をしてくれますよね？」
「はい、私が案内をします。むしろ案内させてくださいお願いします。」
「なら出発しましょう。案内を頼みますよレイナさん。」

レイナさんは無言で案内をしてくれた。
やっぱり持つべき者はペットですよね♪

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「本当に此処で良いんですね？嘘だったら私の部屋に直行ですよ？」

「はい、絶対に此処です。だからボタンに指を掛けるのを止めてくれませんか？」

レイナさんは涙を流しながら上目遣いに私の顔を見てきます。
そんなに可愛い顔されたら虐めたくなっちゃいますよ？

「失礼ですがリキュルさんのお部屋ですか？」

「・・・こんな夜更けにレディの部屋に来るなんて無粋な方ね。名前を教えてくださらない？」

夜更け？まだ9時ぐらいですが…
まあそれはスルーしましょう。

「まさか忘れてしまったのですか？膝枕どころか耳掃除までしてあげたのに・・・」

「セツナちゃんですか！？今すぐ開けます！待っていてください！」

言葉が終わると同時に扉が開いた。

そこには頬を朱に染め、何かを期待するような視線を送る子供…もといリキュルさんがいました。

「セツナちゃん、もしかして夜這「違いますよ。私の服を貰いに来ただけです。」・・・うぅ」

私の言葉を聞いた瞬間、リキュルさんは目に見えて落ち込んでしまいました。
流石に可哀想ですね。

「えっとリキュルさん、今度また耳掃除してあげますから落ち込まないでください。」

「良いの!?」

雰囲気が明るくなったからまあ良しとしましょう。

「とにかく今日は服をくれませんか?アレが無いと色々困るので…」
「服ならセツナちゃんの部屋に置いといたよ?」

・・・・・私を騙すなんて、ドMですかレイナさん?

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「ごめんなさい本当に知らなかったんです悪気は無かったんです許してくださいもうこんな失敗は二度としませんだからもうビリビリは勘弁してください。」

悪気が有ったらこの程度じゃ済ませてませんよ。それこそ蝋燭とか出しますよ?

「まあ、今日の事は許してあげます。ですが次に失敗した時は・・・痛みが快感になるまで虐めますよ?」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

「まあそう言う事で帰っていいですよ。」

「あの…首輪を外してくれませんか?」

「嫌です。電流が流れないようにしときますからそのまま帰ってください。」

レイナさんは泣きながら帰って行きました。

ああ、なんて幸せなんでしょう…

「それはそうと、何かがおかしい気がするんですが・・・まあ楽しいから良いでしょう。」

それじゃあ明日のために寝ますかね。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「・・・すぅ・・・すぅ・・・うん？・・・朝か？」

いつの間にか寝てたみたいだな。・・・あれ？昨日何してたっけ？

「・・・ま、いいか。さっさと着替えよ。」

・・・・・・よし、飯でも食いに行くか。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ただいま厨房・・・

「～～～～♪～～～～～～♪～～～よし出来た。」

お、朝にしては良い出来だぜ！

「いただきます。・・・少し作り過ぎたな。」

どうみても1人で食べきれる量じゃない。
レンの分は弁当箱に入れたが、それでもまだ1人分はある。・・・
どうしよう？

そんな事を考えているとバカ王子が来た。
・・・アイツ、何してるんだ？

「あ～、腹減った。でも飯なんて作れねえし…誰か何かくれー。」

アイツ本当に王子か？
なんで王さま達と飯を食べてないんだ？

「おいバカ王子。お前は何をしてるんだ？」
「セツナか？いや～シンゲンさんと鍛練してたら飯の時間に遅れてちまってな。で、食い物ないか探しに来たんだよ。」
「そうか。なら俺の飯を分けてやろうか？」
「本当か！？頼む分けてく・・・！？」

コッチを見た瞬間、フラウの動きが止まった。

「・・・あの、セツナさんですよね？」
「何とち狂った事を言ってやがる。どっからどう見ても俺だろうが。まさか酔ってんのか？」
「これはギャグなのか？それとも頭でも打ったのか？」

なんだ？まったく訳が解らん。・・・まあ良いや。

「とりあえず飯は置いとくから好きに食え。俺は学園に行ってくる。」

俺はフラウを放置し学園に向かった。

その後・・・

「は、ははは、ははははははは！これは夢だ！多分鍛練の途中で気絶したんだ。あははははは！！！！」

かなりヤバイ状態異常にかかったみたいだ。

夜の出来事、朝の出来事（後書き）

刹那

「俺に何が起きたんだ？」

「大丈夫だ。たんにお前の中で革命が起こっただけだから！」

私だったら嫌ですけどね。

異常判明・・・らしい（前書き）

「ヤっちまった。色々な意味で後戻り出来ねぇ…」

そうですね。もともと後戻り出来ない状態でしたが、ついにここまで来ましたか

「何か助言して欲しいぜ…」

とりあえず逝くとこまで逝った方が楽しめますよ？

異常判明・・・らしい

前回
よく分からん。

朝、学園に着いてから何故か周りの視線が痛い…
特に男子の視線がキツイ。

「・・・俺、男に恨まれるような事したっけ？」

そんな事を考えていると、脇役Ａが話掛けてきた。

「ねえ君、少しだけ僕と遊ばない？大丈夫、きっと楽しませてみせる。」
「興味ない。俺は早く教室に行きたいんだ。退いてくれ。」
俺は脇役Ａの横を通り教室に行こうとした。が、
「ちょっと待ってくれ！僕のどこに不満があるって言うんだ！」

・・・ウザイ。

「まず動きがキモイ。いちいちくねくねすんな。それに香水なんか付けてんじゃねぇよ。かなり臭い。あと宝石類を身に付けすぎ。成金っぽいぞ？　その上かなり弱そうだ。
まあ分かりやすく言うなら存在がウザイ。」

俺の言葉を聞き、脇役Ａは真っ白になっていく。

まあ良いや。さっさと教室行こう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

約５分後・・・

「やっとで着いたか。ったく、この学園の男子は暇なのか？」

教室に来るまでに7、8人の男に話し掛けられた。
そのせいで5分も掛かっちまった。

まあ済んだ事はどうでも良い。
とりあえず教室に入るか。

俺は教室に入り、自分の席に座った。座ったんだか…

「・・・教室もかよ。俺はそんなに変か？」

そんな時、レンが教室に入ってきた。

「おはようさん、レン。」
「おはよう、お兄ちゃ・・・お兄ちゃんだよね？」
「おいおい、レンは何を言ってるんだ？俺は俺だよ。」
「だよね。可愛くなってたからびっくりしちゃった。」

まったく分からん。何が可愛いんだ？

俺がそれを聞こうと思ったらいきなり後ろから衝撃がきた。

「セツナちゃ～ん！耳掃除して～！」
「誰だよお前！？・・・ん？何処かで見た事があるような？」

いきなりタックルしてきた少女は俺の言葉を聞き目を見開いた。

「そんな!?　昨日はあんなに優しかったのに!まさか偽者!?」

「待て待て待て待て待て!　一体なんの話だよ?俺は昨日お前に会ったのか?」

「うぅ…。偽者でも良いから耳掃除してよ~。」

この子、まったく話を聞いてないよ。

誰かヘルプ!俺を助けて!

「おはようございますセツナさん。昨日の一件で目覚めてしまったんですか?」「あ、リクスお姉ちゃんだ。今日は休むんじゃないの?」

リクス?・・・ああ、レイナの友人か。

・・・ところで目覚めたって何?

「済まないが助けてくれよ。この子、話を聞いてくれないんだ。」

後ろから抱き付かれて首が絞まっちゃってんだけど…

「そうですね。このままリキュルの堕落っぷりを見るのも楽しいですが、今は貴方に聞きたい事もありますし・・・とりあえず助けてあげます。」

聞きたい事って何?

疑問を口にしようとした矢先、俺に抱き付いている少女(リキュル)が吹き飛んだ。

リクスの方を見るとフライパンを手に持っていた。

・・・そのフライパンを何処から出しました?

「とりあえず気絶させました。後は自分でどうにかしてください。」

「・・・あの子がピクリとも動かないんだけど大丈夫なのか?」

「いつもの事です。気にしないでください。」

大丈夫なら良いや。

そんな事よりさっきの事を聞いてみないとな!

「なあリクス、さっきの目覚めたってなんだ?それに昨日の一件って何?知ってる範囲で良いから教えてくれないか?」

「・・・昨日の記憶が無いのですか?」

「無いから聞いてんだよ!」

「ならまずは私の質問に答えてください。その服装に何か違和感が無いのですか?」

違和感?この服の何がおかしいだ?

「何処もおかしな所なんて無いが?」

「・・・重症ですね。」

いやだから何がだよ?黙られても分かんないって…

「貴方が・・・女物の服を着ているのが問題なんですよ。」

「それの何処が問題なんだよ?」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「・・・話をまとめると、俺は昨日酷い目にあい、そのせいで色々とヤバイ事になっているらしい。って感じか?」

「まあ概ね正解です。ですがレイナの方が酷い目にあってますよ。」

うん、かなりヤバイ状態だろうな。話を聞くだけで自己嫌悪する…べきなんだよな?

ごめん。俺、聞いただけで清々しい気分になったよ。

「それはそうとレイナは何処にいるんだ?教室内にはいないみたい

だが？」
「多分まだ寝てます。昨日は疲れたと言ってましたから。」
話からすると昨日の俺はえげつない物を創ったようだな。なら、少し使わせてもらおうかな？
レイナの首輪・・・起動
５０ｍ以上離れた場合の電流　・・・ＯＦＦ
使用者以外の取り外し時の電流　・・・ＯＮ
遠隔操作による電流　・・・ＯＮ
『注意事項
遠隔操作はスイッチを押す事で出来るほか、使用者の方ならスイッチが無くても流す事が出来ます。ただし魔力を消費します。
魔力で流す場合は対象にメッセージを送る事が出来ます。
以上』
あれ？注意事項なんてあるの？
まあメッセージが送れるんなら手間が省けた。
『レイナへ
今から１０分までに学園に来ない場合、忠犬レベルまで調教するかもな？
刹那より』
「はい送信。」

さて、何分後に来るのかな？

それから１２分後・・・

レイナは俺に

「ごめんなさい…」

と謝り続けている。

昨日の俺はそんなに怖かったのか？

「レイナ、とりあえず落ち着け。俺はお前に何かするつもりは無い。

」

「うぅ…本当ですか？実はスイッチを押すタイミングを考えてるとかじゃないんですか？」

「ないない。流石にそこまで酷くねぇよ。」

本当に昨日の俺（いや私か？）は何をやったんだ？

くそ！変わって欲しいぜ…

「嘘じゃないですよね？実は遊び心とかじゃないですよね？」

「あ～面倒な奴だな！そんなに信じられないなら、証拠を見せてやるよ！」

俺は言うが早いか手をレイナの首輪に伸ばし、そのまま引き千切った。

「あ・・・」

「これで良いか？良いなら返事をしろ。」

「え？あれ？刹那さん戻ったんですか？」

さっきから普通に話してたんだけど…

「多分な。リクスはまだおかしいって言うけど、俺は気にしてないから問題無いしな。」

「なら今は普通に接しても大丈夫なんですね？良かった…」

・・・何が良かったんだ？

その後・・・

「そう言えば刹那さん、その服は止めた方が良いですよ。」
「何で？けっこう気にいってんだけど…」
「学園の女子全員を敵に回す事になるからです。だって刹那さ「無駄ですレイナ。多分、言ったとしても信じてくれません。」・・・そうですね。」

色々言われた。

異常判明・・・らしい（後書き）

「次回、『鬼ごっこ』をやらせてみたい。」

突然何ですか？

鬼ごっこ？スタート！（前書き）

「さて、鬼ごっこスタートしたぜ。」

本当にやるんですね。

鬼ごっこ？スタート！

前回
少しおかしくなってたらしい。
ま、気にしてないから良いんだけどな…

朝のホームルーム・・・

「今日の授業は１－Ａと合同の体育だ。分かったな。」

へー、此処にも体育なんてあるのか。意外だな…

「た、体育なの・・・。」
「体育・・・ですか。」
「・・・私、今日は軍の方で大切な仕事があるので失礼させていただきます。」

あれ？なんか３人のテンションが低いな。
・・・リキュルの奴、逃げようとしてヒューゴさんのアッパー喰らってやがる…

「レイナお姉ちゃんにリクスお姉ちゃん、なんでそんなに落ち込んでるの？」
「それは俺も気になる。教室で勉強するより何倍も楽しいじゃねぇ

か？」
俺達の疑問にレイナとリクスはコチラを見ながら答えた。
・・・どうでも良いが目が死んだ魚みたいだな。
「あー、2人は知らないよね。この学園の体育の恐ろしさを・・・。」
「体育はクラス対抗で戦います。種目にもよりますが魔法の使用が許可されているため危険なんです。」
「ふむ、確かに危険だけど恐ろしくはないだろ？」
「あのね刹那さん。一番恐ろしいのは観戦してる人だよ。」
まったく話が見えてこない2人は何が言いたいんだ？
「この学園の体育はある事により危険度が増しています。」
「それはね、校長先生公認の賭け試合なんだよ。しかも優勝したクラスには色々な特典があるの。そのせいで・・・。」
あーなるほどね。
つまり、観客は自分の賭けたクラスを勝たせるためにあらゆる妨害をしてくる。そして対戦者は自分達が勝つためにあらゆる手段を使ってくる・・・って事だな
「・・・つまりこれは『なんでも有り』なんだな？勝つために何をしても良いんだよな？最高じゃねぇか！」
俺は2人を引きずりながら外に出た。
・・・もちろん体操服に着替えてからだぜ？

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

クラスごとに別れミーティングを始める。

「クラス会長、今日の種目はなんだ！」「今日は鬼ごっこ、しかも逃げる側だ。」「制限時間は何時までだ？」「今日1日だ。」「上等じゃねぇか！」「前回や前々回に負けた鬱憤、今日こそ晴らすぞ！！」

「「「「「おおおぉぉおおぉおおおお！！！！！！」」」」」

・・・皆凄い殺る気だな。俺より殺る気が有るなんて思わなかったぜ。

「で、お前等2人はなんで殺る気が無いんだ？かなり浮いてるぞ。」

2人はまったく覇気の無い表情で空を見ている。

そしてゆっくりとコチラを見て言った。

「私達は魔法と武器の使用が禁止されているため戦力になれないんです。」

「私は騎士団に所属しているため一切の武器の使用を禁じられているんです。ちなみにレイナは少し特殊な魔法故に使用を禁止されています。ついでにリキュルも使用禁止対象です。」
「色々大変なんだなお前等・・・。」

こいつは少し可哀想だな。何か楽しめる方法はないのか？

・・・・・・・あ。１つだけあった。

「なあ、お前等に聞くが今の話は他のクラスの奴等も知っているのか？」
「ええ、前々回の開会式の時に無能教師が言いましたから。」
「なら無能教師に感謝だな。相手が油断してくれる要素を作ってくれたんだからな。・・・ちなみに無能教師って誰？」
「あの先生だよ。ほら、頭に角が生えてる人だよ。」

・・・あの角にあの赤い鼻はトナカイだな。
鬼ごっこ中にぶん殴ってやる。

「２人共、勝利とあの無能教師に一矢報いるために手伝って欲しいんだが、やってくれるか？」

その言葉を聞き、２人に活力が戻ってきたのが分かった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「じゃあ2人共、とりあえずコレを身に付けてくれ。」
「かわいい指輪・・・。」
「凄まじい魔力を感じるのですが・・・。」
「気にするな。遊び心で創った魔道具だ。その指輪に魔力を流してから物に触るとトラップになるから校内を触りまくってくれ。」

急いで創ったため、消費魔力が増えちまったが充分役立つだろう。
増えたって言っても『メラ』が『ギラ』になった程度だしな。
ちなみにデザインはシルバーのリングにクローバーを掘っただけだ。

「それとコレも身に付けてくれ。それがあれば色々と有利だから。」
「コレは・・・杖ですか？」
「先程の指輪を上回る魔力を感じるのですが・・・」

そりゃそうだ。本気で創り出した一品だからな。
デザインはアル〇ェイドがキャス子（キャ〇ター）からパクった杖を真似た。

「それは『ルナティック』って言って、俺のオリジナル魔道具だ。こいつは持っいるだけで認識阻害、絶対防御、身体能力強化、魔力ブースター、状態異常全無効などが付加される。ちなみに魔力消費は0だ。」
「・・・いくらなんでもデタラメ過ぎです。コレを売ったら城だっ

て買えちゃいますよ。」
「・・・コレは武器です。私達が使う事は出来ません。」
「それなら大丈夫だ。さっき校長を脅し、じゃなくて許可を取りに行ってきた。そしたら、持っているだけなら反則にならないって言ってたぜ。」

・・・あれ？２人共、なんで震えてるんだ？

「（絶対に刹那さんを怒らせないようにしようね。）」
「（ええ、もう古傷を抉られたくないです。）」
「？よく分からんがそろそろ始まるから行くぞ。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「それではルールの説明をします。まず逃げる側の生徒は今日１日、敵対するクラスの生徒から逃げ切ってください。そのためならあらゆる手段を用いて構いません。そして、狩る側の生徒は終了までに逃げる側の生徒をあらゆる手段を用いて狩りなさい。
判定は『時間までに生き残っている生徒が多い』事です。それでは逃げる側の生徒は逃走を始めてください。」

その言葉を聞き、俺を除く全員が逃げた。
ははは、他のクラスの視線が痛いぜ。

「それでは狩りを始めてください。」
「「「「おおおぉぉおおぉおおおお！！！！！！！！」」」」

何十人もの奴等が俺に攻撃してきた。うん、バッチリ予想通り。

「バカだな…。俺をスルーすれば苦しまずにすんだのに…」

俺は『想像具現』で新たなスキルを創る。

「・・・創作スキル『七つの大罪』。喰らえ【暴食（グラトニー）】」

俺は手を前に伸ばし、スキルを発動した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―レイナサイド―

刹那さんに言われ屋上に来ました。そして屋上に来るまでに多くの場所を触ってきたので校舎内はトラップだらけです。
・・・私、帰れるかな?

その時、グラウンドの辺りから開始の合図があがりました。

その直後、

龍の咆哮のような轟音が響き渡りました。
グラウンドから聞こえました。確か刹那さんが残って足止めさせる予定でしたけど、まさか殺られてしまったのでは!?

私は気になり屋上からグラウンドを覗いて見ました。

「・・・え?」
そこには信じられないモノがありました。
グラウンドの真ん中で黒い龍が魔法を食べています。ですが、それより驚いたのはその背中に刹那さんが乗ってる事でした。

「・・・今回の鬼の人は可哀想です。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―刹那サイド―

予想以上にデカイな。
もしかしたら他の奴等もこんなにデカイのか？

「後で調整しないとな…。」

お、喰い終わったか。
よし何人か倒してから逃げるか。

「【暴食（グラトニー）】解除。」

今まで魔法を食べていたグラトニーが消えて鬼や教師が面食らってる。

・・・アイツでこれなら他の奴等は刺激が強すぎかな

「まあ良いか。見下せ【傲慢（プライド）の杖】」

俺が名を呼んだ瞬間、黒い杖が俺の手に現れた。

「お前等全員『ひれ伏せ』。」

俺が言葉を発すると杖が怪しい光を放った。
そして、目の前にいた鬼が地面にめり込んだ。

「・・・パワー強すぎた。まあ何人か気絶したみたいだし良いや。
【傲慢（プライド）】解除。」

惨劇を残し俺は逃げ出した

戦績
鬼・・・４０人中１３名が気絶、残り２７名は軽症。逃亡者・・・
４０人生存。

鬼ごっこ？スタート！（後書き）

「さて次は鬼ごっこの続きだな。」

まあ頑張ってください。応援しませんから。

「そこはしてくれよ！？」

鬼ごっこ終了（前書き）

「これ鬼ごっこか？サバイバルの間違いだよな？」

確かにサバイバルですね。これが鬼ごっこなら一生やりたくないです。

鬼ごっこ終了

前回
鬼ごっこスタート！

現在時刻・・・１０：５８

はあ、逃げたのは良いけどさ～

「誰も追い掛けて来ないのは辛いな・・・」

そう、逃げてから二時間以上同じ場所にいるけど誰も来ない。来ても逃げる。

「・・・暇だし戦況を調べようかな？敵対勢力も知りたいしな。」

解析開始・・・

鬼・・・４０人中１３名気絶、残り２７名は軽傷
逃亡者・・・４０人中８名気絶、その内３名はトラップにより気絶

教師・・・１８名中１７名敵対、その内２名はトラップにより気絶
その他の生徒・・・４００名中２９８名敵対、その内２６５名は観戦、３０名はトラップにより気絶、３名無関心

敵対勢力多いな。
教師はヒューゴさん以外は全員敵だし、生徒は学園の４／３は敵対してやがる
うちのクラス、嫌われてるのか？

「ま、敵対勢力と遊べるから良いや。・・・その前にトナカイの奴を殴りに行くか。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―リクスサイド―

現在時刻・・・１２：３７

授業が始まってから3時間以上が経ちました。刹那さんの指示通り、校舎内の階段やドア、トイレはトラップに変化させましたが、よく

考えたら味方も使うのでは・・・

「それにしても・・・刹那さんは何者でしょうか？」
遊び心で作られた物は触れた物をトラップに変化させる指輪。
そして装備するだけで様々な能力を与える杖。

遊び心で創られた指輪ですら売りに出したら最低でも金貨１０００枚はくだらないでしょう。

もし彼が正規の“魔導装飾師”なら噂になっているはずですし、かといってモグリの者なら協会が許すはずがありません。

「・・・まさか協会が隠している？」

いや、今は戦いに勝つ事を優先させましょう
そのためには周りに敵がいないか調べなければ・・・

「待ってんだろ！！！逃げんじゃねぇよ、トナカイがあああぁぁあぁぁあ！！！！！！！！！」
「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁあああぁぁあ！！！！！！！！！」

・・・・無能教師が大鎌を持った刹那さんに追われていました。
訳が分かりません。分かりませんが、楽しそうですね。

「私もそろそろ殲滅を開始しますか。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―レンサイド―

現在時刻・・・２：４５

「にゃー」

「何これ？・・・なんか和むな。」
「うん、なんか心が洗われるようだ。」

「・・・人参食うか？」

「ふぅぅぅーーー！！！」

「・・・食わないみたいだな。」

「「そりゃ食わんだろ…」」

「・・・ゼリー食うか？」

「にゃー」

「・・・これは食うのか。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―レイナサイド―

現在時刻・・・３：１８

「刹那さん、この指輪は欠陥品です。失敗作です。」

うぅ…トラップを作り過ぎて屋上から出られなくなってしまいました。

「誰か～助けてください。うぅ…刹那さんのバカ。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―刹那サイド―

現在時刻・・・３：３９

「なんか、誰かに馬鹿にされた気がする。」
「あがががががが！！！ちょっと待っでででで！！！八つ当たりしなうげげげぇ！！！！？」

俺以外の声が真下から聞こえた。
俺が下を見ると・・・角が折れ、顔が潰れているトナカイが俺の足の下にいた。

「お前何してんの？昼寝？こんな所で寝てると風邪ひくぜ？」
「って君が私を殴り倒したのだろう！！？」

そういえばさっき顔面に拳を喰らわせたっけ。なんでだろ？

「・・・ああ、思い出した。お前がうちのクラス会長を脅したんだよな？」
「待てくれ！脅したなど嘘を言わないでくれ！アレは立派な交渉だ！」
「知るかゲスが。このままミンチになるまで磨り潰してやろうか？ああぁ！？」「ひぎぎぎぎぎぎぎ！！！！！！！！」

ったく、レイナ達の件だけなら顔面一発で済ましのに更にムカツク事しやがって

「成績を下げる？今までの努力が無駄になっても良いのか？よくそこまで言えますね先生？金で教員になった奴が偉そうに言うんじゃ

ねぇよ！」
「待て！？何故そのこ「何勝手に喋ってんだ？お前に喋る権利なんて無いんだよ！」ヒィ・・・」

滑稽だな！さんざん偉そうにしてやがったのにピンチになったらこれかよ？

「俺はお前の事は大嫌いだ。何故かって？ウザイからだ。」
「・・・・・・・・・」
「正直殺したい。でもそれは流石に無理だ。俺がシンゲンさんに怒られかねん。だから約束しろ。俺のクラスに何もしないと。」
「・・・・・・・・・・・」

・・・ほ～、首を横に振りやがるか。ならコッチも考えがある。

「そうか。なら俺はこの話を王さまに話す。」
「！？」
「だがな、俺の言うことに同意するなら勘弁してやろう。どうする？地位も家族も捨ててプライドを守るか？それともプライドを捨てて今を守るか？選ぶのはお前だ、ゆっくり考えても良いんだぜ？・・・まあ、俺は今日の帰りに言うけどな。」
「・・・・・・・・・」

トナカイは首を縦に振った。一応最後の確認をするか

「口に出して言ってくれないか？じゃないと分からないからさ～」
「わ、私は貴方のクラスに二度と関わりません。ですから、どうかこの話はご内密に・・・！」
「良いぜ。その代わり、約束は守れよ？」

さて、そろそろ狩りに戻らないとな。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

現在時刻・・・４：３０

ちっ、まさかトナカイ相手に４時間近く掛かるとはな

解析開始・・・

鬼・・・２７名中１４人気絶、残り１３名は軽傷
逃亡者・・・３２名中２８名気絶、その内１５名はトラップにより気絶、残り４名の内、１人はトラップに囲まれ行動不能、１名（匹

？）は睡眠中、１名は疲労（大）
教師・・・１５名敵対、その内１４名はトラップにより気絶、残り１名は戦意喪失
その他の生徒・・・３６５名中、２６２名敵対、その内１５１名はトラップにより気絶、５８名は物理攻撃により気絶

・・・まずトラップに囲まれてる馬鹿はレイナだな。うん、間違いない。あとレン、寝るなよ。
はぁ、予想はしたがまさか本当にこうなるとは・・・

「しょうがない、『七つの大罪』起動、遅き【怠惰（スロウス）の時計】」

スキルが発動し、俺の手には懐中時計が現れる。
その時計の針は１０分に一秒分だけ動く壊れた時計。だが・・・

「さて、時間を『合わせよう』かスロウス。」

その瞬間、時間の流れが変わる。ゆっくりと流れるようになる。

「よし、これで楽勝だな。」

さあ、蹂躙を開始しよう

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

時計は3分後・・・
現在時刻・・・4：33

「・・・疲れた。でもなんとか敵対勢力は全部潰したな。」

俺は30分で敵対勢力全員に『ピコ〇コハンマー』を喰らわしたから仲良く気絶するはずだ。
ちなみにアイテムじゃないくて呪文の名前だ。

「【怠惰（スロウス）】解除。」

その瞬間、目の前にいた上級生が倒れた。
よし、ちゃんと気絶してる
他の奴等はどうだ？

解析開始・・・

鬼・・・１３名中１３名気絶
逃亡者・・・４名中０名気絶、残り４名の内、１人はトラップに囲まれ行動不能、１名（匹？）は寝起き、１名は疲労（大）教師・・・全員戦闘不能
その他の生徒・・・５４名中３９名気絶、残り１５名は激痛により行動不能

つまり俺達の勝ちか

その後・・・

「リクス、特典として何が貰えたんだ？」
「皆は全教科の試験免除です。私とレイナは最後まで生き残ったので試験免除と次の体育の免除を貰えました。」
「・・・俺とレンは何が貰えるんだ？」
「レンさんにはリボンの魔道具が、刹那さんには魔石が贈呈されるそうです。」「・・・要らねぇ。」

努力を返してくれ・・・

鬼ごっこ終了（後書き）

『七つの大罪』の説明

?:【傲慢（プライド）】、【色欲（ラスト）】、【暴食（グラトニー）】、【嫉妬（エンヴィー）】、【強欲（グリード）】、【怠惰（スロウス）】、【憤怒（ラース）】　の七つの能力を発動できる。ただし一度に使えるのは3つが限界ただしある状態だと全て同時に使用する事ができる。

?:それぞれ『武器』と『幻獣』の二種類がある。ただし例外として【色欲（ラスト）】には『幻獣』は存在しない。

【傲慢（プライド）】の追加説明

『幻獣』・・・不明

『武器』・・・杖

能力・・・絶対命令権

?:世界に存在する全てのモノに命令する事が出来る。?:世界に働き掛け、対象の存在を奪う事が出来る。

【暴食（グラトニー）】の追加説明

『幻獣』・・・黒龍

『武器』・・・不明

能力・・・万物吸収
あらゆるモノを吸収する事が出来る。
?:魔力を吸収した場合はある魔道具に蓄えられる。

【怠惰(スロウス)】の追加説明

『幻獣』・・・不明
『武器』・・・懐中時計

能力・・・時間制御
使用者以外の時間を時計に合わせる事が出来る。発動中は身体の成長が止まる。つまり使い過ぎで若者から老人になる事はない。

スキルの確認（前書き）

「ついに、ついに復活しちまったぜ！」

ああ、レイナも大変ですね

スキルの確認

前回
鬼ごっこ終了。
魔石は部屋のオブジェにしました。

鬼ごっこ（ただし参加した生徒はプチ戦争と証言）を終え、１週間の休みが貰えた。校舎が半壊したから修理をするらしい。
この機会に自分のスキルを試してみようと思ったんだよ。
で、シンゲンさんに良い修行場所を聞いたんだけど…

「なんでお前等がいるんだよ？」

「良いじゃねぇか、ピクニックは大勢の方が旨いんだよ。」
「ピクニックですか～。久しぶりですね、兄さん。」「私も貴方に興味があります。ですから見学させて頂いて宜しいでしょうか？」
「セツナちゃんのいる所にお姉さん有りよ！」

上からフラウ、レイナ、リクス、リキュルの順だ。

「済まない。リクスに刹那を知らぬかと聞かれて教えたのだが・・・あの3人が聞いておってな。」

「はぁ。シンゲンさん、俺は気にしません。リクスを除く3人は自分達で遊びに行くだけです。」

俺の言葉を聞き、3人の顔が笑みを浮かべた。が…

「だから弁当を分ける必要も無いし、修行に巻き込まれても気にしなくて良いんです。・・・あ、リクスは弁当分けてやるからな。」

「って、そうゆうオチか！」「そんなの酷いです！」
「セツナちゃんはリクスが好みなの！？」

3人は抗議してくるが、気にしない事にする。・・・1人は意味が分からんが大した事じゃないだろう。

「じゃかましい！！人に何も聞かずに憑いてきたお前等に文句を言う資格は無い！そんなに来たいなら俺に聞け！」

「セツナ、楽しそうだから一緒に行って良いか？」
「邪魔しないので一緒に行かせてください。」

「お願いセツナちゃん、私もセツナちゃんと遊びに行きたいの。」

一応、３人とも聞いてきたから良しとするか。

「分かった。憑いて来て良いぞ。」

・・・はぁ、４人分の弁当作らないとな。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

３０分後・・・

「お待たせ、シンゲンさん弁当持ってくれませんか？」

「承知した。・・・ふむ、これは旨そうな匂いだ。まさか嗅ぐだけ腹が減るとはな。」

・・・シンゲンさん、絶対に食べないでよ。

「それでは行こうか。皆、迷子にならんように。特にフラウとリキュル！貴様等は我の前を歩け！それなら見失わん。」

信用ないなお前等。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

約1時間後・・・

「此処なら誰の邪魔も入らんだろう。」

そこは湖のほとりだった。湖の中に巨大な魚が要るのを無視すれば素晴らしい場所だ。

「・・・シンゲンさん、『デビルフィッシュ』がいるが、安全なのか？」

「少なくとも我は一度も襲われた事は無いぞ？」

そりゃアイツも死にたくはないだろうからな…

「セツナ止めとけ。アイツはシンゲンさん以外倒せねぇよ。」
「おい、俺は修行するだけだ。アイツなんか興味な・・・なあフラウ。もし俺がアイツを倒せたらスゲーか？」
「ああスゲーよ。出来たら尊敬する。」
「なら勝負する。俺の本気を見てやがれ！」

まあ、アイツなら『アレ』の良い実験台になるだろうしな！

「ちなみに今から見る事は誰にも言わないでくれ。一応奥の手なんでな。」

全員すぐに頭を縦に振ってくれた。

それを見て俺は銅貨を一枚取り出した。

「・・・なんで銅貨を出してんだ？」
「気にするな。」

取り出した銅貨を上に弾いた。

そして俺の指に触れた。瞬間、銅貨は雷を纏いながら真っ直ぐ飛んで行き・・・

『ガアアアアァァアア！！！！！』

奴の体を貫いて消滅した。

「よっしゃ！！！」

フラウ達の方に自慢したくて振り向くと・・・

フリーズした４人がいました。・・・シンゲンさんは普通に拍手してる。

「素晴らしい技だな。アレなら城塞ですら破壊出来るだろう。・・・まあフラウ達には刺激が強すぎたみたいだがな。」

「一応アレは奥の手ですから。」

そしてフラウ達に目を向けると、何故かフラウの前に一昔前のツッコミ道具（ちゃぶ台）が！

フラウはちゃぶ台に手を掛けそして・・・

「ってなんじゃありゃーーーーー！！！！」

空高く放り投げた。幸い食事は乗ってなかったため、容易に避ける事が出来た。

「なんだ、あのふざけた威力は！？アレだけで小さな戦争終わらせれるぞ！！！！」

「おい、人を兵器みたいに言うんじゃねぇよ。ちなみにやり方企業秘密だから聞くなよ。・・・あと、とりあえず落ち着け。」

まあ、フラウが落ち着いた後に他の3人にも同じようにちゃぶ台を放り投げられたのは予想外だったな。

「とりあえず色々試すから黙って見てろよ。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

1時間後・・・

「・・・なんでだよ。なんで『無限の〇製』が出来ないんだ。」

色々試してみたが、『無〇の剣製』のみ使用不可だった。

『枯渇〇園』『タ〇リ』『獣〇の巣』『王の〇勢』は難なく発動できた（ちなみに『王〇軍勢』は発動したが誰も来なかった）。
だけど『無限の〇製』のみ発動しなかった。

「・・・アイツは何をしてるんだ？」
「なんか『無限の〇製』とか言う魔法が発動しないみたいですよ。」

五月蝿い・・・。
お前達に何が分かる？アレの素晴らしさが分からんお前等にこの悲しみが分かるはずが無い！
ちなみに魔法じゃなくて魔術な。間違えんな。

「くそ、気を取り直して次だ！」

俺が新たな技をやると聞き、皆静まりかえった。
俺は目を閉じて、俺が知りうる中でも最高の魔眼を発動した。

「・・・『直死の魔眼』。」

そっと目を開けると、黒い線や点が見えた。

「出来た!?うわ、マジで出来た!スゲー、コレが死の線・・・・!?」

なんだ?急に頭が割れるみたいに・・・

「『直死の魔眼』解除・・・。はぁ、はぁ、死ぬかと思った。」

くそ、解除したのにまだ痛い・・・。

「どうしたセツナ!?まさか魔力切れか?」
「いやまったく違う。一応大丈夫だから、安心してくれ。」
「どう考えても大丈夫ではないな。少し休め。」
「いや俺はまだ・・・」
「休め。」
「俺はまだで・・・」
「休め。」
「俺・・・」
「休め。」
「・・・はい。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「とりあえず弁当を食おうか。はい、コレがシンゲンさんの分、コレはフラウの分。えっとそれから・・・」

全員の分を配り終えた。
ちなみにオカズは全員違う種類にした。

「よし、さっさと食お「待てよ！」痛ぇ！・・・いきなり何しやがる！」

勝手に弁当を食おうとしたフラウをお玉で撃沈した。皆も唖然としている。

「・・・いただきますと言え。」
「「「「「「・・・は？」」」」」」
「だからいただきますと言え。言わなければオカズはもちろん、米の一粒さえ渡さん！」

言いながら皆の弁当をバックに戻した。

「いただきます。これで良いでしょうか？」
「ああ、リクスは食べても良いぞ。・・・はい、弁当と箸。」

一番最初に言ったのはリクスだった。・・・こいつ、いつも冷静だよな。

「いただきます。我にも食事を分けてくれんか。」
「どうぞ。コレがシンゲンさんの分ですよ。・・・3人とも早く言わんと弁当抜きだぞ。」
「「「いただきます！」」」
「ったく、これぐらい言われなくて言えよ。」

さて全員に弁当を渡し終え、自分の分の弁当を出す。
「いただきます。」
「なあ、刹那。この黄色い塊はなんだ？」
「玉子焼き。ちなみにお前の奴はだし巻き玉子焼きだ。」
「刹那さん、この変なの何ですか？」
「それはエビフライだ。あと変なの言うな。」
「刹那さん、この可愛い食べ物は何ですか？」
「それはプリンだ。ちなみにそれはデザートだからまだ食うなよ。」
「セツナちゃん、食べさせて～」
「絶対に嫌。」
「済まんがコレの作り方を教えてくれないか？」
「城に帰った後にレシピを渡しますよ。」

こんな感じで質問責めにあった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「さて、飯も食ったし再開するか。」

俺は立ち上がり皆から離れた。

「セツナの飯は何度食っても旨いな。」
「見た事はあったけど食べたのは初めてです。」
「・・・私なんて・・・どうせ・・・。」
「えっとリクスはなんで落ち込んでるの？」
「プリンか。後で子供達に分けてやるか。」

いい加減飯の話題から離れろよ。

「皆、今からする事は他言無用だからな。特に王さまには言わないでくれ！」

俺の言葉を聞き、全員頭を縦に振った。

「さて、『七つの大罪』起動。喰らえ【暴食の鎌（グラトニー）】」

スキルの発動と同時に巨体な鎌が現れた。

「フラウ、魔法を俺目掛けて撃て！」

「分かった。オラアアァァアア！！！！！」

フラウが叫んだ瞬間、馬鹿みたいにデカイ水の塊が俺に襲い掛かってきた。

「魔力を『喰え』、グラトニー！」

俺が叫んだ瞬間、グラトニーは辺りの魔力を喰い始めた。

もちろん目の前の水も例外ではなく鎌に吸収された。

「よし、コレなら確実に肉弾戦に持ち込めるな。フラウ、実験台ありがとう。」「・・・お前、俺の従者にならねぇか？」

「大変そうだからパス。【暴食（グラトニー）】解除。」

さて、次はアイツを出すとするか。

「遅き【怠惰（スロウス）】」

その瞬間、空間に穴が空いた。
そして、中からタキシードを着たウサギが現れた。

『主、私に何かご用ですか？』
「ただ呼んだだけ。だけどアイツ等にお茶でも入れてくれると助かる。」
『分かりました。・・・そう言えばラスト様から伝言を預かっていました。』
「ラストか・・・。なんて言ってた？」
『何でもある少女に挨拶がしたいそうでして、５分で良いから出して欲しいと仰っておりました。』
「分かった。お前はお茶を入れといてくれ。」
『かしこまりました。』

スロウスはそのまま皆の所に行った。だが今はそんな事はどうでもいい。
問題はラストの件だ。
アイツはスキルを創り始めてすぐにきまった。正確には俺が創ったんじゃない。何故か最初から決まっていたんだ。だから、

「アイツの事は何も知らないんだよな。はぁ、何が起こるかマジで分からん。」

しかも誰かに挨拶がしたいとか非常識だろ？まるで誰かと知り合いみたいじゃないか。

「とにかく出すだけ出してみるか。狂え【色欲（ラスト）】」

俺はラストの名を呼んだ瞬間、自分が沈んむのを感じた。沈む途中で誰かとすれ違った気がした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―レイナサイド―

今スロウスさんに紅茶を入れてもらいました。今まで飲んだお茶の中で一番美味しいです。

「ありがとうございます、スロウスさん。」

『いえ、私は仕事をしているだけですので。』

そんな話をしていると刹那さんが戻って来ました。あれ？何故か寒気が・・・

『主ですか？それとも・・・』

「お疲れ様スロウス。私にも一杯入れてくださる？」『やはりラス

ト様でしたか。私程度のお茶でよろしいのならいくらでもお飲みください。』

何故でしょう?刹那さんが話すたびに悪寒が・・・

「どうしたレイナ。なんか小刻みに震えてるぞ?」

「それに唇が紫になってますよ?もしかして体調が悪いのですか!?」

「大丈夫ですかレイナさん?私の声が聞こえますか?」

「はい聞こえます。・・・え?刹那さん、今“私”って言いま・・・ま、まさかそんな!?」

ヤバイです。嫌な予感が確信に変わちゃいました。今すぐ逃げ出したいのに体が動きません。

「それにしても、お久しぶりですねレイナさん?私の事、覚えていますか?」

「い、いえ、全く覚えてません!じゃなくて知りません!」

私の言葉を聞き、刹那さんが笑顔を浮かべました。それはもう恐ろしい程綺麗な笑顔を・・・

「忘れてしまいましたか。・・・なら、思い出させてあげましょうか?」

この時ほど恐怖を感じた事はありませんでした。

スキルの確認（後書き）

「ふふふ、悪魔の中の悪魔が降臨した！レイナの未来はどっちだ！？」

確実に地獄行きでしょうね

俺、幸せなのかな？不幸なのかな？（前書き）

「今回短いな」

まあ、次回の布石みたいな物ですし…

俺、幸せなのかな？不幸なのかな？

前回
お久しぶりですね皆さん。最初は刹那？でしたが、今はラストと名前を手に入れました。

―ラストサイド―

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

レイナさん、どうして謝るんですか？ただ挨拶をしただけじゃないですか？

「貴様は何者だ！？これ程邪悪な魔力、悪魔の類いか！？」
「シンゲンさん、大正解です。よく分かりましたね。まさか気付かれるとは思いませんでしたよ。」

本当にどうして分かったんですか?私の能力が・・・

「ですが、いきなり悪魔は酷いです。確かに正解ですが私だって女性なんですよ?せめて悪女が良かったです。」

『ラスト様、そろそろ5分になります。』

もうそんなに経ってしまいましたか・・・残念です。

「今日は12時の鐘がなってしまったので帰らせていただきます。ですが、次の機会があるなら私と踊ってくださいね?」

そして私は精神の海に潜った。今度は素敵な殿方と踊れるのを期待して・・・

『てめえ!いきなり人を沈めやがって・・・!もう二度と呼んでやるか!』

『別に呼ばなくて良いですよ?まあその場合、貴方の中で延々と泣き続けるだけですので・・・』

『・・・とりあえず話し合おうか。』

ふふ、主は優しいので簡単に許してもらえました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―刹那サイド―

「・・・なんか痛い。まるでフライパンで顔面を殴られたようだ。」
「気のせいです。とりあえず目が覚めたみたいで良かったです。」

顔が痛いのを我慢しながら目を開けると・・・リクスの顔が見えました。

「はい？」

待て、何がどうなってこんな幸せな状況になったんだ？何で俺はリクスに膝枕をしてもらってるの？

「あの、目が覚めたのなら起きてくれませんか？そろそろ膝が痺れてきましたので。」
「ごっ、ごめんなさい！」

俺は慌てて飛び起きた。・・・かなり名残惜しかった。

「な、なななな何で膝枕を！！？」

「フラウ様が言うには男の方の看病をする場合は膝枕が普通らしいので・・・」

フラウナイス！じゃなくてフラウ殺す！
リクスに余計な知識を教えやがって・・・

「それで気分はどうですか？まだ気分が優れないのならもう少し続けても良いですが？」
「や、やらなくて良い！　（これ以上あんな事をされたら心臓が破裂する／／／／／）」

女子にまったく耐性がない刹那だった。

「って、耐性が無い訳じゃない！ただ恥ずかしいだけだ！」

「いきなり何を叫んでいるのですか？」
「あ、いや、何でも無い・・・」

その後・・・

「フラウ死ねぇ！見下せ【傲慢（プライド）の杖】」
「何で俺が殺されなきゃいけねぇんだよ！大体、お前も喜んでただろ！」
「五月蝿い！お前は『潰れろ』！『潰れろ』！『潰れろ』！」
「待てそれは、ギャアアァァアア！！！！！」

フラウを半殺しにした。

俺、幸せなのかな？不幸なのかな？（後書き）

「レイナからお便りがきたぞ。何々…」

『ラストさんが出てる時は出さないで下さい』

「無理。」

戦いの始まり（前書き）

「はっはっは、別に前回布石でも何でもねーじゃん」

それは貴方のせいですよ？自覚は有りますか？

「ごめんなさい。私が全て悪かったです。」

戦いの始まり

前回
膝枕は反則だ・・・

―レイナサイド―

「こんにちはレイナさん。」
「こんにちは刹那さん。私に何か用ですか?」

刹那さんは綺麗な笑顔を浮かべ、

「新しい首輪を創ったので散歩に行きませんか?そうですね、街を一周しましょう。」
「イヤアアァァァアアアァァ!!!!!!!!!!!」

そこで目が覚めました。

「・・・はぁ・・・はぁ・・・夢・・・ですか。」

凄く恐ろしい夢を見てしまいました。
・・・どんな夢か忘れたけど、それだけは分かります

「・・・もしかして、何か悪い事が?」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―フラウサイド―

「親父、今の話は本当か!?」
「ああ、信じたくないが事実だ。」
ざけんな!何で今になって戦争なんて始めるんだよ!?

「何処だ?何処の馬鹿が言ってきやがった!」
「帝国レッドアークだ。」「!?」

あの国が攻めてくる?有り得ねぇ!有り得るはずがねぇ!

「あの姫様が戦争なんて仕掛ける訳がねぇ…。」
「・・・ああ、あの子ならな。だがな、今の帝国を指揮しているのはアリア将軍だ。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―リクスサイド―

「・・・何でしょう？胸騒ぎがします。」
「どうしたんすか団長？」「・・・いや、何でもない。それよりお前も鍛練に行け。」
「げ、俺は仕事が有りますんで今日は遠慮させてもらいます！」
逃げようとした部下の襟首を掴み私は演習所に足を運びました。

「今日は私が稽古の相手をしよう。全員同時に掛かってこい。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―リキュルサイド―

「～～～♪～～～～♪」

やっぱり朝に入るお風呂って特別よね～♪

「～～♪～～きゃっ！？」

髪を洗っていると突然鏡に罅が入った。

「そんな・・・先週買ったばかりなのにーーーー！！！！！」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―シンゲンサイド―

「こらこら、そんなに慌てんでもプリンは逃げんぞ。落ち着いて食べろ。」

「「「「はーい！」」」」

先程、刹那に作ってもらったプリンは子供達に大人気だ。

「うむ、子供は無邪気なのが一番だな。・・・ん？」

突然、自分の牙が抜けた。

「・・・我の歯が抜けるとは、珍しい事も有るものだな。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―ウィリアムサイド―

「・・・まさかあの国と戦争をする事になるとはな。人生何が起こるか分からんものだ。」

あの国とはかなり友好的な関係だったため正直辛い。だが、民を守るためには戦わねばならん。

「アリア将軍・・・もしあの子に、ディアナに何かをしているのなら、ただでは済まさん！」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―？？？サイド―

「お腹減ったな・・・」

私が閉じ込められてからどれだけの時間が経ったのだろう？

「・・・アリアの奴、変な趣味に目覚めやがって。」

くくく、此処から出たらたっぷりお仕置きしないとな

「楽しみに・・・してやがれよ、アリア」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―刹那サイド―

『主、今日の紅茶はダージリン［ＳＦＰＧＦＯＰ］のセカンドフラッシュでございます。』
「ありがとう、ついでにクッキーでも焼いてくれないか？」
『かしこまりました。』

あぁ、スロウス創って良かった。

『主、何やら外の様子が騒がしいのですが・・・よろしいのですか？』
「どうでも良い。」

あぁ、なんて素晴らしい日なんだ。

戦いの始まり（後書き）

次回は戦争ですか？

「多分ね。」

番外編？色々説明します（前書き）

皆様、本当にありがとうございます！
まさかこれ程多くの方に読んでもらえるとは・・・

これからも楽しんでいただけるように精進させて頂きます。

番外編？色々説明します

「・・・。」

「ふふ、ふふふふふ。ようこそ！俺の部、ぎゃぴゅ！？」

「・・・俺はさ～、地下室の辺りからさ～」

「ちょっ、待て！何で傲慢の杖出してんの！？」

「ずっとお前を殺したいと思ってたんだぜ？」

「待て！今日は記念日・・・」

「五月蝿い。そんなの、知ったことじゃねぇんだよ！お前は『潰れろ』！『潰れろ』！『潰れろ』！ついでに『凶れ』！『千切れろ！』！『捻れろ』！！」

「アアアァァアアァァアアアァァアア！！！！！！！！！」

＊しばらくお待ち下さい

「ふぅ、スッキリした。」

「・・・・・・・・・・。」

あの～、いきなり作者の悲鳴が聞こえたのですが？

「七つ夜か。何でまた俺は此処にいるんだ？」

作者から説明は・・・されてないんですね。
今日は祝い事があったので主人公の刹那を呼んだんですよ。

「祝い事？ああアレか！」

『ＰＶ２５００００突破！＆ユニーク３００００突破！』

皆さん、本当にありがとうございます！！！

「ありがとうございます！」

さて、お礼は済んだので今日の仕事を始めましょう！

「じゃあ、今日は何をするんだ？」

そうですね。馬鹿作者の計画性の無さが色々な問題を残してますから・・・それを消化していきましょう！

「確かに途中からプロフィールが出なかったり、魔法が使われなかったりと、俺が読者だったらクレームしたくなる要素がてんこ盛りだな。」

ええ。まずはプロフィールを紹介しましょうか。

「じゃあ俺が説明する。七つ夜はお茶でも飲んでろ。」

あ、じゃあお願いします。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

名前：レイナ・クロム・シルディア

性別：女性

種族：魔族

年齢：１７

身長＆ａｍｐ；体重：１６５ｃｍ．５８ｋｇ

髪＆ａｍｐ；目：金髪、碧眼

スリーサイズ：Ｂ７５（Ｃ６５）／Ｗ５５／Ｈ７０

特技：計算

趣味：誰かと遊ぶ事

好きな物：友達、家族

嫌いな物：戦争、ラスト（このインタビューの後、少しの間レイナと刹那が行方不明になった）

スキル：癒しの祝福（死人でなければ癒す事が出来る奇跡の力。ただし対象に触らなければ発動しない）

容姿：可愛い系の顔立ちだが、……地味なのが玉に傷。ロングヘアー

身体能力：普段は５？のダンベルを２，３回持ち上げれる程度。た

だし、ツッコミ時、または照れ隠しの時は１ｔはある岩を余裕で投げる
ＩＱ：努力は人一倍しているが実ることがない。計算が得意だが、文章問題の意味が分からないのでオール赤点
備考：
シルディア王国第一王女。王女っぽく無いけど一応王女。
作中で一番悲惨なキャラ。最近はラストのせいで毎日を怯えて過ごしている。
勉強は全て赤点だが計算だけ極端に出来る（文章問題は出来ない）。
学園七不思議の１つ。
リクス曰く［努力が実らなかった努力家］、リキュル曰く［全てを癒せるドジッ娘］らしい。

☆

名前：リクス・ドラゴラム
性別：女性
種族：龍人族
年齢：１８
身長＆amp;体重：１７３ｃｍ・５９ｋｇ
髪＆amp;目：赤髪、緋眼
スリーサイズ：Ｂ８７（Ｃ６６）／Ｗ５６／Ｈ７３
特技：錠前外し
趣味：お菓子作り
好きな物：鍛練、魔物、お菓子作り
嫌いな物：勉強、幽霊、フラウ様（騙されたため）
スキル：龍人の本能（相手の弱点を見切る事が出来る）

容姿：赤い髪をポニーテールにしている美人。男装をさせると女子が殺到する
身体能力：アイアンクローで頭蓋を割れ、もとい凄い握力を持っている。ついでに足の速さは時速４０？が最大
ＩＱ：一度も勉強したことがないが常に校内ランキング１０以内
備考：
シルディア王国第二騎士団団長。数少ない龍人族の１人。義姉がいる。ちなみに炎龍。
魔物を見るのが好きらしい。あと、龍とは会話も出来る。
よく考えると常識人かもしれない。
レイナ曰く［学園で怒らせてはいけない人ランキング３位の乙女］（ちなみに１位は俺、２位はヒューゴさんらしい）　リキュル曰く［触ると指が裂ける高嶺の華］らしい。
体より大きな武器（包丁やフライパン）を普段から持ち歩いている。ただし何処に隠しているのかは不明。フラウの事は一度騙されてから嫌いになったらしい（膝枕の件だ）。

☆

名前：リキュル・エルメス
性別：女性
種族：魔族
年齢：１７
身長＆ａｍｐ；体重：１３４ｃｍ・３３ｋｇ
髪＆ａｍｐ；目：紫の髪、橙色の目
スリーサイズ：Ｂ７９（Ｃ６３）／Ｗ５３／Ｈ７１
特技：裁縫
趣味：洋服作り
好きな物：可愛い女の子（可愛い男の娘も可）、朝風呂
嫌いな物：気持ちが悪い物、辛い食べ物、仕事

スキル：属性変化（自身の魔力属性を好きなタイミングで変える事が出来る。制限の無いレアスキル）
容姿：髪型はサイドポニー。見た目的には活発な美少女
身体能力：普段は割り箸を折ることも出来ない位力がない。しかし時に生物の限界を超える事もある
ＩＱ：魔法の知識（主に結界係）は詳しいがその他の知識は皆無に等しい
備考：
シルディア王国第一騎士団副団長にして騎士団一の問題児。
街、城、学園、果ては他国にも彼女の被害を受けた者がいる。被害の大半は覗きとストーカー。
魔法は結界がメイン。結界の完成度は高く、破壊される事はまず無い。結界を鞭状にして物理的なダメージを与える事も出来る。
見た目は美少女だが実際はただの変態。レイナ曰く［少し変わったいたずらっ子］リクス曰く［良く言えば天才、普通に言えば給料泥棒、悪く言えば変態］らしい。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「とりあえずヒロイン（？）のプロフィールでした。・・・こんな感じか？」

上出来だと思いますよ。少なくとも作者よりはマシです。

「そっか。次は『七つの大罪』（幻獣＋１）のプロフィールを公開します。」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

『七つの大罪』幻獣プロフィール

名称：色欲（ラスト）
性別：女性（体は男性）
種族：悪魔
年齢：１７
身長＆ａｍｐ;体重：刹那と同じ
髪＆ａｍｐ;目：刹那と同じ
スリーサイズ：Ｂ??（Ｃ??）／Ｗ??／Ｈ??
特技：家事全般
趣味：虐め
好きな物：虐め、レイナ
嫌いな物：不味い料理、弱い男
スキル：刹那と同じ物と固有スキルが２つ
身体的特徴：基本的に刹那と同じ。違いは声がアルト↓ソプラノに変わる程度
ＩＱ：文系６０～８０点、理系７０～９５点、英語は書けるけど喋れない。ついでにいうと保健体育は１００点のみ（本人は実技の方が得意との事）
備考：

刹那の女性人格。最初は刹那が壊れた時に出てきた。後に『七つの大罪』の色欲を支配する。
出てくると必ずレイナに悪夢を見せる。オモチャとして気に入ったらしい。
レイナ曰く［恐怖の象徴］リスク曰く［狂喜の悪魔］リキュル曰く［優しいセツナちゃん］らしい。
ちなみに刹那が女物の服を着るのは壊れた時の後遺症です。

名称：暴食（グラトニー）
性別：オス
種族：龍
年齢：無し
身長＆amp;体重：自由自在
鱗＆amp;目：黒い鱗、紅眼
趣味：昼寝
特技：枕
好きな物：布団、飴、刹那嫌いな物：敵、不味い物、雨
スキル：万物吸収（説明は鬼ごっこ終了の後書きあります）
身体的特徴：モデル［驪竜（りりょう）］
備考：
暴食の名を持つ黒龍。顎の下に宝玉がある。
名前は暴食だが実は少食。普段は刹那の魔力を食べて生活している。
ちなみに前足が2本しかない。忠実に創り過ぎた。
そのためか、光が苦手（吸収は出来る）。新月の夜には馬鹿みたいに強くなる。
スキル以外の力としては、モデルが『海』と『闇』を司る黒龍のためか、『水』と『闇』の力を持つ。

余談だが、黒龍は玄武と同じで『北を守護する神聖な龍』と言われる場合もある（基本的な伝説だと災厄の象徴）。

名称：怠惰（スロウス）
性別：オス
種族：兎
年齢：無し
身長&体重：１８０ｃｍ．７０ｋｇ
毛&目：白い毛、朱眼
趣味：時計に触る
特技：別に無い
好きな物：刹那、ラスト
嫌いな物：敵、歩きにくい場所
スキル：時間制御（スロウスと同じ理由で省かせていただきます）
身体的特徴：モデル［月の兎］と［時計ウサギ］
備考：
怠惰の名を持つ兎。コイツ水の上を走れます。怠惰の名を持つが、かなりの働き者。燕尾服を着ている（つまり執事）。
主である刹那のために全身全霊で働く。
スキル以外の力としては、『引力』をもつ。
引力は、月と同等の力を持つ。
余談だが、『月の兎』に出てくる爺さんは帝釈天（インドラ）らしい。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「以上、『七つの大罪』（幻獣＋１）のプロフィールでした。」

・・・刹那、ラストのプロフィールに一ヶ所おかしい場所があるんですが。

「気にするな。」

まあ、良いですけど。
それでは次に行きましょう。

「じゃ、何やる？」

そうですね、属性の違いをハッキリさせましょう。
正直に言うと髪の色と瞳の色で属性が分かると言われましても・・・

「まったく分かんないよな。じゃ、次はお前が説明してくれ。」

分かりました。
では刹那はお茶を飲んでいて下さい。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

属性色分け表

髪

基本属性
赤＝火　青＝水　黄＝土
橙＝木　金＝雷　緑＝風

上位属性
紫＝闇　白＝光　黒＝？

特化属性
朱＝熱　水色＝氷
鈍色＝鉄　桃色＝香り

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ここまでが髪の属性でした

「・・・なあ、『赤』と『朱』の違いって何？」

朱は黄色がかった赤の事を指します。ちなみに橙色は赤みをおびた黄色（つまりオレンジ色）です。
この２つは似ていますが、まったくの別物です。
分かりましたか？

「なんとなくなら分かった。」

それで充分です。では瞳の紹介をしましょうか。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

属性色分け表

基本
赤＝火　青＝水　黄色＝土橙色＝木　金＝雷　緑＝風

上位
緋＝炎　蒼＝氷　碧＝守護紫＝闇

最上位
紅＝神炎　朱＝精神
翠＝神風　黒＝？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

以上属性色分け表でした。

「・・・なあ、シンゲンさんの属性はなんだ？」

彼は火炎です。スキルのせいで神炎一歩手前のレベルまで上がっていますが、本来は赤髪、赤目なんですよ

「へ～、じゃあ黒はなんなんだ？色分け表には『？』って表示されてただけなんだけど。」

それは言えません。
一応ヒントを出すと『全ての属性に関係しない属性』です。

「まったく分からねぇ。」

今ので分かったら凄いですよ。まあ、それはともかく次にいきましょう。

「そうだな。次はぎゃぶっ！？！？」

「何をいきなり復活してるのかな、作者？」

あの程度では死なないと思ってましたが、まさかこれ程早く治るとは・・・

「ふっ、１０ｔトラックに跳ねられて無傷だった俺を嘗めるなよ！（実話）」

「・・・そうだな。次は塵も残さず消滅させるか。」

刹那、落ち着いて下さい。次は作者に質問しましょう

「俺に?良いぜ、何でも聞いてくれ。」

「七つ夜、俺もコレに質問したい事がある。良いか?」

お好きなように、では作者に質問です。
何でいきなり戦争何ですか?話の流れが変わり過ぎです。

「・・・戦争したら楽しそうじゃん♪」

人類のゴミが息をしないでください。あんまりふざけると後悔しますよ?

「いや、今のマジです。」

・・・では次の質問です。戦闘描写少なく無いですか？魔法もあまり使われてません。説明してください。

「まずは戦闘描写からな。これまで平和だったから♪」

・・・実はそこまで考えてなかったんですね。

「ごめんなさい、その通りです。・・・ちなみに魔法の方は戦闘描写が無かったから。」

死んでください肥溜め野郎。蛆虫以下の存在が同じ世界にいるのは耐えられません。早く地獄に落ちてくださいよ。

「酷っ！！」

「（七つ夜も然り気無く口が悪いのよな）」

刹那、私の質問が終わったので貴方の番ですよ。

「分かった。作者、ブルー、ブルーレア、レア、ミディアム、ミディアムレア、ミディアムウェル、ウェル、ウェルダン、ヴェリー・ウェルダン。どれが好きだ？」

「ステーキか？俺はがヴェリー・ウェルダンが一番好きだぞ？・・・ってこの質問は！！」

「ああ、その想像は大正解だ。こんがり中まで焼き付くしてやる。」

「ギャアアアァァアアアァァァアアアァァアア！！！！！！！！」

・・・えげつないですね。あ、今回は終了みたいですね。
これからも楽しでいただけるように精進させて頂きます。

ちなみに刹那が上げたのはステーキの焼き方です。気になる方はｗｉＯｉで調べて下さいね。

番外編？色々説明します（後書き）

「次回、戦争の前準備だな。」

全身が黒くなるまで焼かれたのに何で話せるんですか便所蟋蟀（コオロギ）？

「だから酷いって！！」

お姫様救出（前書き）

「・・・まともなキャラがいない気がする。」

何を今さら・・・

お姫様救出

前回
ああ、幸せな1日だったな

夜、いきなりフラウが部屋に来た。そして・・・

「刹那、力を貸してくれ。」
「・・・は？」

意味の分からん事を言われた。

「頼む！姫さんの命が掛かってるんだ！」
「・・・済まん。まったく理解できない。頼むから説明してくれ。」

俺の言葉を聞き、フラウは説明を始めた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「・・・つまり戦争するから兵器を作れって事か？」「違う！姫さんを助ける事が出来る魔道具を作ってくれ！」
「無理無理。俺が魔道具なんか作れる訳ないじゃん？」
「嘘を付くな！レイナ達から聞いたから来たんだよ！」
・・・レイナはラストの刑だな。リスクは・・・無しで良いや。

「・・・はぁ、フラウ。１つだけ約束するなら貸してやる。」
「ああ！俺に出来る範囲ならなんだってする。」
「じゃあ、今から助けに行くから準備しろ。ただし武器は俺が用意する。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「・・・出来たぜ。」
「じゃ、コレをやる。絶対に俺に向けるなよ。」

そう言い、俺は真紅の槍を渡した。

「・・・おい、この武器かなり短いぞ。」
「そりゃ今からお姫様を助けに行くんだぜ？目立たないように小さくしたんだよ。」

ちなみに大きさは両手で隠せる位だ。
ま、いつも通り異常な能力を付加しといたけどな。

「よし、フラウ行くぞ！」「・・・何処に行くつもりだお前さんは？」
「だからお姫様の所だよ。」
「帝国まで魔車でも2日掛かるんだぞ！お前は徒歩で行くつもりか！？」
「うん。」

だってその方が早い。
俺はどこでもドア（常に部屋に置いてある）を開いた。

「よし、フラウ行くぞ。」「・・・・・・なんじゃこりゃ？」
「どこでもドア。後で説明してやるから行くぞ！」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

現在、牢屋近くの階段から牢屋の様子を見てるんだけど・・・

「・・・４人“しか”見張りがいないとは思わなかったよ。」
「４人“も”の間違いだろ。俺達は姫さんを守りながら戦うんだぞ？」

いや、５秒で倒せるしあの程度の奴等。

「見下せ【傲慢（プライド）の杖】」

悪いが・・・お前達はこの世界から消えてもらう。

傲慢の杖【世界へのアクセス開始】・・・完了
存在抹消・・・発動可能

「おいフラウ、今すぐ『突撃しろ』。」
「無茶苦茶な事を言うな！って、なあぁぁぁあ！！！？」

ふっ、傲慢の杖装備時の命令は絶対なんだぜ！

お、あいつ等も気付いたみたいだな。

「クソッタレ！こうなりゃ自棄だ。おりゃあああああああ！！！！」

「傲慢の杖、特殊技能発動！雲散霧消！」

能力が発動瞬間、見張りの皆さんは消滅した。

ちなみにフラウは突撃した勢いのまま、鉄格子にぶつかった。

「フラウ、大丈夫か？」

「・・・ああ、顔がへこんだ程度だ。って、あんな事が出来るなら最初に言いやがれ！」

「はいはい、とにかくお姫様を助けようぜ。」

「そうだ！姫さん助けに来たぞ！」

「・・・聞こえてるよ、フラウ王子。とりあえず君は永遠に黙ってくれないか？」

「・・・意外に元気そうだな姫さん。」

「君には言われたくないな。まあ挨拶は後で良い。さっさと助けろ

ロリコン。」

・・・何この会話？

「刹那、牢屋をぶち壊せる物はないか？」

「・・・さっき渡した槍なら壊せるぞ。」

「槍なんかもらってねぇよ！」

「さっきの武器だよ！それに魔力を流してみろ。」

「・・・ん？なんじゃこりゃ！！！？」

フラウが魔力を流してすぐにやや短めの槍が現れた

「ほら、ソレで鉄格子を斬れば良い。」

「ああ！うりゃあああああああ！！！！！」

ブン！ガガガガガガガガガガガガガガズバッ！！！！！

フラウが放った一撃は、壁を破壊してから鉄格子を切り裂いた。

「改めて言うが、助けに来たぜ姫さん。」

「・・・コレがお姫様？」

お姫様はリキュル並に小さかった。だいたい１３０ｃｍ前後・・・

かな？

「フラウ・・・」

お姫様はフラウの方に駆け寄り、そして！

「遅いんだよこの愚図が！！！！！」
「ごぶふっ！！！？」

一瞬で背後に回り込みキドニーブローを喰らわせた。

「・・・綺麗に入ったな。フラウの奴、気絶してやがる。」
「・・・で、お前・・は・・だ・・・」

あ、倒れた。まさかさっきの一撃で全体力を使い果たしたのか？

「・・・あ。」

フラウが気絶してるなら、俺がドアまで運ぶのかよ！

「・・・はぁ。」

その後、2人を運ぶのに苦労したのは言うまでもない

お姫様救出（後書き）

「次回は！・・・どうなるんだろう？」

知りませんよ。自分で考えてください。

城にて・・・（前書き）

「・・・何でまともな奴がいないんだ?」

作者が人間の屑だからですよ。

城にて・・・

前回
お姫様を助けました。

・・・あれから約5時間が経過した。

「・・・この2人は何時になったら起きるんだ？」

もうそろそろ朝だ。
2人にベッドを占領されたため、今日は一睡もしていない。

「・・・飯にするか。」

俺が部屋を出ようとした瞬間、

「「飯か（ご飯か）！！？」」

2人が飛び起きた。

「・・・ん？此処は刹那の部屋か？」
「・・・あれ？ご飯は？」「おい、起きたんならさっさと出てけ。」
「刹那、何で俺はお前の部屋にいるんだ？」
「お前誰だ？それに此処は何処だ？」

・・・頼む、マジで出ていってくれないか。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「おい、何でお前等まで来るんだよ？」
「そりゃお前さんの飯を食べるためだ。」

「だからお前は誰だ！あとご飯を作ってくれ！」

・・・はぁ、いい加減にしてほしい。

「フラウ、まずは王様に報告しろよ。」
「ならお前も来い。」
「フラウ、コレを助けに行く前に約束をしろと言ったな。」
「ああ、お前さんは何も言わなかったがな。」
「だから今決めた。俺の事は何一つ言うな。俺は何も関わって無い事にしろ。」「・・・分かった、だが俺の朝飯も作っといてくれ。」
「了解。」

さて、フラウの事は解決した。問題は・・・

「グルルルルル！！」

コレ呼ばわりしてから足に噛み付いてるお姫様をどうするかだな。
まあ痛くないけど。

「・・・飯でも食わせてやるか。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「お子様ランチ出来たぞ。」
「ご飯だーーーー！！！！！」

お姫様は俺が作ったお子様ランチを嬉しそうに見ている。・・・あ、尻尾振ってる。
どうやらこのお姫様は犬の獣人らしい。

「なぁ、コレ食って良いのか！？」
「いただきますって言ってからなら食べても良いよ。」
「いただきます！！」

凄い勢いでお子様ランチが無くなっていく。
まあそれはともかく、小さい子がご飯食べてる時って何でこんなに美味そうなんだ？

「おかわり！！！」
「はいはい、少し待ってくれよ。・・・どうぞ。」
「ありがと！お前変な奴だけど良い奴だな！」

・・・変？

「・・・俺ってそんなに変か？」
「ああ！髪と目が真っ黒だし、男なのに女の格好してるし、なんか似合ってるし、全体的に怪しいぞお前！」

何か物凄くダメージを食らった気がする。

「あ、それはそうとお前誰だ？」
「如月　刹那だ。・・・次変な奴とか言ったらデザート無しな。」
「変じゃないからデザートくれ。」

・・・変わり身早いな。

「・・・はい、プリン。」「なんだこの奇妙な物は？まさかスライムか！？」

おい、スライムと一緒にするなよ。

「だからプリンだよ。俺が作ったデザートの中で一番人気が高い。・・・食わないんなら貰うぞ？コレが最後の一個だし。」
「・・・ダメだ！一度貰った物は全部私の物だ！」

俺からプリンを奪い、即座に全部食べた。

「んぐっ、むぐっ、ん？ふぁまい！」
「・・・全部食べてから話そうなワンコ。」

あ、今一気に飲み込んだよこの子。

「・・・美味かった。」
「そりゃどうも。こっちもあんだけ美味そうに食ってもらえると嬉しいよ。」
「お前家に来ないか？コックとして雇ってやる！」
「気が向いたら雇われてやっても良いよ。」

シンとした。
何故か涙を浮かべながら睨み付けてくるワンコ。
・・・俺、何かしたか？

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―フラウサイド―

「親父！」
「・・・フラウ、少し落ち着きなさい。」

これが落ち着いてられるかよ！

「親父、姫さんを助けて来たぜ！」
「・・・とりあえず医務室に行きなさい。」
「いやマジだって！信じてくれ！」
「ならどうやって助けて来たんだ？」

刹那の事は・・・言えないな。約束しちまったし…

「こう、死ぬ気でレッドアークまで助けに行ったんだよ！」
「説明になって無い・・・だいたい、帝国まで何日掛かると思っている？魔車を使ったとしても最低2日は掛かるのに何故一晩で助けてこれたんだ？」
「そりゃー刹那に手伝ってもらっ・・・あ。」

つい刹那の名前を出しちまった！

「・・・刹那君に何を手伝ってもらったか、説明してくれるか？」

すまん刹那、後の事は頼んだぞ・・・

城にて・・・（後書き）

「勉強嫌い。・・・うぅ」

・・・馬鹿作者が。休みの間にやらないからそうなるんですよ？

虐めって何でこんなに楽しいんだ？（前書き）

「タイトル通りだ。ま、今回は少しアレだけどな。」

・・・そこまで酷く無いです。だから安心して読んでくださいね。

虐めって何でこんなに楽しいんだ？

前回
疲れた・・・

今、目の前でフラウが土下座している。ま、許さんけど・・・

「何故、こんな事になったんだ？・・・なぁフラウ、お前は何故か知らないか？」
「ごめんなさい・・・」

はっはっは、謝るだけなら四歳児でも出来るぞ。

「なぁ、何で俺が王様に怒られてお姫様に殴られなきゃいけないんだ？」
「親父に怒鳴られたのはともかく、姫さんに殴られれたのは俺のせいじゃぐふぇ！！！？」

なんかムカツク事を言ったフラウの顔面を割りと本気で踏みつけた。
グチャ…って音が聞こえたけど気にせずに何回も踏みつける・・・
あ、なんか楽しくなってきた。

「ぐげぇ!?べぶっ!?がふっ!?・・・・・・」
「あれ?もしかして気絶しちゃった?」

チッ、今からが面白かったのに・・・

「・・・うむ、次はレイナに私刑を食らわせるか（理由はお姫様救出参照）。」

今日はずっと楽しんで良いぞ。

「狂え【色欲（ラスト）】」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―レイナサイド―

「や、久しぶりだなレイナ姉。」
「・・・何でディアナちゃんが城にいるの？」
「実はかくかくしかじかでな。」
「そんな事が・・・」

何で私はかくかくしかじかで分かったんだろう？

「・・・まあ、フラウの行動のおかげで戦争を回避出来そうだけどね。」
「たまには兄さんも役に立つんですね。」
「まったくだな。私も戦争が回避出来るなら願ったり叶ったりだ。」

私達は3人で笑いあった。だがその時、いきなりナイフを突き付けられたような感覚が私を支配した。

「ど、どうしたレイナ姉!!？顔が真っ白だぞ!?」「今すぐ医務室に連れていかねば!誰か!誰か居ないか?!」
「だ、大丈夫だよ。物凄く嫌な予感がしただけだから。」

もはや最近では警報になりかけている勘が、ハヤクニゲテと訴え掛けてくる。

「あ、あははは、はははははは・・・逃げられないよ。逃げたら絶対酷い目にあうから。」
「ちょっ、何を言ってるか分からないよ？！」
「レイナ！早く医務室に行こう！」
2人が私を医務室に連れていこうとした時・・・
「大丈夫ですかレイナさん？顔が真っ白ですよ？」
悪魔の声が部屋に響いた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

―ラストサイド―

「ごめんなさいごめんなさ

いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」「レ、レイナ姉!?いったいどうしたんだ!!!?」「・・・君がシンゲンの言っていた悪魔だな。」
「私を知っているのですか?」

少し意外ですね。あのシンゲンさんが約束を破るなんて・・・

「まあそれは後でも良いですね。レイナさん、散歩に行きませんか?」
「は、はい!行きます、行かせて頂きます!」

・・・少し見ない間に素直になりましたね。

「ならレイナさん、コレを自分で付けてください。」「え!?コ、コレをですか?」
「待て!何故そのような物を付けさせる!」

何故って、上下関係は明白にするためですよ?

「・・・うぅ、これで良いですか?」
「はい、大変似合ってますよ。」

レイナさん、本当に似合ってます。これ程首輪が似合う女の子はまず居ません。流石ですね。

「・・・今回は逃げませんからビリビリは勘弁してください。」
「安心してください。今回のは電流なんて流れませんから。ですが逃げないでくださいね？」

逃げたら意識が吹き飛ぶ程の悪夢を見せなきゃいけませんから。

「仕上げにリードを付けて…完成です。」

ふふふ、本当に可愛らしい。今のレイナさんを写真に撮って売れば金貨2枚は確実ですね。・・・売るつもりはありませんが。

「待て。」
「・・・何ですか？邪魔をするなら容赦はしませんよ？」
「実の娘が悲惨な目にあっているのに見過ごす訳にはいかないな。」

つまり、邪魔をするんですね？

「なら夢へと旅立ちなさい。狂え【色欲（ラスト）の五芒星】」

私の固有武装は武器ではなく瞳です。分からない方はコード〇アスのル〇ーシュを思い出せば分かると思います。
まあ、私の場合は目を合わせる必要も無いし、制限もありません。
そもそも能力が違います。

「とりあえず、一時間程悪夢を堪能してください。」

私が王様を睨むと、魔方陣が王様の体に現れました。

「なんだコレは!?」
「貴方が知る必要はありません。早く『狂喜の夢』へと堕ちなさい。」

私の言葉で魔方陣は発動しました。
魔方陣は孔となり、王様を呑み込みました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―ウィリアムサイド―

私の体に浮かび上がった文字に吸い込まれた先は何も見えない程暗い場所だった

「・・・くそ!転送魔法か!?」

「違いますよ。コレは精神魔法の分野です。」

いきなり背後から悪魔の声が聞こえた。

「ようこそ、ここは出口の無い夢の世界です。まあ、今回は一時間で帰れますから安心してください。」

「・・・そうか。なら君を倒し、出口まで案内させるよ。」

私は魔力を集めようとし、絶句した。

「なっ!?魔力が集まらないだと!!!?」

「ふふふ、此処では魔力は使用できませんよ。もちろん武器も持ち込み不可能です。」

私は腰に手を回す途中で止めた。

「・・・くそ！こうなったら素手で・・・なっ！？」

いつの間にか体を鎖で縛られ動く事が出来ない状態になっていた。

「無理ですよ。貴方は私が許可するまで泣いて赦しを求める事しか出来ません。」

「その様な真似、死んでもするものか！」

「死んでも…ですか。ふふふ、その程度の覚悟で私に歯向かうなんて。」

彼女はそう言いながら右手を挙げると暗闇の中から禍々しい器具が現れた。

「貴方はさっき、死んでも…と言いましたね。考えが甘い。貴方は少し経ったら殺して下さいと懇願するようになるんですよ。」

その言葉を聞き、私の中に恐怖が生まれた。

「わ、私に何をするつもりだ！！！？」

「今から地獄を体験してもらいます。安心して下さいね。此処ではどの様な事になっても死ぬ事は出来ませんから。」

彼女は私を台に縛り付け、何かを手にしながら薄く笑った。
その笑顔は驚く程美しく、同時に恐ろしい程邪悪だった。

「まずは軽い物から始めますね。そうですね、爪を剥ぎましょう。」

そう言い、彼女は手に持った道具で私の爪を――――

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―ラストサイド―

ふぅ、王様を『狂喜の夢』の夢へと送ったのは疲れましたね。
後の事は『あの世界の私』に任せて散歩に行きましょう。

「レイナさん、四つん這いになって、移動して下さいね。」

「・・・うぅ、はい。」

素直なのも良いんですが、何か物足りませんね。

「おい、変態悪魔！お前は何をやるんだ？」

・・・変態悪魔？

「ディアナさん、私を馬鹿にしてるんですか？」
「馬鹿になんかしてない。ただ真実を言っただけだ。」

・・・良いでしょう。
私も少しばかり怒りましたよ？

「ん？何で急に近付いてくるんだ？おい聞い――――！！！？」

私はディアナさんに近付いき、尻尾を強く握り絞めました。
どうやら弱点だったみたいですね。顔が気持ち良さそうです。
なので優しく撫でてあげたり、少し強めに引っ張ったりしてみました。

「んあぁぁっ…だ、だめ…こん、な……ひゃん！？…あはっ…ん、

ぅあああああ！！！！…はぁ…はぁ…あぅ！？まだ待っ…あああぁあぁ！！！！」

尻尾を強く握るたびに小さな体を震わせるディアナさん。・・・可愛過ぎです。

ディアナさんもオモチャにしたくなりましたね。

私はディアナさんの首にも首輪を付けて歩き出しました。

ふふふ、楽しい散歩の始まりですよ。

虐めって何でこんなに楽しいんだ？（後書き）

「次回は散歩だな。」

・・・ただ散歩するだけなのに何でこんなバイオレンスな話しになってるんですか！？

「いや、可愛い女の子って虐めたくなるじゃん？」

貴方は絶対ろくな死に方をしませんよ。

、（前書き）

・・・なんですかコレは？

「ごめんなさい。本当にごめんなさい。」

、

前回
楽しくなってきましたね。

―ラストサイド―

私の目の前にレイナさんとディアナさんが可愛らしく座ってます。
ちなみに2人には首輪（前回の機能以外にちょっとした機能を追加しました）が付いてます。

「だ、誰か助けて・・・。」
「・・・何で私がこんな格好で歩かなきゃいけないんだよ!?」
「私の奴れ…ペットだからですよ。」
「「今奴隷って言いましたよね（言ったよな）！!?」」

・・・言いましたが何か?

「さて、城を歩きに行きますか?それとも私の部屋で逝きますか?」
「・・・あの、今の話はスルーですか?」
「何か問題が有りますか?」
「な、何も無いです。」
「私は有るぞ。変態悪「誰が変態ですか?」・・・」「ラストさん、そのままだとディアナちゃんが死んじゃいます!」

あら?また無意識に首を絞めてたみたいですね。
まあ、人間でもこの程度なら死にませんから大丈夫でしょう。

「ディアナさん、何が問題なんですか?」
「・・・・・・・・・」
「ちょっ、ラストさん!?ディアナちゃんが泡吹いてます!!」

・・・この程度の力で堕ちないで下さい。

「とりあえず街に行きますか。」
「あの、ディアナちゃんはどうするんですか?」
「引き摺り「それはダメです!!!」・・・はぁ、分かりました。」

私はディアナさんの耳に口を近付け・・・

「ディアナさん、ボソボソボソボソ・・・」
「イャァァァァァアアアアアア！！！！って私は何で叫んだんだ？」
「起きましたね。さて、街に行きますか。」
「あ、あの、なんて言ったんですか？」

・・・ふふふふふ

「ボソボソボソボソ・・・「！？！？！？」・・と言っただけですよ。」
「・・・レイナ姉、どうかしたのか？」
「・・・ディアナちゃん、世の中には知らない方が幸せな事も有るんだよ。」

お2人共、早く街に行きましょう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

街にて・・・

「久しぶりだなクソガキ！この前はよぴゅっ！？」
「いきなり貧相な顔を見せないで下さい。また地獄を見たいんですか？」

まったく、レイナさん達とデートに来たのに開始早々酷い者を見ました。

「・・・理不尽だな。」
「まあ、ラストさんだし、しょうがないよ。」
「レイナさん、そんなに私の部屋で遊びたいんですか？」
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」
「・・・今の言葉に何が有ったんだ？」
「知りたいですか？」
「って、いきなり蹴り飛ばしたあげく何事も無かったかの様に話始めるんじゃねぇよ！！！」

・・・しぶといですね。

「ゴリラさん、呼び止めたのなら何か用件が有るですよね？」

「（ゴリラって何だ？）な～に、用件はこの前のお礼がしたいだけだ。」
「え！？ラストさんが人を助けたんですか？」
「「「・・・」」」

今、凄く失礼な事を言われた気がしましたが、まあスルーします。

「レイナさん、お礼と言ってもお礼参りです。」
「お礼参りって何ですか？」
「・・・ディアナさん、説明をお願いします。」
「つまり喧嘩で負けたからリベンジしたいんだよ。分かったかレイナ姉？」
「つまり仕返しって事？」「・・・おい、もう初めて良いか？」
「この微妙な空気の中で殺られたいならご自由に。」「俺が殺られるの前提で話すんじゃねぇ！！！」
「どう見ても噛ませ犬だなお前。」
「うるせぇぞチビ！獣人風情が黙ってろ！！！！」
「・・・今何て言ったブサイク。獣人風情…だぁ！？」

・・・ディアナさん、もしかしてキレてますか？

「くくく・・・良い度胸だなブサイク。消し炭も残さねえからな？」

「私も戦いましょう。元々私の問題ですしね。」
「良い度胸だ！野郎共、出てきやがれ！！！」
「「「「「おおぉぉーーー！！！」」」」」

ゴリラさんの掛け声と共に武器を持った男性が２０人程度現れました。

「・・・はぁ、せめて２００人は集めて下さい。」
「いや流石にキツイと思う。」
「喧嘩は止めた方が良いと思うんだけど…」
「野郎共、殺っちまえーーー！！！」
「「「「「おおぉぉーーー！！！」」」」」

1分後・・・

「「弱すぎです（だな）。」」

まさか、自滅（同士討ち）するとは…

「とりあえず何か食べに行こうよ。」
「・・・そうですね。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―レイナサイド―

「レイナさん。少し良いですか？」
「は、はい。なんでしょうか？」
「この街にはまともな料理人は居ないんですか？」
「うん、凄く不味いな。」

2人共、お願いだからそれ以上言わないで！
前に来た（街での大騒動より）ときのせいで、ほとんど全ての店に敵視されてるんですから。

「あ、あの・・・ラストさんは覚えてますよね？」
「何をですか？」
「街に来たとき、ラストさんがやってた事ですよ！」「・・・・・・

・・・・・あの時の事ですか。」

絶対に忘れてましたね。

「別に問題は無かったはずです。ただ不味い物に不味いと言っただ
「わあああーーー!!!」・・・少し黙って下さい。」

はぁ…はぁ…何でそんなにあっさりと言えるんですか!?
しかも今、絶対に聞こえる様に言いましたよね!?

「美味しい場所まで案内しますから少しの間だけ喋らないで下さい
!」
「・・・良いでしょう。ですが、もし不味い物を食べさせたらどう
なるか。分かってますよね?」
「ん?今から美味い物が食え――――!!!」
「ふふふ、凄く楽しみですね。」
「そんな場所…あぅ…ちょっ、ダメ…ひゃう!?…あぅぅ…」
「・・・街中では止めて下さい。ディアナちゃんが可哀想です。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「・・・渋いお店ですね。」
「リクスが言うには美味しい物があるらしいです。」「…はぁ…はぁ…あ、足に力が入らない……。」

ディアナちゃん本当に頑張ったね。

「レイナさん、早く美味しい物を食べさせて下さい。」
「あ、はい。マスター！珈琲１つとミルクティ２つ下さい。」
「・・・レイナさん、私は食事がしたいのですが。」「おい女せ『ギロリ』…ラスト！何でレイナ姉の頭を鷲掴みしてるんだよ！なんかミシミシって音が聞こえてるだろ！？」
「レイナさんなら大丈夫です。それに・・・私が本気でやっているなら、指先が触れた瞬間潰れてますよ。」
「・・・あの、本気で痛いんで離してくだだだだだだだだ！！！？」

今ミシミシからメキメキに変わりましたよ！？！？

「珈琲をお持ちしました。」
「ありがとうございます。」

マ、マスターありがとうございます。もう少しで危ない川を渡る所でした。

「レイナさん、珈琲は誰が飲むんですか？」
「珈琲がラストさんで、ミルクティーが私とディアナちゃんす。」
「私とレイナ姉は珈琲は飲めないからな。」
「・・・私がもし、珈琲を飲めなかったらどうするつもりですか？」

あ、あれ？なんか『ゴゴゴゴゴゴゴゴ…』って聞こえます。

「次からは確認してから頼みましょう。ね？」
「は、はい！分かりました！」

うぅ、笑顔なのに笑ってません。見た目は『ニコリ』なのに実際は『ニタリ』です。

「もしこれで不味かったら・・・ふふふ。」

だ、大丈夫です！この店はリクスに教えてもらったので間違いありません…よね？

「・・・レイナ姉、ラストって本当に男か？」

「え？体は刹那さんだけど中身はラストさんだから・・・女性で良いと思うよ？」

「つまり、体は男だよな？・・・なんか悔しい。」

「何で悔しいんで・・・ああ、成る程。確かに悔しいね。」

・・・ラストさんって、ただ珈琲を飲んでるだけなのに絵になりますね

「・・・確かになかなかの味ですね。」

「・・・ホッ。」

「しかもウォータードリップとは…珍しいですね。」「「ウォータードリップ？」」

「ウォータードリップは、熱湯を使わずに水で淹れる方法です。これだけを聞くと簡単に思う方がいるかもしませんがそれは間違いです。淹れるには専門の器具が必要ですし、一杯分の珈琲を淹れるの

に6～8時間程掛かるため、飲みたい時にすぐに飲む事は出来ません。」

「・・・良い所無いな。」「普通に淹れた方が簡単に出来ますよ？それに味だってそこまで変わらないと思います。」

「確かに普通に淹れた方が簡単ですが、ウォータードリップは熱を加えずに長時間掛けて抽出するため、独特のまろやかさがあり、苦味が強く濃厚でフルーツのような爽やかな風味が楽しめます。」

「・・・良く分からん。」「とりあえず美味しいんですか？」

「ええ、この店のはかなり美味しいですね。」

リクス本当にありがとう！これで、これでラストさんの部屋に行かなくて済む！

「ですが、私は『美味しい物を食べさせて下さい』と言ったはずです。飲み物は頼んでませんよ？」

その時のラストさんの目が妖艶に光ったのは…気のせいだと思いたい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―ラストサイド―

「んんんーーー!!!?」「少しは静かにしてください。」
「タスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテ…」
「ディアナさんも少しは静かにしてください。」

ああ、なんて楽しいんでしょう。
レイナさんはともかく、ディアナさんがここまで可愛らしい顔が出来るなんて…

「んんん、んん「ちゃんと喋ってください。」んん!?」
「・・・ああ、そう言えば今は喋れませんでしたね。」

現在レイナさんは口にゴム製のボール（名称は分かる人には分かりますよね）を入れてあるので喋れません。姿は・・・（描写不可能なため）想像にお任せします
ディアナさんは少し刺激が強い悪夢を見てます。内容は怪談ですね。

「ああ、なんて幸せなんでしょう。」

今日は寝かせませんよ。

同時刻・・・

「大変です!帝国が攻め、王ーーーーーー!!!?」「・・・シ、シンゲンか?は、はは、あははははは。生きてるって素晴らしいな。」

王さまが帰ってきたみたいですね。

、（後書き）

「まあ、次回を頑張るっすししょー。」

ロリブルマの真似は良いから精進してください！

続き…でしょうか？（前書き）

「ＨＡＨＡＨＡ、またグッタグタだぜ！」

ウザい上にキモいです。一寸刻みにして、燃えるゴミに出しますよ？

「すみません、調子に乗ってました。」

続き…でしょうか？

前回
夜の始まりですね。

ある程度の準備体操が済んだため、そろそろ本番に移項します。
ちなみに2人は上半身のみ何も着用してません。
レイナさんはベッドの上で仰向けに寝ています。両手は手錠で拘束してあるため使えません。

「ラ、ラストさん。流石にコレはキツイです。」
「レイナさんなら大丈夫です。」
「あれ？何で私は縛られてるんだ？それに尻尾に違和感が…」
「おはようございますディアナさん。『アレ』を見ただけで気絶するなんて可愛いですね。」

もっとも、もし現実で『アレ』を見たら大抵の方は気を失うでしょうが…

「それでは始めましょう。まずは・・・やっぱりコレですね♪」

私はあるアイテムを創りました。

「そ、そんな…いくら何でも酷すぎです！」
「何でそんな物を持ってんだよお前！？」
「この程度なら大丈夫ですよ。・・・それにしても、よく見ただけで使用方法が分かりましたね。」

私が手に持っているのは赤くて長い蝋燭（ロウソク）。それは何に使われるか、2人は何故知っているのでしょう？

「え！？そ、それはその…リ、リキュルに聞きました。」
「アリアから聞いた。つーかアイツも持ってた。」

お2人共友人に恵まれてますね。
主の友人なんて……私ですら寒気がするほどおぞましい方ですよ。
まあ、それはともかく準備しなければ…

「【燃やせ『炎撃（ファイア）』】」

ボッ…

ロウソクに火が灯り、徐々に蝋が熔け始めました。

「刹那さんより上手い…」「・・・アレで？」

「余計なお世話です。初めてなんだからしょうがないでしょう？」

「いや、魔力無駄に使い過ぎだし、そもそもなんで詠唱を省かないんだ？」

「ディアナちゃんみたいに詠唱破棄出来る人の方が珍しいよ…」

なんだか楽しそうな話しになってきましたが…それは主の時に話してください。今は・・・『しつけ』を優先したいですから。

あ、結構熔けてきましたね。

2人はまだ魔法について話してます。

私はこっそりレイナさんの近くに移動しました。

そして・・・

「レイナ姉危ない！」
「え？何が○◇■＃…☆▲！？！？！？」

・・・流石に不意打ちは危ないですね。
レイナさんが悲鳴らしい悲鳴をあげないのは少しばかり悲しい…

「な、ななな、なななな何をするんですか！？」
「ペットの調きょ…しつけです。」
「・・・今、なんて言おうとしましたか！？」
「明らかにヤバかったぞ！」
「落ち着いてください。じゃないと・・・『コレ』を引っ張りますよ？」
「んな物引っ張られたって怖くなんかないぞ！」
「・・・（私はかなり怖いんだけど）」

・・・怖くない？良いですね。啼かしてあげます。

グイッ・・・・・・・

「・・・あれ？」

「何も起こんないじゃん…なっ！？」

いきなり天井が開き上から色々な器具が落ちてきた。

・・・主に見つからないように創った仕掛けです。正直骨が折れました。

「何も起こらない？当たり前です。今から始まるんですよ。」

落ちてきた物は…

『千切れた皮の鞭』『危ないビスチェ』『壊れた木製の馬』『電源が潰れた小刻みに動く玉』『シルフィーの服』『猿轡』『妖しい液体』『吸血生物（ナマモノ）の人形』『あさがおの種』『ドルジ（関取ではない）

の等身大人形』『肉スカ○バーの鞘』『注射器』『（吸血鬼）ブルー○ガオザー』『ファナ○ィックおたま』『ウェディングドレス』『雀卓』ｅｔｃ…

・・・・・私が隠してたのは『皮の鞭』『木製の馬』『小刻みに動く玉』『猿轡』『妖しい液体』だったんですが、壊されてますね。しかも色々増えてます。
誰が増やしたかは予想は出来ますけど、このチョイスはどうかと思います。

「・・・この可愛い人形は？もしかして魔獣？」
「レイナ姉、コレが可愛いのか？このよく分からん人形が？…あ、このドレス綺麗だ。」
「・・・何をしてるんですか２人共？」

・・・主のせいで空気が、場の空気が激変してしまいました。

「あ、ラストさん。この人形はなんて名前ですか？」「・・・吸血（ナマ）生物（モノ）です。」
「きゅ、吸血？！」
「ええ、夜な夜な血を求めて徘徊する生物（ナマモノ）です。」

実際は個人的暇潰しで俗世を混乱させる面白生物ですが…この際関係ありません

「・・・実はその人形は、その生き物を封印した物なんです。そのせいか、夜に呻き声のような音が聞こえてきます。」
「……（ふら）」

バタン！
いきなりレイナさんは気を失いました。

「あー、レイナ姉はその手の話しは苦手だから。」
「それは良い事を聞きました。」
「まあそれはそうと、このドレス貰っていいか？」
「条件を飲むのなら、差し上げても良いですよ。」
「・・・話しによる。」

別にそんなに警戒しなくてもいいじゃないですか。

「『コレ』を着て街を一周して来て下さい。」

『コレ』＝シルフィーの服

「・・・こ、こんなの着れるかーーー！！！」
「ならあげません。」
「ぅぅ…卑怯だぞ。」

ディアナさんに羞恥プレーをやらせてみたかったんですが…無理みたいですね。

ちなみに『シルフィーの服』はカプ○ンのゲームソフト『ロスト○ールド』に登場します（他にはナム○プでも出ます）。
シルフィーの「あなたってとってもHなのね」は印象的ですね。

「ではそろそろ…っ！？」

いきなり体が痺れてきました。そして・・・

『そろそろ時間切れだぞ。オーバー。』

・・・もうそんな時間ですか。たいして遊んでもいないのに…

「もう少しばかり時間を頂けませんか？」

『なら3分な。』

「ありがとうございます。…ではディアナさん。」

「な、なんだ？私に何か様か？」

「『コレ』を着て下さい」

コレ＝エン〇ェルモードの制服

「い、嫌じゃアホーーー！！！」

「そんな全力で拒否しなくてもいいじゃないですか。・・・見下せ【傲慢（プライド）の杖】」

「待て！それは卑怯だろ？！」

「卑怯ですよ。ディアナさん、ゆっくりと『着替えなさい』」

ディアナさんはボタンを1つ1つ、外していきます。

「ディアナさん、そんな目で見ないでください。」
「なら止めろボケーーー!!!」
『・・・分かってると思うが18禁はアウトだからな。それと残り1分だぞ。』

・・・時間が流れるのは早いですね。
あと主は私をなんだと思っているんでしょうか?

「時間が無いのでスピードを『上げなさい』」
「いやだ…こんなの絶対…ぅぅ、勝手に動くな!」
「無理ですよ。ほら早く着替えてく『時間切れー!』」

・・・時間がきてしまいましたか。

『主、少し酷くないですか?』
「このくらい普通だろ?・・・っと、ワンコ、今はもう俺だから着替えなくていい…か…ら?」

何故か主がフリーズしました。
何故でしょう?まさかディアナさんが下を脱ぐ途中(下着が太もも

辺りまで下してある）だから・・・とかじゃないですよね？

「み、みみ、見るなーーー！！！」
「ご、ごめんなごふゅ！」

主が蹴られました。
・・・急所を。

「ーーーーーーーーー？！？！？！」

・・・そんなに痛いんですか？

続き…でしょうか？（後書き）

「次回は…わかんね♪」

死ね…×１００

「た、頼むから止めて！」

まあ利益が無いのに頑張る必要ないよね？（前書き）

「グッダグタだなぁ～。書いてて泣きたくなるよ」

自覚があるなら精進しなさい無能…

「いやまあ、反論出来ないけどね…流石にキツいから」

まあ利益が無いのに頑張る必要ないよね？

前回
蹴られた・・・

あれから1時間後・・・

「おい、何で俺が犯罪者扱いされなきゃいけねぇんだよ！？」
「お前がディアナを助けた事を、アリア将軍が『シルディアの馬鹿王子が姫を拐った』と言ったからだ」
「まあ、兄さんはロリコン容疑がありますから仕方無いんですが…」
「フラウ様は１０歳年下の少女に『お嬢さん、俺と遊びませんか？』とか言ってますし…しょうがないと思います」
「流石変態王子ね。でも…もしも本当に手を出したら殺すわよ？」
「日頃の行いが悪いからこういう目で見られるのだ。少しは自重しろ」
「変態ロリコン野郎。これ以上にフラウを表す言葉は…まず無いな」

「ロリコンじゃねよ！たんに落ち込んでたガキを楽しませてやろうと思っただけだ！あとリキュル！誰が変態王子だ！？それに姫さんも助けてもらったのに酷くねぇか？！」
「・・・いい加減にしろ、大馬鹿迷惑王子ｏｒ王女×２＆ａｍｐ；存在が愉快な仲間達がーーー！！！」

何故俺の部屋で皆集まるんだよ？

「理由があるなら言ってみろ。全部無視するから」
「君にも関係がある話だからね。呼ぶより行く方が良いと思ったんだ。あと無視しないでくれ。ただでさえ気付かれない時があるんだから」
「・・・王様、あんた居たのか？」

痛恨の一撃ィィィ！

ウィリアムに７２８のダメージ！

「・・・言ったばかりなのに」
「ごめん、マジで気付いてなかった」

刹那はザラキを唱えた！

ウィリアムはショック死（気絶）をした。

「さて、王様が気絶したんで解散！…しろよ？」
「いや待てよ。少しは真面目に聞けって！」
「今回の件は刹那にも関係がある。故に聞いてもらわねばならん」
「お願いセツナちゃん、少しで良いから聞いてくれないかしら？」
「お願いします刹那さん。」
「だーーーーー！！！分かった、分かったよ、分かりましたよ！！！聞くよ！聞けばいいんだろコンチクショーーー！！」

この後、国同士の喧嘩に巻き込まれるとは…思っていたけど防げなかった

「・・・コンチクショーってなんだ？」
「私に聞かれましても…」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「つまり、俺に責任取れと言いたいんだな？よし帰れ」
「いやいやいやいやいやいやいや待て待て待て待て待て待て待て待て！」
「だ・ま・れ♪三枚におろすぞコラ」
「すみません黙るんで許してください」

よしよし、素直な子は嫌いじゃないぞ？

「絶対に戦争には参加しないからな！だいたい原因はそこで土下座している変態だろう？俺まで捲き込むなボケ！」
「まあ、確かにその通りなのだが…」
「だろう？なら俺が戦争に参加する必要ないだろ。しかもメリットが無い」
「・・・メリットが有れば参加するんですか？」
「なんと言うか…刹那さんらしいですが」
「こんな時ぐらいはもう少し一般的な答え方をして欲しいわ…」
「つーかお前は傭兵か何かか？」
「うっさい変態ロリコン王子！」

「だから変態でもロリコンでもねぇよ!?」

ふん、事実を述べただけだろうが…

「フラウが変態かどうかはともかく…「だから変態じゃねぇぇぇぇ!!!」…とにかく、メリットが“有る”のなら協力するのだな？」

「・・・へー、何かくれるのシンゲンさん？」

「土地では…ダメか？」

いや、確かに土地は欲しいけど、家を貰う約束をしてるんだから自動的に土地も手に入るだろ？

・・・あれ？そう言えばあの時は他にも誰かが居たような？……あ

「あああああああああああああ!!!!!」

「な、何だ!?」

「レ、レン、レンを忘れてた。やべ、『スキルの確認』辺りから一回も出て来てねぇぞ!?」

「ちょっ、刹那さん!?そのセリフはかなりメタな発言ですよ!?」

「レイナ!それも禁止ワードです!」

「リクスも人の事言えないわよ…」

「・・・フラウ、『スキルの確認』辺りだのメタな発言だの禁止ワ

ードだの、あの3人は何を言ってるんだ?」
「とりあえず、皆は聞き流してくれ。それが一番助かるからな」「いやお前も何を言ってるんだ?!」

その後、かなり五月蝿い時間が…5分程掛かったとか掛からなかったトカ?

ちなみに、この騒動の後はレンを探すために（フラウを除く）全員が部屋を出ていった。

何故フラウだけが探さないかと言うと、このダメ王子がレンの顔を知らないためだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

「・・・はぁ、レンは何処に行ったんだ?」
「つーかマジで今まで妹を忘れてたのかよ。流石に馬鹿過ぎるだろ」

「・・・ぐっ！フラウ相手に反論出来ない」

城中を探しまくったが…まったく見付からなかった。もちろん解析だって使った。

「なぁ、どうでも良いがこの音は何だ？」

「音？・・・こ、これは『大江戸戦士トノ○マン』か！？」

何故コレが聞こえる？

俺は逆○裁判を持ってきてないぞ！？

発信源は・・・リュックだな。

「いったい何なんだ？つーか、何でこの曲なんだ…」

リュックを開けると…

凄まじい量の爪とか鱗とか羽根とかが入ってた

そう言えば最初の頃に集めてたな～

「じゃなくて、ケータイは・・・あった！」

ケータイを開き、耳に近付けた瞬間…

『出るのが遅いぞこの女男ーーー！！！』

鼓膜が破れるかと思う程、馬鹿デカイ声が聞こえた。

「い、痛ぇ…耳鳴りが…」『その程度で済んだんだから喜べ。あと、何で今まで電話に出なかった？』

「い、いや～、実はかくかくしかじかで…」

『・・・ふ、ふふふ』

えっと、なんか一瞬だけどあ○いあくまが見えたんですが…しかもヤンデレ後輩が『クスクスっと笑ってゴーゴー』の状態で後ろにいる…

「あ、あの～オーディーンさ…ん？」

『・・・クスクス、刹那？あんまりふざた事を言うと…麻酔無しで犬の矯正を体験してもらうよ？』
「ごめんなさい私が全て悪かったですだからそれだけはご勘弁を…」
『私は心が広いからな。許してやろう』

うぅ、マジで泣きてぇ…

『泣きたいなら泣けば良いじゃないか？ほら、早く泣きなよ、むしろ泣け』
「勝手に心の声を読むな！つーかお前はイジメっ子か！？」
『あ、な～にその反抗的な言い方は？お姉ちゃん悲しくなっちゃった…』

誰がお姉ちゃんだって？
つーかアンタ、お姉ちゃんって歳じゃないだろ？

・・・あれ？ケータイから冷気が出てね？

『刹那、誰が年増だって？』
「あー、死んだなこりゃ」

グチャメチャバギャゴキゴリザシュ…！

ＢＡＤ　ＥＮＤ

『って、勝手に終わらすな馬鹿者！』
「いや此処はこんな感じかなって思って…」
『コレじゃ私が悪いみたいじゃないか…』
「なぁ、さっきからお前は誰と話してるんだ？つーか何だそのオモチャは？」
「『・・・まだ居たのか変態ロリコン王子』」
「って、誰が変態ロリコン王子だーーー！！！つーか今知らない奴に馬鹿にされた気がする！」
『まぁ、実際に馬鹿にしてるからな』

そう言えば居たなお前…
久しぶりにこの拉致好きな疫病が……破壊神の方が良いな、と話したせいで忘れてたよ

『・・・おい、否定は出来んが酷いだろ?』
「自覚があるなら自重しろオーディ…長いな略して良いか?」
『ほう。オーちゃんか?ディンか?ディーンか?なんならお姉さまでも良いぞ?』
「・・・自分で言ってて恥ずかしくないか?」
『・・・流石に恥ずかしい。ぶっちゃけ悶死出来そうだ』
「だろうな。ちなみにお姉さまで良いか?」
『いやよりによってソレを選ぶのか!?』
「まぁ流石に冗談だ…じゃあディンでよろしく」
『・・・ああ、分かったよ糞餓鬼が…』

おい誰が糞餓鬼だ誰が!?

「なぁ…さっきから俺を無視するなよ。泣くぞコンチクショー!…」
「『キモいから泣くな!!!』」
「ヒデェ!?」

っと、こんなモノの相手にしてる暇は無かったな

「なぁディン?お前、レンが何処にいるか知らないか?」
『ん?…ああ、家でゴロゴロしてるぞ?』

「・・・・・・は？」

『いやだから家でゴロゴロしてるんだって。なんかその世界に飽きたらしいぞ。』

・・・と、とほほ

まあ利益が無いのに頑張る必要ないよね？（後書き）

「『と、とほほ…』だなマジで」

まあ、作者がコレですからね

この後どうなるか…考えたくもないな（前書き）

「はいはいはいはい！ついに遠野のフルネームが出たぜ！」

あとまた神キャラ出ました。あ、誤字じゃありませんよ？
あと今回は後書き無しです

この後どうなるか…考えたくもないな

前回
なんかやる気ねぇ…

「はぁ…付きまとうな異常者が」
「ええっ!?何処?何処に異常者が居るの?」
「お前だ阿呆!」

先程の事件（？）からずっと異常者――リキュル――が付きまとってくる。
うん、女じゃなかったら殺してる。・・・ちなみに昔（元の世界に居た頃）、本当に男に襲われた事があった。その時の事は…ご想像にお任せします。

「で、なんか用か?言ってみろレズビアン」
「えっと、私はレズじゃないわよ?私が好きなのは可愛い者全てだ

もの…（はぁと）」

ゾゾゾゾゾゾゾゾ・・・！

「寒っ…」

「そうかしら?今日は暖かい方だと思うわ…はっ！まさか私に暖めて欲しいの!?」

「いや寒いのはお前の頭の中だ…」

何故俺の周りにはまともな奴は居ないんだ!?

フラウ（変態ロリコン野郎）やレイナ（薄幸な自爆姫）、王様（地味過ぎる）、シンゲンさん（化け物）、ワンコ（キレやすい）、リクス（四次元武器庫）、リキュル（異常者）　だけならまだ（かなりギリギリだが…）許容出来る。

しかし!ディン（拉致犯にして破壊神）やレン（神出鬼没）も居るからキツイ…

しかも昔（元の世界）の友人――遠野――は完全記憶能力とかふざけた能力持ってた。

「あぁ、まともな友人が欲しい…せめて俺くらい落ち着いた奴が居たら良いのに」

「・・・ノーコメント」

おい、そこは同意しろよ！それだと俺まで同類みたいじゃないか！？

・・・って、いつの間にか話が変わってねぇか？

「とりあえず、さっきの質問に答えろリキュル」
「・・・え？何かあったかしら？」
「…ったく、少しは覚えてろボケナス。何か用でも有るのかって聞いたんだよ」「・・・あぁ、戦争参加してみない？って聞きに来たの」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・は？

「すまん、聞き逃しちまった。もう一度言ってくれないか？」
「戦争参加してみない？」「はい却下。考えてから喋ろうぜ合法的ロリ」
「酷ぃ！私だって気にしてるのに…ぅぅ」

泣くんじゃねよ…何処かの偉い人が言ってたぞ？
『貧乳』はステータスだとな

「まあそれはともかく、さっきの話の時に言っただろ？絶対に戦争には参加しないって」
「うぅ…確かに言ってたわね。でもメリットが有れば参加するんでしょう？」
「ああ、だがお前さん達に俺のメリットが分かるのか？」

金は…必要最低限の金が有るならいらん。有りすぎると身を滅ぼすだけだ。
衣服は…いくらでも創れるからな～
食事は…それこそ心配する必要ない。
土地は…家とセットで貰える。
少なくとも衣食住はあるからな～、他に欲しい物なんて娯楽ぐらいだぞ？

「えっと…魔法の効率的な使い方を教えてあげましょうか？それこそ手取り足取りナニ取り…「はい黙れ」痛っ！？顔は流石に止めて！」
「うるせぇ！デコピンなんだから我慢しろ！つーか然り気無く欲望丸出しのセリフを吐くんじゃねぇよ！そんなの台本に無かったぞ！？」
「台本って何！？何かの魔導書！？」

まあ、ある意味魔導書かな？　セリフと言う呪文がビッシリと書かれた…
闇の四天王の１人『Ｋ』はその本のせいで地獄を見続けた結果、闇の力に目覚めたと言う…まあ最後はフランス語で『空』の名を持つ代行者のオマージュキャラによって殺られたけどな…（分からない人は『ひぐ○しのなく頃に―祭―～カケラ遊び～』を調べてみてね）

「まあそれはともかく、魔法は教えろ。ただし少しでも変な事をしやがったら…消し炭にするからな？」
「怒られ損！？その上バレてる！？しかも戦争に参加するか答えてないじゃない！？」
「だから何？」

だって戦争なんて疲れるだけじゃん？
人を殺したりするのは……少し楽しそ、ってダメだダメだ！俺はシリアルキラーじゃねぇ！

その時、いきなりケータイから『幾年創○幻想曲』が！

「誰からだ…って考えるまでもねぇな」
『やぁ、初めまして。如月刹那君だね？』

「・・・お前誰だ？」

まったく知らない奴からの電話だった。

『・・・すまないね。もろもろの事情で名前は言えない。だけど昔呼ばれてた呼び名を教えるから我慢してくれないか？』

「呼び名？どんなのがあるんだ？ロア助とか春男とかさっちんとかエジプトニーソとか絶倫メガネとか秋歯とかほうき少女マジカルアンバーとか洗脳探偵とかちぇけやっちょコハッキーとかバカスパナとかあかいあくまとかタイガーとかレッドの兄ちゃんとかジョージとか食いしん王とか妹王（イモキング）とかワカメとか？」

『・・・流石にそんなのは無い。と言うか１つだけセリフがあったぞ』

おお！良く気付いたな！

「まあそれはそうと、アンタの呼び名は？」

『［トリックスター］や［終える者］、［ビューレイストの兄弟］と呼ばれていたな』

「［トリックスター］に［ビューレイストの兄弟］だぁ？」

なんだ？つまり俺を拉致した破壊神の義弟（義妹？）だと言いたいのか？

『これで分かるのか…君は勤勉なんだね』

「おいコラ、勝手に心の中を読むな！あと勤勉とか言わないでくれ、寒気がする」

『まぁまぁ、とりあえず僕の話を聞いてくれないか？』

「勝手に言えば？」

『あの出鱈目な兄に言っといてくれないかい？遊ぶのは良いが権力を私物化するんじゃない、あまりに酷い場合はもう金は貸さないからな、と』

「分かった。絶対に伝えとく」

『ありがとう。お礼に情報をあげるよ』

情報？

『まず君のスキルについてだ。君のスキルは３つあるが全てＬＶ１だ。』

「ＬＶ１？」

『あぁ、まったくと言って良いほど使われて無いためＬＶが上がっていない。そのためかなりショボい』

「えぇぇぇ…」

つーかＬＶあったのかよ?説明書に書いて無かったぞあの破壊神が…

『二つ目は元の世界に居た友人についてだ。現在、遠野　魔理亜さんがこの世界にいる』

「・・・あの女郎(めろう)。次会ったら顔面貫いてやる！」

『いや物騒な事を言わないでくれ。・・・彼女は君に関する記憶を持っていたんだ。それを面白がったディーンに此処へ送られたんだよ。』

「何でアイツは記憶を持ってたんだ?」

『まぁ、君が厄介な娘と関わっているだけの話だ。…御愁傷様』

頼む、誰でも良いからアイツを消してくれ

『それと、一番大事な話なんだが…』

「え～まだあるの?つーか今のより大事な話って何?」

『・・・まぁ、とりあえず言わせてもらうよ。このままだと、この城にいる人が全員死ぬよ?』

「・・・え?今のマジ!?」

この悪戯神の助言で、かなり悲惨な事になるなんて…この時は予想
もしなかった

はぁ…必殺技を覚えろフラウ（前書き）

あれ？今日は作者が今せんね。あ、手紙あるなになに…

『強引でした。すみません！』

はぁ…それくらい自分で言ってください。

はぁ…必殺技を覚えろフラウ

前回
異常者に付きまとわれ、とある悪戯神に助言を貰った

「と言う訳で、戦争に参加する事になりましたとさ…」
「おい待てコラ、何が『と言う訳で、戦争に参加する事になりましたとさ…』だ!?まずは説明をしろ、説明を!」
「に、兄さん落ち着いて!」
「まぁ、参加していただくのはありがたいのですが…」
「心変わりの理由が分からないのは…正直不安だわ…」

ちっ…うるせぇっての!
たまには静かにしろよな

「まぁまぁ、刹那君が力を貸してくれるんだ。理由なんてどうでも良いじゃないか」
「うむ、刹那は傭兵に近い思考を持っている。だから裏切る事は…おそらく無い…だろう…多分」

「そこは言い切ってくれよシンゲンさん！」
「いや、良く考えたら傭兵は自分の命を優先させるからな、刹那も場合によっては裏切るかもしれん」

酷っ！？俺はそんなに信用出来ないのか！？

「くそっ、絶対にこい「ぶけっ！？」つ等ぶん殴る…」
「セリフの途中で兄さんを殴ってますね…」
「しかもノーモーションでした」
「相変わらずね～」
「それぐらいは避けんか馬鹿者！」
「シンゲン、お前以外にアレは避けれん」
「・・・お、お前…等、少しは…心ぱ…いしろよ、げぶっ！」

無理無理、だってお前ギャグキャラだから死なないもん…普通なら

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

約１０分前・・・

「おいコラ、ちょっと待てよ魔探偵！」
『確かに同名だし起源は同じ…かもしれないが、僕と彼は別人だ』
「って、知ってんのかよ！？」
『まぁ、ディーンの漫画を読んだ事がありますし…』

仕事しろよお前等…

『呆れないでくれよ。こっちは…あの馬鹿のせいで大変なんだから』
「キツイのは分かるが…」『まぁまぁ、とりあえず話を戻そう』
「・・・そうだな。」

どうやったらあの『黒い悪魔』並の生命力を持った奴等が死ぬんだ？・・・一匹は地上最強の生物だし…

『いや地上最強は言い過ぎだ。せいぜい獣人最強だ』「だから勝手に読むんじゃねぇよ！・・・で、どうしてアイツ等が死ぬのさ？」
『まず…
シンゲンはアリアによって斬殺

リキュルは捕まり強姦され自殺
リクスは龍殺しの槍で刺殺ディアナは戦争後、身内によって暗殺
王族の3人は見せしめとして公開処刑
・・・こんな所だ』

・・・マジかよ

『まぁ、これは君が参加しなかった場合だ。』
「・・・つまり俺に参加しろと言うのか？」
『参加したところで変わらないかもしれないが…しないよりは良いんじゃないかな？少なくともこれ以上最悪の結果はまず無いよ？』
「・・・ちっ、厄介な事になったな」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「はぁ…人生に幸せなんて無いんだよ」
「いきなり何を言ってんだお前さんは…」
「はぁ…何でアイツがこの世界に居るんだ？」
「アイツって・・・誰ですか？」

「はぁ…しかも自分から厄介事に首を突っ込むなんて…ボケたかな？」
「ボケるにはまだ早いと思うわ」
「はぁ…リキュルとフラウは死ねば良いのに…」
「「いきなり酷いだろ（酷くない）！？」」

よし、切り替え終了っと！

「さて、まず一言言わせてくれ。つーか勝手に言うからちゃんと聞けよ？」
「いきなり仕切り始めたぞ？」
「まず、シンゲンさんはアリア将軍と闘うな」
「む…何故だ？」
「俺が殺りたいから。はい次、リキュルは王様とレイナを守る事に集中しろ。間違っても闘おうなんて考えるなよ？」
「え？良いけど…」
「リクスは槍を持った奴に気を付けろ！かなり相性が悪いから」
「・・・私は大丈夫です」「言う事聞け！じゃねぇと明日からシイタケ料理しか出さ「分かりました」…まあ良いや。」
「ワンコは「ワンコ言うなーー！！」」痛ぇ！？…戦争中は大人しくしとけ。…絶対に」
「は、はい」
「王様は後方支援、レイナは怪我人の治療。だけどリキュルから離れるなよ？」「・・・分かったよ」「怪我を治せば良いんですね」
「じゃあ…以上！」
「待てぇぇぇえええい！！！」

んだよ～なんか文句あんのかよ！？つーかお前はギャグキャラだから死なねぇんだよ。だから助ける必要無し！

「俺にはないのか！？皆に言ったのに俺には何もないのか！？」
「う～ん、ならお前は…必殺技でも編み出しとけば良いんじゃねぇか？」
「ふざけんなーーー！！！」

いやいや、ふざけてなんかない。馬鹿にはピッタリだと思ったから言ったんだ。

「じゃあお前の魔法属性何？」
「いや見て分からねぇ…んだな。俺は水の魔力を持ってるぜ」
「なら武器に纏わせる事が出来るか？」
「出来るか！？んな事が出来たら騎士団の団長になれるわ！」

つまり難しいんだな？

「よし！俺とワンコが虐…教えてやるからそれを習得しろ」
「ナニィィィィイイイ！！！」

＊　＊　＊　　＊　＊　＊

「なぁ、何で私まで巻き込まれなきゃいけないんだよ！？」
「だって魔法が得意何だろ？だったら教える位訳ねぇだろ」
「だったらシルディア王でで良いじゃんかー！」
「ダメだ！アレは地味すぎて居るのを忘れる！」
「ぐっ！…た、確かに」

ほらな、反論出来ねぇじゃん？

「だ、だけど…」
「さっさと腹決めろ。今回は…ちと洒落にならない事をするからな。主にフラウが」
「・・・分かった。私がやる」

よし、なら始めるか

「狂え【色欲（ラスト）の五芒星】」
「それは…シルディア王に使ったスキルだな」
「へー、良く知ってるな。でも使い方は違うぞ」

ラストが使ったのは…

デビルスター

つまり悪魔を意味する物だラストはそれにエジプトで使われていた
五芒星の意味を追加した。

エジプトの五芒星は子宮は性的な事を意味する

だからラストが使った時は性的な悪魔、つまり淫魔を表した…まぁ、
何故か拷問道具の数々が姿を現したが

今回俺が使うのは

メソポタミア文明で使われていた五芒星だ。

意味は『小さい空間』

「出てこい…俺の隠れ家よ！」

目の前には人が入れる程度の孔が出来た。

「ワンコ…中にフラウが居るか「つまみ上げるなーーー！！！おーろーせー！」…分かったよ、ほらよっと！」

ブン！

「なぁぁぁぁぁぁぁぁあああ！！？」

ワンコは孔に吸い込まれていった

さて、次は俺だな

はぁ…必殺技を覚えろフラウ（後書き）

次回は…

「前書き無いんで！」

今私が説明しようとしてたんですが！

「うすせぇ三下！作者はこの小説内では一番権力があ…何やってんの？」

いえ、次回の後書きが楽しみですね。クスクス…

「え、何その笑い？スゲー怖いんですけど」

必殺技完成！

前回
フラウの修行スタートだ！

「おい、なんだこの場所は！？」
「怖っ！いやキモい！？やっぱ怖っ！」
「うるせぇよ！だいたいこんなに良い訓練場所を目にして怖いって言うな！」

目の前に広がる場所は素晴らしかった…

広さは東京ディ〇ニーランドがまるごと入る程広い。天井には閉鎖感を和らげるために空のペイントをしてあり、床は土で所々に岩や枯れ木が設置されている。そして極めつけには、数多の槍が突き刺さってる。
ちなみに全ての槍は髑髏（ドクロ）に刺さっている。

「さて、とりあえずワンコに魔法を教えてもらおう」「待て！この場所についての説明は無しか？！」
「あ～、この場所は『ブリー○』のパクリです」
「分からねぇよ！つーか禁止ワードだ！」
「いやだから禁止ワードって何！？」
「とりあえず2人共黙れ、じゃねぇとこの場所にいる間、出てくる料理が野菜だけになるぞ」
「「ごめんなさい！」」

さて、2人が黙った事だし…ワンコに魔法を教えてもらいますか

「ワンコ、とりあえず言えや…」
「魔法は魔力を使う技術だな。1人1人属性が有って、それが髪や眼に色として出てくる…まぁその属性が得意になるだけで他の属性が使えない訳じゃないから安心しろ」
「ちなみに黒は？」
「分からん。普通無いし、歴史上にも存在してない」

ちっ…こうなったらあの破壊神に聞くか

「まあ、それはそうと魔法教えてくれないか？…魔法苦手で」
「それでよく俺に教えるとか言えたな」

「あん？なんか言ったか」「すみません何でもないです」
「・・・力関係が良く分かるな」

ふっ、食を制す者はこの場のヒエラルキーを制するんだよ

・・・誰の言葉か忘れたけど

「とりあえず刹那に魔法を教えるとして…」
「俺はどうするかが問題だな」
「だから、武器に魔法を纏わせて必要な時に解放出来るようになりゃ良いんだよ！」
「「出来るかそんな超高等技術！！！」」

ヤる前から諦めるんじゃねぇよ…

＊　＊　＊　＊　＊　＊

まずは俺の魔法をどうにかしようと思う。ぶっちゃけると魔力無限で魔法が三流じゃ話しにならねぇからなあと一応は最強物だし…

「おい何を黄昏てるんだお前は？真剣に聞けよ！」
「すまん。じゃあ教えてくれよ」
「まずは基礎からだな。魔力を出してみろ」
「こ、こうか？・・・お、前より早く出た！」
「・・・・・・・・・」

え？何その顔？まるで珍獣を見たような顔だな…

「ま、魔力が視覚出来るって…？！しかも黒い！？」「・・・フラウ、ワンコは何を驚いてんだ？」
「分からねぇ…俺にもさっぱりだ」
「ってお前は分かれよロリコン王子！！！」
「ぐげぴゅ…」

素晴らしい蹴りだな。ワンコの奴、的確に鳩尾に叩きこみやがったよ

「はっ！呆けてる場合じゃない！おい刹那、お前に１つ言わなきゃならない事がある！」

「それはなんだワンコ！？」
「お前は詠唱を唱えるな！大惨事になる！」

えええええぇぇぇぇ…

「良いか？詠唱は魔法の補助をする部分…ぶっちゃけると魔法を発動するだけなら最後の魔法名だけ唱えれば良い。だけどイメージが固まりにくい奴のためにその前の詠唱があるんだ」
「つまり俺は魔法の名前だけ覚えれば良いのか？」
「だけどイメージが出来てないと魔法を出してもすぐに消えるぞ？」
「イメージなら任せろ！何を隠そう俺は想像の達人だ！」
「なら『炎獄（インフェルノ）』って唱えみろ。あ、インフェルノは炎の地獄って書くからな？」

・・・まぁ、炎の地獄って言ったら『アレ』しかないよな？

「見ろ、俺の実力を！『炎獄（インフェルノ）』！」

その瞬間、視界が白く塗り潰された…

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

約7分後・・・

「し、しし死ぬかと思っひゃぞ、うわ～～～ん!!!」
「ごめんなさい。まさかあそこまで威力が有るとは思わなくて…」

いや～今のはヤバかった。マジで死ぬかと思った。正直生きているのが奇跡だ…

「いったい何を想像したらあんな事になるんだよ!?」
「い、いや～フェ○トの『１０年前の大災害』をイメージしたらこんな事に…」「フェ○トってなに?!」「だから禁止ワードげっぷ…!?」

・・・アイツ生きてたのか？あの火の海の中にいて？流石はギャグキャラ、俺達とは耐久力が違う！

「・・・今然り気無く馬鹿にしただろ」
「いやおもいっきり馬鹿にした」
「余計悪いわ！」
「さて、俺も魔法が使えるようになったし「なってないぞ？」そろそ……え？」

今なんて言いましたマイシスター？

「なんだよその顔は？お前は『魔法』は『使える』けど、魔法名を『2つしか覚えてない』だろ。しかもワケわからん属性だし…その上絶対暴発させるし（ボソッ）」
「つまり魔法は使えるけど種類が少ない、しかも自分の属性が分からねぇからまだ魔法を使うのはダメだって言いたいのか？」
「まぁそんなところだ。だからまずは魔法名を全部覚えろ」

ふっ…俺は暗記が得意なんだぜ！？

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

5分後・・・

「・・・頭が痛ぇ…」

「下位魔法名だけだったけど２０個もあったんだぞ？それを5分で覚えきったのに頭が痛いだけってなんだよ…私だって、３日もかかったのに…うぅ」

いやそんな事で泣くなよ。

「まぁとりあえず覚えたからフラウの修業に移行するぞ。殺るぞフラウ！」

「…くかー…くかー…」

「「・・・（ブチッ）」」

今、ワンコと俺の想いは１つになった…！

「「何寝てやがるんだこの糞王子がぁぁぁ！！！」」「ぐげっぶ、ぎゃひ…！？」

『炎撃（ファイア）、水槍（アクアスピア）、雷弾（ボルト）、風刃（カット）、土葬（グランド）、巨木（ウッド）！！！』

「■■■■■■■ーーー！？」

現在、フラウは燃えながら水槍に刺され、感電し、風に切り刻まれながら土に埋まっていく。トドメに巨大な木が……杭のようにその場（フラウの居る位置）に沈んだ

「「はぁ～スッキリした」」

今確実に良い笑顔だろう…

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

約1時間後・・・

「ちっ…死んでなかったのかよお前」
「やっぱり掘るのが早かったな」
「虐めか?!お前等俺を虐めて楽しいか?!」
「「楽しいね!ああ楽しいね!!!」」
「ウガァァァァア!!!」

おお、屈辱のあまり自分の髪を千切ってやがる!
ま、止めないけどな…

「さて、そろそろ授業を始めるぞー!」
「いきなりだな」
「誰も止めてくれねぇのかよ・・・」
「一回目は許すが私語厳禁だからな?」
「「それより何の授業するんだよ?」」

最初から言ってるだろうがまったく、困ったもんだ…

「まぁ習うより慣れろ!だな。見ろ!」

俺は刺さってる槍を抜き構えた…

槍を頭の中でリボルバーに置き換える。弾（魔法）を装填するためだ…

「炎獄装填（インフェルセット）」

炎獄が槍に吸い込まれた…その瞬間…！

槍の刃が白く光り始めた…軽く振ってみたら、近くにあった岩が蒸発した…

「「・・・・・は？」」「ふっふっふ…こんな簡単な事が出来ないなんてお前等は可哀想な奴だな～」
「待て待て待て待て！！！」
「なんだよ今のは！？」
「なんで魔法を覚えたばかりの奴がそんな事が出来るんだよ！？私だって出来ないのに…」
「想像力の差だな。お前等は『こんな事はあり得ない』と思ってるから出来ないんだ。だが俺は違う！俺はあり得ない事なんて無いと思ってる！」

まぁ…実際に『あり得ない事』を体験してるのもデカイけどな…

「さぁフラウ！今すぐヤってみろ！」
「は、はは…漫画だ、漫画の世界だ…」
「執事を極めし拳（執事マスターパンチ）！！！」
「ゴガァァア！？」

貴様、どこの筋肉だ！？
お前は『筋肉革命だぁぁーーー！！！』とでも言っとけ！！
第一この世界に漫画は存在しねぇ！！

「ったく、アホな事を言う暇があるならさっさとヤれ馬鹿者が！」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

修行中・・・

「ギャァァァアアア！！！」

「バカ野郎！そんなショボい想像力で出来ると思ってんのか！？やり直し！」

「アギャァァァアアア！！！」

「この無能！自分の得意属性ぐらい制御出来ろ！やり直しだ！」

「アンギャァァァアアア！！！」

「ふざけてんじゃねぇ！！！『炎獄（インフェルノ）』・『嘆きの川（コキュート）』装填（ロット）！一回…死んでこい！！！」

ドッカーーーーーーーーーーン！！！

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「はい終了～！これで特別授業は終わりだー！」
「・・・・・（ピクピク）」
「フラウ死んでないか？私が分かるか？」
「大丈夫だ！なんたってフラウは不死身の称号『ギャグキャラ』を持っている男だからな！」
「それは誉めてねぇーーー！！！ってあれ？俺は何をしてたんだ？」
「・・・ほらな？」

ふっ…だが流石はフラウ。アレだけの無理難題でぶっ倒れるくらい体力を使ったのに、寝返りをすれば元通りだ…！

「まぁそれはそうと、フラウが無事に覚えた事で帰るか！」

ちなみに…フラウが気絶（正確には臨死体験）した回数は…！

１時間当たり７０回ほどだったりする

修行時間５時間３０分

必殺技完成！（後書き）

あ、来たみたいですね

「あん？誰がだよ？…へ？」

「ふっふっふ…久しぶりの登場だな」

「オ、オオ、オーディーン！？」

ええ。今日は作者を矯正するために喚びました

「なんで？俺何もしてないじゃん！？」

理由は……前回の後書きを読んでください

「私はお前を殺すために来ただけだ。逝くぞ！

光輝背負うもの　秩序と法の王
聖なる峰の頂に座す至高の王、ハン・ハーンに闇に戦う故を持って
請願す
秩序の軍団員！　法の執行者！　光おびしもの！
汝の忠実なる配下である我は、根源の光もて敵を撃つ！！
完成せよ、地から伸びる光の牙！！　」

「それは流石に反そギャァァァァアアア！！！」

まぁフラウだし…（前書き）

作者改めて『夜つ七』「久しぶりの本編だーーー！！！」

うざいキモい死ね♪

夜つ七「なんか言葉が直接的になってる！！！」

ああ、そもそも形が悪いのかもしれませんね？コイツを殺すなら、『偽・螺旋剣（カラド・ボルグ）』の１つや２つ増やす覚悟が必要ですよね？

夜つ七「なんか怖い…！ヤバイまさか殺られる！？」

あ、よく考えたら初めての１日二話投稿ですね。おめでとうご罪魔朱

夜つ七「七つ夜がバグったーーー！！！」

まぁフラウだし…

前回
フラウは必殺技を覚えた！

「・・・とまあこんな感じで教えたんだが」
「ふむ、我より厳しいな」「と言うか鬼畜です」
「流石刹那ちゃんよね～」「兄さんよく生きてましたね」

そんなに厳しいか？
ただ単に…失敗する度に改造魔法の実験台にしてただけなんだが…

例：爆撃（ボム）→炸裂弾（バーストブレッド）

指から対象に当たると爆発する弾を射つ魔法。秒速は８００ｍ程（ライフルと同じ）。ちなみに連射可能。
イメージとしては『Ｆａ○ｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ』のガンド…分かんない人は調べてみよう

例：水槍（アクアスピア）→　槍の雨（スピアレイン）

対象に向けて水属性の槍が降る。範囲は対象から１００メートル程度。量と大きさは魔力による

ちなみに外れても『烈火の〇』の氷柱舞（つららまい）みたいに足下から巨大な氷柱ができる……アレって見た目は霜柱（しもばしら）だよね

・・・このレベルだぜ？

全部下位魔法（ただし改造した事により上位魔法並の威力がある）しか使ってないんだ。責められるのは間違いだぞ？

「とりあえずその話は置いとけ。今は戦争が優先だろ」

「ああ、その通りだね。フラウの事はその後だ」

「じゃあ王様、今現在はどんな感じなの？」

「まずは地図を見てくれ」

そう言いながら王様は地図を広げた…

「まずは現在位置を確認しよう」

「親父…流石にそれは分かるだろ」
「いや…まずはここから始めたいんだ」

変な奴多いよな…この城の人間って…あ、魔族か

「まず此処が今私達がいるシルディア城だ」

・・・あれ?此処って空に浮いてんじゃないの?
聞いてみるか…

「なぁ…この城って浮いてるんじゃねぇの?」
「え?…あ、もしかして知らないのかい?此処が原始の穴の上に浮かんでいる事を」

新出単語がでてきた…
なにさ原始の穴って?

「・・・その様子だとまったく知らなかったみたいだね」
「うん、なにさ原始の穴って?恐竜でも居るのか?」「恐龍?まぁ確かに龍は居るが…恐龍なんて名前じゃないはずだよ」

龍…アレ（最初の辺りでレンに瞬殺された奴）じゃないよな？

「まぁその事は戦争が終わってからで良いや。と言うわけで、さっさと続き話せ」

「（話を止めたのは君なんだが…）分かった。ではこのポイントを見てくれ」

王様が指を指したのは……は？

「いや待て、何この『魔獣の巣／★★★★☆』って！？」

「此処も知らねぇのかよ…どんだけ箱入りなんだお前さんは？此処は魔獣の巣、ＡＡＡ（トリプルＡ）ランク以上の魔物の住み家だ」

「我でも山頂まで行った事が無い…いわゆる人外魔境だな」

「多くが小型の魔物ですが…一匹でシルディアを滅ぼせるような魔獣ばかりです」

「中には人語を話せる奴もいるみたいよ？まぁ…あそこに行って帰って来れたのはシンゲンとアリアだけだから…ガセでしょうけど」

「唯一の救いはあの山から降りて来ない事ですね」

「ちなみに★の数が危険度を表している。最大は★５個、だけどそれ以上に危険な場所は『ＡＮＫＮＯＷＮ（アンノウン）』と書かれる。コレは行ったら確実に死ぬな」「何か質問はあるかい？」「色々あるけど後で良いや…話長そうだし（ボソッ）」「では話を戻そう。此処を見てもらったのは……帝国軍の拠点がこの中に存在するからだ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・え？

「「「えええええええええぇぇぇぇぇ！！！！！！」」」
「ナニイイイイイイィィィィィ！！！！！！」
「じゃかましいわーーーー！！！！！！」
「少しは落ち着いてください皆さん」
「黙れバカ王子（フラウ）！」
「今バカ王子って書いてフラウって読まなぎゃべしっ！？」

なんでお前はソレが分かるんだよ？それは読者様の特権だぞ？勝手に使うな…！

「とまぁ…バカの粛正が済んだ所で質問するぞ。さっきまでの話となんか矛盾してるような気がするんだが…俺の気のせいか地味キング？」
「じ、地味キング……」
「落ち込む前に言えや…時間は限られてるんだから」「あ、ああ…
…実はレッドアークがSランクの傭兵を雇ったらしい…」
「「「「なっ！？」」」」「Sランク…だと…！？」

Sランクって……どのくらいの強さなんだ？

「あぁ、おそらく知らない刹那君のために説明するとSランクの傭兵、もしくはハンターは、1人でAAA以上の魔獣を5匹以上討伐した後、ギルドで出される討伐依頼をクリアしなければならない」
「ちなみに我が傭兵をやっていたはAランクだった…」

つまり何か?
敵対勢力にシンゲンさん以上の化物がいるって事か?

「なぁ親父…その野郎の二つ名はなんなんだ?」
「・・・『慈悲無き者』だ」

技名みたいな二つ名だな…恥ずかしくないのか?

「「「「「・・・・・・・・・」」」」」
「・・・あれ?なんで皆絶句してんの?」
「いや…刹那君は知らないから驚かないだけだよ」
「まさか…あの『慈悲無き者』が参戦するとはな…厄介な事になったものだ」
「そんなに強いのか?その『慈悲無き者』って奴?」
「う、うむ…少なくとも我では勝てんな」

・・・どんな人外だよ

「つーか、アイツってここ3週間でSランクになったんだろ?しかも最初の依頼でいきなりAまで上がったって聞いたぜ?」
「ああ…最初の依頼で『スコーピオン』と『グリーンドラゴン』討伐して帰って来たんだ」
「そりゃまた凄い……化物だな」
「その後、数々の依頼をクリアし…先日Sランクになったらしい」

よく分からんが…今はどうでも良い話だよな?
じゃあさっさと話を進めるか

「王様、ぶっちゃけ勝てるの勝てないの?」
「勝つのは…難しいな。魔獣の巣は危険だし…何より『慈悲無き者』は危険過ぎる」
「でも殺るしかないんだよな?」
「あ、ああ…その通りだ」

なら…殺るしかないよな?よし…久しぶりに暴れられるな……あはは、あはははは、あはははははははははははははは!!!!

ってダメだ阿呆！あんまり興奮すんな俺！！
これじゃ戦闘狂（バトルジャンキー）じゃないか！？
・・・ん？なんか変な音が聞こえる。コレは…声か？

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」
「タスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテ…」
「ふ、２人共落ち着いてください！！」
「ほら私に合わせて深呼吸！ヒィ、ヒィ、フー…ヒィ、ヒィ、フー…」
「って、それは赤子産むときの呼吸法だろーが！！」「・・・王様、この２人どうしたの？」
「生きててすみません生きててすみません生きててすみません生きててすみません生きててすみません生きててすみません生きててすみません生きてて…」
「ってアンタもかよ！？」

いったい何があった！？なんか尋常じゃねぇ壊れ方してるぞ！

「シ、シンゲンさん！とりあえず何がどうなってこうなった！？」
「・・・何か恐ろしいモノでも見たのだろう……トラウマを刺激するような恐ろしいモノを…な」

この３人のトラウマ…？

「少なくとも……セツナちゃんにも関係するわよ？」「俺に？バカ言うんじゃねぇよ…この人畜無害な俺が人のトラウマになるわけねぇじゃん？」

「いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや！！！有り得ねぇ、流石にそれは有り得ねぇよ。お前が…無害？その基準だと戦争も子供のケンカになるぞ！？」

「・・・どちらかと言うと人畜有害だと思うんですが…」

「ナニカ言ッタカ２人共？」

「何でもないで「だからお前は危険なんだよ！！」」・・・」

よし…良い度胸だな糞王子様？１０分の９殺しで許してやろう…俺は優しいからな、クックック…！

「どうした？いきなり華も石になりそうな冷たい笑顔を浮かべやがって？」

「・・・・・あは！」

「え？ちょっ何しやが…ギャアアアァァァァ！！！！！！」

「あはは！あははははは！あははははは、あははははははははははははははははは！！！！！！！！！」

「（刹那さんって…キレると綺麗な笑顔になるんですね……あれ？）

」

「（若干寒気がするわね……ん？か、体が動かない！？）」

この後…2人（リキュル、リクス）にトラウマが出来た事を……刹那は知らなかった

久々のその後・・・

「さて、10分の9殺しも済んだし…ちょいとアリア将軍閣下の所へ挨拶にいきますか…」

まぁフラウだし…（後書き）

一時はどうなるかと…

夜つ七「思ったのは俺だから…マジで怖かった」

さ～て、来週の刹那は？

夜つ七「サ○エさんかよ！？まぁそれはともかく…殴り込みにいきますね」

聖職者を名乗る下衆と『慈悲無き者』と〝うまう〜〟（前書き）

「は〜れほ〜れうまう〜！」

アホですね

聖職者を名乗る下衆と『慈悲無き者』と〝うまう～〟

前回
フラウ、安らかに永眠（眠れ）…
・・・ま、死んでないけどね？

―アリアサイド―

誰だって無条件で嫌いになる奴はいるだろう？
私にもいる…もちろん嫌いな理由がある。
・・・確かに最初の問いと違うな。だがね、そんな事は些細な事だ。
今1番大切なのは私が彼女（仮にAと呼ぼう）の事が嫌いだと言うことだ。
Aはいつも黒い服（本人は尼僧服だと言っていた…）を着ている。
いつも何か（本人はヘッドフォンだと言っていた…）を耳に付けている。戦う時は仮面（本人は狐のお面だと言っていた…どれも私が知らない物ばかりだ）を着けて戦っている
だが何より奇抜なのは…その髪だった
黒い髪……伝承の中にしか無い異常な魔力を現している恐ろしい色だ

神から見放された悪魔の色を持っている…だから軍人であり聖職者である私はAが嫌いだ

「おい…たまには働けこの出不精が！」

「ふん。何を勘違いしているんだ君は？私の仕事は魔獣の殲滅だけだ。他の仕事は別料金に決まってるだろう？」

あんな大金を払ったのにまだ欲しがるか悪魔風情が……！

「この守銭奴が…」

「当たり前だろう？金がなければ人生を楽しめないじゃないか？それとも何か？君は質素な生活を善しとするタイプか？」

「当たり前だ！私は神に使える者だぞ！？」

「だったらそんなに怒鳴るな…憤怒は大罪の一つだぞ？」

「ぐぅ…！」

「それはそうと、私に仕事をさせたいなら金を出すか、私を動かせるような素敵に楽しい情報を持ってこい」

「お前は…クソッ！」

「どうした？聖職者がそんな事を言ったらお前が大好きな神様が悲しむぞ？」

悪魔が神の名を…！

そんな時、いきなりドアが叩かれた

「誰だ？」

「アリア将軍！大変です！城内に賊が侵入しました！」

「なんだと！？見張りは何をやっている！？」

「それが…全員気絶させられてます」

「賊は、賊は何人だ！？」「ひ、1人です…」

「・・・はは っ！ははははは、ははははははははは！！！！！！」

いきなり、この女が笑いだした

「なんだ！？何が可笑しい！？」

「くっくっく…いやすまないね。まさか私もこんな面白いアクシデントがあるなんて思わなかったんでね」「・・・それは、いったいどういう意味だ？返答次第では…」

「ん？…ああ、すまん。別に悪いとは言ってないよ。ただ楽しくなってきたと思っただけさ…もしこれで侵入者が私の思い人だとしたら、楽しすぎて壊れてしまいそうだ」

そう言いながらまた狂ったように悪魔は笑いだした…

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『慈悲無き者』サイド

「おいおい、いくらなんでもあり得ないだろコレは…？まさか『平和〇静雄』が来たのか？」

部屋から出ると何人かの雑魚兵が壁に突き刺さっていた…そしてその中心辺りに見覚えのある仮面を着けた少女（？）がいた…この少女（？）がこの惨劇の張本人だとしたら恐ろしいな…
そして少女（？）の手には何も握られてはいない…つまり素手でこの雑魚兵を壁に突き刺したという事だ

「ふむ…君は誰だ？」
「・・・ただの斉藤さ」
「ぶっ！！！」

ぷっ…ぷぷっ、この状況でその言葉が出るとは…

「で、では斉藤。何故こんな場所にいるんだ？」
「そこに城があるからさ」「君はどこの登山家だ？」
まぁ…この会話だけで目的は果たす事が出来た
この少女（？）は確実に『こちら』の人間だ！

「斉藤…君は何をしに来たんだ？」
「・・・まぁ、アリア将軍閣下に挨拶に来ただけだったんだが…何故か通してくれなかったんでな、実力行使をしただけだ」
「ふむ……なら勝手に会えばいい。私は止めない」
「・・・？なんでお前は止めないんだ？」
「私は傭兵でね、金にならない事はやらない主義なんだ」
「凄く良い主義だな」
「自分でもよく思う」

斉藤とは以外に気が合うかもしれないな

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「・・・と言うわけだ。話ぐらいしてやれ」
「・・・神よ、この悪魔を葬りたまえ」

「お前悪魔なのか？…ええっと、なんて名前だ？」
「ん？ああ、私は『慈悲無き者』とでも呼んでくれ」「へ～、技名みたいな二つ名だな」
「そうだろう…結構気に入ってるんだ♪」
「人が真剣に悩んでる時に何をほのぼのと話してるんだ貴様等！！！」

まったく、無粋な男だな君は…
可愛い者がいたら他の事はすべて無視しなければならないんだよ、私的に…

「まぁアレだ、君は少し落ち着け…あと落ち着いたら話を聞いてやれ。迷える子羊の相談にのってやるぐらい、神父なら出来るだろう？」
「お前は……良いだろう。では私になんの用なんだサイトウ？」
「じゃあ聞くぞ？姫様どうした？」
「君は……知らないかもしれないが、姫様はシルディアに拐われたんだ」

・・・聖職者なのに嘘は良いのか？自分にだけは寛大な神様だな？

「そんな最近の事は知ってる。俺が聞きたいのはその前、アンタが姫様に『何をしたのか』だけだ」

「!?」

・・・なんの話だ?

「わ、私が…姫様に?いったいなんの話しかな?」
「しらばっくれんなよ?この蛆虫風情が…」

斉藤…いきなり声が冷たくなったよ
しかも殺気が半端じゃないな

「手前がワンコを牢屋に閉じ込めてたのは知ってんだよ!!」
「ワ、ワンコ?」
「・・・あ、もしかしてディアナちゃんか?」
「ああそうだ!とにかく言わせてもらうぞ!
今ワンコはシルディアで保護している状態だ…そこに戦争を仕掛けるんだ、ワン、いやディアナ姫を潰すつまりだったんだな?前々から邪魔だったシルディアをともに…」

・・・君はそんな事までしてたのか?
というか斉藤、良くそこまで調べたね?

っと、それどころじゃないな

「ＫＯＯＬになれ！斉藤！今は燃え上がる時じゃない！」「・・・なんか若干ムカツクんだが…まぁ確かにその通りだな。ありがとな『慈悲無き者』」

「うむ、気にするな♪その仮面を外して『お姉ちゃん大好き！』とか言ってくれるだけで良い」

「ざ・け・ん・な♪」

むぅ…真剣に言ったんだが

「とにかくだな…俺の家に手を出すなら殺される覚悟ぐらい…いや、『生き続ける』覚悟ぐらいしてから来い。忠告はしたぜ？あばよ」

謎の言葉を残し、斉藤は消えた…と思ったら窓の外から『トミノの地獄』が聞こえてきた…歌詞無いのによく歌えるな？

「クソッ…いったいなんだったんだアイツは？」

「君の大好きな神様じゃないかい？」

「ふざけた事を言うな…」「ふざけてないよ？ほら、『死神』だって神だろう？」

ああ、それにしても可愛い子だったな♪
戦争に参加したらまた会えるのかな？

「という訳で…戦争に参加してやる」

シンゲンさんって…生き物ですか？（前書き）

夜つ七「らら、ら～」

誰の真似ですか？

夜つ七「棗恭介さ！」

・・・リトバスですか

シンゲンさんって…生き物ですか？

前回
下衆（アリア）＆amp;『慈悲無き者』と話した
何故か『慈悲無き者』を殴りたくなったんだが…なんでさ？
ちなみに姿は見ていない…しょうがないじゃん！あの仮面着けると
目が見えないんだから…

「ただいま～」
「お帰りなさ…じゃなくて今まで何処に行ってたんですか！？」
「アリア将軍＆amp;『慈悲無き者』とお茶してた」
「・・・は？」

どうしたレイナ？
俺なんか悪い事したか？

「な、何を「してるんだ君はーーー！！？」と、父さん落ち着いて！！」
「親父があんなに怒鳴った久しぶりだな」
「まぁ…今回は仕方ないと思うわ」

五月蝿いな地味キング、変態王子、社会のゴミ…

「とりあえず落ち着けよ王様。まずはその魔法を消しなさい」
「君が言うな！！……はぁ、とりあえず理由を聞こうか？」

理由…ねぇ？

「暇だったから？」
「うん…少しぐらい良いかな？」
「おおお落ち着いて父さん！！」
「流石刹那だな…そんな理由で敵に会いに行く奴はいないぜ…多分」
「少なくともこの城にはいないでしょうね」

ふっ…俺はお前等とはスケールが違うのさ…

（単にバカなだけだぞ？）

あれ？今なんか凄くムカツク声が…

「まぁ良いじゃん？無事に帰って来たんだし…？つーか相手の戦力削ってやったのにそれはないんじゃないか？」
「結果としてなっただけだろう！…まったく君はいったい何を考えてるんだ？」「人生は楽しく、趣味は何よりも優先するべし！歯向かう奴等にゃ地獄を見せる！」
「・・・刹那君、熱でもあるのかい？」

失礼だな…
俺はまともだ！だから1人も殺したりしてないんだぜ、王様？

「王よ、今はその様な些末事に腹をたてる時ではありません。『草』の情報では、もう帝国軍は魔獣の巣へと拠点を移しているはずです。早く我々も魔獣の巣へ向かいましょう」
「シンゲン…確かにその通りだな。では…帝国軍を潰しに行くとしよう！」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「さて、現在いかにも戦場ってところにいるんだが…なんだろうな

？いきなり逃げ出した奴が1万ぐらいいる。しかも味方で…」
「・・・誰に話してるんだお前は？」
「気にするな『青いゴキブリ』」
「流石に傷付くぜ…つーか泣くぞ？」
「泣けば？そこにアンモニア創り出してやる」
「失明するわっ！！！」

ギャグキャラだから問題無いだろ？
お前なら原子レベルで存在抹消しても黄泉帰りそうだからな…

「とまぁ…いつものやり取りはここまでとして……どうする？」
「シンゲンさん…」
「うむ……魔獣の巣へ行くしかあるまい」

あーやっぱりね、そんな気がしてたんだよコンチクショー…
つーか何あのずらりと並んだ魔物の群れは？１００は下らないぞ？

「おそらくだが…『慈悲無き者』に追い出された奴等だろう」
「あ～あ、人生ってなんでこうも理不尽なんだろう？」
（ふん…楽しいからに決まっているだろ！）

・・・今、なんかムカツク奴の声が聞こえた気が…

「ふん…まぁあの程度の数なら第一騎士団だけで充分だな」
「いや…半分近くいないじゃん？」
「逃げた輩は最近入った新顔ばかりだ」

つまり熟練した者達は逃げてないって？
だからなんだよ？現在７０人ぐらいしかいないんだぞ？

「ではいくぞ、我が戦友達よーーー！！！」
「「「「オオォォォーーー！！！」」」」

・・・シンゲンさん、キャラ違うくね？

＊　＊　＊　＊　＊　＊

俺は凄いモノを見てるのだろう…

シンゲンが動く度に魔獣がぶっ飛んで逝く…真っ二つになりながら…

「なぁ…シンゲンさん素手だよな？」
「あぁ。確かに素手だな」「なんで真っ二つになるんだ？」
「多分突っ込んだら負けなんだろうよ…斧使わなくても充分化物だな」

「ハァァァ…■■■■■ーーー！！！」

ザシュメキメキ…ベキン！

「・・・今一瞬バー○ーカーがいたような…？」
「つーか素手で『ザシュ』ってなんだよ？」

まぁ…とにかく今は先に進むか…ツッコミするの疲れるし…

シンゲンさんって…生き物ですか？（後書き）

なんかスゲーグダグダですね？

夜つ七「だって～早く魔理亜とバトル書きたいんだも～ん」

死ね♪

夜つ七「ちょっ、最近言葉が酷くなってないか！？」

戦闘（前書き）

夜つ七「ハーハッハッハッハッ！！！バトル描写ムズイわ、ボケーー！！！」

その上テンションが無駄に高い時に書いたせいで訳が分からない展開、いつもと違う書き方…とりあえず死ねば？

夜つ七「なんか最近言葉がストレートだな！！？」

戦闘

前回
シンゲンさんは生き物なのか？

『慈悲無き者』サイド

ふむ…やはりシンゲン殿は強いみたいだな
雑魚とはいえまさか１人で８２匹も倒すとは…

「どこぞの自称聖職者にも見習わせたいものだ」

まぁ…奴は自分で戦う事が少ないだけで実力はあるらしい
少なくとも…こちらに来る前の私ぐらいはある筈だ
はぁ…そんな私と互角以上に戦う事が出来た少年は行方不明……か
一度思い出したせいで、少年への想いが次から次へと溢れてくる…

「どこにいるんだ少年……私は、こんなにも君を求めているのに
…こんなにも君に……触れて欲しいのに…」

いつも、そういつもだ!!普段は私をバカにしながらも隣に居てくれた…嫌がりながらも側に置いてくれた!
なのに何でいつも会いたい時にいなくなるんだ!?
こんなにも…こんなにも愛してるのに……!

「……私だって…普通の女の子みたいに…好きな子と買い物したりしたいんだぞ?…なんで…気付いてくれないんだよ……あの朴念仁が……!」

私は声も無く泣いた…
誰かに見られるかも知れないがお面を着ければ誤魔化せるだろう…

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

刹那サイド

「・・・ん？」
「どうした刹那？」
「いや…今誰かに呼ばれた気がしたんだ…多分気のせいだ、気にすんな」
「分かった…一応言っとくが、今は戦争中だ。絶対に気を抜くなよ！死にたくないなら逃げてもいい。だから最後まで生き延びろ！」

・・・はぁ、なんで普段はギャグキャラなのにこういう時だけそんな事言うんだよ？
逃げにくくなっちまったじゃねぇか…

「分かったよ、逃げたくなったら逃げる。約束してやる…お前こそ、家族の所に逝かないように頑張りな」「なんでそんな事を……いや良いか。ああ、死なないために…勝ってみせるさ！」

言うが早いか、フラウは魔物の群れに突っ込んだ…
相変わらずバカだなアイツは…
だが…そんなバカだから助けたいんだろうな

「まったく…俺の心配をするなんて……１５００年ほど早いんだよ！！！」

さて…俺も勝つための努力をしますか…！

「『七つの大罪』起動！」

いつものやり方じゃダメだ
アレだと味方も殺してしまう…
だから…もう1人の俺を呼ぼう…！

「『色欲（ラスト）』改変……改変終了」

・・・新しい力をくれてやったんだ、しっかり働けよな！

「狂え【色欲（ラスト）】！！！」

その言葉と同時に俺の意識は闇の中に――――――

「おはようございます主…確かに新たな力を頂戴しました」

ーーーー沈まずに留まった

「新しい身体はどうだ？なんか不都合があるなら言え」
「問題無しです。むしろ以前より良好ですね♪…でも不満が一つありますね」
「なんだよ？」
「どうして女性じゃないんですか？私は女の子なんですよ？」
「わ、分かったよ！分かったから泣き真似は止めろ！」

ラストは俺にそっくりだが…決定的に違う身体を気にいったようだ

俺との違い、それは…

蝙蝠（コウモリ）を連想させる黒い翼、まるでナイフのような爪、瞳の色は琥珀色に変わり、髪は白に変わっていた…

と言ってもコレは戦闘をする時のみだ。普段は俺と瓜二つだ…

「それなら不満なんて無いですよ♪」
「ならさっさと狩るぞ。あんなバカな連中を死なせる訳にはいかないからな！」「そうですね…私も自分以外の生き物がレイナさんを傷付けるのは許せません」

「滅ばせ【憤怒(ラース)の刀】」
「喰らえ【暴食(グラトニー)の鎌】」

同時に俺達の手に武器が現れた…
俺の武器は日本刀だ…柄は血のように赤く、刀身が黒一色、鐔(つば)が無い…
そして腰には鞘が現れている

能力はどんなモノでも斬る事が可能で、モノを斬れば斬る程鋭さが上がり、使用者の思考を早くする事が出来る…そして、握っている間は殺気が零になる…！

「俺は右を殺る…」
「なら、私は左ですね？」

俺達は弾かれた様に敵陣に飛び込んだ…

「なっ！？なんだおがぁっ…！」

最初に俺の存在に気付いた奴を斬り殺した…

刀が哭いた…まるで人を斬る事を喜んでいるかの様に鈴の様な透明な音が辺りに響いた…

「手前…！殺す！」

帝国の兵士達はは俺を殺そうと近付いてくる…

俺は『ラースの刀』のスキルを発動した…俺が知覚していた世界が変わる…全ての動きが緩やかになる…
聴覚と嗅覚（余計な情報）が無くなり、視覚が異常な程に研ぎ澄まされる…

叫んでいた兵士の刀がゆっくりと迫ってくる…

――遅い、遅すぎるぞ――

それはあと少しで当たるような距離にある。だがまだ時間はある…有り余っている

――これじゃあ…楽しくないだろう？もっと速く動けよ！それなら斬らないでやる――

もはや２ｍｍもないだろう。だがまだ刹那は動かなかった…

――もう良いよな？さんざん待ってやったんだ…斬れなかったお前が悪い――

シュッ…という空気の裂ける音が戦場に響き、何人もの兵士が音のした場所を見た…
次に聞こえたのは何かが落ちた様な…鈍い音だった

全てを見ていた者がいても理解出来なかっただろう
それほどまでに理解出来ない状態だった…

「な、なんだよ今の…？俺は夢でも見てるのか！？」「夢でも幻でもない…現実だよ」

刹那がやった事を説明するのは簡単だ
攻撃を避け、最低限の動作で首をはねた…ただそれだけだ
だが…見ていた者達には理解出来ない、いや出来る筈がなかった…

何故なら…刹那が避けた距離は僅かな、それこそ針の穴程の距離だったのだ…
そして首を斬った時の刀が…まるで存在しないかの様に『消えていた』

物理的に消えた訳ではない殺気が欠片もなかったせいでそう見えただけだ…

「何なんだよアイツは?!シンゲンさえ気を付ければ良いんじゃねぇのかよ!!?」
「間違いじゃないよ…俺はまだ弱いからな。だからお前等に手加減する余裕なんて無いんだよ。俺は死にたくないし死なせたくないバカな奴等が何人かいるんだ…だから、もしこれ以上俺の平穏を乱すなら……消すだけだ」

刹那は淡々と言いながら帝国の兵士達に近付いて行く

それはかなり不気味だろう無表情で…ゆっくりと闊歩する姿は人間よりも機械に近い…
ましてやこの世界にはそんな表現が出来る者は少ない

だからこそ、感じた事のない恐怖は、焦りと不安へと姿を変え、まともな判断力を根こそぎ奪う…!

「こ、このバケモノがーーー!!!」

彼に続き何人かの兵士が動いた…
1人は刀を袈裟(けさ)に、1人は魔法による遠距離攻撃、1人は槍による払い…

ほぼ同時に行われた攻撃は……ほぼ同時に叩き伏せられた…！

――だから、遅いんだよお前等…本気で俺を殺したいなら、その万倍の早さで動け…！――

袈裟に斬りつけた兵士は、弾かれた槍によって絶滅した
槍を払った兵士は、味方の魔法に対する盾にされ溺れ死んだ
魔法を放った兵士は、気付いた時には腰から下が消えていた

「バカが…！逃げれば死なずにすんだのに…」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ラストサイド

迫りくる攻撃を全て流し、鎌を一閃する…！
それだけで3人絶命した…

「ふぅ…そろそろ鎌を使うのも疲れてきましたね」

ラストは手に入れた翼を使い上空へ移動した

「さて、優しい遊びは終わりです。これからは私の『世界』で楽しみましょう。可愛い虫けら達…狂え【色欲（ラスト）の五芒星】」

琥珀色の瞳に逆五芒星が現れた
それは下からでも分かるような圧倒的な存在感を放っている

「範囲１００m、対象帝国軍……発動『狂喜の夢・狂い咲き』」

その一言で、ラストの周りにいた兵士達は消えた…

―――――――――――

「なんだよ、何なんだよこれは!?」

そこは何も無い…そうカタチも感触も色さえ無い空間だった…
なのに…何かが『いる』のだけは分かる…

「初めまして虫けら以下の兵士さん…ここは貴方に最高の恐怖を与える夢です」「誰だよお前!?いったい…何を言ってんだよ?!」
「え?……ああ、簡単な事です。貴方はここで『悪夢』を見続けるだけです」

ただし…一生出れませんがね♪

「さて、貴方の『悪夢』のカタチが来たみたいですよ?」
「・・・え?」

今まで何も見えない空間がいきなり割れた…そしてそこから『白い何か』が現れた…

兵士は…その存在を理解出来た…出来てしまった

「な、何で…！アイツは死んだ！俺が…殺しただろうが…！？」
『痛イ…痛イ…頭ガ……割レテルノ…！……貴方ガ…貴方ノ…セイデ……！』
「うわあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーー！！？」

その『白い何か』はただ存在するだけ…だが、彼にとっては『存在する事』すら恐怖のようだ…

「助け、助けて！！頼む、来るな…！それ以上、近付かないでくれーーー！！」「私はこれで帰らせていただきます。貴方は…死ぬまでこの『悪夢』を楽しんでくださいね？」

―――――――――――――――

ラストは落下するような速さで敵へと降下した…
その手には何かを握っている
その向かう先には…複数の兵士とフラウがいた

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

フラウサイド

「クソッ…さっさと死ねよ糞ガキがぁ…！！」
「はん…！手前等風情に殺される程…俺は弱くねぇんだよ！！！」

フラウは魔法を封じた槍を構え…そして、

「解放！氷針（アイスニードル）！！！」

いきなり…槍の尖端から氷の針が放たれた！

「なっ、ごがぁ！？」

槍から出た針は兵士の鎧を貫き、内側から凍らせていく……兵士は

僅か1秒で凍り付いた…
フラウはすぐに周りに神経を尖らせ…背後に敵がいるのに気付いた…！

「手前…！」
「遅い…死ねぇぇぇ！！！」

兵士の剣がフラウに斬りかかった…だが！

「……！？あが、がぁぁぁぁぁぁ！！？」

いきなり、剣を握っていた腕が肘辺りから捻り切られていた

「ふぅ…間一髪でしたね」

捻り切られた腕を押さえていた兵士の背後から、ラストが楽しそうに話し始めた

「フラウさん、一対多の戦闘で1人に集中し過ぎるのは危険ですよ？まったく…スロウスが無ければ助かりませんでしたよ？」

ラストの右手には確かに小さな懐中時計が握られている
そして左手には…肘の近くが捻れたように千切られた籠手が握られていた

「お、俺の腕…！か、かかか返せ?!」
「そんなに欲しいなら差上げます。どうぞ…！」

ラストはまるでキャッチボールのように腕を兵士に投げた
兵士は残っている腕で千切れた腕を捕った……そして突然腕が爆発した

「すみません、先程千切らせていただいた時に、手榴弾（ハンドグレネード）を取り付けたのを忘れていました」

そのあまりに容赦の無い一撃は…悲鳴を上げさせる事もなく敵を排除した

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

アリアサイド

これは…いったい何なんだ?!
シンゲン以外はそこまで強くなかった筈だ…!
なのに…何故我が軍が劣勢なんだ!?

「おい、いい加減お前も戦え!」
「・・・何故だ?私は自分の意思でここにいるだけだ。君に雇われた訳では無い筈だが?」

目の前のコイツは若干苛立ちを含んだ声で返してきた……鼻声に聞こえるのは気のせいだろうか?

「それに君が出れば敵の勢いが下がるんじゃないか?」
「私は…指揮官だ。最後まで兵士達に命令をしなければいけない」
「・・・嘘だな」
「なっ!?何故嘘だと思う!?」
「君は嘘をつくと明るい笑顔になる…正直キモかったが…流石に可哀想なので黙っといてやろう」
「ぐっ、お前は…!」
「そんなに怒るな。…そうだな君が私とのゲームで勝てたのなら私も戦いに参加してあげよう」
「・・・いいだろう。何をやるんだ?」

奴はスッと出した物は…
鉄の塊だった…

「コレは銃といってね…ギャンブルで玉に使われる、まぁ『オモチャ』だな」
「それで…いったい何をするんだ?」
「自分の頭に向けて引き金を引ければ君の勝ちだ。もちろん引けなかったら私の勝ちだからね。あ、引き金はこの部分だからな?」
「分かった。ではコレを引けば良いんだな?」

アリアは自分の頭に銃を当て、引き金に指をかけ…躊躇い無く引いた…

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『慈悲無き者』サイド

血の臭いとほんの少しの火薬の臭い…足下には頭から血を流す死体がある

彼女はその死体に…感情の無い目で見下ろしていた…

「まぁなんだ…君は正直嫌いではなかったよ。でも、君は少し騒がしかったから…黙ってもらう事にしたんだ」

・・・あぁ、だが勝負は君の勝ちだな

だから…この下らない遊びに参加してあげよう

戦闘（後書き）

夜つ七「次回は…魔理亜が出て来るげひゅ…！！？」

刹那「手前…今何つった！！？」

まぁ実際に出ますから諦めてください

おい作者（夜つ七）…この終わり方はねぇだろ！！？（前書き）

夜つ七「ごめんなさい…マジでごめんなさい。謝るんで…その、首チョンパは勘弁してください」

ダメです♪
貴女の愚かさを骨の髄まで刻み込んで差し上げます

夜つ七「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさ『ブン！』ギャアアァァァァアアーーー！！！」

はぁ…なんでこんな奴が小説書いてんでしょうね？

おい作者（夜つ七）…この終わり方はねぇだろ！！？

前回
アリアは死にました
良かったな？君の大好きな神様に会えるぞ…死神だけどな

「だから…死にたくねぇならすっこんでろ！！！」

刹那は刀を鞘に戻し、ある武器を創り出した
その武器は『ＡＤＳ』と呼ばれる非殺傷兵器だ

「焼いてやる…！」

ＡＤＳから電磁波が放出され、兵士達は次々と気絶した

「ふん、仲良く気絶してろ類人猿共が…」

ＡＤＳ［Ａｃｔｉｖｅ　Ｄｅｎｉａｌ　Ｓｙｓｔｅｍ（アクティブ・ディナイアル・システム）］は、アメリカが開発中の暴動鎮圧を目的とした兵器の事…だったと思うぶっちゃけるとあまり覚えてないから俺のイメージが創り出したトンデモ兵器かもしれない…

「まぁ…コレのおかげで半径４００ｍぐらいは皆気絶したな！」

次の場所に行こうとした瞬間、いきなり背後から音が聞こえた

「コレは…爆発音か？」

「あははは…ははははははははは、あっーはははっはっは！！！」

なんかスゲー笑い声が…

しかも…なんだあの馬鹿でかい筒みたいなの……ま、まさか！？

次の瞬間、近くにいた兵士が吹っ飛ばされた

「ア、ＲＰＧ―２９…！？」

ＲＰＧ－２９とは…
通称ヴァンピール（吸血鬼）の名を持つソ連が開発した対戦車擲弾発射器（グレネードランチャー）だ

ぶっちゃけるとコレが有れば歩兵で戦車にも勝てちまうような超☆トンデモ兵器だ……あれ？なんかテンションがおかしいような…？

「って、そんな事はどーでも良い！！アレが有るって事は…！」

爆発した方を見ると、１人の女が歩いている
その手には…キャリコＭ１００だと！？

女の手が上がり、銃口が俺に向いて…

「ちょっ、待て手前、ざけん…」

ガガ……！！！！！

「うわぁ！？いきなり発砲するんじゃねぇーーー！！」

刹那は叫びながらも銃弾を避けている…スキルがあるからといっても流石に大変らしい…全身から冷や汗を流しながらギリギリで避け続けている

数秒後、銃撃は止まった…

「ぜぇ…ぜぇ…し、死ぬかと思った……俺は、貴史やレイとは違って、普通の人間なんだぞ…手前ーーー！！！」

刹那が吼えた！
背後からドス黒い魔力が立ち上がる…！

前を見ると女はいつの間にか距離を詰めている…

「とりあえず…10分の9，5殺しで許してやるよ…糞女（マリア）」
「ふふ…そんなに熱い視線で見られるとお姉さん興奮しちゃうぞ？少年？」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

約1時間後…

「どうした少年？さっきから逃げてばかりだが…私を１０分の９，５殺しにするんじゃないのか？」
「うるせぇーーー！！！ならその格好をどうにかしやがれーーー！！！」

刹那が逃げるのは…まぁ無理もない
現在マリアの格好は直視出来るレベルじゃない

「このボンデージがどうかしたのか？」
「どうもこうもあるかーーー！！？」

色白でメリハリの利いたマリアの肢体は、幅数ｃｍほどの革のベルトに緊縛されている。
《ピーーーー》と乳首をギリギリ隠せるサイズしかない革帯は、ボディペイントのように、身体の曲面にピッチリと密着している。

ある意味、全裸よりも扇情的な姿だ…

・・・言っとくが、今は見てる訳じゃないぞ？さっき見た時に目に焼き付いたんだ……

まぁ…さっきまでは普通（？）の服だったんだが…
それについては回想で説明したい…

↑　↑　↑　↑　↑　↑　↑

互いの距離は約８ｍ…
刹那の武器は刀、魔理亜の武器はナイフ（銃は弾切れのため捨てた）だ

最初に動いたのは刹那だった…

「とりあえず…喰らえ！！！」
「ふっ…」

刹那が放った一撃を魔理亜は体をずらしただけで避けた…いや、どうやら避けきれなかったようだ…腕から血が流れている

魔理亜は傷を受け恍惚とした表情をして…恍惚？

「君の愛が痛いよ少年♪」「こっ、この変態がーーー！！！」

・・・この状況をどう説明すればいいのか…作者（夜つ七）にはまったく分かりますぇん

無理矢理説明すると…
斬られた方が…喜んでて、斬った方が…怯えてる？いや、気持ち悪がってるように見えるような？

「さて、次は…こちらの番だ」

いきなり、魔理亜の体がブレた…

「っ…！」

刹那は咄嗟に刀で一撃を防いだ
しかしナイフによる一撃は見た目からは予想出来ない重さがあった
…そのせいで体勢が崩れてしまった

「コレは…オマケだ！！！」

崩れた所に回し蹴りが襲い掛かる…！

刹那の脇腹から鈍い音が聞こえた…しかし

「ぐっ！……なめ、てんじゃねぇぞ！手前ーーー！！！」

刹那は蹴りを掴み、その勢いのまま投げた

頭から地面に着地した魔理亜は、地を削りながら１０ｍほど転がり、止まった…

「あ、ぐぅ…！！…少し気持ち良いな♪」

思い切り投げられ、かなり危ない角度から落ちたのに…何故か喜んでいる

「流石だな魔理亜…今のはフラウでも危ない角度だったんだが…」

「ふっ…少年の愛だと思えば快感に変わるのさ…ぁん、もっと激しくしてくれ」「だから～、そう言う発言は止めろって何回言ったと思ってんだ！？１００や２００じゃねぇんだぞ！？」

どうやら…フラウ以上の変態らしい…うん、今何処からか「だから変態じゃねぇよ！！？」って聞こえたが気にしない

「・・・さて、回復したところで続きをしようか」
「回復早っ!!?前より耐久力上がってねぇか!?」「ふっ…私のスキルを嘗めるなよ?コレのおかげでS級になれたんだからね」
「どうでもいい…とりあえずさっさとスキル名言えよ…」
「うむ、では言わせてもらおう。私のスキルは3つある…1つは少年と同じ『心身強化』、次は『特性強化』、まぁ読んで字のごとくだな」
「・・・なんだかスゲー嫌な予感がするんだが、3つ目はなんだ?」
「ふっ…私が考えた最強のスキル、『超☆回復力』だ!」

・・・まてい、なんだそのあまりに分かりやすいネーミングは?

「ちなみに効果は即死でないかぎり傷を瞬時に回復する事が出来る。ただし痛みは防げない」
「・・・防げよ」

もはや意味不明なコイツにツッコミを入れるのは虚しいだけだ…しかも昔より質が悪い

「はぁ…とりあえず魔理亜、一言言わせてくれ…」
「あぁ、好きなだけ言ってくれ…私は出来る範囲で答えよう」
「ならさ…死ね♪」

刹那は黒い物を投げ…いや流石にそれは!?

「ちょっ、それは洒落にならないぞ少ね…」

セリフを言い終わる前に…「ハンドグレネード」が爆発した

「ふぅ…良い仕事をした…さて、カラオケでも行くか…ってねぇか」

いやアレ放置かよ!?
せめて墓ぐらい作ってやれよ!?

「いやだ、アイツは俺の大切なモノを奪っ「ふふふ…」…おい、流石に冗談だろ?」

そこには…衣服がボロボロになっているのに…無傷で立っているマリアがいた

「少年…私が好きだからといって激しすぎるのは……(ポッ)」
「なんだ今の『ポッ』は!?大体いくらなんでも理不尽過ぎるだろその能力!?」

「何を言う…服がボロボロになってしまったじゃないか！お気に入りだったのに…ま、こんなふうになったら邪魔なだけだし、変えるか」
「ちょっと待て、まさか此処で着替えるつもりか？」「？何か問題あるか？」
「・・・いや良い。後ろ向いてるから早くしてくれ」

そう言うと本当に後ろ向く刹那…顔が若干赤い。
照れるなよ～刹なふっ！？

「少し黙れ…」

分かったよ！解説してれば良いんだろ！

コホン…破れた場所から見えるマリアの肌は陶器のようだ…引き締まった肢体からはまるで誘っているかのように甘い香りを漂わせている
マリアは尼僧服を脱ぎ始めた……すまん、刺激強すぎて解せへぇげぶ！！？

「だから、黙れ阿呆…」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「うむ、やはり私は何を着ても似合うな♪」
「いきなり自画自さ……ぶっ！？」

いきなり刹那が鼻血を出した…

「どうした少年？まさか私を見て興奮しちゃったのか？襲いたいなら何時でもＯＫだぞ？」

その言葉に刹那はつっこまずに…逃げた

↓　↓　↓　↓　↓　↓　↓

そして現在に至る…

「ゆっくり回想なんかしてんじゃねぇーーー！！！」

いやだって他人事じゃん？ごめんなさい、真剣に考えます……ラスト呼んだら？

「・・・その手があったか」
「何を1人で言ってるんだ?まさかイマジナリー・コンパニオン（空想上の友達）か?」
「違う!イマジナリー・サンドバッグだ!」
酷ぇ!!?

「とにかく今すぐ来やがれラストーーー!!!」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「さて、戦争も終わったみたいですし…レイナさんで遊びますか♪」
『とにかく今すぐ来やがれラストーーー!!!』
「・・・はぁ、サボりますか」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「アイツ、着信拒否しやがった!!!」

着信！？いやそもそも拒否とか出来るの！？

「だから何をさっきから言っているんだ？」

あ、今さらだけど作者（夜つ七）の声は刹那と神（オーディーン）にしか聞こえなばおげぇ！！？

「くそ、こうなったら…全魔力で足を強化！プラス『固有時制御』！オマケに遅き【怠惰（スロウス）の時計】…時間を『合わせろ』スロウス！！！」

・・・逃げるためだけにここまでするとは…

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「こ、ここまで来たら流石に追い付けないないだろ…ラスト、首を洗って待ってやがれ…！」

どうでも良いけど…マリアの奴、シルディアの方へ行っちゃったけ

ど…良いのがげぇ！！？

「それを…早く言えーーー！！！」

ギャアアアアアアアアーーー！！！！！！

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ラストサイド

その頃のシルディア…

「・・・此処がシルディアか。ふむ…何故こんなに美少女が多いんだ？それに…なんだこの気色の悪い視線は…？」

「貴女がそんな格好をしてるせいでしょうが…まったく学院時代から変わってませんね？」

「む？…君は誰だ？少年に似ている気がするんだが」

まぁ…一応“元”同一人物ですし

「気にしないでください変態マゾ女。あと気持ち悪いので半径１０００００００ｋｍ以内に入らないでください」「はっはっは…いきなり酷い嫌われようだ…私は何か嫌われるような事をしたかな？」

「強いて言うなら『存在』ですね…私の大切なモノをいきなり奪った手前を許すつもりはねぇって事です」

・・・はぁ、主だった頃の口調になってしまいました

「よく分からんが…君は敵だな？」

「当たり前です。貴女は楽には殺しません…逝き狂え【淫らな夢・無限地獄】」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

刹那サイド

だいたい5分後…

「・・・おい、いったい何をやった？」

「別に何も…ただ少しばかり夢を見せただけです」

「少しで…コイツがこんな事になるか！！？」

刹那が指を指した場所には…何故か全身が汗だく、頬を上気し、痙攣しながら口をだらしなく開けたマリアがいた

ちなみにレイナが毛布かけてくれたので直視出来ます

「良いじゃないですか…誰にも被害がでなかったんですから…ぷんぷん」

「無表情で『ぷんぷん』とか言うな!!」
「・・・さて…戦争が終わったのでレイナさんと夜の営みをしてきます」
「んなっ!!?て、手前…そんな事を大声で言うな!!!」

いや…戦争終わってる事に驚こうぜ?

「そうだった!アリア将軍はどうしたんだよ!?」
「脳天ぶち抜かれて死んでました。ちなみに殺したのは魔理亜かと…」
「なんでさ?」
「銃です…この世界に銃があるはずありません」

うん、素晴らしく虚しい死に方をしてたよ

「・・・知ってたのかよ?」
「ちなみに…他の兵士は命令されて仕方無くやってたそうですよ」
「嘘だろ流石に…」
「まぁ…半分ぐらいの方は嘘でしょうね…ですが一般兵の方々は本当みたいですよ?」

ま、そんなもんだよ世の中なんてさ…

「コレが言うとイラッときますが…確かにそうですね」
「・・・おい、マジでこの終わり方かよ!!?」

戦争編…完！

後日談

「色々脅し…もとい頼んで私もこの国に住む事になったからよろしく♪」
「地味キングーーー!!!」

おい作者（夜つ七）…この終わり方はねぇだろ！！？（後書き）

夜つ七「あー、死ぬかと思った」

刹那「いやそこは死ねよ！！？」

はぁ…いつか幸せになりたい（前書き）

「すまない…〇〇〇〇は次回だ！」

ごめんなさい…コレがいつも迷惑をかけてます…うぅ

はぁ…いつか幸せになりたい

前回

・・・あんな終わり方で良いのかよ?

「これからこの城で第2騎士団に所属する事になったマリア＝ディスタントだ。女の子は名前で呼んでくれ…男は例外を除き、全員名字で呼べ。さもなければ…しまっちゃう叔父さんが来るぞ?」

「えっと…コイツが『慈悲無き者』だ。とりあえず仲良くしてやってくれ」

「ふむ…ツッコミは無いのか?」

「言っても無駄だと分かっているからな」

「すまねぇが、まったく理解できないんだが…つーかコイツ敵じゃねぇの?」

フラウにしては良い事言ったな…

「ありがとよ…」

「褒めてねぇよ…まぁそれはともかく、地味キング…マジでコイツ入れるの?」「もう…それは定着してるんだね…」

いいから答えろ…

「あぁ…確かに危険かもしれないが、リクスが監視につくから大丈夫だろう」

「甘い！お汁粉に角砂糖を一袋入れたかのように甘い！その認識だと…リクスは確実にリキュルと同じタイプの人間になるぞ？」

「すみませんが辞退させていただきます」

だよな…流石にあんなんになりたくないよな？

「なら…シンゲンに任せるか」

「王よ…我にリキュルとフラウを押し付けといてソレは無いだろう？」

「すまん…確かにこれ以上は心労で死ぬな…では刹那君がペし！！？」

とっさに回し蹴りを出してしまった…うん、反省しなきゃな……あ、また無意識のうちに首を絞めちゃってるや♪

「選べ…全身の皮を生きたまま剥がされるのか（その後塩をかけます）、足の先からじわじわと焼かれるのがいいか（ちなみに頭まで燃え尽きないと死ねません）、公衆の面前で裸で吊し上げられるか（ちなみに逆さ吊り）、自分で魔理亜の監視をするか…どれでも良

いぞ?え、全部?地味キングも好きだね～?」
「ごめんなさい……自分でやりますから勘弁してください」
「え、いいの?ごめんな王様、何だか無理強いさせたみたいで…」
「「「「「今のは絶対に無理強い（だぜ）（です）（ね～）（（だな））（だろうな）」」」」」

うるさい変人共が!!
だいたい何ですかそのイカれたライオンを筆頭に!
変態ロリコン野郎に無自覚暴力ワンコ、全身是武器庫なりや、自爆型ドジプリンセス、変態ミニマム結界師、その上死なないドMな糞先輩…一体全体何ですか?何?お前等はアレか?虐めっ子か?そんなに俺を虐めて楽しいか?こんなに人畜無害で心優しい男の子を虐めて楽しんでんのか!?手前等少しは常識持てや!!

「お前が言うなお前が…」「あぁん?何勝手に…地の文読んでんだ手前ーーー!!!」
「がぱっ…ちょっどりゃは…待げぇ…「俺のこの手が真っ赤に燃える!勝利を掴めと轟き叫ぶ!」…し、死ぬ…」

死ね!

「ばぁぁぁくねつ!ゴッドフ「待て少年!」ィン…何しやがる!放せーーーー!!!」
「君がこの場でフラウの焼肉を作るのは止めはしない…だがな、今此処には女の子が何人もいるんだ…少年は肉の溶ける臭いを女の子

に嗅がせても良いのか？」「・・・チッ、分かったよ先輩」

あー、微妙な空気にしちまったな…

「そうだな…うむ、私から提案があるんだが…良いかな？」
「ダメって言ったって言うだろうが…」
「こんな時は鍋でも食べれば楽しいと思わないか？何、安心しろ。これでも料理は得意なんだ」

・・・・・マジで？

「すまん…急に腹が痛くなったんで休んでくる！！！」
「む！シンゲン殿ＧＯ！」「ガアアアァァァーーーーーーー！！！！！！！」

マリアの掛け声と同時にシンゲンが刹那に向かって駆け出した…その速さは雷のようだ

「え？なっ、ごぶふっ！！？」
「ガアアアァァァーーー……はっ！我は何を？」
「手前、魔理亜…こんな事にそれを使うな…ぐふっ」「いやすまない…まさかこんな大惨事になるとは思わなくてな…」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

それから１０分後…

「とりあえず材料はあるな。では…参る！」

その材料を見て確信した…ろくな物が出ない、と…

「とりあえずシンゲンさん、さっき逃げるの邪魔したんだがら…何が出ても全部食えよ？」
「む…分かった」

さて、鍋の…ガタガタガタガタガタガタ

「ど、どうしたんですか刹那さん！？顔が土気色です！！！」
「バ、」
「バ？」
「バカなーーー！！！アレはシチューのはずだ！」
「なっ！？まさかあの伝説のゲテモノ料理か！！？」「フラウが知っている事は置いといて……間違いない！あの材料を見ろ！」

そこには…

ひき肉…コレは普通
煮干し…出汁だよな？
たくあん…いや確かに大根だけどね！？
塩辛…待て待て待て待て待て待て待て待て待て！！！ジャム…いやーーー！！！！汁が赤い！！！！
大福…色がむ、紫！！？ぐはっ…臭いが甘い！！？
セミの抜け殻…は、ははは、あはははは、俺の人生はここまでのようだ…

そして…料理（という名の毒の概念武装）が目の前に現れた…
色は…もはや表現するのを諦めてしまう程に毒毒しい色だ
臭いは…ごめん、麻痺しちゃってる♪
見た目は…どろーりという表現ですら生ぬるい…
一言言わせてくれ…コレはジャイア〇シチューを越えた恐怖の料理だ…！

「さて…出来たぞ。たくさんあるから好きなだけ食べてくれ♪」
「「「「ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ…」」」」
「・・・フラウ」
「・・・分かってる」

フラウは（残像が出きるほど）素早く動き、シンゲンさんを羽交い締めにした

俺は鍋（中には何かポコポコと泡がたっている）を持ち、シンゲンに駆け寄った

「な、何をする2人とも!?止めろ、止めんか!!?」
「さっき約束…よろしく♪」
「ま、待ゴゴポゴポゴゴポゴ……!!?」

鍋の中にあった物体Xはシンゲンの腹の中に消えた…

「…ガハァァ!!?」
「シ、シンゲンさんが倒れた!!?」
「医者だ!医者を呼べ!」

こんな感じで俺の一日は過ぎた…

頼む…たまにはゆっくりさせてくれ

はぁ…いつか幸せになりたい（後書き）

準備は良いですか？

休暇をもらった（前書き）

本当に、本当に一年以上放置とかマジですみませんでした
番外編ではなく本編です
番外編は違う小説として置く事にしました。まだ書けてないです。
マジでごめんなさい

休暇をもらった

シンゲンさんが死にかけてから一週間が経ち（峠を越えるのにエリクサー級の薬を多用しなければならなかった）、なんとかシンゲンさんが復活する事が出来た
ちなみに復活した瞬間フラウと魔理亜は５００ｍくらい蹴り飛ばされた。まあ実際は俺もやられそうだったんだけど、ねこじゃらしとマタタビでどうにか出来た

……まあ、それはいい。正直、フラウが変態と言われて「だから変態じゃねえよ！？」と、言う姿並みにどうでもいい
今一番大事なのは？？――？？――

「ががががっがっがががが！？」
「なんだよこれ？　なんなんだよこれ？！　なんで、シチュー溢しただけで石の床が焦げるんだよ？！　って、さっきから隣の奴ががががうるさ、ってお前コレ飲んだのか？！」
「……うへへっへへ♪」
「さっきからどうし、……お前焦点あってな、お、おい？　口から泡出て、み、耳から血が？！　ま、まて？！　お前肘が逆に向いて、く、くく首、首が３７０。くらい回って、ぎゃあああぁぁぁ！！！
近寄んなーー？！」

？？――？？――この地獄絵図をどうにかする事だ

ちなみにこの訳分かんない事言ったりしてる連中は城の休憩室で、

飯食ってる時に……【魔理亜のシチュー】を俺のと間違えて食ったいや、それなんて侮辱？
あんな青と茶色の混ざった泥のような液体が俺の料理とかマジムカつく間違いしやがってよ
しかも、コレは俺の国の料理かも？　だぁ？
手前等和食嘗めてんだろ？

「はぁ、なんでお前は毎回馬鹿みたいに面倒事起こすのさ？　馬鹿なの？　いや馬鹿だろ？　というか料理作んなよ？　死人出てないのが不思議なレベルだぞこの大量殺人液体兵器？」
「ふふん、ちゃんと食べれる物で作っているのに死人が出るわけないだろう？　相変わらず変な事を言う奴だな君は」
「あのな、学校の調理実習で先生がお前のクラスだけ調理実習禁止にしたの忘れたのか？」
その時の家庭科教師は後にこう語った

「アレは料理ではない。バイオ兵器の開発だ」……と

「あれは教師が私の料理の才能に恐怖を覚えたせいだ。ふっ、隔絶した才能は人に畏怖を覚えさせるものだよ」
「そのプラス思考マジすげえわ。しかもある意味的を射てるのがうぜぇ」

確かにコイツの毒殺料理はチートとかでも畏怖覚えるわな
なんつったって、ある奴がレベルを測った時の答えが

［姫路の料理×ポイズンクッキング×毒の概念武装×琥珀さんの薬×前原圭一の父の手料理×レインボーパン×ネオレインボーパン×ハイパーレインボーパン×（ハイパーレインボーパン＋謎ジャム）×賞味期限ぶっちしてリキッド状になった猫缶×あらゆる世界の毒物］の１００，０００，０００乗＋チート補正無効（ただし、肉体面でなんとか頑張れる人には無効。しかし、舌の上は大殺界級）＋非殺傷（ただしダメージは死んだ方がマシ）

だったからな。ちなみに、この肉体面っていうのは理不尽級のチート１００人と戦って無傷で生き残れるレベルらしい。あと、例外として俺は毒になれたから効かない。中学の3年間、毎日毎日食わされて、しかも高校になってからも嫌がらせのように食わされたからな。

……ん？　そんなに食わされる前に逃げれば良いだろうって？　いやね、魔理亜だけなら余裕で逃げれますよ？　でもね、ある奴が面白半分で捕まえるんですよ。ちなみにそいつが魔理亜の料理にレベルを付けた奴だ

「それはそうと少年」
「なんだ？」
「後ろの連中に気を付けろ」
「え？　ひっ？！」

魔理亜に言われた瞬間、いきなり尻を撫でられた

「え？　ええ？　な、なな、なにすんだアン……「うへ、へへうえええ……」……ちょ、こっちくんな？！　きめぇよ？！　怖いよ？！　う、うわああ、服を噛むな？！　待って、指をワキワキさせん

な?!　後、舌なめずりするな、怖すぎすぞ?　ちょ、お前等見てないで助け「「「……（残ったメンバー全員が一斉に頷く）。うへ、うへへへ♪」」」ぎゃあああぁぁぁ、だからよるんじゃねえ!!」

「じゃあな。これだけの大人数、きついかもしれんが頑張れよ?」

「バッ?!　手前も手伝え!」

「残念だが全員少年を所望しているようなのでな。人気のない私は他の方々とお茶でも飲みに行くとするよ♪」

「てめ、めんどくさいからって逃げんじゃ、ひゃう?!　ど、どこ触ってんだ手前等ーーー?!!」

＝　＝　＝　＝

それから一時間後……

ようやく抜け出す事ができた刹那（倒しても倒しても起き上がるゾンビのような集団に本能的な恐怖を覚え、逃げていたが、捕まって首筋、耳の裏、腋等を舐められそうになりキレる。全力で１０分の９殺しを実行した）は重い足取りで自室に向かった。ちなみに、若干泣いてるのは気にしないで上げてください

「グスッ……俺男なのに何であんな目に……」

それは女物の服（ちなみに基本的にラストが選んだ物を着ているのでゴスロリとか当たり前である）を着ているからなのだが……本人は全く気付いていなかったりするというか、本人の中ではこの服が普通と認知されているので気付く事はないだろう、多分

「ああ、早く服脱ぎたい。野郎の唾液まみれの服を脱ぎたい。そんでお風呂に入って、可愛い物（テディベアとか子猫の人形等）抱っこして寝るんだ」

ちなみに、刹那の寝てる姿をラストが写真に収め、一枚を金貨一枚という値段で売っているのを刹那は知らない（ちなみに一番人気はピンクのネグリジェにテディベアを抱いて眠る姿だったりする）

「可愛い物がどうしたの？」
「ひにゃあぁぁ？！」
「え？　なんでそんなに驚いてるの？」
「リ、リキュ、い、今のまさか聞いて……？！」
「もちろんラストちゃんから貸してもらった道具で録音までしたわ♪」
「お、終わった……」

ただでさえ女扱いされてるのに、こんな恥ずかしい趣味まで知られたら……絶対誰も男扱いしてくれなくなる！！

「リ、リキュル。その、今の誰にも言わないでほしいな～？」
「ダメよ。これは刹那ちゃんの可愛さを皆にアピールするチャンス……何があってもこの城の全員に聞かせにいくわ！！」

この変態マジで殺そうかな？
いや、待てプライドを捨てれば……でも、やりたくない。俺はそんなセリフ言いたくない！！

「じゃあさっそくリクス達に「っ！？」じゃあね刹那ちゃん♪」
「ま、待って、まってよ」

言いたくない……でも、言わなきゃ、言わなきゃもう一生女の子扱いだ！

「どうしたの刹那ちゃん？　私急いで「リ、リキュルお姉ちゃん」……る……え？」

「僕ね、リキュルお姉ちゃんの持ってる物手に取って見てみたの♪　……ダメ？」

しゃがみこみ、リキュルの服の裾を掴み、可愛らしく小首を傾げながら刹那は最後の切り札を使い……もの凄い勢いで後悔しまくっていた

ちなみに、効果の程はというと……

「……（たら―）」

「リ、リキュル？　どうした？　鼻血出てるぞ？　……お～い？　気絶してやがる」

刹那の予想以上に効いていた

この隙に録音機を奪い、死ぬんじゃないか？と思うほどにリキュルをボコッた

出来れば記憶を失ってほしいものだ……俺の心が折れない為に

＝　＝　＝　＝

更にダメージが蓄積された精神はギシギシと悲鳴を上げていた

『これ以上は流石にきついので休憩マジでお願いします。』と、幻

聴が聞こえる程である

「今度こそ、お風呂に入ってからゆっくり眠るんだ。早く……！」

今回は何の妨害も無く、無事に部屋に着くことが出来たようやく、ようやくゆっくり休める……！

「ただいま～」

「おかえりなさい主」

「……」

扉を開けた瞬間変な物が見えたあれ？　ここ俺の部屋だよな？　なんでレイナが鎖に繋がれてるんだ？

「た、助けてください～（泣）」

「何か言いましたかレイナさん？」

「ラ、ラストさんは美人です」

「あら、ありがとうございます」

「って、お前等何やってんだ――？！」

「別に犯ってなんかいませんよ？」

「なんか微妙に違う気が……って、それよりラスト！　やるなら、レイナの部屋でやれ。俺は今から寝るんだ！！」

あと、天井に道具置くんじゃねぇたまに、変な音とか聞こえるんだぞ。『ジジジジ…』って。まあ、気になって見てみればピンクのボールみたいなのが動いてただけだけど（ちなみにむかつくからぶち壊した）

「せ、刹那さん。それより助け「めんどいからパス」そんな……刹那さんの薄情者～！　こうなったら、さっきラストさんと一緒に盗聴言葉を皆にばらしちゃいますよ？！」
「へえ、どんなの？」
「あ、ここにありますよ？」

ラストが取り出した機械からかすかにだが俺の声が聞こえる
えっと……小さすぎて聞き取りにくいな

「もうちょい音量でかくし『リ、リキュルお姉ちゃん……』ぐはぁ？！　……な、なあ、二人とも、本当にこれを公表するつもりなの？　なあ、ラスト？　お前はそんな事しないよな―（副声音：したらマジ殺すからな？）」
「私はしませんよ？　もし私と間違えられたら『人生最大の汚点』じゃないですか♪」
「うぐぅ……！　レイナももちろん言わないよな？」
「助けてくれなきゃ言いふらします」
「ラ、ラスト……すまんけど今日は我慢してくれないか（明日以降なら容赦なくやっていいからさ）？」
「そうですね。流石にこれはまずいですよね（この部屋使ってもいいですか？）」
「ああ、流石にきつい（問題ない。俺がいない時ならいつでも使っていいぞ）」
「なら、止めましょうか（にしても、主も悪人ですね♪）」
「すまない恩に着る（お前ほどじゃねえよ）」

ちなみに（）内は全てアイコンタクトだ
レイナはちょいと調子に乗りすぎた。もう、今まで何に使われるか分からないけど、使われないように……と、壊していた道具もこれ

から壊さないようにしよう。レイナが精神崩壊したとしても自業自得だ

「ありがとうございます刹那さん（これからもこのネタで助けてもらおう♪）」

「いや、気にすんな。俺に利益があるから助けただけだ（これからの地獄楽しみにしとけ♪）」

「おやすみなさい主（さて、明日の準備でもしますか♪）」

＝　＝　＝　＝

風呂上り、部屋に着くと……馬鹿がいた

それも、人の本棚を漁っている状態で

「これじゃねえし、これでもねえ。チッ、早くしねえと見つかっちまうからな」

「……へえ、誰に？」

「そりゃもちろん刹那に決まってんだろ。アイツにばれない内に大人のバイブルをだな」

「大人のバイブル？」

「エロ本だよエロ本。いや～、他国の奴に貸してからなかなか会えなくてな。まだ返してもらってないから他の奴に借りようと思ってな。アイツも男だし持ってるだろうと思ってな。こっそり、借りに来たってわけよ」

……コイツハナニヲイッテルンダロウ？

「フラウ、俺はエロ本なんて持ってないぞ？　興味ないし、何よりあれは１８歳じゃないと読んじゃダメだろ」
「またまたぁ～、アレを持ってない男子とかいる訳ないって。にしても、マジでどこに隠してるんだ？」
「だから読まねえよ。つーか、何人の部屋漁ってんだお前はーーー！！！」
「え？　げぇっ、刹ｎ、ぐぼげぇ？！　おげ、ふご、ばびしゅ？！」

問答無用で殴り続ける。途中、グシャ、から、メチャ、とかヌチャって音に変わっていく
そして、殴っている間に刹那は思った

この城に住んでると阿呆が沢山いて退屈はしないけど……正直疲れるな。たまにはゆっくり休みたい

＝　＝　＝　＝

と言う訳で、農園でトマトの収穫をしていた地味キングに休暇をもらう事にした（忘れてるかもしれないが、一応レイナの護衛という仕事をしている）

「うん。別にレイナの護衛自体単に君が近くに居たら安全であろうという保険でしかないから別に問題はないよ」
「そっか～。ところで地味キング」
「もう定着してしまってるみたいだけどそれ止めてほしいな。で、どうしたんだい？」
「どんな風に休めばいいんだ？」
「え？　普通に休めばいいんじゃないかな？」

いや、普通の休み方って

ゲームとかＴＶとか小説とかしかやったことないからな～
買い物は必要最低限の物があればいいし……服とかは自分で作れるし

「そうだね、私ならこの農園で一野菜（この子達）を育てるのが休みだし、シンゲンは鍛錬か子供の世話しかしない。リキュルならストーカー紛いの事でもしてるだろう。リクスはよく里帰りをしているな」

「どれも俺には無理そうだな」

「ん～、他の者も基本家で休む程度だし、たまに武者修行の旅に出かける者がい……そうだ」

「ん？　なんかいい案出た？」

「旅に出てみたらどうだい？　この城に来てからのことしか知らないが、あまり世間一般の事を知ら無いだろう？　これを機に色々世界を回ってきたらどうだい？」

「……面白そうだな。よし！　明日の朝一で旅立つか！」

「え、それは速過ぎな「じゃ、地味キングありがと！」あ、え、ちょっと待って」

なんか地味キングが言ってたが気にしない
それより旅だ！　野宿セットとか野外用調理器具とか用意しなきゃ！！

＝　＝　＝　＝

野宿セット　……ＯＫ
調理器具　……ＯＫ
テント　……ＯＫ

枕　　……OK
金貨2千枚　　……OK
おやつ（5百円分）……ok

これだけをディンにもらったリュックに詰め（中に入っていた物は全て出した）、他に忘れ物がないかチェックする

「いらない物は……あ、ラストは置いてくか。その方が（俺の精神衛生上と、調子こいたバカ姫の反省材料に）良いだろうし。……この旅の間に、一目で男って分かってもらえるようになりたいな～。ヒゲとかすね毛とか胸毛とか生えればもうちょっと分かってもらえるんだろうけど。はぁ……」

まあ、それは置いといて……忘れ物はないな
よし、じゃあ明日に備えて寝るか！！

＝　＝　＝　＝

ベッドに入ってから、約5時間が経過した

（羊が7万とんで32匹……羊が7万とんで33匹……羊が眠れなくて7万とんで34匹）

結局、眠ることが出来ずに羊を１６万とんで９０７匹数えていた刹那だった

旅立ち……最初がいきなり予想外（前書き）

はい。なるべく早く更新しました
まあ今まで放置してた分頑張らないと

旅立ち……最初がいきなり予想外

結局一睡も出来なかった。というか、羊が頭から離れない１６万とんで９０４匹

「少年、目が血走ってるぞ？　あと、すっごいふらついてるからな？」

「お前、そんな体調で大丈夫かぁ？」

「大丈夫だ……問題ない」

あれ、今俺なんてった？　かなり危険な事言った気が……

ま、まあ問題無いだろう

「主、一言言わせてください」

「なんだ？」

「何旅に出るとか勝手に決めてるんですか糞野郎♪」

「……安心しろ。お前は連れてかない。分かったかド変態悪魔さん？」

「（プチッ）クスッ、そんなの当たり前でしょう？　あと、そのセリフは自分自身に返ってくるって理解してます？　無自覚ドＳ小便小僧♪」

「（プチッ）あはは、手前とは違うんだよ塵芥にも劣る三流女王様が。だいたい、手前は俺の作り出した能力だろうが。何創造者の意見に文句言ってんだ脳みそ腐ってんのか？　ああ、だから手前の口から腐敗臭がするのか」

「（ブチリ）なかなか面白い冗談を言うんですねオカマ野郎♪」

「（ブチリ）いやいや、俺は冗談なんて言わないぞ。全部真実だからな。認めたくないのは分かるが認めろよ雌豚」

「「あはははははははははは」」

乾いた笑いが辺りに響く
コイツぶん殴ろうかな？　とか思っていたら……

「まあ待て、少し冷静になれ」

魔理亜
変態が間に入ってきた

「あのさ、俺はコイツ殴りたいんでどいてくれない？」
「主の顔面蹴りあげるのでどいてください」
「まあ落ち着け。その怒りは私にぶつけてだ『ドグチャ！！』げがぶっ♪『メキメキ！』くふりゅ♪」

ラストが耐え切れず魔理亜の顔を蹴り上げたところを、俺が本気の左ストレートを鳩尾（みぞおち）を叩き込んだ。その後、ラストと俺は魔理亜を挟む形で蹴り続けた。合わせて１６００コンボくらい。コイツの性癖はむかつくが、サンドバックには重宝する

「ナイスサンドバック♪」
「すっきりしました♪」
「あ、ありが、ごふっ♪　と、とうございます♪」

とても歪なの妙にフィットした三人だった

「……二人の喧嘩は怖いわ」
「絶対とばっちり喰らうと思います」
「……少しばかり、怖かったです」

「なんだ、リクスでも怖がるんだな」
「……女の子ですから。あと今の一言は普通に失礼ですよ」

なんか外野の面々が好き勝手言ってるな。まあ、地味キングはまだ自力で立てないシンゲンさんの介助してるから静かなもんだが

……ん？　よく見たらワンコがいない

いや、別にいなくてもいいんだが、こう、なんていうか……ちょっと寂しい。いつも、玄関まで追いかけてくる子犬が今日は来ないとか……そんな感じ、かな？

「ん？　どうかしたか刹那？」
「いや、別に……じゃあそろそろ出発するわ。おい、お前等、留守番頼んだからな？　じゃ、行ってきま「待て」……なんだよ？」
「出発の前に景気付けだ。私がいい物をやろう」

そう言って、何処からか紙袋を出した魔理……ん？　ＢＧＭが変わった（いや、今までは流れてなんかなかったけどな）？

「今から渡す物は……昔、パンの作り方を教えてくださった方が特別にレシピを教えてくれた物だ。このパンは究極にして至高のパン。その名も……」

魔理亜が袋を開けた瞬間、七色の光が世界を照らした

やばい、嫌な予感しかしない

「ハイパーレイン〇ーパンだ！！」
「予想通りだよチクショー！！」
「お好みでジャムもあるぞ？」
「待て、まさかそれはその……甘くないジャムか？」

「よく分かったな」

なんてこった。ハイパーレイ○ボーパン＋謎○ャムってだけ最強コラボなのに……その上、魔理亜の手作り……だと?！　……やばい、舌がストライキを起こすかもしれん

【魔理亜がパンを渡してきました。どうしますか?

誰かにパスする（おそらく全員避ける）

?回避（回避成功確率８４％）

地面に叩き付ける（流石に泣かれる）

「ほら、少年食え♪」

「ま、魔理亜?　これは道中ゆっくり食べさせてもらってもいいか?　実はさっき飯を食ったばかりで腹が減ってないんだ」

刹那は回避を選択した

「そうなのか?　感想を教えてもらいたかったのに……残念だ」

刹那は回避に成功した

アイテム「ハイパーレ○ンボーパン（魔理亜作）」を手に入れた

アイテム「謎ジ○ム（魔理亜作）」を手に入れた

アイテム合成リストに【○苗＆秋○コラボＳＰ】が追加された

刹那は称号【大量殺害兵器所持者】を手に入れた

魔理亜は称号【お前にレイ○ボー！】を手に入れた】

……今のＲＰＧ風のナレーションはいったい？
しかも、その称号凄くいらない

「どうした刹那？」
「いや、気にすんな。それより、今度は本当に行くから……じゃ、行ってきます」
「「「「行ってらっしゃい」」」」
「土産頼むぜ！」
「できれば、甘いお菓子がいいです」
「私は可愛い女の子がいいわ」
「リキュルは黙りなさい。あ、私はいりません」
「刹那、旅を楽しめ」
「刹那君、道中気を付けてね」
「帰ってこなくてもいいですよ主♪」
「じゃあな。また会おう少年」

＝　＝　＝　＝

さて、とりあえず町で地図でも買わないとな。よし、雑貨屋に行くか

雑貨屋、雑貨屋……どれだっけ？
よし、適当に人捕まえて聞くか

「すみません」
「は、はい？　なんでしょうか？」
「雑貨屋ってどこにありますか？」
「ざ、雑貨屋ならあそこの赤い屋根の家を右に曲がってすぐですよ

？」
「ありがとう！」

赤い屋根……あれか
教えてもらった場所に行くと……なぜだろう？
なんだか、もの凄く嫌な予感がする。特にあのゴリラっぽい店員から……まあ、地図買ってすぐに帰れば何もないだろう

「すみません。地図売ってませんか？　世界地図なんですが」
「地図ですね。ちょっと待っててくださ……ッ？！」
「……？　どうかしましたか？　もしかして、俺の顔に何かついてます？」
「……とぼけるんじゃねえよ。手前だけは絶対に殺すと決めてたんだあぁ！！」
「ええ？！　なんでさ？！」

いきなりの事に驚いていると、店員はバカみたいにデカい棍棒を出してきて、いきなり殴りかかった

「よくもぉ！　俺と俺の友達を！　死ねぇ！」
「待て！　なん、うわぁ？！　って、危ねぇだろうが糞ゴリラ！！」

ちょっと、（スカートに）かすったじゃねえか？！
ああ、結構気にいってたのに……！　コレ、作るの結構時間掛かるんだぞ？！

「避けんな！」
「まず殴んな！　つか、マジで誰だよ？！　ゴリラに知り合いはいないぞ？」
「ふざけんな！　手前のせいで……一週間下痢になって、その上俺

と友人をぼこぼこにしやがったじゃねえか?!」
「……あ、ちょっとタイム。今、なんか思い出しそう」

下痢は……そうだ。確か、ラストが馬鹿を懲らしめた時にそんな道具を使ったって聞いたな
ボコボコの方は……そうだ。確か、ラストが前懲らしめた奴等がお礼参りに来て自滅しました。って言ってたな?

……つまり、勘違い&逆恨みだな?
ったく、ラストの尻拭いなんてしたくないのに……しゃあない

「少しばかり遊んでやるよ」

ゴリラの側面に回りこみ、左膝の当たりに蹴りを叩き込む

「なっ、がぁ?!」
「手前はウホッ♪　以外喋んな」

ひるんでいる間に柔道の大外狩りで倒した後、起き上がる前に踵を喉に押し付ける

「なあ、このまま首を折らたいか?　そうか折られたいか」
「い、言ってな、ッ……ぐっ、ぉ……!」
「だから、手前はウホッ♪　以外喋んなよ?　まあ、それはそうとさ。俺今日から旅に出るんだけどさ~、地図とか無いんだよ。タダで手に入ると嬉しんだよな~。もし手に入ったら、凄く助かるんだよな~?」
「ウホッ?!　ウホッ、ウ、『グググッ』……ぅ、お?!」

「手前何ウホウホ楽しそうに言ってんだ？　言葉喋れんだろう？喋ろよ」
「（理不尽だ！）　ち、地図はくれてやる！　だからこの足をどけてくれ！！」

うんうん、これで地図は確保した。それにここまで脅えれば……俺等に刃向かおうとかもう思わないだろう

「なら早く持ってこいよ。離して１０秒以上経ったら武器探してると判断して、首の骨を折りに行くからな？」
「そ、そんなに時間かからない！　……ほ、ほら！　これでいいだろう？！」
「ああ、助かったぜ……あ、それと」
「まだなんかなんかあんのかよ？！」
「だから、手前はウホッ♪　以外喋るんじゃねぇ！」
「理不尽過ぎだーーー！！！！　ごぶごっ？！」

さて、遊ぶのはここまでにして
（あそこまで、やって遊びかよ……グハァ！）
「必要な物も揃えたし……そろそろ外に行くか♪」

＝　＝　＝　＝

凄い……これが外の世界か
目の前一杯に広がる森、魔物、食べ物……ごめんなさい。嘘つきました
目の前に広がるのはただの荒野です。確かに道らしいものとか、遥遠くに森が見えたり、川も流れたりそてりするけど
旅するんならもうちょい緑のある場所がよかったよ

「まあ言っても仕方ないけど」

とりあえず、地図を見たところ……あそこの森を超えるてすぐに村があるみたいだ。……なんて読むんだコレ？

しょうがない。能力使ってみてみるか

【Μ？λλον（メロン）：ギリシャ語】

村の名前の意味は未来。特産品は無いが、畜産業で有名な村ただし、今年は魔物の大量発生影響で出荷数が例年に比べ減少している

ちなみに、出荷している魔物の名前は【オーク】【コカトリス】【ミノタウロス】。

……え？

待て待て、今おかしいのあったよ？

オーク？　コカトリス？　ミノタウロス？　それ、全部アウトじゃね？　いや、むしろチェンジじゃない？　何？　じゃあ、今まで豚肉とか鶏肉とか牛肉だと思ってたのって……こいつ等の肉だったの？！

いや、落ち着け。あれだ。見た目はまともなのかもしれない……まともであって欲しい。

凄く気になる。よし。とりあえず、そこに行ってみよう。なんてったって近いし、なにより、まっすぐ行けばいいんだし。そして何より魔物がすごく気になる

「この地図だと……2？か。走れば30分くらいで着くかな？」

よし、まずは森を目指して全力疾走だ！

１時間後…

ぜえ、は、ぁ……やっと着いた
これ、地図縮小しすぎだろ?！　城と森の距離２?なのに走った距離軽く４０?くらいあったよな?！
すぐ着くと思ったから走ったから、凄い疲れたよ?！

「『水よ集まりて　我が喉を潤せ【ミネラルウォーター（とりあえずペットボトルで）】』」

魔法で水（とペットボトル）を作りだし、一気に飲み干した

「ぷはぁ～♪　美味かった。とりあえず、森には着いたし……飯にするか。もう、１２時過ぎてるみたいだし」

リュック（ちなみに、どこぞのバカ神がくれた物なので異次元みたいなのに繋がってます。どれだけでも入る代わりに探すのが大変だ）から調理器具を出さなきゃな。今日は何を作ろ『がぶっ』……

リュックに手を入れて、調理器具を探していると……何かに噛まれた

「って、はあああぁぁぁあ?!　ちょ、痛ッ?!　なんなんだコレ?!　イタタタッ?!　指千切れる?!　だから、痛いって?!」

リュックから手を（噛んでる奴も一緒に）出す。そして、噛んでいる物を見てみると

「がるるるる!!」

可愛らしい犬耳、逆立ってる尻尾、怒りに燃えてる瞳、そんでもって怒ってるのに迫力のない顔

「ワンコじゃん」

「ワンコ言うなーー!!　私はディアナだ!」

「いや、それよりなんで?　なんでコレに入ってたんだ?」

「お前が寝ぼけて入れたんだろうが?!」

「いや、寝ぼけるも何も俺昨日寝てない……」

「良い訳するな?!　昨日私がトイレに起きた時、目を瞑ってまま『羊の腹から腸がはみ出てる７万とんで９０３匹…』とか言いながら、私の尻尾掴んでこの中に入れただろうが?!」

ごめん、まったく覚えてない。というか、昨日俺寝てないよな？
もしかして眠ってない夢を見てたのか？　そして、もし本当なら何故入れた？

「なやむ前に謝れ！」
「ごめんなさい」
「うん。許さん」
「許さないのかよ？！　土下座までしたよ？！」
「朝ごはん食べれなかった！　お前のせいだ！　だからごはんよこせ！　おむらいすとスープと、肉がいい！」

いきなり我がまま全開だな。まあ、今回は俺のせいみたいだから許してやるが……でも

「卵無いからオムライス無理、スープは調味料そんなにないから却下。肉は牛肉、……あ、いや、ミノタウロスしかないぞ？」
「なんでだよ？！　オ～ム～ラ～イ～ス～！」
「だぁー、騒ぐなお前は？！　確かお前お姫様じゃなかったっけ？　いいの、こんなところで大暴れして？！」
「オムライスーーー！！！」
「うるせぇーー！！　分かった。作る。作るから！！　ああ、くそめんどくさい……。飯食ったら城に連れてくからな？！　分かったな？！」
「……城に戻ってからもおむらいす作ってくれるか？」
「現在俺休暇中。なんで他人の飯作らにゃならんの？　ラストか魔理亜に作ってもらいなさい」
「……あいつ等のごはんは怖い。でも、他の奴らの不味いし……そうだ！　私も旅に着いてく！　そしたら毎日おむらいすだ！」
「却下。ついて来ても無視するからな？」

「……泣くぞ？　泣くからな？　お前の後ろで泣き続けるからな」

想像してみる
どこかに泊まるとき、町を歩くとき、誰かと喋るとき、買い物をするとき

……ダメだ。全員俺を白い目で見てる

「……あのさ、今すぐオムライス作るからさ。帰ってくれない？」
「嫌だ。私はもう決めた。毎日オムライスを食べると！」

ダメだ。この手のタイプは絶対しつこい。友人（？）がこんなタイプだったからな。一度決めたらやり遂げるというか……人の気持ちを考えず独断専行するというか……はっ？！　いかんいかん。またトラウマを思い出すところだった

「ど、どうした？　ま、まさか泣くほど私と一緒は嫌なのか？　グスッ…」
「え？　ほんとだ。涙出てる。って、違うぞ？！　お前がいるのが嫌だから出たんじゃない？！　だから、泣くな？　なっ？！」
「本当か？」
「本当だ！　ただトラウマを思い出しただけだ！」

ああ、よかった。とりあえず落ちつてくれたか
……でも、本当にどうしよう？　ワンコ連れってった時の事を考えてみよう

泊まる時……バカ、一番良いところに泊まろうとするな？！　し

かも、二部屋?!　無理だ。ちょ、泣くな?!
町を歩く時……あ、こら!　勝手にどっか行くな?!　って、待て?!　なんで見るからにめんどくさそうな方に行く?!
人と話す時……バカ、フラウや俺に話すような感じで話すな?!
人の神経逆なでするような言い方は止めろ?!
買い物時……勝手にカゴに入れるな?!　しかもお菓子ばかりじゃないか?!　返してこい?!　だから、すぐに泣くな?!　ほら、一つ買ってやるから?!　え?　3つがいい?　わがま、大声を出すな?!　分かった!　三つだからな?!　って、一番高いの選ぶんじゃない?!

……ダメだ。絶対すぐに金が尽きる

「……本当は外を歩いてみたいだけなんだ。見てみたいんだ。外の世界を。城以外の場所を……で、出来るだけ我慢とかするから。自分の事は自分でするから。連れてってくれ」
「……はぁ、昔から子供に甘いって言われてたけど、自分で自覚したの今日が初めてだよ」
「……ど、どういう事だ?」
「出来ない事はすぐに言え。わがままも、……たまになら言っても良い。お金も心配しなくていい。ただ、危なくなったらすぐ逃げる事。あと、料理で好き嫌いをしない事。それが約束できるなら付いて来い」

一瞬ポカンとした表情を作り、その後徐々に嬉しそうに笑うコイツを見て、ちょっと嬉しかった
正直今でも連れてきたくない。金銭面のトラブルとかも嫌だけど……それは働けばすぐ貯まる。我がままの耐性も『あっち』でついてる。さっきまで言葉や思考は単なる良い訳だ。目の前で知り合い

が死ぬのが嫌なのが本音なんだよな……まったく、知らないからってのんきに喜びやがって

そんな純粋に喜ばれると怒れないだろうが。まったく、このアホ犬…

「おい、ワン……ディアナ。喜んでないで行くぞ。オムライス、食べるんだろう？　さっさと、この先の村で卵買おうぜ」

「え、あ、うん！　……あれ？　今お前私の事「早くしないとおいてくぞ？」あ、待て！」

さて、これからどうなるのかな？

刹那はかなりムカついたようです（前書き）

ちょっと、というかかなり治しました

刹那はかなりムカついたようです

メロンに着いた俺たちはさっそく卵を買いに行った
ちなみに、その途中でオークとコカトリスを見たが……正直後悔した。コカトリスは尻尾が蛇になっただけの鶏だったが、オークは、オーク、オー……ごめんなさい。出来れば考えたくないです
だって、なんというかムキム……いや、マッ……筋に、……とにかくブタがボディービルダーになったと思ってください

まあ、それはそうと……

「……ディアナ。その、菓子を持ってきたいなら持ってきていいぞ？　そんな物欲しそうな目で見ながら我慢されると逆に困るんだが？」
「べ、別にお菓子なんて食べたいわけじゃ「なら俺が食べたいからおススメの物を何か買ってきてくれ」……しょ、しょうがない。じゃあ、そこで待ってろ」

ものすごく嬉しそうに尻尾と耳を動かすディアナを見てちょっと可愛いと思ったが……言うと、何か言われる気がしたから黙っておく
にしても、さっきから俺の視界の端で喧嘩してる奴等はどうにかならないのだろうか？
とりあえず唇の動きで内容を判断してみると……

『魔物のエサが足りないだと？　貴様等、1年分の金額を渡したのに足りないと言うのか？！』

『だからあの子憎たらしい魔物がエサの木の実を食べてしまうと言ってるだろうが?!　だいたい、領主であるアンタにはこの村の問題を解決する義務があるんだ！　文句を言う前にあの魔物を殺してくれ！』

『貴様！　私に向かってなんて口のきき方だ！』

……ああ、魔物の大量発生がどうたらで困ってるって話か

まあ、俺には関係ないからいいや

「刹那、これとこれが私のおススメだ！　こっちは甘くてサクサクしてるんだ！　とっても美味しいんだ♪　こっちはちょっと硬いけど、その硬さがたまらないんだ♪」

「……そうか、よかったな～」

なぜだろう？　この嬉しそうにお菓子を持って来たディアナを今ものすごく撫でたい

「それでだな。このお菓子の他にも美味しいのが……ん？　なんか、ケンカしてる奴らがいるぞ？」

「領主が魔物を倒してくれないのに、文句しか言わないんだと」

「なんだそれは？　領主とは、―弱き者（民）を脅威から守り、生活を支え、そして管理する者だ。それをなんだあの男は?!　許さん！」

「あ、ちょっと待てよディア「ちょっとお客さんお金!!」ほらよ、釣りはいらんから取っとけ！」

店員に金貨を投げ渡し、暴走したディアナを追う。あのアホ犬は自分から厄介事に突っ込む気か?!

ちなみに……金貨を受け取った店員は腰を抜かしたのはまた別の話

＝　＝　＝　＝

「おい、そこのオークみたいな領主！」
「誰がオークだ？！　……ん？　誰だお前？」
「領主な、うわぁ？！　こっち向くな怖いだろ？！」
「さっきから黙って聞いてると失礼だな？！　衛兵共、このガキを捕まえろ！」

衛兵は一瞬とても嫌そうな顔をした後、無表情になってディアナを捕まえようとした。多分小さな女の子を捕まえるという行動に躊躇ったけど、自分の明日の為に捕まえようとしたな

「すまないが少しまってくれないかボルックスさんとカステルさん。あと、そこの領主さんも連れが迷惑を掛けたようで悪かったな」
「……貴様は誰だ？」

ああ、面倒だ。何が面倒って？　コイツと話すのがだ
解析したところ此処はシルディアの領地っぽいし、コイツ以上の権力を見せつければ何とかこの場は収まるだろう
めんどくさいけどそれらしい喋り方もしないとな

「私か？　私はシルディア王国公爵家が一つ、如月家の人間だよ」
「こ、公爵？！　ふざけた事を抜かすな？！　シルディアの公爵家は2家のみだ！　その中にキサラギという名は含まれていない！」
「ああ、最近なったばかりでね。ウィリアムがどうしても……と頼んだのできたので3日程前に公爵になったんでな。正直、どんな事をすればいいのか見当もつかんので各地の領主にあいさつ巡りをし

ているところさ。まあ、急に現れた男が公爵などと言われれば疑うのも無理はない。水晶で王と連絡を取ってみたらどうだね？」

正直自分でもよくこれだけの嘘八百が出てくるもんだと思うまあ、信じたら儲け物だし、信じなかったら今日から公爵だろう

「クッ、少しそこで待っておれ！」

とりあえずブタ面、もといオーク面した領主が家の方に駆けていくのを見送る。さて、あの領主はどんな反応をしてくれるかな？

「刹那、お前いつの間に公爵になったんだ？」
「たった今から」
「流石にウィリアム王も手伝ってくれないんじゃ「いや、絶対に大丈夫だ」……なんでだ？」

俺は今、とてつもなく悪い笑顔をしているのだろう
……ディアナが泣きそうな目で見てるし止めよ

「まあ、簡単な話……ラストと魔理亜がいるからさ」

＝　＝　＝　＝

書類に目を通していると、メロンの領主から緊急の連絡が入った

「私だ。何か問題があったのか？」
『こ、公爵家を名乗る者がいるのですが……本当に公爵家の者か確かめさせていただきたいのですが』
「ふむ、なんと名乗っていた？」
『き、如月家と……』

せ、刹那君？　確かに色々世話になってはいるが、これは流石に許容範囲軽く越す問題だよ？

「安心しろ。彼は友人だが、公しゃ……く……」

いきなり、扉が開き、恐ろしい笑顔で笑っているラスト君を見て、言葉が出なくなった
ラスト君は白い紙に可愛らしい文字で恐ろし過ぎる事を書いて私に見せた

【主（と私）を公爵家にしない場合、私が見た目や臭いを通常の物と同じにした魔理亜の料理を城の人間全員に配ります】

……正直、冷や汗が止まらない
私は未だかつて経験したことのない国の危機に震える事しか出来ず、彼女の言いなりになった

『王？　どうなさいましたか？』
「あ、いや、彼とはとても親しい間柄でな。この前の戦争でこの国

を助けてもらったから、こ、公爵になってもらったんだよ？」

目の前のラスト君が親指を立てているのを見て、私は真っ白に燃え尽きた

＝　＝　＝　＝

「さて、ラストの事だし上手く脅して公爵家にしてくれただろう」
「……どんな脅しをされたのか、簡単に想像できるのが嫌だな」

そんな話をしていると、全速力で駆けてきたブ、オーク面の領主が現れた
よし、少しふざけてみよう

「はぁ、はぁ……さ、先程はすみませんでした」
「おい、誰だ？　オークは放し飼いにしてはだめじゃないか。衛兵の諸君、そのオークを小屋に入れておけ」
「オークの放し飼いだと？！　貴様等、何をしている？　管理がずさん過ぎではないか？！」
「おお、このオークは話すのか。これはまた不思議な物を見た。さて、そろそろ良いんじゃないのか衛兵諸君？　今、この場で一番の権力者は誰か……君たちは分かっている筈だ。……そうだ。さて、私はこの場にいる喋るオークをどうにかしてほしいのだが、出来るかね？」

俺がとても黒い笑顔で二人の衛兵達は嬉しそうに領主に近寄り、腕を掴み高速した

「き、貴様等何をしている?!」
「何を? オークの捕獲ですが?」
「それより、このオークをどうすればいいんですか?」
「そうだな……なかなかに面白い見世物だ。檻に入れ、村の入り口の所に放置しておこう」
「「分かりました」」
「ま、待ってください如月様! 私はオークなどでは「オークは皆そういうのだよ」いや、まずオークは喋らないのでは? あ、馬鹿者いますぐ私を出せ! 待て、私の命令に背くのか?!」
「いえ、ただ公爵様の命令なので私たちは逆らうことが出来ません」

さて、邪魔者はいなくなったので、とりあえず一言

「アホかお前は?」
「え?」
「あんなもん、無視して休憩だけすれば地味キングに迷惑かけないで済んだし、なによりこんな厄介事に巻き込まれる事なんてなかっただろうが」

あ、待て泣くな。泣かせたかったんじゃない。ああ、くそ! これからの為に一回目はガツンと言うつもりだったのに~!

「ご、ごめん。で、でも、わた、私は「あ、あくまで俺が面倒事が嫌いなだけでお前は凄くいい事をしようとした。まあ、結果は思いっきり場を乱しただけだが、それでも悪い事を注意しようと思ったのは良い事だ」……」

「ほら、泣いてないで胸を張れ。お前は別に悪い事は一つもしてない」
「う、うん。せ、刹那……」
「うん？」
「ありがとう。あと、ごめん」
「気にすん……いや、盛大に気にしろ。まあそれは置いといて、せっかく買い物したんだ。オムライスつくってやるから早く宿に行こうぜ？」

さて、この時はこれで騒動が終わりだと思ってたんだが……まだ続いていたのだった

＝　＝　＝　＝

えっと、これはどういう状態なのでしょう？
何故、店主がいきなり土下座で迎えてるの？　あと、さっき頼んだのは最も安い部屋だよね？　なんでそんなに豪華な感じになってんの？

「公爵様！　我々村人の悩みを聞いてください！　お願いします！」
「え、ちょ、一から説明して」

ヤバい。今のはまるで話を聞くのを肯定したみたいだ

「おお！　ありがとうございます！」

ダメだ。今更この状況を説明してくれなんて言えそうにない

「実はですね、この村は小さいながらも農業でそれなりの生活が出来ていました。ですが、今年ある魔物が大量に現れ、エサの木の実を食い尽くしたんです。そのせいで、ミノタウロスは痩せたまま出荷することになり、コカトリスは肉を売らずに卵を中心に、オークにいたっては半数以上が餓死してしまいました。そして、領主に魔物の討伐を頼んでも、帰ってくるのは怒声ばかり……これではいけないと思いギルドに依頼を申しこんだんですが、誰も受けってくれないんです。このままじゃ、俺たちの村が大変なんだ。公爵様の力で兵士や傭兵を集めて、魔物をどうにかしてください！」

「ごめんなさい。自力で頑張ってください」

即答だった。しかも、笑顔で

「力を貸す理由が俺にはありませんし、なにより、貴女方は自分たちで何かをしたんですか？　弱者の地位に甘えて、領主に頼んだりするだけで、自分たちで何か対策をしたんですか？　考えてすらいませんよね？　まずは自力で挑んでください。話はそれからだと思いますよ」

俺が丁重にお断りをしていると、一人血の気の多そうな奴がキレた

「手前、公爵だかなんだか知らねえが、偉そうに言うんじゃねえよ？！　手前も領主と同じで金が減るのが嫌なだけだろ？！　お前等貴族はいつもそうだ！　なんでも金中心で人の命を、そこらにあるリンゴと同じくらいにしか見てねえんだ！」

「ま、待て。刹那は「うるせえ！」がっ……？！」

なんか言いかけてたディアナを殴り飛ばす。偶然、ディアナは頭を打ち気絶してしまったようだ

そして、仕事か何かで使うんだろう。近くにあったナタをディア

ナの首筋に当て

「コイツを殺されたくなかったら、アイツ等を殺してくれよ?!
こっちだって、命かかってるんだ！　本気で刺すからな！　はったりなんかじゃねぇぞ！」

どこぞの三流ドラマみたいな事を言ってた

「……えっとさ、これがこの村の考えた結論で良いの？　それならそれで対処するけど？」
「お、お待ちください。彼もやりたくってやっている訳「ほう？俺が公爵だと分かった瞬間から、断られた時にディアナを人質に捕ろうとか思ってたのによく言うね？」……そ、そんな事は少しも考えておりません！」
「『この若造が！　まさか気づいていたとでもいうのか?!』……ね」
「なっ?!」

でもまあ、やり方はともかく俺を脅してでも村を守りたいって気持ちは分かった
うん、殺さないでやる。だけど、許せないものは許せないからな

「はいはい。茶番はおしまい。なあそこのダングイス君。とりあえず、ディアナ離してくれない？　これ以上は殺、怒っちゃうよ？」
「ふ、ふざけんな?!　手前は状況が分かんねえのか?!　コイツの首に向けてるコレが見えないのかよ?!」
「うん、見えないよ？　だって、ほら。俺がもう奪っちゃたし」

そう言いながら左手を上げ、彼が持っていたナタと全く同じ包丁を皆に見せる。？――まあ、中身のないただの幻術（張りぼて）なんだけどね

一瞬驚いた顔をしたあと、確かめるように自分の右手の先を見る。そこには……ちゃんと包丁が握られていた。そして、ホッとしたかのように溜息を吐きこちらを睨んだ

まあ、そんな事はどうでもいい。一番大事なのは俺がそんな大きな隙を見逃す筈がない。という事だ

睨んだ時点でもう、右手の包丁は俺が奪い、それと同時にディアナを掴んでいた左腕の関節を極める。そして、後ろから包丁を首の動脈付近に当て、低い声で脅す

「ねえ、いい加減さ、ディアナ離せよ。マジで首掻っ切るぞ？　それともなんだ？　確か命賭けてるんだっけ？　あ、違った。命かかってるんだったな？　このまま、ザックリやった方が楽に死ねてお前のためか？　あん？」

「ひぃ、やめ、助け……はなしま、ひぎぃ？！」

さっきまで俺に向けられていた視線は金持ちの嫌な奴を見る目だったのに……これだけのことで理解出来ない物への恐怖に変わった。いいね、今はディアナも気絶してる。そして俺はコイツがむかつく。

何勝手にディアナ殴ってんだ。何コイツに刃物向けてんだ。コイツは……俺の大事な友達で、まだ小さい子供（刹那は知らないが２歳しか違わない）だ。危ない事してんじゃねえよ！

「人に刃物向けったって事は、自分に刺さっても良いってことだよ

な？　助けて？　やめて？　何それ？　どこの国の言葉ですか？
ごめんなさい。俺学がないもんで難しい言葉は分かんねえんだよ。
もっと、分かりやすい言葉で言ってくれませんかねぇ？」
「す、すいませ、すいませんでしたぁ！」
「うん、許す。だから、もう俺、俺達に関わるな。分かったな？」

その後、男を気絶させた後、ディアナを連れて部屋に移動した
とりあえず、魔法と能力を駆使し治癒を施した。さて、今のうちに
吐く嘘考えないとな

＝　＝　＝　＝

「ん？　……んんっ？」
「ようやく起きたか」
「あれ、刹那？　……さっきまで何してたんだっけ？」
「飯作ってる最中に寝てた。出来たから起こしにきた。ほら、早く
食べようぜ？」

……なんだろう。違和感を感じる
刹那はいつも通りなんだけど、それが凄く変な感じがする
刹那が変なんじゃなくて、他の……そう、周りの空気が違うんだ
腫物を見るみたいな、そんな感じ

「なあ、何かあったのか？」
「ああ、さっきお前が寝てる間に俺に絡んできた酔っ払いがいたん
でボコボコにして帰っていただいた。というか誰が姉ーちゃんだ」
「まあ、見た目完全に女だしな。でも、その話本当か？　あと肉お
かわり」

「変な事聞くなよ。嘘つく必要ないだろ？　おかわりは無い」

それはそうなんだけど……でも、なんだか違和感があるんだ。何かを隠そうとしてるみたいな

いや、……だとしても知られたくない事なんだろう。なら、話してくれる待つとするか

「それよりディアナ、お前に一つ質問があるんだ」

「なんだ？」

「お前はこの村をどうしたい？　俺は今すぐこの村を見捨てて違う場所に行きたい」

「……助けたいな」

「理由は？」

「ない。困ってる人を助けるのは当たり前じゃないか」

「予想通りな理由をどうもありがとうございました」

……なんでこんな事聞いてきたんだろう？

刹那は助けたくないみたいだし、私だけやれってことか？　うぅ、それは少し怖い

「……おい、とりあえず準備しとけ。その間に食器洗っとくから」

「準備ってなんのだ？」

「魔物退治するんじゃないのか？　やるならさっさとやって次の村行くぞ」

＝　＝　＝　＝

なんでかね？　なんでこうも子供に甘いのかねぇ、俺は？

アイツ等の為に何かしたくなんてないのに……どうしてコイツのわがままに付き合うのかねぇ？

脅えてるのに一人で行こうとか考えてるこのアホが、どうしても気になるんだよな。……ああ、そうか。分かったぞコレは、この気持ちはアレだ

お父さんの心境だ

「準備できた！」

「こっちもちょうど終わったよ。じゃあ行くぞ」

「あ、ちょっと待て先に行くな！」

でもまあ、こういうのも悪くはない。うん、俺絶対親バカになるな

村を助ける？　まさか、俺は俺がしたい事をするだけだ（前編）（前書き）

半年近く更新しなくてすいませんでした。ようやく仕事に余裕が出来たので少しずつ更新出来そうです

村を助ける？　まさか、俺は俺がしたい事をするだけだ（前編）

目標の敵を見つけたのはいい
問題は……アレは流石に倒すの無理、精神的に無理

だって、だって……
つぶらな瞳で見つめてくるし、なんかリスみたいだから触ってみたいし、なんというか凄く飼いたい
というか我慢とかもう無理

「せ、刹那？　落ちつてるか？　ほ、ほら、水でも飲んで、あ、こら、アレは倒す魔物だぞ？！　勝手な行動するなと言った本人がするな？！」
「……触りたい。撫でたい。なにより愛でたい！」
「ほ、ほらアメやるから我慢！」
「……むぅ」

くっ、しょうがない。アメを舐める間だけ我慢しよう
うん、無理

「隙あ、ぐがふっ？！」
「ふう、足に縄付けといてよかった」

↑　↑　↑　↑　一時間前　↑　↑　↑　↑　↑

まあ、森に来たのはいいんだ
ただ問題がさ、一つあるんだよ

よく考えたら、俺達魔物の姿知らない

「で、ワンコ。どうすんだ？」
「ワンコ言うな！」
「痛ッ？！　だから蹴るな。で、なんか情報あるの？」
「子供に聞いたらなんか小さくて可愛い奴だったそうだぞ？」
「わー、そうなのかー」
「棒読みは止めろ」

まあ、情報少ないなら魔物片っ端から解析して探せば良い
問題は、……さっき見えた龍と虎を混ぜたような魔物には出会わないようにしないとな。守りながら戦うには面倒な相手だ。だってほら、疲れるし

「で、ディアナ。何処に行くつもりなんだ？　この森、確か結構広かった筈なんだが？」
「……あっちからあの町の飼料と同じ匂いがする」
「……なあ、お前以外の奴もそんなに鼻良いの？」
「いや、私ぐらいだぞ？」

それ先祖返りってやつじゃないの？
もう名前ワンコに改名しない？

「今なんか変な事考えなかったか？」
「いや、全然。それより早く行こうぜ？　あと、見つけても勝手な行動はしないように」

「……分かった」

↓　↓　戻る　↓　↓

で、現在にいたる

一つだけ言わせてもらう。俺は変態ではない。たんに可愛い物が好きなだけだ

前のオークのせいで精神的ダメージを癒してくれそうなのがいたので愛でたくなっただけ。それは分かって欲しい

「分からないからな」

「分かれよ！　とにかく動物好きなんだよ！　そこに可愛い動物がいたら愛でる！　それでいいじゃんか！」

というかこの世界に可愛い奴少ないんだよ

魔物は基本的にグロい形だし、人は見てもつまらんし、本は歴史書とか教科書とかしかないし

「という訳でアレを愛でる。別に問題などないだろう」

「あるに決まってるだろう！」

「大丈夫！　俺動物にすぐなつかれるから！」

「そういう問題じゃないだろ？！」

2人はヒートアップし、徐々に声が大きくなっていく。まあそんな大声でケンカしたら勿論

『きゅー！』

気付かれるに決まっている

「げ、バレた！」
「お、お前のせいだお前の！」
「う、うるさい！」

とりあえず逃走を試みるが、時既に遅し
回り込まれ、退路を絶たれた

「魔物頭良いな」
「感心してる場合か！　ど、どうにか逃げるぞ」
「え？　何で？　話してみてからにしようぜ？」
「通じてたまるか！」

能力使えば簡単に通じるんだが……まあとりあえず話してみるか

「あーあーテステス。聞こる？」
『うん』『聞こえる』『あれ話せる？』『せるせる』『なんで』『でー？』『不思議』『なんで？』『遊ぼー』『ぼー』『何する？』『なになに？』『お腹空いた』『ご飯？』『ドングリ』『グリ』『グリコ』
「……よし、何一つ分からない」
『分からない』『ない』『いないいない』『何が？』『がー？』『がー』『がおー』『おー』

「せめて意味が分かるように言ってくれ……」
「私にはきゅーとしか聞こえないんだが」

まあ俺も能力で話せるようにしなきゃそういう風にしか聞こえんがな

とりあえず、話しは出来るみたいだしなんで盗んだのか質問するか

「なぁ、なんで村から餌盗んだんだ？」
『盗んだ？』『なになに？』『あれあれ』『どれどれ？』『木の実木の実』『あー』『とらちゃん』『ペコペコ』『かわいそー』『そー』『お父さん』『捕まった』『売る』『かわいそー！』『人悪い』『ペコペコ』『死んじゃう』『友達』
「ごめん、断片的過ぎてわかんない」
『とらちゃん』『お父さん』『捕まった』『かわいそー』『ご飯』『食べれない』『れない』『ないー』『ないない』『人悪い』『ご飯』『探した』『たー』

えっと……つまり？

「ディアナ、この森に毛皮が高い魔物っているのか？」
「タイガードラゴンがこの辺りに生息してるって聞いた事があるぞ。毛皮はだいたい……一匹辺り金貨１００枚はくだらないんじゃないか？」
「そのタイガードラゴンって肉食か？」
「いや、草食だ。草とかドングリを食うんだぞ」

だいたい予想出来た。なんで確信を得るために行動せねば

「なぁとらちゃん呼べるか？」
「とらちゃん？」
「すまん今は黙って。で、呼べるか？」
『呼べる』『べる』『とらちゃん』『とらちゃん！』『来てー』『てー』『聞こえる？』『るー』

不意にガサッという音が真後ろから……あれ？　この位置は何かヤバい気が？

『呼んだ～♪』

そして、妙に明るい声と共に２ｍくらいの白い影が

「い、グガッ？！」
『来たー』『たー』『とらちゃん』『うがー』
『うがー♪』
「……」
「刹那生きてるか？」
「し、死にそう」

とりあえず降りてもらい、話をしてみる事に

『おー、人だー。父さん元気かー♪』
「……いや密猟か何かされたんじゃないの？」
『おー、よくわかんないー♪』
「わかんないって……」

目の前にいるホワイトタイ……じゃなくてタイガードラゴンに聞き始めるが、第一声から不安である
にしても……めちゃモフモフ出来そうだな

『人、父さん村で何してるー♪』
「いや知らん」
『一週間帰って来ないからー、向かえに行くー♪　でも道わかんないー♪』
「前途多難だな」
『だなー♪　連れってってー♪』

コイツと話してると、予想が違う気がして来るから不思議だな。というか会話がかみ合ってるのかかみ合ってないのか分からん
でも、可愛いからいいや

「あとで抱っこさせて」
『別にいいぞー♪』
「交渉成立だな。と言う訳で、村行くぞ」
「待て。泥棒の犯人が分かってないだろ」
「それはこのチビ供がやった。理由はこの……とらちゃんのお父さんが人に連れてかれてご飯を食べれなくなってたのを見たので人から貰ったんだとよ。以上。よし、村に行くぞ！」

＝　＝　＝　＝

と言う訳で戻ってきた。が……もちろんこんなデカい（といっても２ｍくらいだが）ホワイトタイ、じゃなくてタイガードラゴンを連れて来た時点で追い返されそうになった

なので、権力という楯を使わせていただきました

「お前人に命令するの慣れてないか？」
「まあ昔から人にあれこれ言う立場に居たしな」

生徒会の庶務なのに会長が全く仕事しないせいで実質俺会長だったしな

「それより、何処にいるか分かる？」
『トラに聞いてるのかー？　臭いなら、……アッチだぞー♪』

トラちゃんが指（……いや爪？）を指した方向には、昨日見た豚が、オーク顔の領主の城（家とは言わさない）があった

「おい、どういう事だ？　何で領主の家に向かってるんだ？」
「魔理亜から受け取ったレイ〇ボーをこんなに早く使うとは思わなかったぜ」

「待て、今の物騒な発言はいったい……！」

後ろでディアナが叫んでいるが今は無視し、領主の家に邪魔をする

「こっちだな？」

『こっちだぞー♪』

「待て窓から入るな、これ不法侵にゅ、うぐっ！」

騒がれるとまずいので、色欲を使い前回修行で使った部屋に押し込めておいた

その後、トラちゃんの鼻を頼りに屋敷を彷徨（うろつ）いていたが、ある部屋でトラちゃんが動かない

『臭い消えたー』

「さて、じゃあこっからは俺の出番かね」

とてつもなく久しぶりだが……能力を作成するとしよう

■■■

解析で屋敷全体像は把握済み、何処にいるのかも分かっている。だが、そこに至るまでの道がない。おそらく転移魔法による移動なのだろう

なら俺が創るのはもう決まっている。今必要なのは移動手段だ

つまり、俺が創るのは『道』だ

■■■

「能力発動『理想の道（イデアルルート）』」

能力が発動した瞬間、俺の目の前には……何故かエレベーターがあった

「……は？」

自分でもビックリだ
道を創る筈だったのに何故かエレベーターが出来ている
おそらく地下にある部屋に行くのでエレベーターなんだろうが……
色々な意味で大丈夫なのか？

「ま、まあいい。トラちゃんとりあえず乗るよ」
『分かったー♪』

トラちゃんと俺が乗った時、無機質なアナウンスが流れる

【最下層までワープします】
「形意味ねぇ？！」
ツッコミが虚しく木霊する中、扉が開く
そこに広がっていたのは――

村を助ける？　まさか、俺は俺がしたい事をするだけだ（後編）

扉を開らく前から覚悟はしていた

赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤

部屋の中は不気味なぐらいに赤一色だ。むせかえる程濃い鉄の臭いが充満し、それよりも更に強い腐敗臭に胃液が逆流しそうになる

「……これだけ、殺されたって事か」

辺りを見れば頑丈そうな檻や用途不明な壺のような物があるその近くにある黄ばんだ骨は魔物の物だろうか？

『臭くて鼻痛いー』
「流石に元気ないか。にしても、ディアナ閉じ込めといてよかった」

こんな光景をディアナが見たら発狂するかもしれなかった

『父さんの臭い、あっちー』
「分かった行くぞ」

トラちゃんと共に奥に進んだ。通路を進んで行くと、大きな爪痕がくっきりと残っている。その近くには何人かの死体が転がっていた。運ぶ途中に暴れられたのだろう
同情する気はない。自業自得だ。だけど……

「やっぱり甘いよな」
『どうしたー？』
「何でもないぞ。何でも、な」

彼等に冥福を祈るくらいは良いだろう

＝　＝　＝　＝

ある程度まで進むと大きな扉が現れた
おそらく、この中にいるのだろう

「トラちゃ、……いちいちちゃん付けめんどいからトラでいいか？」
『別にいいぞー』
「トラ、ここで待ってろ。俺がお父さんを連れてくるから、な？」
『トラも行きたいー』
「ダメだ。ディアナと同じ所で待っててくれ。頼む！　あっちに沢山食べ物あるからさ！」
『ご飯ー？　分かったー♪』

了承を得たのでトラをディアナと同じ場所に送る
まあドングリとかも大量に置いといたから勝手に食べてる事だろう

「さて、行きますか」

＝　＝　＝　＝

扉を開けた瞬間、巨大な虎が吼えた。まるで泣いているかのように、
まるで何かを祈るかのように
虎の周りには7人程の人影がある
その内の一人が口を開いた

「……血液の枯渇を確認しました」
「そうか。流石は森林の守護獣、なかなかにしぶとかったな」

血液の枯渇、それはつまり……遅かったのか

「なぁ、アンタ等」
「なっ?!　貴様どうやって此処に?!」
「き、如月様?!　な、何故このような場所に?!」
「そんな事はどうでもいい事だ。疑問や驚愕は捨てろ。今から動かすのは口だけでいい。俺の質問に嘘偽りなく答えろ」

答えなんて解析でもう見えている。だからどんな答えを言っても俺は許さない。正直に言うなら楽に殺してやる

だが、嘘ならば……

「何故、こんな事をする？」

「そ、それは村の収入だけだと生活が苦し」

「金だよ」

「なっ？！　き、貴様何を！」

「無駄だよ。セブルさんよぉ？　このお兄さん、どんな答えでも殺す気だよ」

「鋭いな。全く持ってその通りだよ。何で分かったんだ？」

「へへ、傭兵やってると命の危機ってやつには敏感になっちまうのよ」

「そうか。じゃあもう一つ聞く。金貨一枚と、その魔獣の命……どっちが重たいんだ？」

「傭兵としては……金貨ですかね。個人的には何もされなかったのにこんな事はしたくなかったんですがね？　仕事だったんでね」

「分かった。お前だけ半殺しで許してやる。だがそれ以外の奴等はダメだ。お前等は偽りを語ろうとするだけじゃなく、命よりも金貨を選んだ。だから」

地獄の苦しみの中で殺し尽くしてやる

＝　＝　＝　＝

【傭兵視点】

目の前の男が小さく何かを呟くと赤い、片刃の剣が現れる

「お前等に選択する権利を与えてやる。俺に殺されるか、それとも俺に滅殺されるか」

「はぁ？　お前数すら数えられないのか？　お前一人でどうやってこの人数を殺すつもりだよ？」

「逆に切り刻まれるだけだーつの、ははッ！」

今叫んだのは最近入団した新入り達だ

じゃなきゃ、アイツを見てあんな言葉が出る筈がない

俺、いや少なくとも領主と今の新入りを除いた全員は分かってる

――こんなバケモノ見た事ねぇ……！

鍛えられた傭兵は恐怖の中でどう生き残るか、どうやれば勝てるかを一瞬の間に考えられる。いや、むしろ考える事が出来ないならば早々に死ぬだけだ

だが……目の前の相手は違う

（自分が生き残る姿が見えない。いや、そうじゃねぇ……死んだ姿しか想像出来ねぇ！）

こんなのは龍人に睨まれた時以来だ
いや、あの時はあくまで遊びだった。だが今回は実戦だ。確実に……殺される

「分かった。お前等は滅殺（ころ）されたいんだな
『時すら捕える闇の牢獄よ』」

2人の言葉を聞き、視覚出来る程のどす黒い魔力がヤツの体から噴き上がる
しかもヤツが唱えているのは……上位属性の?!

「『逃げる事は出来ぬ。此処は真なる闇の中。永遠にして一瞬の死を味わえ』」

闇の最上位魔法……まさか、使える奴がいたのか！

「【闇の牢獄（ブラック・プリズン）】」

突然、先程までバカにしたように笑っていた者の影が自らの本体を飲み込む
悲鳴は聞こえない。聞こえる筈もない。気付く前にもう消えたのだ

「さて」
「……ッ！」
「魔法で死にたいか？　物理的に死にたいか？　選べ」

その言葉を聞き、俺達は一斉に襲い始める。僅かでも生き残れる可能性(みち)を信じて

＝　＝　＝　＝

人には才能という物がある。もちろん才能があっても、努力がなければ何かを掴める程世の中は甘くない。だが、努力だけでは限界があるのは確かだ

そして、こと剣術において、如月刹那には才能がない。そして……
それは実戦になった時、ハッキリと形になる

「クソがっ……！」

四方から迫る剣や槍を捌く事しか出来ない
怒りに身を任せた良いが、圧倒的な技量の差と物量によって僅かだが押され初めている

（何故、俺達はこんな弱いヤツに恐怖を抱いたんだ？）

傭兵も疑問に思う
先程の恐怖はなんだったのか、先程の殺意もなんだったのか？　そして、今感じている圧力はなんなのか？

（やっぱり付け焼き刃の剣術じゃ無理か。せめて鎌の方が良かったか？）
「何故だ？」

不意に、先程の傭兵が話し掛けて来た。これだけの攻防（いや、一方的ですが）をしてるのに余裕のようだ

「お前、何で手加減して戦うんだ？」
「さっきか、らッ！　全力だ！」
「嘘だな。なら、何故悪寒が止まない！」
「しッ、るかぁッ！」

俺が大振りの一撃を振るうと、何故か傭兵達が下がった

「どうした？　どう考えても今のチャンスだったよな？」
「確かにチャンスだ。だが、罠の可能性もあったからな」
「ねーよ馬鹿。にしても、俺剣苦手みたいだわ。カッコいいから憧れてたんだけどな……」
「そうか。なら死ぬだけだろうな」

まったく反論が出来ない。確かにこのままなら確実に死ぬだろう。
剣の戦いならな
俺は【憤怒の太刀】を戻し、一度も使った事【大罪】を使う事を決意する

「ああ、本当に嫌だ。本当にアイツを使うのは嫌だった……！」
「何を言って……？」
「……七つの大罪、起動」

普段は楽に出来る能力行使も、【アイツ】を使おうとした瞬間、全身の血が逆流したかのような痛みが走る

そう、創る事が出来たのに……レベルの問題で使えないのだ

【エラーが発生しました。レベルが足りません。後９２の能力使用をした後、再度アクセ】

「うるせぇよ！」

頭の中で鳴り響く警告を無視し、無理矢理能力を使用する
この程度の痛みで止まるくらいなら、止まってトラを悲しませたまま、終わるくらいなら……！

【エラー。エラー。プロテクト発動。保護と隔離を優せ、ん？　ゆう、ラー、イルスの、入をかく】

今ここで死んだ方がマシだ！

【魂が龍と同等のレベルになったのを確認。次回よりレベル2としての能力使用が可能となりました。七つの大罪【強欲】の使用許可がおりました】

出てこい。そして、俺の望む物をお前の力で実現してくれ！

「掴み獲れ【強欲のナイフ】！」

決着と別れ

切り札（ワイルドカード）
それは一つで戦況を覆す程の力を持つ物である
そして、刹那の手に握られている漆黒のナイフは、切り札と呼ぶに相応しい力を持っていた

「なぁ、お前は「もし、どんな願いでも叶える事が出来る」としたらどうする？　今の俺の願いは一つだけだ」

そう言い、ナイフを領主に向かって投げる……が、カスリもせずに後方に消えた

「おい、ふざけてるのか？　投げるならせめて当てるくらいしろ」
「当てたよ。だから、この勝負は俺の勝ちだ」

直後、真上から轟音が聞こえる。上を見ると、仲間だった肉片が落ちてくる所だった

「なッ？！」
『■■■■■■！！』

何かが響き渡る。それは、どこか聞き覚えのあり、本能的な恐怖に意識を失いそうになる『咆哮』だ

「ま、まさか……！」

そんなのふざけている。あり得ていい筈がない。いくらなんでもルールから外れすぎだ

だが、後ろから近付いてくる唸り声は……

「何で死体が動いてるんだよ?!」

先程死んだ筈のタイガードラゴンの物だった

＝　＝　＝　＝

その後、タイガードラゴンによる一方的な惨劇が始まった
もともと傭兵達は力の弱い子供を捕えたという嘘を盾にタイガードラゴンを捕獲したのだ

もし、タイガードラゴンに子供を守る必要が無いと分かれば、……
待っているのは『死』だ

「『敵対者にイチイの毒の裁きを。苦痛による死だけが免罪符であるとしれ【毒の雫（ポイズンドロップ）】」

例え魔法を使おうと

「えッ？！　ひ、ギヒィ！」

その毛皮に弾かれ、爪による一撃で絶命する

そもそも、タイガードラゴンの毛皮の価値が高いのは魔力に対する抵抗力が高いからだ。それを理解していない者が生き残れる筈もない

「クソッ、魔法ではなく接近して戦え！　あの巨体なら懐に入れば勝機がある！」
「バカ野郎！　よせ、行くな！」

そして、接近戦を挑むのは愚の骨頂だ
何故ならば……タイガードラゴンは魔物の中で最も機敏な動きをするからだ

駆けていった傭兵達は、半分も行かない内に叩き潰された

残るは一人の傭兵と、角で震えている領主のみ
品定めするかのように2人を見ると、ゆっくりと傭兵の方に近付いていく。領主は殺す価値もないと判断されたのだ
だが、噛み付く前に刹那に止められた

『……』
「ダメだ。あいつは半殺しにするからな」
『……』

刹那がそう言うとゆっくりと丸まり、傍観を決め込む。どうやら「好きにしろ」という意味らしい

「……領主さんよ、腹くくろうぜ」
「離せ！私を今すぐ屋敷に帰せ！」
「そりゃ無理だ。魔法使いは2人しか居なかったからな。俺は魔法使えないしな。あっちの兄さんにでも頼みなよ」
「つ、使えんヤツめ！　き、如月様！　わ、私はこの者共に騙されていただけでございます！　屋敷に戻り次第どんな事でもしますので、どうかいの、ちばァッ？！」

刹那に泣き付こうとしていた領主は刹那の蹴りにより膝を付く。領主からしてみれば何が起きたか分かりすらしなかっただろう。今までこの方法で助かって来たのに通じないのだ

「見苦しいわこの豚が。何が命だけはだ。お前は、今まで金の為に

どれだけの魔物を殺しやがった？　自分の命が大事なら、他の命も大事にしろよ。魔物だって生きてんだよ？　勝手な理由で殺していいわけあるか！」

まだ何か言いたそうな領主に向かってナイフを向け

「じゃあなクソヤロウ」

容赦無く振り下ろした

＝　＝　＝　＝

「おい、今のナイフ何処から出した？　拾ってなんかないよな？」

「ああ、コレはこのナイフの能力だ」

強欲のナイフ

普段はただのナイフだが、刹那が願えばどんな事でも実現させる能力を持っている。だが……代償もある

「どんな願いでも叶える代わりに、俺が産まれてから過ごしたという現実を、知り合いの中から一時間分消す能力（ちから）を持ってるんだ」

刹那は忘れない。だけど共有した思い出が無くなっていく。それは、相手の中から自分を少しずつ消すようなものだ

「しかも、一時間分しか消さないせいか、一時間しか願いは叶わない」

そう、振り向きながら言うと後ろのタイガードラゴンが徐々に姿が薄れ始めた
それも叶えた代償か、生き返った者は土に還れず、まるで霧が晴れるかのように消えてしまうのだ

「ごめんな。結局助けれなかった」
『気にするな。儂はもう充分生きた。だが……息子が、心配でな』
「それは、俺が責任を持って護るよ。介入したんだ。最後まで責任を持つさ」
『……ふふ、若いのに苦労性だな』
「苦労性でも無責任より遥かにマシだ」

2人（正確には一人と一匹）で笑い合っているその時

『主、人の部屋にディアナさんとアホ虎入れないでください』

いきなり、ラストの声が聞こえてきた

「あれ、何故かラストの声が聞こえる？」

『どこぞのタイトルで年齢偽装してる魔王な魔法使い（いや魔女？）の物語に出てくる念話です。まあそれはともかく。今、私の部屋に来てるんですよ。そしたら大量のドングリ食べてるアホ虎とその近くで何故かいじけてるディアナがいたんですよ！　訳分かりませんから！　という訳で送り帰します。受け取ってください馬鹿主♪』

「え、ちょっ……！」

いきなり、真上に孔が開き、その中から驚いてるディアナとリスのように頬を膨らませたトラが……

「って流石に死、ぎゃあああぁぁぁ……」

もちろん、トラ（おそらく３００ｋｇを超えてるだろう）を受け止められる筈もなく、潰される事になった

＝　＝　＝　＝

なんとか脱け出した後、トラの父親が嬉しそうに笑いだした

『まさか……最後に息子に会えるとはな。本当に、感謝するぞ少年』

「いや、結果的に会えただけだ。本当は死んでる姿を見せるつもり

はなかったんだ」
『ならば余計に感謝せねばな。息子の心をを気遣ってくれるとは、本当に感謝する。だが……息子なら大丈夫だ』
「それは……どういう意味だ？」
『こういう意味だ。トラよ。早いが、継承だ』
『うんー。悲しいけど分かったー』

継承？
その言葉に疑問を抱く前に、トラは父親と額を重ねた

『じゃあねー父さんー』
『優しさと誇りを胸に抱き続け、いつか大切な者を護りなさい。……さらばだ。愛しい子よ』

額を合わせたまま2人の咆哮が響き渡る
そして、変化は突然現れた。トラの赤い瞳が左目だけ深い緑に変わっていったのだ

『これで本当にお別れだ。……それでは、息子を頼む我が親族の兄君殿よ』
「ああ、任され……って親族？　え、ちょっと待て！　まさかお前……！」

最後まで聞き終わる前に、俺の目の前で霞のように消えてしまった。
しょうがない。ディンに聞くか

でも……今は止めておこう

『悲しいー、でも泣かないぞー』

「泣いていいぞ。どうせ」

いまだに後ろでいじけてたディアナと諦めてくつろぎまくってる傭兵を地上まで転移させる

「見てるのは俺だけだからな」

『そっかー、じゃあ、少しだけ、我慢するの、やめる』

その後、暫くの間悲しそうな唸り声が地下室に響いた

村を出て

地下室から戻ったら、即座にディアナが後ろ回し蹴りを脛に当てて来た
かなり痛かったが、まあ今回は俺が悪いので甘んじて受けておく

「次からは私も混ぜろ！　凄く怖いけど頑張るから！」
「いや、正直邪魔だったか、痛っ！　噛むな、歯形付くだろ？！」
「……おい。ずっと逃げずに待ってるんだが、漫才やらずにコッチを気にしてくれ」

あ、傭兵Ａ忘れてた。というか逃げなかったんだ。感心感心

「という訳で」
「お、おい、何故いきなり後ろから抱き付」
「投げっぱなしジャーマン！」
「ぎゃあぁぁッ？！」

盛大に顔面から落ちたが……まあ大事だろう。どうせ敵だし気にしたら負けだよな

「さて、何故投げられたか分かるかね明智くん？」
「誰だそれは？！　俺は「傭兵Ａ」だ！　って被すな！」
「早く質問に答えないと死にたくなるような怖い話を聞かせてやろ

う」
「ア、アイツを殺したからか？」
「不正解！」

とりあえず本気で蹴り飛ばす。飛距離は１ｍといったところか

「だから何しやがる？！　というか今のはノリだな？　絶対にノリだな？！」
「だったらどうした？」
「開き直りやがった！」
「まあノリかどうかはこの際捨て置け。さっきの答えだ。ほら」

刹那は何かがギッシリ詰まった袋を投げた。傭兵Ａは上手くキャッチ出来た事に安心した。もし取れなかったら鼻の骨が折れていただろう

「コレがなんだっていうだよ」
「開ければ分かる」

疑問に思いながら開けると……金貨がギッシリと入っていた

「……は？」
「いや、実は俺は見るだけで相手の事がある程度分かる能力を持ってるんだよ。まあつまり……さっさと村に帰れ。そんで良い医者呼

んでやりなよ」
「……何でだ？」
「ん？」
「さっきまで殺し合ってたんだぞ？　俺は、アイツの親父を殺したんだぞ？　何で助けるんだ」
「ああ、誤解のないように言っておく。まず、許したつもりも助けたつもりもない。……その金は」

刹那は恥ずかしそうに頬を掻いた

「よ、傭兵のアンタに依頼だ。依頼の内容は……もう二度とあんな事しないでくれ。そ、その金は報酬だ。　も、もう払ったから取り消し不可能だからな！　な、なんか文句あるか？！」

シンとした。それが逆に刹那を追い詰めるが、誰も気付かなかった

「あ、ありがとう」
「依頼の報酬だ！　お礼言う暇あるならさっさと帰れ！」
「あ、ああ！　ありがとう！　本当にありがとう！」

＝　＝　＝　＝

「で、どういう意味なんだ？」

「何が？」
「だから、金貨をやった理由だ。り・ゆ・う！」
「あ、ああ、アレね。依頼の」
「建て前はいいから」
「うぐっ…」

もはやディアナにすらバレバレである。バレていないのはトラ

『刹那ってー、優しいんだなー♪』

……にすらバレていた

「あ、アイツは悪いこととしてたけど、悪いことした理由が他の奴と全然違ったんだよ」
「違った？」
「ああ、アイツは、家族を助けたかったんだ。でも、少しの間にお金が貯まる仕事もないから……」
「あんな事をしたのか」
「うん。許せないし、凄くむかつくけど……家族は、守りたいもんなぁ」

実際に守れない時があったから、それがどれだけ辛い事かはよく分かる
まあ、家族と言っても俺が守れなかったのは猫なんだが

「うん、ところで刹那。あの渡したお金が全財産なわけないよな？」
「ああ、金貨三枚は残しといた。さて、とりあえずもうこの村出ようぜ？　領主は後で地味キングに連絡しとけばいいだろうし……」
「そうだな。じゃあ、トラ」
『なんだー姫ー？』

いつの間に仲良くなったんだろうか？
というか、いつ自己紹介した？　意思の疎通できないんじゃないの？

「ラストに落とされる前に布団代わりにしてたんだ。で、タイガードラゴンって呼びにくいからトラってあだ名付けてみたんだ」
『いつの間にか近くにいたー♪　なんとなくお姫様みたいだから姫って呼ぶことにしたー♪』
「え？　コレってツッコミ待ちなん？　ディアナはまだいいよ？　俺が名前言ってたかもしれないし。でもね？　トラ、何その奇跡の正解率は？」
「何の話だ？」
『分かんないぞー♪』

いや、分かれよ。いくら何でもトラ凄ぇだろ。ディアナの何処が姫なんだよ？
わがままだろ？　金銭感覚おかしいだろ？　見た目可愛らしいけど中身は狂暴だろ？　世間知らずここに極まれだぞ？

何処に姫の要素がある。せいぜい……わがまま程度だろ

「今、物凄くバカにされた気が……」
「気のせいだ。よし、ディアナ。リュックの中に入れ。歩くと流石

に1週間近く掛かるから自転車（チャリ）で行く」
『トラに乗ればー♪』
「それは速すぎて俺が追い付けない」
『ならトラもその中入るかー？』
「おう」

という訳で2人に入ってもらい（ディアナは嫌がったが）チャリをリュックから取り出して出発する事にする

「さて、出発しますか」

＝　＝　＝　＝

現在、魔物に囲まれている。可愛いのから気持ち悪いの、弱そうなのから強そうなの。理由は簡単だ

なつかれた

「邪魔だお前等！」
『言葉分かるぞ！　珍しい珍しい』

『肉食うか？　取り立てだ』
『野菜くう？』
『遊ぼーぜ』
「急いでるんだー！」
『『落ち着け』』
「お前等が言うか？！」

結局かなり足止めされ、森の近くで野宿する事に

「刹那、お前本当に生き物か？」
「少なくとも人間だ。魔族とか獣人とか龍人ではないのは確かだ」
「人間？　……まあ何でもいいや。で、何でお前の後ろに大量の、それもかなり珍しい魔物と、会うのが難しい魔獣がゴロゴロいるんだ？」
「なつかれた」

後ろの奴等から貰った卵や野菜、謎の肉を食べながらそんな話をしている。ちなみにディアナには何も言ってない。五月蝿（うるさ）そうだし

「オムレツおかわり」
「ねぇよ」
『刹那ー、野菜もうないー？』
「ないよ」
「『えー』」
「文句言わない。俺なんて2人の半分も食ってないんだぞ。ちなみにお前等も獲りにいかんでいい」

『『『えー』』』

あのね、今日初めて会った（まあ正確には襲われていつの間にかなつかれたんだが）お前等にこれ以上パシらせる程俺は酷い奴じゃないからな？

「とりあえず今日はもう寝るぞ」
「早ッ？！」
『あいー♪』
『もっと話そーぜ』
『人との話面白い』
『というか初めて』
「また明日な」
『『『うん。分かった』』』

とりあえず帰ってもらう。え？　ちゃんと明日も話すよ？　夜逃げとかしませんよ？　ただ朝が早いから会わない可能性があるだけだよ？

「さて、ディアナリュックに」
「あんな場所で寝れるか阿呆」
「なら、テントでも立てるか」
「よし私も手伝うぞ」

結局、全く、全然、これっぽっちも役にたたなかったので俺一人で準備した

＝　＝　＝　＝

「で、何でこうなったし……」

「……ｚｚｚ」

現在、テントの中で「２人仲良く同じ布団」で寝てたりする
何故こんな事になったのか簡単に説明しよう

テント完成→よし寝よう→せまいからディアナだけ入れ→お前が寒いだろ！→無理矢理布団に眠らされる→何故かディアナも入ってくる→俺動揺、ディアナ爆睡

こんな感じである
もうね、俺絶対男として見られてないよね？　保護者扱いだよね？
いや、襲う気もないから問題はないが。ただね、女の子が男と簡単に寝るというのはいかがなものか？

「……せつなー」

「はい？！」

「オムラ……スー」
「あの……夢でも俺コック扱いですか？　というか、またオムライス？　夢の俺にぐらいたまにはバリエーション出させてくれない？　卵高いからさ」

このまま、結局寝れずに朝まで過ごす事になる

……俺って、コック以外の価値は無いんだろうか？

＝　＝　＝　＝

で、魔物達にまた遊びに来る約束をし（まさかのトラの寝坊によって計画が狂った）、村に向かって移動を開始する

何の邪魔もなかったので割りとすぐについた。と言っても目的地ではなく、近くの村だ。ここで2～3日程買い物と骨休みをするつもりだ。……何故か、休めない気がするが

「じゃ、宿に行こうぜ」
「……ｚｚｚ」
『姫トラの上で寝てるよー♪』

「……楽でいいなコイツ」

クリスマスはこちらにもあるらしい（前書き）

はい、勢いで書いたけど後悔してないです
ちなみに本編と直結してます。番外編っぽいけど番外編ではありません

クリスマスはこちらにもあるらしい

クリスマス、それは刹那に取って忘れられないトラウ……思い出である
そのせいか、ディアナにクリスマスが今日だと告げられた瞬間
何故かケーキを作りに行ってしまった

「私は何してればいいんだ？」
『姫ー、遊ぼー♪』
「うわぁぁ？！　のし掛かるな潰れる！　あと私は刹那と違ってお前の言葉は分からないんだー！」

トラは刹那が居なくなるとき、寝ていたので元気一杯だ。のし掛かられたディアナは満身創痍だが…

「よし、折角のクリスマスだ！　たまには私が何かしてやらないとな！　トラ、プレゼントを買いに行くぞ」
『あいー♪』

そして、刹那の為に買い物に行く一人と一匹だが……果たして無事に買えるのだろうか？

＝　＝　＝　＝

ＡＭ１０：００　小物取扱店にて

「むぅ、手持ちは金貨二枚か」

買い物をするには充分だが……どれだけ使っていいのかが分からない
そもそもこの金貨は【刹那から預けられた金】なのだ。お菓子は５個まで許されたが、それ以上使っていいのか分からない

「まあいい。働いて返せばいいんだ」

さて、今更ながら金額の説明だ
銅貨は円に換算すると約１０円の価値がある
銀貨は銅貨１００枚分の価値がある。つまりは１０００円だ
そして銀貨は、銀貨は１００枚分の価値がある
つまりは……１０万である

そんな大金を預ける刹那もだが、それを簡単に使おうとするディアナも非常識である

「むぅ……良い物がない。刹那は可愛いの好きみたいだし……こん

なチャラチャラしてるのダメだよな」

長い時間悩んでいると……不意に唸り声が聞こえ始める

『姫ー、まだー？』

「ひいぃ？！　こ、こんな所に魔獣がー？！」

もちろん、トラが来ているのをしらない者はパニックである

「ここ以外の所で買おう。トラ、待たせてごめん。次に行こう」

『あいー♪』

その後、服屋、装飾屋、武器&防具屋など行ったが……結局いい物はなく、気が付くと夕暮れになっている

そして、トラがある匂いを察知する

「いいのないな」

『姫ー、あっちから不思議な匂いするー♪』

「わ、待て何処に行くんだ！　そっちは変な匂いがするから嫌なんだー！」

ある店の前まで来てしまった。外装がボロボロで今にも崩れそうなイメージがある。煤けた看板にはうっすらとだが【運命屋】と書い

てあった

「トラ、今すぐに帰ろう。な、なんか出そうだ」
「何も出やせんよ」

ディアナが怯えていると中から優しそうな声が聞こえた。中を覗いて見ると優しそうな笑顔を浮かべた老婆がいた
ただし……

「ひぎゃあぁ?!　出たー!」

怯えてたディアナからすればお化けにしか見えなかった

『姫ー、落ち着いてー♪　あれ生きてないけどー、死んでもないよー?』
「いや、私は生きとるんだが……今のは流石に傷付いたぞ?」
「な、なんだ生きてたのか。ご、ごめん。失礼だった」
「気にしなさんな。よく言われるよ。まあそれはそうとお嬢ちゃん、何か見ていかんかね?」
「あ、うん。見させてくれ!」

ディアナが探し始めてすぐに……2つの物に目が止まった

まずは蒼い石がはまったブレスレットだ。その石は何の飾り気もない。だが……何故かどんな宝石よりも輝いて見えた

そしてもう一つは…

「首輪？」

「チョーカーと言った方が聞こえが良いと思うんだがね」

それは可愛らしい鈴の付いた赤いチョーカーだった。ディアナは何故か分からないが、この２つを気に入った。両方刹那に似合いそうだ

「値段は？」

「いらないよ」

「え、そ、そんな訳ないだろう？！　お金が欲しいから店を開いてるんだろう？！」

「違うね」

驚いた。そんなの店として成り立っていないではないか

「普段はね、お金を取るんだよ。でもね、ふふ……こん小さな女の子が、好きな相手にプレゼントをしようと頭を悩ませる姿を見たら、胸が温かくなってね」

たっぷり5秒の間ディアナは固まり、ようやく戻った時、顔が熱くなるのを止められない

「ち、違ッ？！　あ、アイツはただの友達で、す、好きとか嫌いとかじゃない！　ぜ、ぜぜぜ絶対にない！　ないったらないー！」
「そうかそうか。まあ、サンタさんからのプレゼントだと思いな」
「う、ううぅ～……！」

その後、ディアナは逃げるように店を出た。トラはゆっくり後をついて行くが、一度だけ振り返り

『アレー、本当になんて物なのかなー？』

どう考えても人に対する感想ではない事を呟いていた

＝　＝　＝　＝

刹那は大量のケーキ片手に部屋に帰っていた。ちなみに現在は机の前で膝をついて落ち込んでいた

「……何で、こっちの世界でもケーキ作ってんだよ。ちくしょー、コレもう強迫観念だよ。作らないと空高く殴り飛ばされる気がする

とか病気だよ……うぅ」

若干、刹那の身体から負のオーラが滲み出ている気がするんだが…
…気のせいだろうか？

『刹那ー♪』
「フゴブッ？！」

いきなり扉が開き、トラが飛び乗ってきた。膝をついていた刹那は対応が遅れ、見事に潰されていた。普通の人間なら骨折をしていただろうが、刹那は『心身強化』のおかげで身体の頑丈さが異常な程に強化されていたので無事だった

『ただいまー♪　あれー？　刹那どこー？』
「ぎ、ギブッす。マジで痛いから」
『おー、下にいたのかー♪』

とりあえず退いてもらった。人間として考えるなら、精神年齢５歳程度だから仕方ないけど……多分、そろそろ骨が折れるから飛び付くのは我慢して欲しい。可愛いから許しちゃうが…

「まあそれはそうと、トラ」

『あいー♪』
「メリークリスマス！　ほら、ドングリでケーキ作ったから食べね♪」
『やったー♪』

喜ぶと同時にケーキにむしゃむしゃと食べ始める
うん。ケータイで写真撮らねば…

「刹那」
「ん？　どうしたディアナ？　あ、メリークリスマス！」
「あ、うんメリークリスマス。あ、あのだな……その、あのだな」

何故か話始めると急にモジモジとし始める。なんだ？　お花でも摘みに行きたいのか？

「あ、そうだディアナ。ケーキ作ったから食わないか？　それと、今日は早く寝ろよ？　サンタさん来ないぞ～？」
「うっ、あ、うぅー……！　せ、刹那、コレ、やる！　じゃ、じゃあな！　もう寝るからな！」

いきなり、袋を投げられる。何か分からないが……とりあえず貰える物は貰っておこう

＝　＝　＝　＝

真夜中、刹那はこっそりとディアナの部屋に忍び込む。別に夜這いではない。サンタの格好でプレゼントを持ってきたのだ

「……ディアナ。メリークリスマス♪」

そっと枕元に小さな包みを置いて帰って行く

この時、刹那は一番大事な事に気付かなかった。ディアナは寝ていなかったのだ。目を瞑っていただけだ
運命屋で言われた事が気になり寝れなかったのだ

「……うぅ、なんか私変だ。刹那が来たのに何も言えなかった」

ディアナは刹那が入って来た瞬間、文句を言おうとしたのだ。だが……一度、異性として意識したせいか、身体が硬直してしまったのだ

「うぅー、お婆ちゃん、恨むぞ」

今まで甘えていたのも、我が儘を言っていたのも、そして手を繋い

だり、野宿の時に一緒の布団で寝たり（もちろん何もなかったが）していたのも刹那を【男】として意識していなかったからだというか、面倒見の良い兄みたいな感覚で見てたそう、つまり今までの事を男女の中として考えると……年頃の娘として、アレなのだ

「うぅ～、今までの私を殺したい～！」

ちなみに……翌朝まで悶え苦しだので寝不足になり、食事中に寝て刹那におぶられて宿を出たのはディアナにとって黒歴史になってたりする

クリスマスプレゼントは呪いの品でした（前書き）

はい、好きな人とか嫌いな人とかいるかもだけど……性転換あります
大事な事なので2回言います。性転換あります

それでも良い方はどうぞ

クリスマスプレゼントは呪いの品でした

現在、背中にディアナを乗せながら次の町に向かっている。ただ、自転車が使えないので今日も野宿確定だろう。……ドラム缶でも作ろうかな？

「んっ……ん～？」
「お、ディアナ起きたか？　昨日作ったケーキあるけど食べるか？」
「食べ……む？」

ディアナはいきなり首を上下に動かし、最後に俺の顔をまじまじと見ると、急に真っ赤になり、そして

「な、ななな…」
「な？」
「な、何してるんだお前はー！？」

後頭部に魔力でコーティングされた拳を叩き付けてきた

「ごふはッ？！」
『……刹那ー、大丈夫ー？』

「む、無理っす」
「はぁはぁはぁはぁ、な、何であんな事したんだお前はー?!」

刹那からしてみれば訳が分からない。前日、同じ布団で寝た（だけ）のに何を今さらおんぶで後頭部にボクサー顔負けのパンチを食らわなければならないのだろうか?

「ディ、ディアナ」
「な、なんだ!」
「食事中に寝るなよ……ぐふッ」
「寝る?　あ、そういえば朝……ってああ、寝てた?!　刹那、何でおこし……って刹那ー?!」

その後、一時間経つまで目が覚めなかった

＝　＝　＝　＝

「ああ酷い目にあった」
「わ、私が悪かった。謝る。だから、うん。蓋(ふた)をしめた状態でそんなに臭い物を食事に出すのはやめよう」
「大丈夫大丈夫。これ食べ物だから」

「だからといって口に入れるとか無理、うぐぅ～？！」

風向きが変わり、風上に避難していたいたディアナに臭いが襲う
臭いの正体は【くさや】
味はともかく、臭いがヤヴァイ食べ物だ
もちろん、犬並みの嗅覚があるディアナなら本来なら麻痺するレベルの臭いなんだが……そこは刹那が能力の無駄遣いをして、防いでいる。どうでもいいが地味な仕返しである

「ははは、お前のは一番大きいのな」
「食べるのに一番時間かかるだろ？！」
「普段大きいの寄越せ言ってるじゃん♪」
「そういうのを今持ち出すな卑怯者ー！」
『トラは臭い感じないよー？』
「麻痺ってるからな」

そして仕返しという名の食事が始まる

「うぅ～」
「食えよ？」
「あ、謝るから」
「え？　これただの食事だけど？」
「う、ふぇ……グスッ」
「うっ……」

何故だろう？　仕返しの筈なのに物凄い罪悪感がこれはアレか？　妹泣かせちゃった兄の心境か？

『姫かわいそー！』
「ってトラまでそんな目で見るなよ？！」
『だって泣いてるよー』
「あ、ぅ……」
『トラ、刹那好きだよー？　でも今の刹那嫌いー』
「……」

いつの間にか追い込まれている気がするのは何故だろう？　というか、俺、何か悪い事しましたか？
ちょっとした意地悪しかしてないのにコレは酷くないか、なぁ？

「……分かった。分かったよ！　食わなくていいから！」
「え、ホ、ホントか？」
『刹那、やっぱり優しいー♪』
「ああもうなんかどうでもいいようんちくしょーいつかぐれてやるそしてどっかだれもいないばしょでしぬんだ」

結局最後は俺が折れるのはお約束になりそうで嫌だ

＝　＝　＝　＝

「あ、せ、刹那」
「あ？　まだ何か文句あんの？」
「い、いや違う。それ……」

ディアナが指差す場所は俺の首
……あ、アレね

「チョーカーがどうかしたか？」
「あ、いや、何でもない何でもない！」
「変なヤツ」
「ま、まさかもう付けるなんて……ゴニョゴニョ」
「なんか言ったか？」
「な、ななな何でもないぞ！」
『姫ねー、嬉しいんだと思うよー♪』
「ト、トラ！　い、今絶対余計な事を言ったな！　ええいこうしてやる！」
『姫ー、かくなら頭よりお腹がいいー♪』

よく分からんが喜んでくれてるならいい。にしても……このチョーカー、なんなんだろうか？　首にフィットし過ぎて違和感が無さすぎるんだが

「なぁ、そう言えばコレどこで買ったんだ？」

「このこ、ん？　それなら【運命屋】って所だぞ」
「【運命屋】ね」

刹那はリュックからケータイを取り出すと『ロキ』と掛かれた所に繋いだ

『はい、こちら北欧神話委員会ですが？』
「あ、ロキ。やっほー」
『刹那君？　どうしたんだ。またバカ兄貴が何かしたのかい？』
「いや聞きたい事があるんだよ。あのバカだと面倒そうなんでロキにかけたんだ」
「トラ、あれが一人芝居って言うんだぞ」
『へー♪』
「ディアナ、後で覚悟しとけ。それよりロキ、運命屋って知らないか？」

電話の向こうで息を飲む音が聞こえる。え、なんかヤバイの？

『ど、何処であったんだ？』
「い、いや、俺じゃなくて連れがあったんだけど」
『クッ、あの店まだやってたのか？！　刹那君、何も買ってないよね？　買ったとしても装備したりしたらダメだからね？！』
「え、あの……もう遅いんだけど？」
『……マジ？』
「……マジ」
『……ご、御愁傷様』

「説明しろやコラ」

■■■■

あー、何から説明したらいいのか分からないんだが……とりあえず【始まり】から話そう

【運命屋】は道具の、道具による、道具の為の、ご主人様捕獲用の罠だ
作って貰ったのは良いけど、一度も使われなかった数々の道具達が結託し、自分を使うのに相応しい者に力を貸す呪いの品だ
で、ディアナさんがあった老婆は【コピーマン】だろう。誰にでもなれる身代り人形だ。意志があるから好きな者にしかならず、不良品扱いされた者だけど……店番くらいは出来るだろう

そして、刹那君にプレゼントされた2つ……

ブレスレットは【星掴みのブレスレット】
星の魔力や生命力を掌握出来るようになる道具で……余裕で世界滅ぼせる道具なんだよ。ただ使用する魔力が星と同じ以上にいるから誰も使えないんだよね。刹那君は使えるけど

そして、刹那君。君にとってはコチラの方が悪夢の道具だろうね。

そのチョーカーの名前は【ボーヴォワール】

■■■■

「ふわぁ……刹那、一人芝居終わらな、えッ?!」
「うるさいな、どうしたのディアナ」
「せ、せせせ?!」
「だからどうしたのよ? 全く、冗談なら怒」
「刹那が女になったー?!」
「……え?」

ディアナに言われて下を見てみる

うん、いつも見える筈の靴が見えないわ。この胸の辺りにある2つのの球体は何かしら?
とりあえず触ってみる。うん、私の体から出てる。ついでに下の方も触った
無い。ある筈の物が無い

……あ、そう言えばさっきよりも視線が低い気がする

「って何よコレー?!」

『遅かったか……【ボーヴォワール】は性転換させる力があるんだよ』

「早く言いなさいよバカ！」

「く、口調まで女に…」

「え、ディ、ディアナ流石にそれは冗談よね？　ぼ、ボクが女の子みたいなしゃべり方する筈ないよね？！」

「今ボクって言ったぞ」

「や、やだよ～！　戻してよ～！」

『あ、あはは。じゃ、じゃあ仕事あるからまたね』

あの野郎、説明だけして逃げたわね！

「くっ、こうなったら」

「こ、こうなったら？」

「男っぽい服持ってこい！」

それは現実逃避と言う

＝　＝

で、着てみたが

「む、胸が苦しい」

「う、羨ましい」

双方クリティカルダメージを受けてグロッキーな状態である

「なんならVネック」
「絶対にダメだー！　私をこれ以上追い込む気か？！」
「な、何の話？　トラ分かる？」
『刹那いい匂いー♪』
「ト、トラ？　ボクの匂い嗅がないでよ？　う、うぅ……ボクはこれからどうすればいいの？」

もはや誰にも分からない
まあ、それはともかく……今日も野宿が決定した2人（と一匹）だが、今日は問題が発生した

トラが風呂（水浴び）に入りたがったのだ

「しょうがないわね。少し待ってなさい」
「うん」
『あいー♪』

刹那は色欲を使い、前作った空間を出した
そして

「材料は桧（ひのき）、お湯は……やっぱり温泉だよね♪　脱衣所は男女別。ん～、ついでにコーヒー牛乳も置いとこうかしら？」

そんな感じで作られた結果、何故か旅館が出来た

「き、気合い入れすぎたわね。あはは」

まあ、とりあえず2人を呼んだんが……また問題が発生した。ディアナがボクと一緒に入るのを嫌がったのだ。いや、まあ常識的に考えたら当たり前なんだが

「ん～、ボクも今は女だし、気にしなくても問題ないんじゃないかしら？」
「ア、アホか！　一緒に入るって、つ、つまり見えるんだぞ！」
「いやボク女だし」
「ダメったらダメだ！」

つまり、ボクに入るなと？　こんなに頑張ったのに泣くよ？

「うっ……そ、そんな目で見るな！　というか性格変わってないか？」
「そんな事言われても分からないもん」
「もんって……うぅ、分かったよ我慢するから泣くな」
「やった♪」
「うぅ、この刹那苦手だ」

そんなこんなでお風呂に入る事になったんだが……どうなるんだろうか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4957j/

俺の異世界物語

2011年12月27日21時33分発行